

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第194集

山  
賀  
遺  
跡  
Ⅱ

八尾市新家町

# 山賀遺跡Ⅱ

寝屋川水系改良事業(一級河川寝屋川 新家調節池)

地内の埋蔵文化財に係る発掘調査

二〇〇九年八月

財団法人  
大阪府文化財センター

2009年8月

財団法人 大阪府文化財センター

八尾市新家町

# 山賀遺跡Ⅱ

寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調整池）

地内の埋蔵文化財に係る発掘調査報告書



## 序 文

山賀遺跡は大阪平野のほぼ中央、八尾市と東大阪市にまたがって所在する縄文時代から中近世の複合遺跡です。昭和54年から実施した近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、弥生時代前期から中期を中心とする貴重な遺構や遺物が多数確認され、大阪府下でも弥生時代を代表する有数の遺跡であることがわかりました。

本書に報告する山賀遺跡の発掘調査は、平成16年から17年にかけて行った寝屋川水系改良工事に伴う調査のつづきにあたります。今回の調査は、平成20年12月から約3ヶ月半をかけて実施したもので、調査自体の期間が短く、範囲も狭いものでしたが、これまでの成果に加えて、山賀遺跡やその周辺における弥生時代を考える上で重要な成果を得ることができました。

最後に、今回の発掘調査および整理事業にご理解とご協力を頂いた大阪府東部流域下水道事務所、大阪府教育委員会をはじめとする関係機関各位に感謝します。今後とも当センターへの御支援を賜りますよう、切に希望する次第です。

平成21年8月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市新家町に所在する山賀遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府八尾土木事務所より財団法人大阪府文化財センターが委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調節池）地内の埋蔵文化財に係る発掘調査（その3）として実施した。

現地での発掘調査は、平成20年12月1日に着手し、平成21年3月18日をもって終了した。

引き続き、中部調査事務所において、平成21年3月19日から平成21年5月31日まで遺物整理作業を行い、平成21年8月31日、本書の刊行を以って事業を完了した。
3. 調査は以下の体制で実施し、随時、当財団職員の助言・協力を得た。

平成20年度 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 寺川史郎、  
副主査 亀井 聡

平成21年度 調査部長（兼）調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、  
調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三、副主査 亀井 聡
4. 木製品の保存処理・樹種同定については、調査グループ資料活用主査 山口誠治、専門調査員 橋本俊範が行った。遺物写真については、調査グループ主査 片山彰一、非常勤補佐員 伊崎千智が撮影を行った。遺物整理においては、京阪総括主査 三好孝一、福万寺総括主査 西村 歩、池島主査 陣内暢子、南部総括主査 森屋美佐子、南部副主査 市村慎太郎、中部技師 新海正博をはじめ、多くのセンター職員の協力や教示を得た。
5. 調査の実施に当っては、大阪府教育委員会をはじめとして、関係各位・機関にご指導やご教示を賜った。記して謝意を表したい。
6. 遺物の材質同定に当っては、以下の方々のご教示を賜わった。

石 材 鑑 定：元近畿大学教授・京都大学助教授 富田克敏  
動物遺体鑑定：大阪市立大学大学院医学研究科 安部みき子  
魚類遺体鑑定：奈良県立橿原考古学研究所 丸山真史

また、自然科学的分析の委託を以下のように行った。

種実同定：パリノ・サーヴェイ株式会社  
放射性炭素年代測定（AMS）：株式会社パレオ・ラボ
7. 本書の作成にあたっては、亀井が執筆を行った。ただし、第4章 自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ 中村賢太郎氏、パリノ・サーヴェイ株式会社 辻本裕也氏、元近畿大学教授・京都大学助教授 富田克敏氏、大阪市立大学大学院医学研究科 安部みき子氏、奈良県立橿原考古学研究所 丸山真史氏、各位からの教示や寄稿を受けたものを亀井が総括した。
8. 本書の編集は亀井が行った。
9. 本調査に係わる写真・実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

# 凡 例

1. 実測図における標高は、すべてT.P.（東京湾平均海水位）による表示を行った。
2. 遺構平面図において使用した測地系については、世界測地系による国土座標の第VI座標系に基づく表記方法を採用している。なお、本書で用いた座標は、m単位である。
3. 本書で使用する方位は、国土座標における座標北を示す。なお、座標北と調査地周辺の磁北との偏位角はN - 6° 26' - W、真北との偏位角はN - 0° 14' - Eである。
4. 遺構実測・遺物取り上げ等に使用した地区割は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）に則っている。なお、遺物の取り上げや図面・写真の記録に使用した地区割の第I区画・第II区画は「H6」・「2」である。
5. 調査・整理における土層や土器の色調観察については、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究所 色票監修の最新版に依拠した。
6. 遺構名については、数字と遺構種類の組み合わせによる表記を用いる。現地調査では、トレンチ毎に必要な応じて通し番号を付与し、これに遺構種類を併記した。遺構名を設定する場合の基準は、規模の大小に関わらず、調査区内で完結するまでを1つの遺構とした。溝・水路・高まり等は、形状に関係なく、連続する限り同一遺構とする。しかし、それらが分岐する場合には、基幹となる部分にのみ同一名称を与え、派生した部分には新たな遺構名を設定する。畦畔の場合、幹線は確認しうる限りを同一名称とし、支線はそれぞれ別名称とする。この支線も連続する限り同一名称とし、交錯するものに対しては新名称を設定する。例外として、鋤溝や畝間溝のように、遺構の境界が不明瞭で個別の認識が曖昧なものについては、遺構群として複数の遺構に対して1つの名称を与える。溝・流路・高まり等のように、複数の遺構面に継続して存在が認められる場合は、同一の遺構番号を使用する。ただし、同一遺構番号であっても、遺構面毎に形状が異なる場合は遺構種類を変更して区別する。また、複数の遺構の集合体である建物等の場合、全体を総称する遺構名を別に設定する。
7. 遺物番号は、種や形に区別なく挿図毎の通し番号を設定した。また、図版（写真）における遺物番号は、本文中と一致するよう、挿図 - 通し番号の組み合わせで表示した。
8. 掲載する遺物の実測図の縮尺は、土器1/4、大型石器・土製品1/2、石鏃等の小型品2/3、木製品1/6を標準とし、遺物の寸法に合わせて整数値による縮尺を適宜用いた。
9. 遺物実測図中の黒色トーンは欠損を示す。それ以外に使用する場合は、別途、図中に凡例を記す。
10. 遺構断面図については、取得した位置を遺構平面図あるいは全体平面図に鉤形で示す。なお、鉤形の先は見通し方向を指す。断面図中の斜線パターンは、その遺構に対する地山（基盤層）を表現する。特に土質が異なるもの以外は注記を省略する場合がある。
11. 本書は、すべての図面や写真をデジタル上で編集したデータを出力したものである。遺構図は、現地における実測図をデジタル画像化したり、図化处理したデータをデジタルトレースした。遺物実測図は、従前通り手実測したものをデジタル画像化した後、デジタルトレースを行った。遺構写真は、現地で撮影したフィルムをスキャニングし、解像度8ビット400dpiのデジタル画像を作成した。遺物写真は、デジタルカメラによる撮影を行い、直接デジタル画像を作成した。遺構・遺物の写真データ

については、写真室担当者による明るさ・コントラストの調整を行った。

12. 写真図版に掲載する各遺物や遺構の縮尺率は不同である。ただし、動物遺体についてはスケールバー（最小単位1.0mm、一部0.5mm）の写し込みを行った。

13. 遺構・遺物の記述・観察・器種分類に関しては、下記に記す文献を主に参考とした。

『木器集成図録 - 原始・古代編 - 』奈良国立文化財研究所

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

『古式土師器の実年代を探る』（財）大阪府文化財センター

『弥生式土器の様式と編年 - 近畿編 I - 』寺沢 薫・森岡秀人編著、木耳社

『弥生文化の研究』金関 恕・佐原 眞編、雄山閣

『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣



# 本文目次

序文  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査・整理に至る経緯・経過と方法	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	5
第3章 調査の成果	8
第1節 基本層序と遺構面	8
第2節 各時代の遺構と遺物	14
1. 第11面（弥生時代前期）	14
2. 第10面（弥生時代前期末～中期）	21
3. 第9面（弥生時代中期初頭以降）	30
4. 第8面（弥生時代中期前半）	36
5. 第7面（弥生時代中期中葉）	40
6. 第6面（弥生時代中期後半）	42
7. 第5面（弥生時代中期末）	47
8. 第4面（弥生時代後期）	50
9. 第3面（弥生時代後期末）	53
10. 第2面（古墳時代～古代）	54
11. 第1面（中世～近世）	61
第4章 自然科学分析	62
第1節 はじめに	62
第2節 山賀遺跡出土石器・剥片の石材	63
第3節 放射性炭素年代測定	66
第4節 山賀遺跡の大型植物遺体同定分析	70
第5節 山賀遺跡の動物遺体同定分析	77
第6節 樹種鑑定	80
第5章 まとめ	81
第1節 基本層序について	81
第2節 遺構面について	87
第3節 溝群について	89
第4節 木棺墓について	90
第5節 建物について	91

# 挿図目次

図1 山賀遺跡の地区割	3
図2 山賀遺跡周辺の土地条件	5
図3 山賀遺跡周辺の遺跡分布	7

図4	各調査区における基本層序の断面位置	8
図5	08-1-1区 断面	10
図6	08-1-2区 断面	11
図7	08-1-3区 断面	13
図8	08-1-2・3区 第14層 出土遺物	14
図9	第11面 全体平面	15
図10	08-1-1区 21ピット	16
図11	08-1-2区 27溝 出土遺物	16
図12	08-1-3区 12溝 平面・断面・出土遺物	17
図13	08-1-3区 11木棺墓 平面・断面	18
図14	08-1-2・3区 第13層 出土遺物(1)	19
図15	08-1-2・3区 第13層 出土遺物(2)	20
図16	第10面 全体平面	21
図17	08-1-1区 20溝 断面、08-1-2区 26土坑 断面・出土遺物	22
図18	08-1-2区 25建物 断面	23
図19	08-1-2区 25建物 床1～3変遷	24
図20	08-1-2区 25建物・ピット群 平面、ピット28・29・31・33・35・37・38 断面	25
図21	08-1-2区 25建物 出土遺物	27
図22	08-1-3区 10溝、08-1-2区 第12層、08-1-3区 第10面 出土遺物	28
図23	第9面 全体平面	30
図24	08-1-2区 20落込 断面・出土遺物	31
図25	08-1-2区 24石器集中部 出土分布	33
図26	08-1-2区 24石器集中部出土遺物	34
図27	08-1-1～3区 第11層 出土遺物	35
図28	第8面 全体平面	36
図29	08-1-1区 19落込 断面	37
図30	08-1-2区 21・22・23土坑 断面・出土遺物	38
図31	08-1-2・3区 第10層 出土遺物	39
図32	第7面 全体平面	40
図33	08-1-2区 18溝 断面・出土遺物	41
図34	第6面 全体平面	42
図35	08-1-2区 17流路・第8層 出土遺物	44
図36	08-1-3区 8流路 出土遺物(1)	45
図37	08-1-3区 8流路 出土遺物(2)	46
図38	第5面 全体平面	47
図39	08-1-1区 10～12土坑 断面、9溝・12土坑 出土遺物	48
図40	08-1-2区 11～13溝・15土坑 断面、13溝 出土遺物	49
図41	08-1-3区 6土坑、08-1-1区 第7層 出土遺物	50
図42	第4面 全体平面	51
図43	08-1-2区 10溝 断面、08-1-3区 第6層 出土遺物	52
図44	第3面 全体平面	53
図45	08-1-1区 第4層 出土遺物	54
図46	第2面 全体平面	55
図47	08-1-1区 1～2溝、5・6ピット 断面、2溝・3落込 出土遺物	57

図48	08-1-2区	1土坑	断面	58
図49	08-1-2区	7土坑	遺物出土状況・断面・出土遺物	59
図50	08-1-2区	5・6土坑、9ピット	断面、第3層出土遺物	60
図51	第1面	遺構平面、第1層出土遺物		61
図52	各試料の	暦年代較正曲線		68
図53	弥生時代前期	(I様式)の山賀遺跡		82
図54	弥生時代中期	(II様式前半)の山賀遺跡		83
図55	弥生時代中期	(II様式後半)の山賀遺跡		84
図56	弥生時代中期	(III~IV様式)の山賀遺跡		85
図57	弥生時代末~古墳時代初	(庄内期)の山賀遺跡		86

## 表 目 次

表1	基本層序・遺構面の関係	9
表2	石材鑑定分析資料の一覧および分析結果	64
表3	測定試料及び処理	67
表4	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	67
表5	各床面炭層における大型植物遺体の産状	71
表6	動物遺体同定分析資料の一覧および分析結果	78
表7	出土木質遺物一覧	80
表8	山賀遺跡における基本層序の対照	81
表9~10	掲載遺構一覧	92
表11~15	掲載遺物一覧	94

## 写 真 目 次

写真1	ラフタークレーンによる航空測量	2
写真2	大型植物遺体	76

## 図 版 目 次

図版1	08-1-1区	西壁断面 (東から)	08-1-3区	13落込断面 (南東から)	
	08-1-1区	南法面断面 (北から)	図版6	08-1-3区	12溝検出状況 (西から)
	08-1-1区	南法面断面 (北から)		08-1-3区	12溝近接 (西から)
図版2	08-1-2区	西壁断面 (東から)		08-1-3区	12溝遺物出土状況 (西から)
	08-1-3区	東壁断面 (南西から)		08-1-3区	12溝断面 (西から)
	08-1-2区	北壁断面 (南西から)	図版7	08-1-1区	全景 (西から)
	08-1-3区	東壁断面 (西から)		08-1-1区	20土坑近接 (北西から)
	08-1-2区	南北アゼ断面 (西から)		08-1-1区	20土坑断面 (南西から)
	08-1-3区	北壁断面 (南西から)		08-1-1区	赤色顔料出土状況 (北から)
図版3	08-1-1区	全景 (西から)	図版8	08-1-2区	全景 (北から)
	08-1-1区	21ピット断面 (南から)		08-1-2区	25建物南北断面 (北から)
図版4	08-1-2区	全景 (西から)		08-1-2区	25建物東西断面 (西から)
	08-1-2区	27溝断面 (北西から)		08-1-2区	25建物(床1)近接 (南から)
図版5	08-1-3区	14溝断面 (南西から)	図版9	08-1-2区	25建物(床2)近接 (南から)
	08-1-3区	北端全景 (西から)		08-1-2区	25建物(床3)近接 (南から)

	08-1-2区	25建物最終面遺構検出状況 (南から)		08-1-3区	北端全景 (南西から)
	08-1-2区	25建物最終面遺構検出状況 (東から)	図版21	08-1-1区	全景 (西から)
図版10	08-1-2区	25建物最終面遺構完掘状況 (南から)		08-1-1区	15溝近接 (北西から)
	08-1-2区	28・29ピット完掘状況 (南から)	図版22	08-1-1区	14流路断面 (北東から)
	08-1-2区	30ピット完掘状況 (南から)		08-1-1区	14流路近接 (北東から)
	08-1-2区	28ピット断面 (南から)	図版23	08-1-2区	全景 (北から)
	08-1-2区	37ピット断面 (南から)		08-1-2区	18溝近接 (南から)
	08-1-2区	31ピット断面 (南から)		08-1-2区	全景 (西から)
	08-1-2区	38ピット断面 (西から)		08-1-2区	17流路断面 (南東から)
	08-1-2区	29ピット断面 (南から)		08-1-3区	8流路(北端)検出状況 (南東から)
	08-1-2区	35ピット断面 (南から)		08-1-3区	8流路(南端)検出状況 (西から)
図版11	08-1-3区	北端全景 (南東から)		08-1-3区	北端全景 (南東から)
	08-1-3区	10溝検出状況 (南から)	図版24	08-1-3区	南端全景 (西から)
	08-1-3区	10溝近接 (西から)		08-1-3区	8流路(南東)断面(西から)
図版12	08-1-1区	全景 (西から)		08-1-1区	全景 (北西から)
	08-1-2区	全景 (北から)		08-1-1区	12土坑遺物出土近接(南から)
図版13	08-1-2区	24石器集中部検出状況 (南から)		08-1-1区	12土坑断面 (東から)
	08-1-2区	24石器集中部出土状況 (南西から)	図版25	08-1-1区	10土坑近接 (西から)
	08-1-2区	24石器集中部作業風景 (南西から)		08-1-1区	10土坑断面 (西から)
	08-1-2区	24石器集中部出土状況 (南から)		08-1-1区	全景 (南東から)
図版14	08-1-2区	24石器集中部出土状況 (北から)		08-1-1区	9溝(西端)断面 (東から)
	08-1-2区	24石器集中部作業風景 (南から)		08-1-1区	9溝(東端)断面 (東から)
	08-1-2区	24石器集中部出土状況 (南から)	図版26	08-1-2区	全景 (北から)
	08-1-3区	南端全景 (西から)		08-1-2区	全景 (西から)
図版15	08-1-1区	全景 (西から)		08-1-2区	15土坑断面 (西から)
	08-1-1区	19流路断面 (南西から)	図版27	08-1-2区	13溝断面 (南西から)
図版16	08-1-2区	全景 (北から)		08-1-2区	12溝断面 (南西から)
	08-1-2区	20落込遺物出土状況(西から)		08-1-2区	11溝断面 (北から)
	08-1-2区	遺構検出状況 (西から)	図版28	08-1-3区	北半全景 (南東から)
	08-1-2区	遺構掘削状況 (西から)		08-1-3区	南半全景 (北西から)
図版17	08-1-3区	北端全景 (南東から)		08-1-1区	畦畔検出状況 (西から)
	08-1-3区	南端全景 (西から)		08-1-1区	全景 (南西から)
図版18	08-1-1区	全景 (西から)	図版29	08-1-1区	8溝検出状況 (南から)
	08-1-1区	15溝近接 (北西から)		08-1-1区	8溝・疑似畦畔近接(南から)
図版19	08-1-2区	全景 (北から)		08-1-1区	7・8溝近接 (北東から)
	08-1-2区	遺物出土状況 (南から)		08-1-1区	7・8溝断面 (北から)
	08-1-2区	第10層遺物近接 (南から)	図版30	08-1-2区	全景 (北から)
	08-1-2区	第10層遺物近接 (東から)		08-1-2区	水田近接 (西から)
図版20	08-1-2区	18溝近接 (南から)	図版31	08-1-2区	10溝近接 (南から)
	08-1-2区	18溝断面 (西から)		08-1-2区	10溝断面 (南から)
				08-1-3区	北半全景 (南東から)
				08-1-3区	中央全景 (南東から)
				08-1-3区	南端全景 (北西から)
			図版32	08-1-1区	全景 (南から)
				08-1-2区	全景 (北から)
				08-1-2区	水田畦畔(第5層)断面 (南から)
			図版33	08-1-3区	中央全景 (北西から)
				08-1-3区	第6層(氾濫堆積物)

		検出状況 (南東から)		18溝、17流路 [1]	
	08-1-3区	東壁断面 (南東から)	図版62 第6面	08-1-2区	17流路 [2]
	08-1-3区	4溝内噴砂検出状況 (北東から)	図版63 第6面	08-1-3区	8流路 [1]
	08-1-3区	4溝断面 (北から)	図版64 第6面	08-1-3区	8流路 [2]
図版34	08-1-1区	全景 (西から)	図版65 第6面	08-1-3区	8流路 [3]
	08-1-1区	全景 (東から)	図版66 第6面	08-1-3区	8流路 [4]
図版35	08-1-1区	4井戸断面 (東から)	図版67 第6面	08-1-2・3区	8流路 [5]、第8層
	08-1-1区	4井戸底断面 (東から)	図版68 第5面	08-1-1・3区	
	08-1-1区	5ピット断面 (南から)			12ピット、9溝、13溝、5土坑
	08-1-1区	埴輪・土器出土状況 (南から)	図版69 第5～3面	08-1-1・3区	
	08-1-1区	1溝断面 (南東から)			6土坑、第7層、第6層、第4層
	08-1-1区	2溝断面 (南から)	図版70 第2面	08-1-1・2区	1溝、2溝、3溝
図版36	08-1-2区	全景 (北から)	図版71 第2面	08-1-2区	7土坑
	08-1-2区	1土坑検出状況 (北西から)	図版72 第2面・第1面	08-1-1・2区	
	08-1-2区	1土坑断面 (南西から)			第3層、第1層
	08-1-2区	1土坑断面 (北東から)			
図版37	08-1-2区	7土坑遺物出土状況 (南西から)			
	08-1-2区	7土坑断面 (南から)			
	08-1-2区	5土坑断面 (北から)			
	08-1-2区	9ピット断面 (南から)			
図版38	08-1-1区	全景 (西から)			
	08-1-2区	全景 (西から)			
図版39	第11面	08-1-2・3区 第14層、27溝、12溝 [1]			
図版40	第11面	08-1-3区 12溝 [2]			
図版41	第11面	08-1-2・3区 第13層 [1]			
図版42	第11面	08-1-2・3区 第13層 [2]			
図版43	第11面	08-1-2・3区 第13層 [3]			
図版44	第11面	08-1-2・3区 第13層 [4]			
図版45	第10面	08-1-2区 25建物址 [1]			
図版46	第10面	08-1-2区 25建物址 [2]			
図版47	第10面	08-1-2区 25建物址 [3]			
図版48	第10面	08-1-2区 25建物址 [4]			
図版49	第10面	08-1-2・3区 26土坑、 10溝 [1]			
図版50	第10面	08-1-3区 10溝 [2]			
図版51	第10面	08-1-2・3区 第12層			
図版52	第9面	08-1-2区 20落込			
図版53	第9面	08-1-2区 24石器集中部 [1]			
図版54	第9面	08-1-2区 24石器集中部 [2]			
図版55	第9面	08-1-2区 24石器集中部 [3] 第11層 [1]			
図版56	第9面	08-1-2・3区 第11層 [2]			
図版57	第9面	08-1-1・2・3区 第11層 [3]			
図版58	第9面	08-1-2区 第11層 [4]			
図版59	第8面	08-1-2区 22土坑、23土坑、第10層 [1]			
図版60	第8面	08-1-1・2区 第10層 [2]			
図版61	第7面・第6面	08-1-2・3区			

# 第1章 調査に至る経緯・経過と方法

## 第1節 調査の経緯と経過

山賀遺跡は、大阪府八尾市の北西部（山賀町・新家町）と東大阪市南西部（若江南町・若江西新町・新上小阪・南上小阪・金物町）に所在する。遺跡の範囲は八尾市新家町を中心とする東西約0.9 km、南北約1.0 kmに及び、周囲には若江遺跡、上小阪遺跡、友井東遺跡等が隣接する。本遺跡は縄文時代晩期から中近世にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代前期を中心とする古い段階の資料が豊富に認められ、近年では流水文の施された小形木製品が出土したことで注目された。

山賀遺跡は、昭和46（1971）年の楠根川改修工事において、弥生時代を中心とする多数の遺物が出土したことにより発見された。昭和54（1979）年以降、近畿自動車道松原吹田線の建設に伴い、財団法人大阪文化財センター（現 大阪府文化財センター：以下、当センター）が発掘調査を実施し、縄文時代から中近世にかけての複数の遺構面を確認し、連綿と続く生活痕跡の良好に残存する遺跡として周知されることとなった。特に、弥生時代前期から中期にかけての遺物量が豊富であり、河内平野でも有数の最古級遺跡として知られる。当センター以外にも、東大阪市教育委員会、東大阪市文化財協会、東大阪市遺跡保護調査会、八尾市教育委員会、八尾市文化財調査研究会、近畿大学による調査が行なわれており、河内平野の弥生時代を知る上で貴重な成果があげられている。

今回の調査は、大阪府八尾土木事務所が計画する寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調節池）の一環に伴う発掘調査であり、平成20（2008）年12月から平成21（2009）年3月にかけて、現地調査を実施した。平成16・17（2004・2005）年度には、工事本体部分である調節池とその周辺部において、山賀遺跡03-1・05-1の発掘調査が実施されており、その後の整理作業を経て、平成19（2007）年9月に報告書を刊行している。

今回の調査地は、新家調節池2期工事として計画された同地内の管理棟・防火水槽・圧送管築造部分の埋蔵文化財の記録を目的とするものであり、既刊の03-1・05-1調査区に隣接する。現地では既に鋼矢板が打設された北側の管理棟部分から着手し、順にその他の調査区を開口した。ただし、調節池本体の工事も同時に進行していたため、これに接続する圧送管築造部分は調査期間を調整しながら実施した。主に2つの調査区の作業を並行して行い、都度に応じて大阪府の指導・立会を受け、管理棟部は平成21（2009）年2月24日、防火水槽部は平成21（2009）年3月6日、圧送管築造部は平成21（2009）年3月19日に、それぞれの調査を終了した。

現地調査終了後は、報告書作成に伴う遺物整理事業を中部調査事務所において平成21（2009）年5月31日まで行い、その間に、石材や動物遺体・植物遺体の同定、放射性炭素年代測定の委託分析を実施した。印刷業務を経た後、平成21（2009）年8月31日付けの『山賀遺跡Ⅱ』の刊行をもってすべての事業を終了した。

## 第2節 調査の方法

調査・整理に関するすべての記録は、大阪府文化財センターが平成15（2003）年に定めた『遺跡調査基本マニュアル』に則って実施している。以下では、今回の調査に関する特記事項を中心に明記する。

調査名称は、遺跡名に事業開始年度（西暦）の下2桁を足し、同遺跡における同一年度内の発注番号を枝番号として付したものである。調査区は、新家調節池2期工事として計画された管理棟・防火水槽・圧送管築造部の3箇所がある。いずれも独立することから、北から順に1～3を設定し、記録上の調査区名称としては○トレンチとのみ記載した。当センター内の正式な記録情報名としては、○トレンチが「山賀遺跡08-1-○区」となり、本書内もこれを踏襲する。

現地では、08-1-1・2区については鋼矢板の打設後、G.L.-1.2m付近まで重機による機械掘削を行い、これより下を人力により掘削した。本体工事の設計により、08-1-1区の調査深度はG.L.-1.60m・-1.95m・-2.95m・-3.50mの4段階、08-1-2区はG.L.-3.75mとなる。08-1-3区は、平成17（2005）年度にG.L.-2.1m付近まで既に調査が実施されており、今回はその下部が調査対象となった。現地では、既調査部分を重機により掘削し、周囲に軽量矢板を建て込んだ後、G.L.-4.00mまでを人力により掘削した。

調査中に行った図面・写真の記録や、出土した遺物の取り上げには、すべて「地区割」を明記した。この地区割は世界測地系の国土座標軸に準拠したものであり、本調査区における具体例を図1に示す。大阪府は国土座標軸の第VI座標系に位置しており、これを元に第I～VI区画に区分し、アルファベットとアラビア数字による組み合わせで表現する。今回の調査区は、第I-II区画が「H6-2」、第III区画が「8L」「8M」となる。調査では、主に第IV区画までを用いており、必要に応じて座標値や任意の区画による記録を行っている。なお、以前に使用していた日本測地系による地区割との混同を避けるため、第III・IV区画の表記方法において、アルファベットとアラビア数字を逆にしている。

遺構面と層序名については、機械掘削終了後の調査対象部分に関して、上から順に通し番号を設定した。詳細は第3章において記述するが、包含層の数と検出した遺構面の数が一致しないため、層名と遺構面名にはズレが生じている。例としては、第1・2層の除去面を第1面とする等である。また、限定的な細分や、連続しない層の場合は、基本層序番号に枝番号を付して対応した。

遺構名は、基本的に調査区毎に上面から順に通し番号を設定し、その番号の後ろに遺構の種類を明記



写真1 ラフタークレーンによる航空測量

した。特に表記の必要がないと判断したものについては、名称を付与していない。本書では、各調査区が離れていることや、遺構数が少ないことから、報告する上で特に不都合は生じないと判断し、現地で付与した遺構名を踏襲した。

現地では、主に人力による図化やアナログの写真撮影を行ったが、調査の効率化を図るため、ラフタークレーンによる航空測量やデジタル撮影による図化を併用した。航空測量では、撮影後の校正を経て、報告書の編集作業における汎用性の高いデジタルデータを作成した。

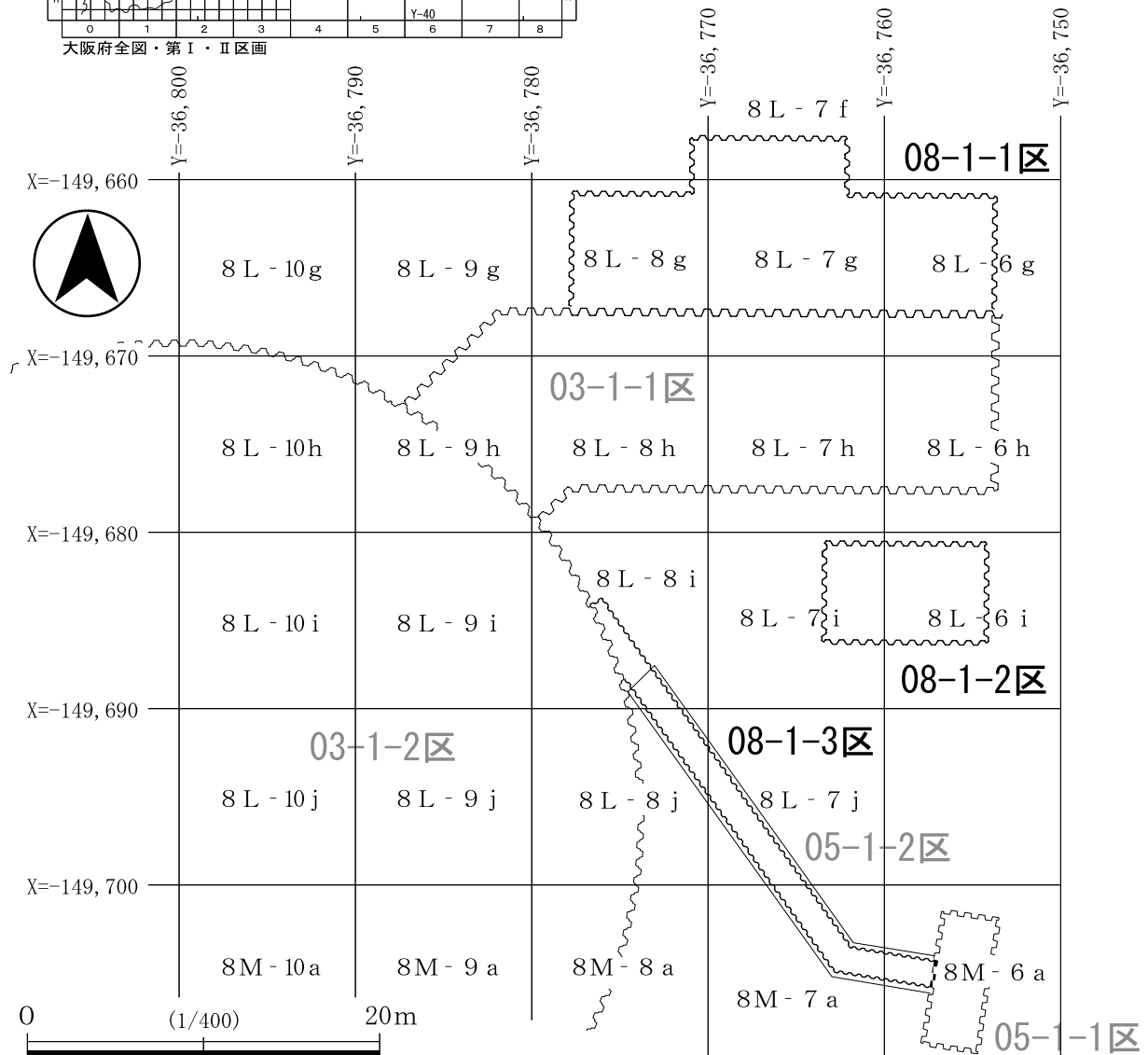
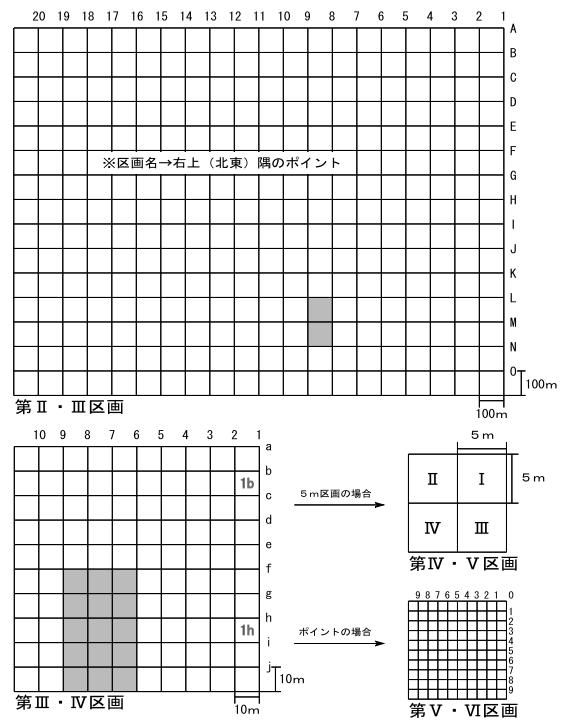
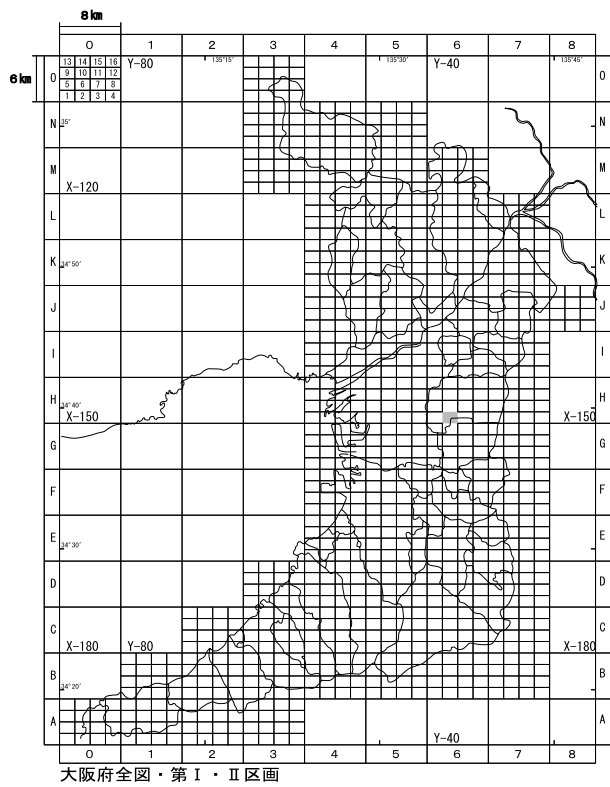


図1 山賀遺跡の地区割



報告書作成に先立つ基礎整理作業では、写真・図面の整理と遺物の洗浄・抽出を最優先とし、遺物の接合や注記作業の一部を省略した。したがって、掲載遺物の多くを破片が占めるものの、出土遺物に個体残存率の高い資料が少ないわけではないことを明記しておく。

現地における記録写真については、前述の調査マニュアルに則り、35mm・6×7銀塩カメラとコンパクトデジタルカメラを用いて撮影を行った。すべての写真資料について、併用したデジタルカメラの画像と撮影情報を記載した、ファイルメーカー社・ファイルメーカーによる「写真台帳データベース」を作成している。この中から報告書掲載用の写真を抽出し、担当写真室においてネガの画像処理を行い、印刷用のデジタルデータを作成した。現場の実測図面については、エクセルによる簡易一覧表を作成し、上記の「写真台帳データベース」上の対象写真に図面番号を併記している。写真・図面とも、報告書に掲載したものについては、その情報を上記の「写真台帳データベース」に記載している。

すべての遺物については、前述の調査マニュアルに則り、登録番号毎の画像を貼付した「登録台帳データベース」をファイルメーカーにより作成している。本書に実測図または写真を掲載した遺物については、個別の画像と各個体情報、および報告書内の掲載情報を記した「遺物台帳データベース」を別途作成している。報告書掲載用に抽出した遺物については、一部を除いて写真撮影と図化を行い、それらの情報を「遺物台帳データベース」上に記載している。

遺物写真の撮影については、前述のマニュアルに反するものの、すべてデジタルカメラを用いて実施し、担当写真室による画像処理を行った。遺物実測については、従前の方法によるアナログ図を作成した後、これを下絵としてアドビ社・イラストレーターを用いてデジタルトレースを行った。ただし、石器の一部は、デジタル化した実寸画像を下絵としてデジタル上でトレースを行ったため、手実測による図面を作成していないものもある。

調査・整理作業中に作成した写真・実測図等のデジタルデータは、すべてアドビ社・インデザインによるDTP編集作業を行い、印刷用データを作成した。印刷業務を経て、最終稿を元に本書のPDFデータを作成しており、当センターにおいて保管している。

## 第2章 位置と環境

山賀遺跡は、沖積平野である河内平野のほぼ中央に位置し、旧大和川の支流である長瀬川や楠根川によって形成された自然堤防や三角州（氾濫平野）上に広がる。今回の調査地は、ほぼ南北に北流する楠

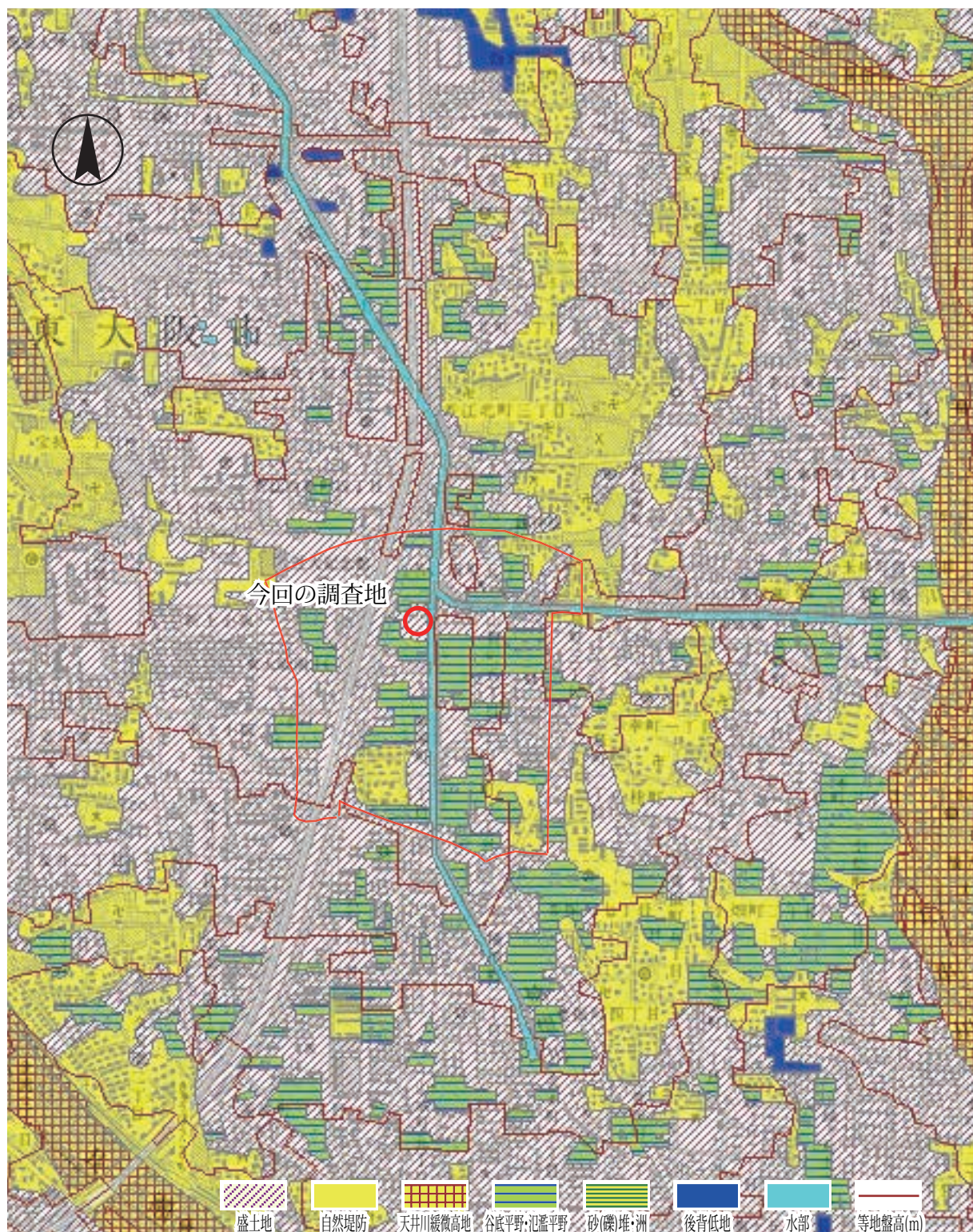


図2 山賀遺跡周辺の土地条件

※国土地理院「数値地図25000  
(土地条件) 西日本」

根川沿いの盛土地上に位置するが、この土地条件は近代以降に行われたことが明らかであり、遺跡の立地条件に直接の関連性は存在しない（図2）。しかし、それ以外の自然堤防や氾濫平野等の自然地形との関連については、いくつかの傾向を看取することが可能である。

今回の調査地周辺には氾濫平野の集中する様子が認められ、これらはちょうど山賀遺跡の範囲に一致することがわかる。遺跡の東側には断続しながらもほぼ南北方向にのびる自然堤防があり、さらに、やや小地形が散見される地域を経て旧玉串川の埋没した天井川微高地へと続いている。一方、遺跡の西側は堆積地形の過疎な地域が広がっており、これを隔てて旧長瀬川の埋没した天井川微高地やその派生によると思われる自然堤防が分布する。土地条件図における盛土地が後世に因る地形であることを鑑みると、それ以前は低地であったと考えられ、山賀遺跡の位置する地形は低地に囲まれた南北にのびる舌状の微高地であったといえる。

この自然堤防と氾濫平野によって形成された微高地形は、南側の定法寺遺跡から北の新家遺跡まで、ほぼ南北に連なる遺跡群の分布範囲に非常によく一致する（図3）。この遺跡群の東西両側には遺跡の空白地帯が認められることから、旧玉串川と旧長瀬川に挟まれた地域の中で、地形的に有利な場所を選んで遺跡が発達したことを示している。このような地形は現在も残る楠根川の前身の沖積作用に因るものと思われ、その活動は河内平野形成期の早い段階に終焉していたと考えられる。

河内湾は縄文時代前期末から中期にかけて、淀川の激しい沖積作用により河口付近の埋積が急激に進行し、後期以降には河内潟へと変化した。これに連動するように上記の堆積地形が形成されたと考えられ、遺跡群の中の新家・若江北遺跡等からは縄文時代後期の遺物が出土する。縄文時代晩期以降になると、山賀遺跡を含む多数の遺跡から遺構や遺物の出土量が増加する傾向がうかがえる。これは当該期に当地の周辺地形が安定していたことを示すものであり、弥生時代前期にかけて、瓜生堂・若江北・山賀・美園遺跡等が発達する。しかし、この間に周辺の開析谷では埋積が進んだため、弥生時代前期以降になると河川は度々氾濫を起こすようになった。各遺跡にみられる水田面の重層は、河内平野に特徴的な遺構であるが、河川の氾濫に対する当時の人々の闘いを知る貴重な足跡でもある。弥生時代中期にかけて、山賀遺跡をはじめ、瓜生堂・若江北・巨摩廃寺・萱振遺跡等に集落や墓域の形成が認められる。弥生時代中期から後期には、遺跡間や遺跡内の遺構に著しい消長がみられるようになる。同時に大規模な氾濫の痕跡等も認められることから、周辺の自然環境の変化に影響を受けたものと考えられる。このような自然災害の増加や大規模化は、弥生時代前期以降に進んだ急激な土地開発が原因となったとも指摘されている。しかし、このような中でも瓜生堂・巨摩廃寺・若江北・山賀・友井東遺跡等、多数の遺構や遺物が出土しており、周辺が生活域として利用されていたことは明らかである。

古墳時代以降、河内湖の埋没が進み、当地周辺の地形も次第に平坦化する。古墳時代前期には、東郷・中田遺跡や久宝寺遺跡等に大規模な集落や墓域が形成されている。しかし、中期以降は生活域の痕跡が急速に減少し、瓜生堂遺跡等のように点々と集落はみられるものの、各地で耕地化が進行する。また、周辺では寺院の存在を示す地名が処々に認められるものの、具体的な内容は明らかではない。古代から中世にかけて条里型地割を伴う水田開発が盛んに行われ、島島といった河内特有の農耕形態が現れる等、広大な耕作地の風景は、高度経済成長期まで永らく人々の生活と共にあった。

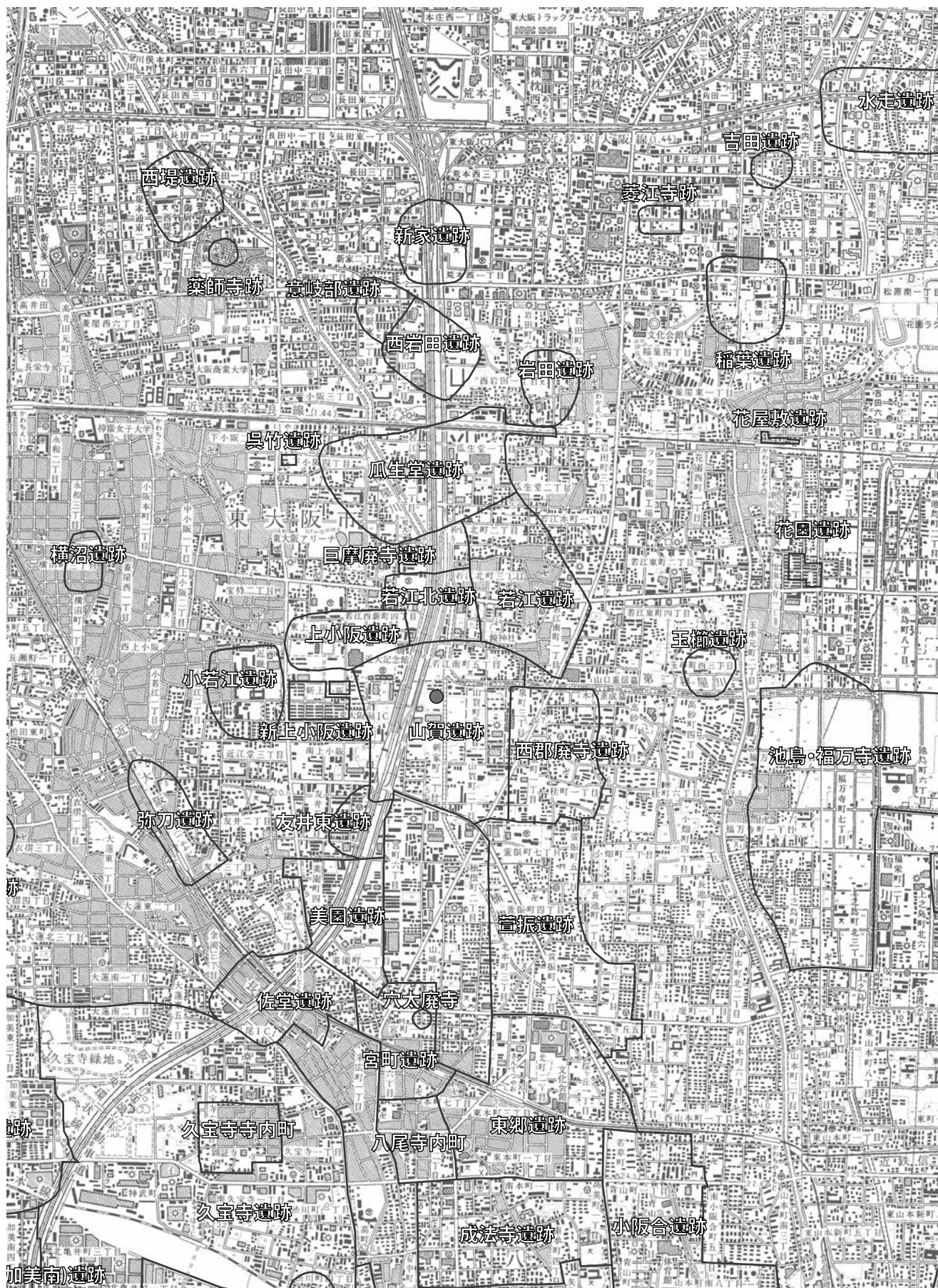


図3 山賀遺跡周辺の遺跡分布

※「大阪府文化財分布図1/10000」一部加筆

# 第3章 調査の成果

## 第1節 基本層序と遺構面

本節では、今回の調査によって得られた弥生時代前期から現代までの基本的な層序についての説明を行なう。調査地は08-1-1区から3区に分かれており、08-1-1・2区においては南北と東西の両方向、08-1-3区は北西から南東方向の層序断面を記録した(図4)。08-1-1区については、調査区内の掘削深度が異なるために1箇所記録では最深部の断面図を作成できないことから、複数の法面の情報を結合している。08-1-3区については、調査区の幅が狭いことから、横断方向である短辺側の断面の記録を行っていない。

今回の調査地は既知の03-1・05-1調査区に隣接することから、それらの成果との整合を確認しながら調査を行なった。各調査区における基本層序の対照は概ね一致するものであったが、一部に不整合

な点も認められた。詳細は第5章に後述するが、僅かな調査地点の違いで土質が変化するためであり、今回の3つの調査区内においても認められる現象である。このような状況を総括し、本調査の基本層序をまとめたものが表1である。

基本層序は、機械掘削の対象とした近現代の盛土を第1層とし、これより下、調査地内では最深の08-1-3区において計13層を確認した。遺構面は、第1層・第2層の除去面を第1面とし、これより下において計11面を確認した(表1)。以下では層序と遺構面の基本的な所見を示す。各調査区の詳細な地形や土質については、図5から図7を参照されたい(図版1・2)。なお、表1の各層序に貼付するトーンを本書内のほぼすべての断面図に共通して用い、

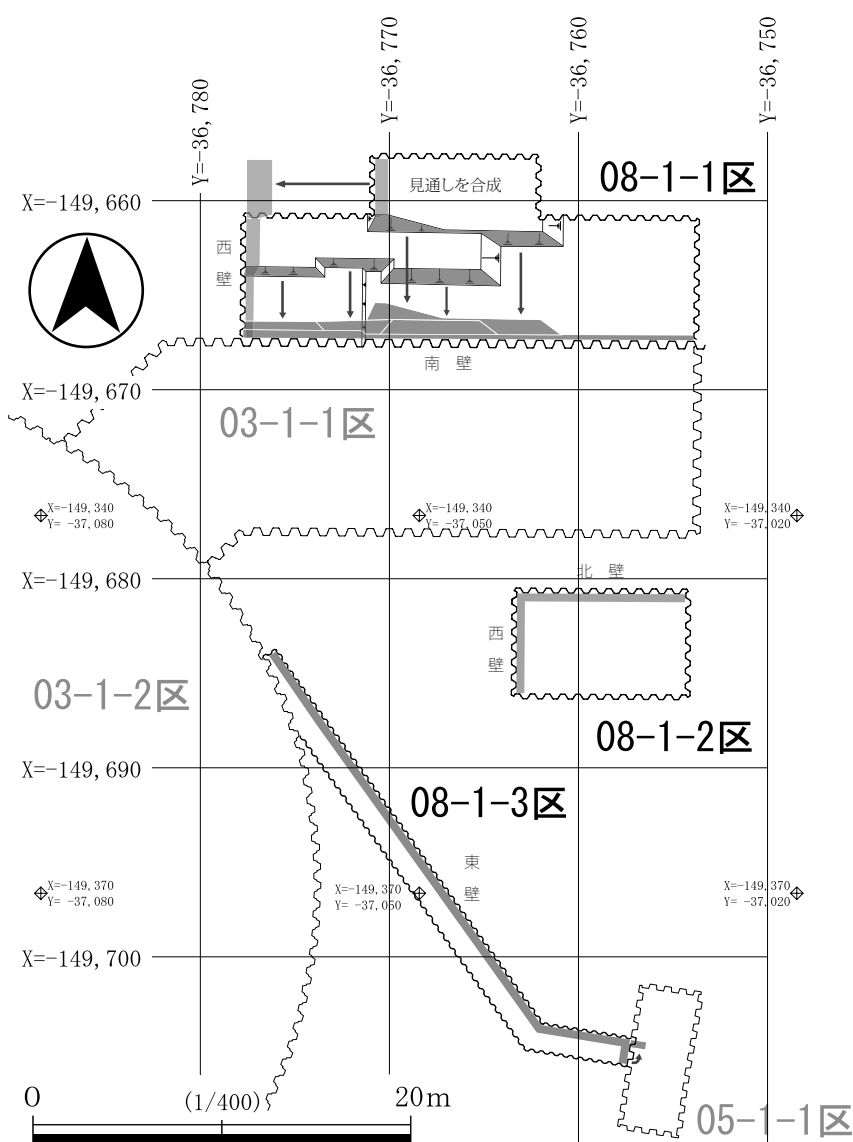


図4 各調査区における基本層序の断面位置

層序名の記載を省略している。

**第1層** 現地表面から約1.3mの深さまで堆積し、上半は礫やシルトのブロック土、下半はグライ化したシルト混じり中細砂を呈する。当地周辺に残存する耕作地との比高差が約1mであることから、極めて最近に盛土された客土と、その直前まで機能していた耕土と考えられ、近現代の耕土および盛土とする。08-1-1区では、同層除去面において耕作痕や遺物の出土が認められたため、これらを保護するため、僅かに残しながら機械掘削を行った。

**第2層** T.P.+3.3m付近に検出し、灰色や暗灰黄色を呈する砂を含むシルトである。層厚は10cm前後を測るが、後世の耕作に際して大半が失われたものと推測できる。層中に認められる斑状鉄は、均質に攪拌された耕土に残存するものとは考えにくいことから、上層の耕作時に生成されたものであろう。同層の除去面において、整然と配された多数の耕作痕を検出したことから、畝作に伴う耕土と推測する。同層からの出土遺物は少ないものの、削平した側である第1層の遺物等から鑑みると、中世から近世にかけての層と考えられる。第2層除去面を、**第1面**とする。

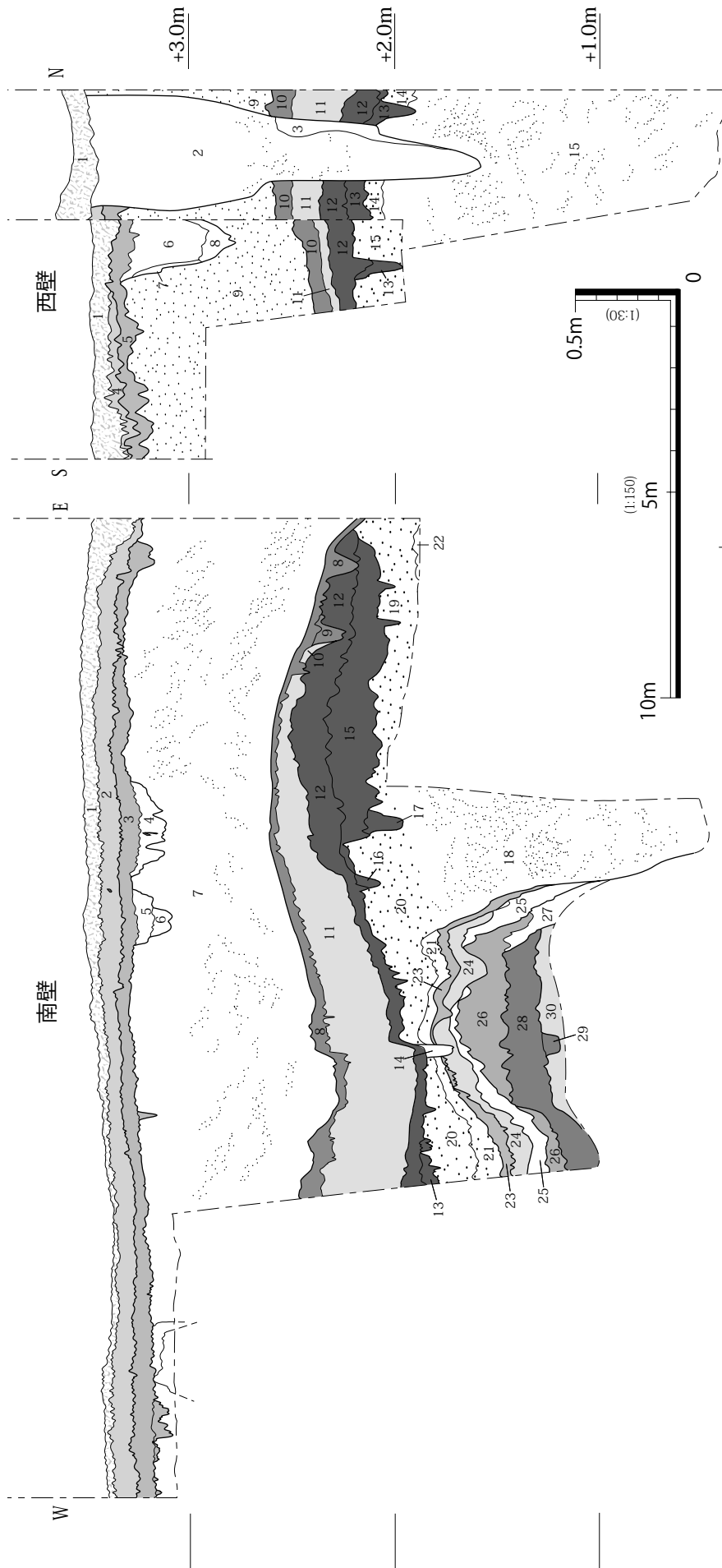
**第3層** T.P.+3.2m付近に検出し、黄灰色や暗灰黄色を呈する中細砂混じりのシルトである。層厚は10cm以下であり、上層の第2層と比較すると砂質が強く、暗色である。基盤となる第4層が砂層であることや、地表化の期間が長かったことが原因と推測する。第4層上面には層界の不明瞭な暗色部があり、第3層からの土壌化が進行したものと考えられる。層内に遺物を包含することや固く締まること、同層の下面から土坑や溝等の遺構を検出したことから、第3層は耕作土ではなく、表土が主と判断する。第3層の除去面を、**第2面**とする。

**第4層** 調査区のほぼ全域に認められる氾濫堆積物であり、層厚は0.6mから1.0mを測る。土質は灰黄褐色から暗オリーブ灰色を呈する細砂から細礫を主とする。ラミナが顕著であることから流水性の強い堆積と判断するが、原因になったと考えられる流路等は本調査区や周辺では確認できない。また、同層の除去面に侵食の痕跡があまり認められないことから、当地は本流から離れた溢流堆積部分と考える。同層より出土した遺物から、弥生時代後期末頃に発生した氾濫（洪水）によるものと推測する。

**第5層** T.P.+2.1mから+2.7m付近に検出する黒色の粘土シルトである。層厚は5cmから10cmを測り、地点によってはやや砂質であり、全体に炭化物が多く含まれる。層内に遺物がまったく含まれず、上面において水田畦畔を検出したことから、耕作土と判断する。同層上面を**第3面**とし、上層の第4層

遺構面	層序	層年代	特徴	遺物
	第1層	近現代	整地・盛土	
第1面▶	第2層	中世～近世	畝作土	瓦器、陶磁器
第2面▶	第3層	古墳～平安	畝作土～包含層	須恵器、円筒埴輪、古式土師器
第3面▶	第4層	弥生後期末～	氾濫・溢流堆積物	V様式甕
	第5層		水田耕土	
第4面▶	第6層	V様式?	止水?堆積物	
第5面▶	第7層		水田耕土	
第6面▶	第8層	IV様式?	溢流堆積物	炭化米
第7面▶	第9層		土壌化、薄層	
第8面▶	第10層	II様式新～III様式?	流水堆積物?薄層	櫛描文盛行、廉状文無(地域色?)
第9面▶	第11層	II様式?	土壌化顕著、厚い	櫛描文
第10面▶	第12層	II様式前?	土壌化弱い、盛土?	櫛描文混
第11面▶	第13層	I様式末～II様式初	土壌化、残存不良	櫛描文無
	第14層	I様式	灰色泥層	有段、刻目口縁

表1 基本層序・遺構面の関係



1 暗緑灰	7.5GY4/1	シルト混中細砂 (粗砂含む、グライ化著しい)	第1層
2 灰	5Y5/1	4 井戸埋土	第2層
3 灰	2.5Y5/1-4/1	9 の崩落土	第3層
4 灰黄褐	10YR4/2	シルト (粘土・中砂含む、マンガン鉱・珪状鉄)	第4層
5 黒褐	2.5Y3/2	中細砂混粘土 (下半ほど砂質、粗砂・細砂含む、珪状鉄)	第5層
6 灰黄褐	10YR4/2	中砂～細礫 (ラミナあり、上部土壌化、下半に鉄分沈着)	第6層
7 灰黄褐	10YR5/2	中細砂混シルト (細砂・小礫含む、珪状鉄)	第7層
8 黒	7.5Y7/2	7 にぶい、草腐	第8層
9 オリーブ黒	7.5Y3/1	細砂～細礫 (シルトとにぶい草腐10YR5/3中細砂の互層)	第9層
10 灰	10Y4/1	粘土シルト (炭化物含む、鉄分沈着)	第10層
11 暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘土シルト (下半に第7層まきあける)	第11層
12 黒	5Y2/1	粘土シルト (粘土・粗砂含む、炭化物多く含む)	第12層
13 オリーブ黒	7.5Y3/1	シルト混中細砂 (粗砂含む、珪状鉄)	第13層
14 黒	10Y2/1	細砂混シルト (中砂含む、シルトブロック含む)	第14層
15 灰	10Y4/1	シルト～細礫、シルト、ラミナあり、下層ブロック含む	第15層
16 灰～オリーブ黄	5Y6/1～6/3	12と19のブロック	第16層
17 灰オリーブ	5Y5/2	15と19のブロック	第17層
18 暗オリーブ灰	5Y4/1	シルト～粗砂 (細礫(植物遺体含む、ラミナ有))	第18層
19 黒	5Y3/1	細砂～粗砂	第19層
20 暗オリーブ灰	7.5Y3/1	シルト混粗砂(中砂含む)	第20層
21 黒	10Y2/1	細砂混粘土シルト(強いラミナ)	第21層
22 黒	5Y2/1	シルト混細砂	第22層
23 黒	2.5GY4/1	粘土シルト (上半部砂含む、下半部ブロック状)	第23層
24 オリーブ灰	10Y3/1	粘土シルト(中砂わずかに含む)	第24層
25 灰	10Y4/1	中細砂混粘土シルト (細礫、植物遺体含む)	第25層
26 灰	10Y3/1	粘土シルト(微細ブロック状)	第26層
27 オリーブ黒	10Y3/1	中細砂混シルト(ブロック状)	第27層
28 オリーブ黒	10Y3/1	細砂混シルト(粘土、粗砂、細礫含む)	第28層
29 暗緑灰	7.5GR4/1	28と30のブロック	第29層
30 暗緑灰	7.5GR4/1	中細砂混シルト(粗砂、細礫含む)	第30層

図5 08-1-1区 断面





が短期間のうちに堆積したと考えられることから、弥生時代後期後半頃と推定する。

**第6層** 灰色から暗オリーブ灰色を呈する粘土から細礫の氾濫堆積物であり、第5層の基盤層となる。調査区の大半は層厚が20cm前後で粘土からシルトを主とするが、08-1-3区の北半は層厚が50cm以上の礫層であり、第7層が削平されていることから、土砂流入の中心であった可能性が高い。第5層を除去した本層の上面では、遺構がまったく検出されなかったため、遺構面の設定を行っていない。僅かな出土遺物から、弥生時代中期から後期頃の堆積と推測する。

**第7層** T.P.+1.9 mから+2.5 m付近に検出する、黒色の土壌化層である。08-1-1区東半から3区にかけての低位では粘土シルトが主であり、08-1-1区西半の高位はシルト混じりの中細砂を呈する。同層の上面において水田畦畔を検出したことから、良好に攪拌され、長期にわたり地表化した耕作土と判断する。第7層上面を**第4面**とし、同層除去面を**第5面**とする。第5面からⅣ様式の土器が出土することから、弥生時代中期後半の地表面と考える。

**第8層** 灰オリーブを呈する細砂から細礫の氾濫堆積物である。08-1-3区の中央から08-1-2区の西端をかすめ、08-1-1区の西半を北流する河川（流路）から溢流したものと考えられ、中心部の層厚は1.5 mを超える。流路の出土遺物から、Ⅲ様式からⅣ様式頃の氾濫によるものとする。同層除去面を**第6面**とする。

**第9層** T.P.+1.7 mから+2.0 m付近に検出する、黒色の微砂混じりシルトを主とする土壌化層である。層厚が5 cm程度と薄いものの、上層を止水堆積が覆うことから、削平はほとんど受けていない。同層除去面を**第7面**とする。

**第10層** 第9層の基盤層であり、暗オリーブ灰色を呈する粘土から微砂を主とする。10cmから30cmの層厚を測り、微細な粒状がみられることから、弱い流水性の堆積物と推測する。層中より出土する遺物に櫛描文を多用する特徴的な土器が含まれることから、Ⅱ様式からⅢ様式にかけての堆積と考える。同層除去面を**第8面**とする。

**第11層** T.P.+1.5 mから+1.7 m付近に検出し、オリーブ黒色から黒色を呈する砂混じり粘土シルトである。層厚は10cmから25cmを測り、層内に炭化物を多く含み、土壌化が顕著である。特に08-1-2区において遺物の包含量が著しく、それらに古い様相の櫛描文土器が認められることから、Ⅱ様式を中心とする弥生時代中期前半頃の表土と考える。同層除去面を**第9面**とする。

**第12層** T.P.+1.5 m付近に検出し、灰色からオリーブ黒色の砂混じりシルトを主とする。いずれの調査区においても、ブロック状を呈することが特徴であり、層厚は5 cmから20cmを測る。局所的であるため断定はできないものの、ブロック内に土壌化層を多く含むことから、自然堆積に因るものとは考えにくく、人為的に改変された盛土等の土砂である可能性が高い。出土遺物に櫛描文土器が混じることから、弥生時代中期初めの所産と考える。同層除去面を**第10面**とする。

**第13層** T.P.+1.0 mから+1.4 m付近に検出し、オリーブ黒色の砂混じり粘土シルトである。層厚は10cmから20cmを測り、土壌化が顕著である。貼付突帯を主とし、櫛描文土器がほとんど認められないことから、弥生時代前期末から中期初めにかけての表土と推測する。同層の除去面を**第11面**とする。

**第14層** 第13層の基盤層であり、暗緑灰色から暗オリーブ灰色を呈する粘土シルトを主とする。層厚は40cm以上を測り、調査深度以下に達する。粒度の細かい08-1-2・3区に対し、08-1-1区は粗砂や礫が混じるものの、いずれにおいてもグライ化が認められる。

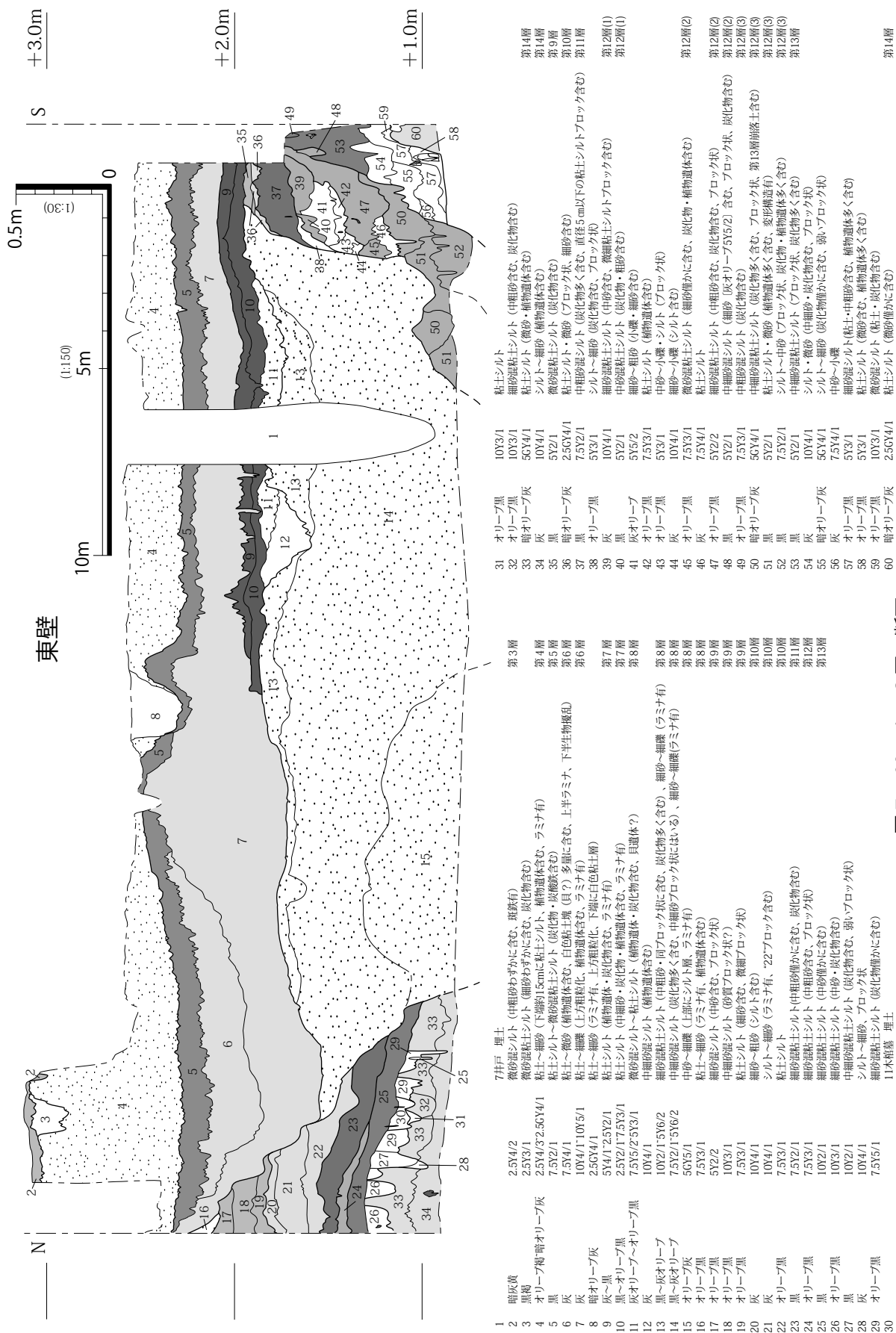


図7 08-1-3区 断面

## 第2節 各時代の遺構と遺物

### 1. 第11面（弥生時代前期）

今回の調査における、最深の層序として確認したものが第14層である。後世の流路による攪乱を除いた調査区のほぼ全域において検出した。いずれの調査区においても、T.P.+1.0 mから+1.3 m付近に堆積しており、層厚が15cmから40cm以上を測る氾濫堆積物である。土層の下端が調査深度以下に存在するため、全体像は未確認であるが、検出した範囲では下位ほど顕著なグライ化が認められる。土質は、08-1-2・3区が泥質であるものの、北側の08-1-1区がやや粗粒となる。また、標高に関して、南側の08-1-2・3区に比して08-1-1区がやや高いことなどから、大局的ではあるが、北側に氾濫堆積物を供給するような本流の存在した可能性が高く、調査区周辺はその後背地に位置したと推測する。松田順一郎氏によると、縄文時代晩期以前に形成された開析谷（流路）が弥生時代前期までにほぼ充填するとされており、当該期に第14層のような溢流堆積が増加したものと考えられる。

第14層から出土した遺物は、本調査における層位学的に最古の資料となるものである。しかし、同層の全体像が不明であり、出土位置が層の上位にあたると考えられることから、これらの遺物が直ちに第14層の時期を決定するものではないことを注記しておく。層内からの遺物としては弥生式土器の壺・甕・鉢・石器等がある。08-1-1調査区の遺物は皆無であったが、08-1-2・3調査区ではまとまって出土した。図8-1は、外面に3条の沈線を巡らす鉢の口縁部片である。端部はやや直立する。2は頸部に沈線を巡らせ、外反する鉢の口縁部片である（図版39）。出土遺物全体において、沈線や削り出し突帯・貼付け突帯の破片のみが認められ、櫛描文はまったく含まれないことから、第14層はI様式の弥生時代前期に比定する。

第14層の上面である第11面は、同層が土壌化した第13層の除去面に相当する。第14層を検出した調査区のほぼ全域において確認した。遺構面の標高は、T.P.+1.0 mから+1.3 mを測る。各調査区ともに検出範囲が狭小であるため、地形等の詳細は不明であるが、前述の堆積状況から、当地周辺は南へと緩やかに下降する後背地であったと思われる。遺構としては、落込み・溝・土坑・ピットを検出した。

08-1-1区は、北側の突出部分のみの調査であり、南西から北東へと伸びる落込みと、ピット1基を検出した（図9、図版3）。西側は第6面の流路による攪乱である。落込みは、遺構底面が調査深度限界より低い位置にあるために詳細は不明であるが、調査区外へと伸びることから、大地形の一部であったと推測する。落込みの南辺に沿う微高地において、21ピットを検出した。直径約30cm、深さ約9cmを測る（図10、図版3）。埋土上層の中央部に凹みがみられることから、柱の掘形であった可能性が考えられる。

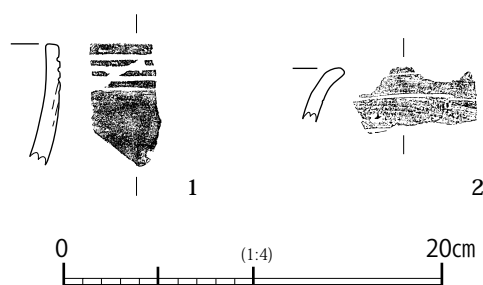


図8 08-1-2・3区 第14層 出土遺物

08-1-2区では、西側の第6面の流路による攪乱を除く全域において第11面を検出した。地形は、調査区の北東部を高所として、南西へと緩やかに下降する状況が認められる。遺構としては、不定形な溝を1条検出した以外、微地形を確認したのみである（図9、図版4）。ただし、本調査区では、調査深度までに第14層の分化を確認し、上層の除去面において、間層の中細砂を埋土とする多数の足跡を検出した。検出範囲

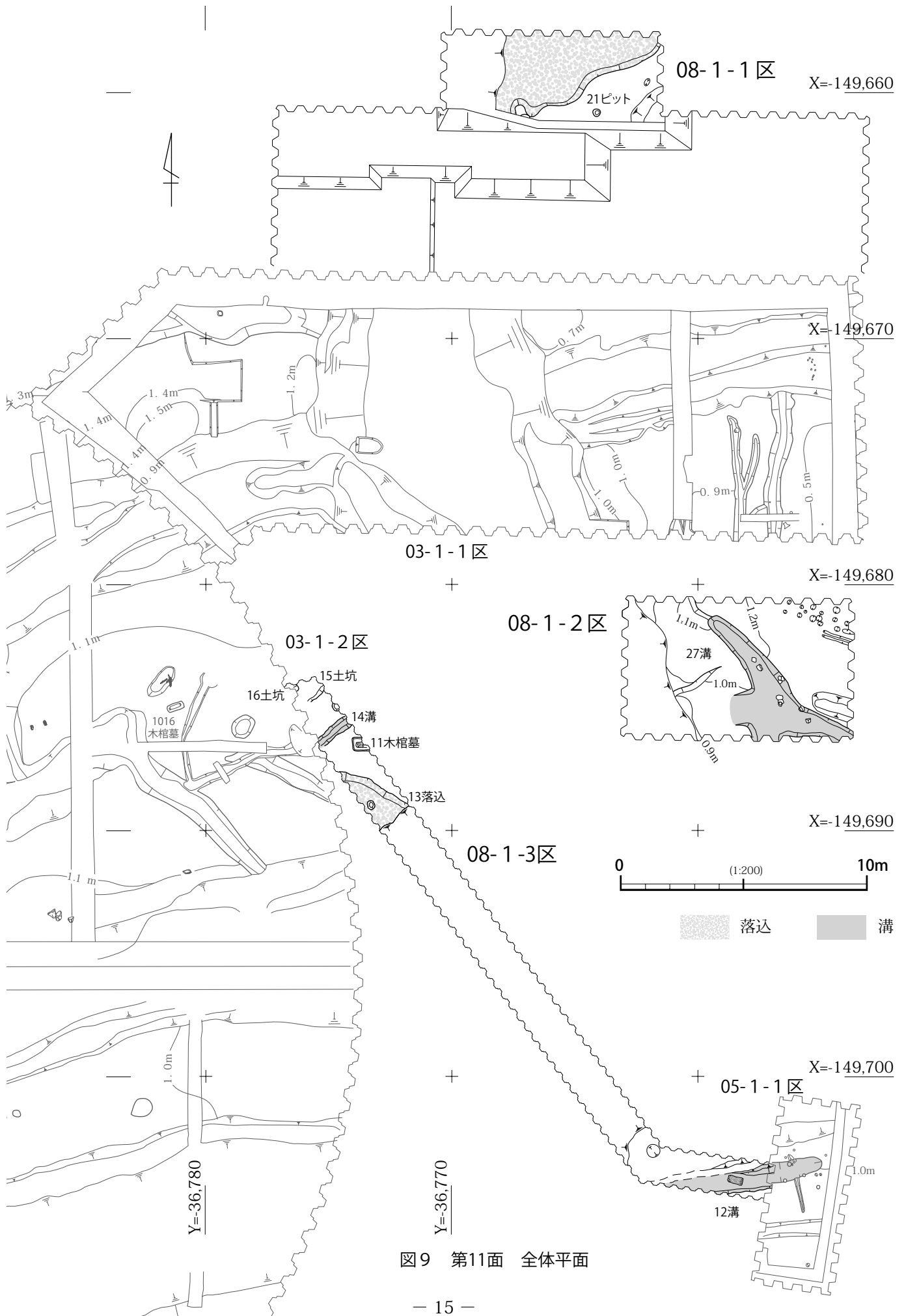


図9 第11面 全体平面

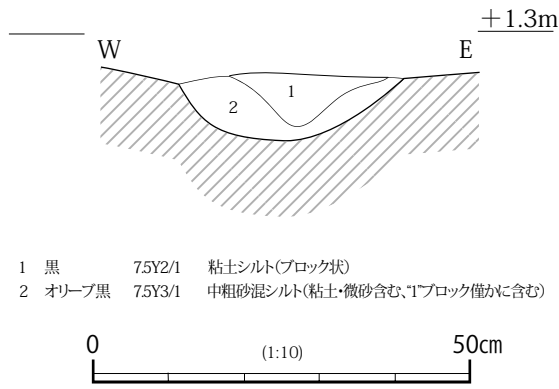


図10 08 - 1 - 1区 21ピット 断面

が極めて狭小なため、遺構面としては区分していない。

27溝は、緩斜面の傾斜に平行するように開削されており、長さ約7.5 mにわたって検出した。ただし、南東端は調査区外にのびており、平面形状も不定なことから、いわゆる溝として機能したものは不明である。溝は幅約1.1 m、深さ約23cmを測り、埋土が炭化物や微細ブロックを含むシルトから細砂である(図18右、図版4)。同溝の周辺からは遺物がまとまって出土したものの、出土地点の標高がやや高く埋没後の可能性が高い等、同遺構に伴う確実なものは少量であり、その大半は甕の体部片であった。

図11-1は、27溝より出土した甕の口縁部片である(図版39)。頸部の外面に2条の沈線を巡らせ、口縁端部に刻目を施す。I様式、弥生時代前期の甕である。

08-1-3区では、第6面の流路による攪乱を除く調査区の北端と南端において、第11面を検出した(図9、図版5)。地形は、検出地点が大きく離れているため正確には不明であるが、標高差から、北側のやや高い状況が認められる。また、調査区北端の検出範囲内に限っても、北から南へと緩やかに下降する様子が看取され、全体的な地形を推察する手掛かりになると考えている。遺構としては、落込み・溝・土坑・ピット等があげられる。

調査区南部は、西へと屈曲する狭い範囲において、溝を1条を検出した(図12、図版6)。12溝は、上面の10溝を掘削中に異なる土質のブロック土が現れたため、肩口に残る土壌化層の第13層を除去したところ、別の溝を検出したものである。長さ約4.5 m、幅約1.15m、深さ約20cmを測るものの、北半が上面の遺構に攪乱され、また調査区外へと溝がのびることから、正確な規模を示すものではない。埋土は上半にオリーブ黒色の微砂混じり粘土シルト、下半に灰色の泥土が堆積する。いずれもブロック土が混入しており、特に上半は植物遺体を含み、遺物も多く包含する。このことから、下層が溝の機能時の自然堆積物であり、上層は埋め戻しか、あるいは新たな溝の掘り直しに伴う盛土として、周囲の表土を集積したものと推測する。遺構内からは、弥生式土器の甕・壺・鉢や、剥片・木製品・動物遺体(骨)が出土している(図12、図版39・40)。1・2は、埋土下層の上面付近から出土した木製品である。いずれも樹種はアカガシ亜属である。1は柱目の板状棒材、2は板目の材で、短辺の一方に加工痕が明瞭に残る(図版40)。3は刻目を施された貼付突帯を数条巡らす壺の体部片、4から6は甕の口縁部片で、4・5は外面にハケ調整と端部に刻目を施す。7は内外面にミガキ調整を行い、やや内湾する鉢の口縁部である。これら以外には、a：シカの下顎骨、b：大型哺乳類(シカ?)の舌骨、c：イノシシの大

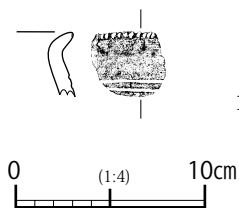


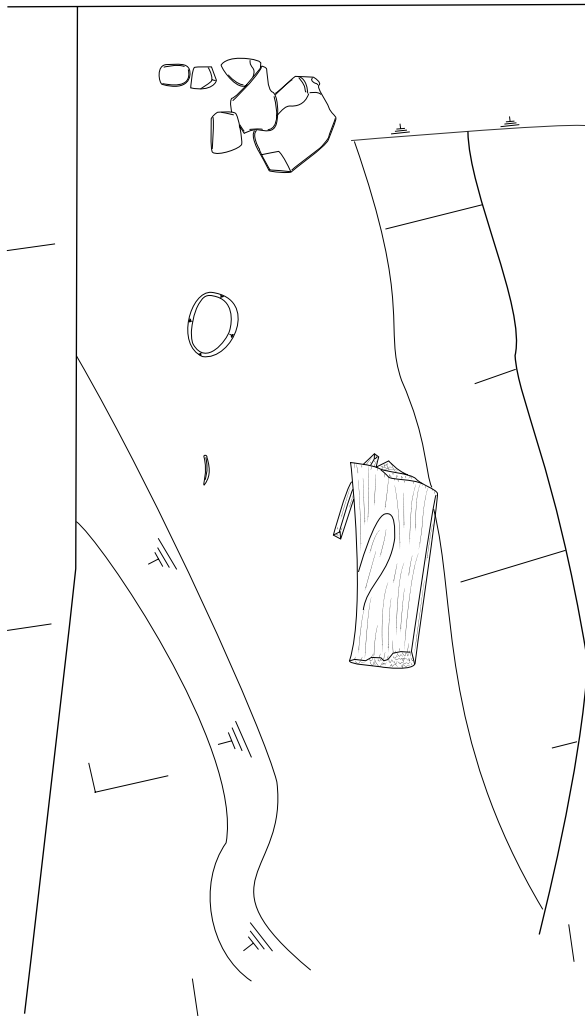
図11 08 - 1 - 2区 27溝 出土遺物

腿骨が出土しており、写真のみを掲載する(図版40)。9の一部に細かな傷跡が観察され、加工痕の可能性もある。形質等の詳細は、第4章第5節に記載する。

調査区北部は、長さ約7.0 mの範囲において、複数の遺構を検出した。14溝から16土坑は、土壌化層の第13層を埋土とする遺構であり、少量の遺物が出土している(図版5)。13落込は上記と異なり、第14層に酷似するグライ化した埋土が確認され

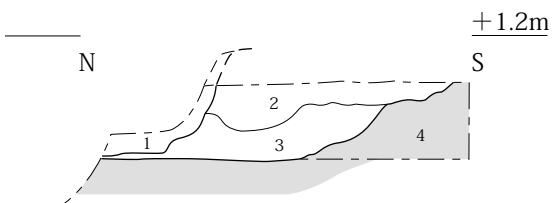
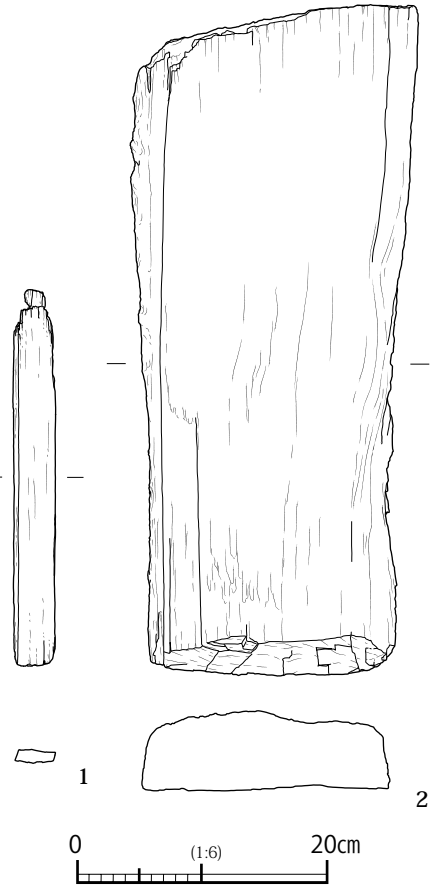
X=-149,704

X=-149,705



Y=-36,758

Y=-36,759



- 1 オリーブ黒 5Y3/1 細砂・シルト (植物遺体多く含む、遺物・獣骨出土、10溝最下層)
- 2 オリーブ黒 7.5Y3/1 微砂混粘土シルト (細砂・植物遺体含む、\*4ブロック含む)
- 3 灰 7.5Y4/1 粘土シルト (微砂・細砂僅かに含む、ブロック状?)
- 4 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 粘土~微砂 第14層

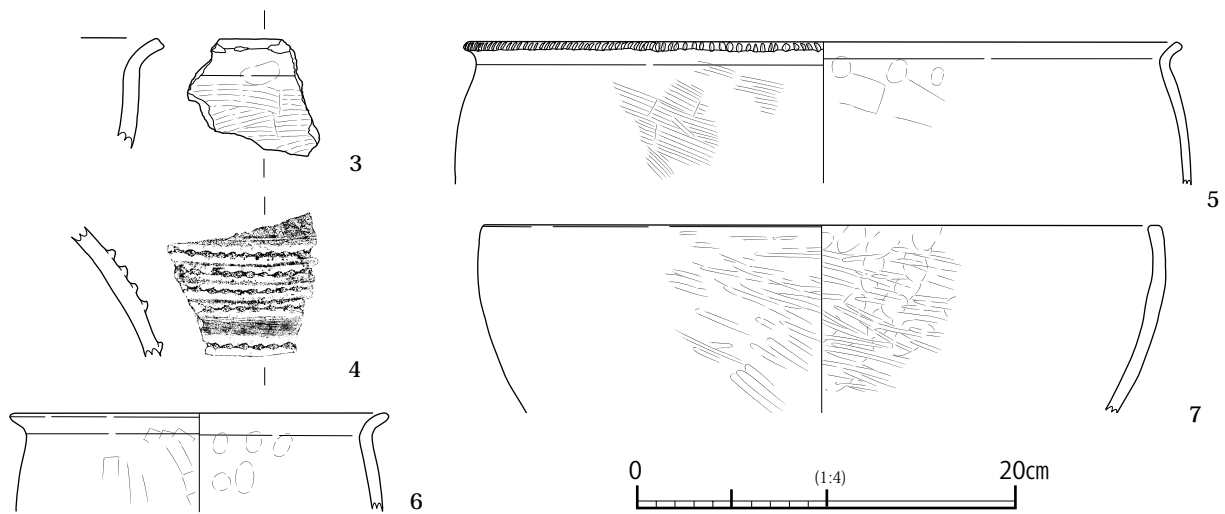
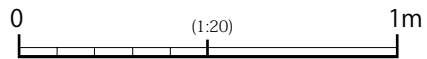


図12 08-1-3区 12溝 平面・断面・出土遺物

た。埋土中に粗砂を含む自然堆積物の薄層がみられることから、第14層の堆積後に残った自然遺構で、土壌化が進むまでの間に埋没した落込みと推測する。

土壌化層である第13層の掘削中に木棺の一部を検出し、**11木棺墓**とした（図13、図版5）。確認した部材は小口板と側版の残骸のみであるが、検出時に土壌の変色部分が認められたことから、蓋（天井）板が存在した可能性も考えられる。検出した規模は最大長85cm、同幅69cm、深さ23cmを測る。西側小口板は棺内に倒れた状態で出土し、一部が矢板により欠損するものの、ほぼ全形を残す。幅約17cm、高さ約25cmを測る。側板は、北側で最大約5.6cmの高さを残すのみであり、厚みがなく腐食が著しいため、原形を留めない。樹種はいずれもヒノキである。小口板の出土状況や側板の残存状態、下部に土壌の変

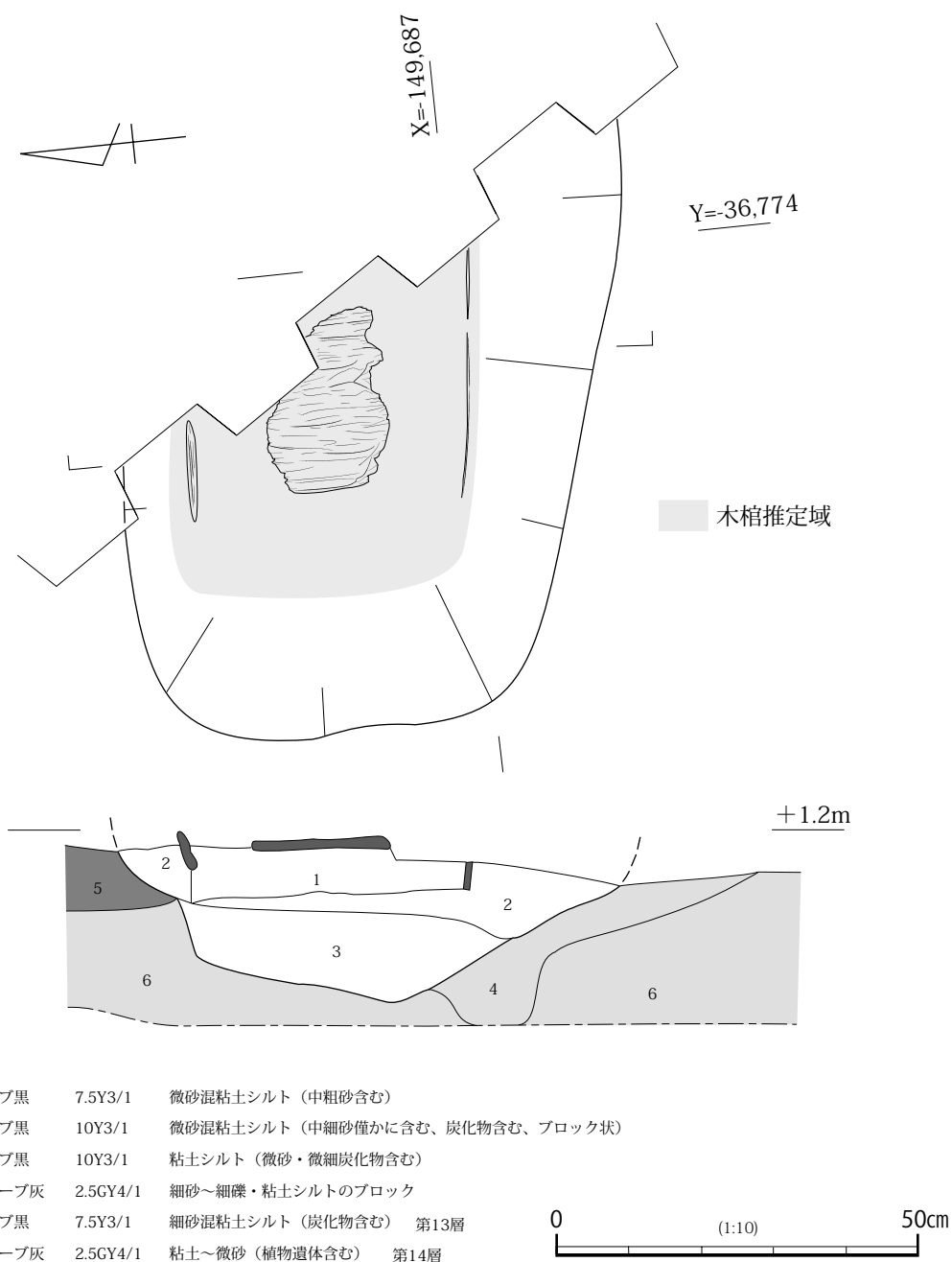


図13 08 - 1 - 3区 11木棺墓 平面・断面

色等が見られないことから、底板の存在した可能性は極めて低い。木棺の裏込土に掘削土を使用しているため、掘形の検出が非常に困難であり、断面を基に平面形を復元した。

上層を除去した時点で小口板や側板の下端といった木棺の底部が見つかったことから、本来はこの上部に木棺本体の存在したことが明確である。遺構内から遺物がまったく出土しなかったため、時期も不明であるが、検出面として本遺構面における報告を行うものの、同面が木棺の帰属面ではない可能性は

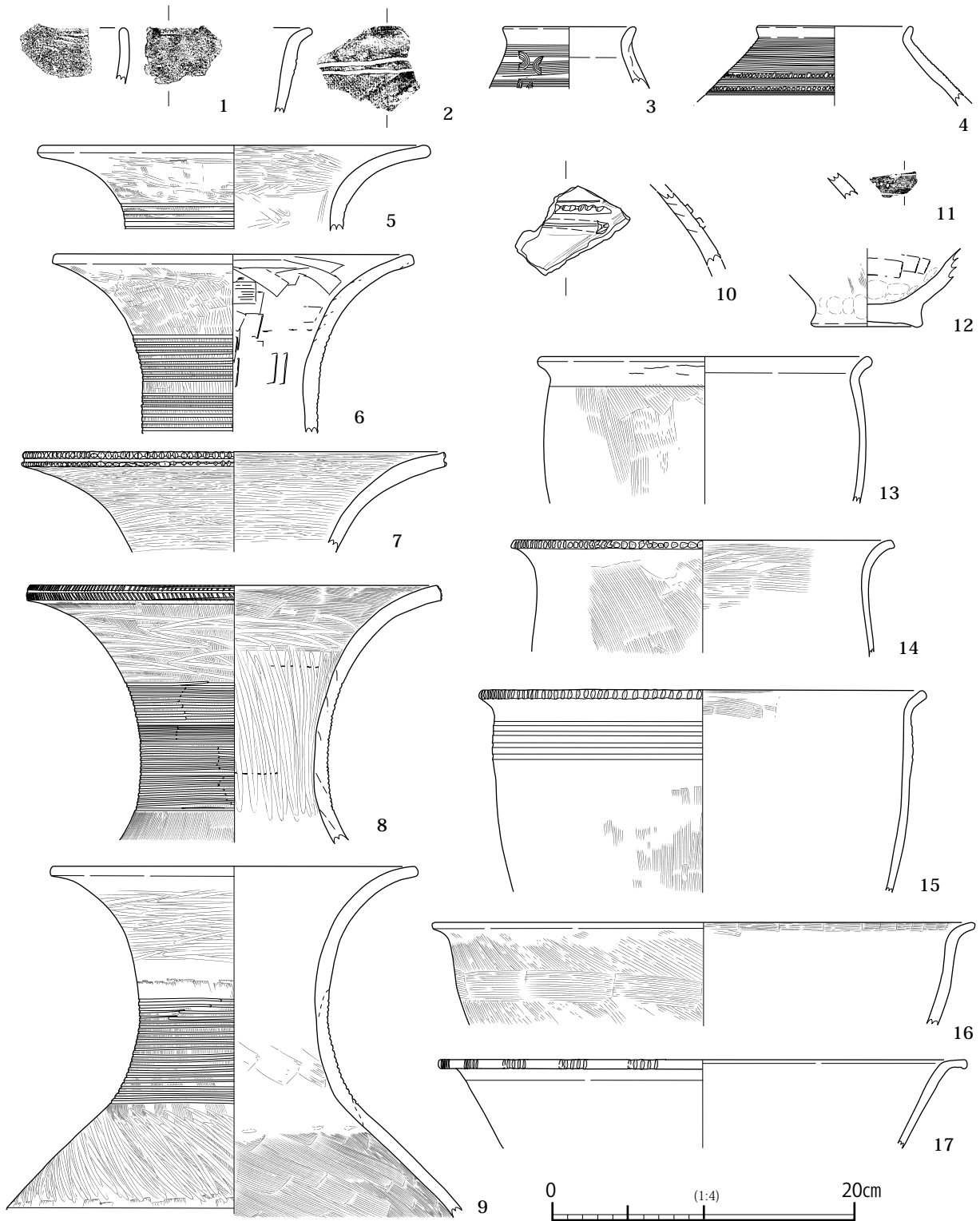


図14 08 - 1 - 2・3区 第13層 出土遺物 (1)



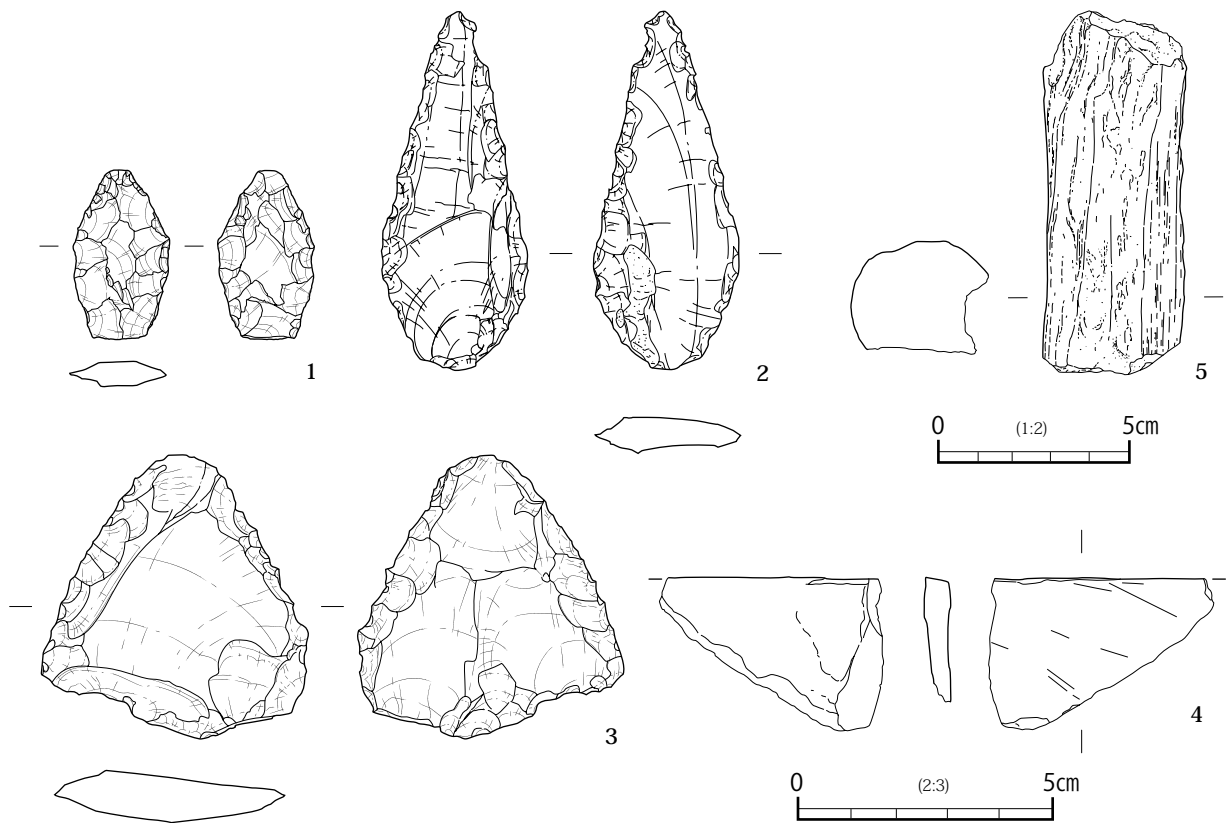


図15 08-1-2・3区 第13層 出土遺物(2)

非常に高いと考える。

第14層の土壌化層である第13層は、第11面を確認した調査区の全域において検出した。08-1-1・2区、および08-1-3区北端においては、第11面に平行して層厚10cmから15cmの暗色帯が認められる(図5・7・18)。08-1-3区南端については、第11面の溝が埋没した上部において検出した人為的な客土を第13層相当として確認した。土質は、基盤層である第14層の影響が強く、北側の08-1-1区が砂礫混じりの粘土シルトであるのに対し、08-1-2・3区は細砂混じり粘土シルトとなる。層内の出土遺物としては、弥生式土器の甕・壺・鉢、石器、動物遺体がみられる(図14・15、図版41~44)。

図14-1は縄文式土器の深鉢である。口縁端部の一部に隆起がみられる精製土器で、滋賀里Ⅲ式頃の所産と推測する。2・13・14・15は弥生式土器の甕である。2は外傾する口縁と直下に2条の沈線を巡らす。14は口縁端部に刻目、15は口縁端部の刻目と頸部に4条の沈線を巡らす。3は直線文と扇形文を描く短頸壺、4は多条の沈線の中に竹管文を施す、生駒西麓産の無頸壺である。5から11は壺であり、いずれも大きく外反する口縁を持つ。7以外ではハケ調整後、頸部に多条の沈線を巡らす。7は口縁端部に沈線を巡らせた後、上下に刻目を施す。8・9は生駒西麓産である。8は頸部に付加条沈線を巡らせ、口縁端部に羽状の刻目を施す。10は刻目のある棒状浮文を施す壺の肩部である。11は刺突文を施す。12は壺の底部、16・17は鉢であり、17は水平に屈曲する口縁端部に5個一対の刻目を等間隔に施す。

図15-1・2は石鏃であり、1は尖基無茎式と推測、2は円基無茎式の大型品である。3は不明の未完成品であり、製作に失敗した後、剥片取りしたようである。4は緑泥石石英片岩製の石庖丁片である。5は片麻岩製の石棒と考える。この他に、図版43-a・bは楔形剥片(石器)、cは溝状の研磨痕が残るシルト質砂岩製の砥石である。図版44-aは被熱痕のあるシルト質砂岩であり、砥石か鋳型と思われる

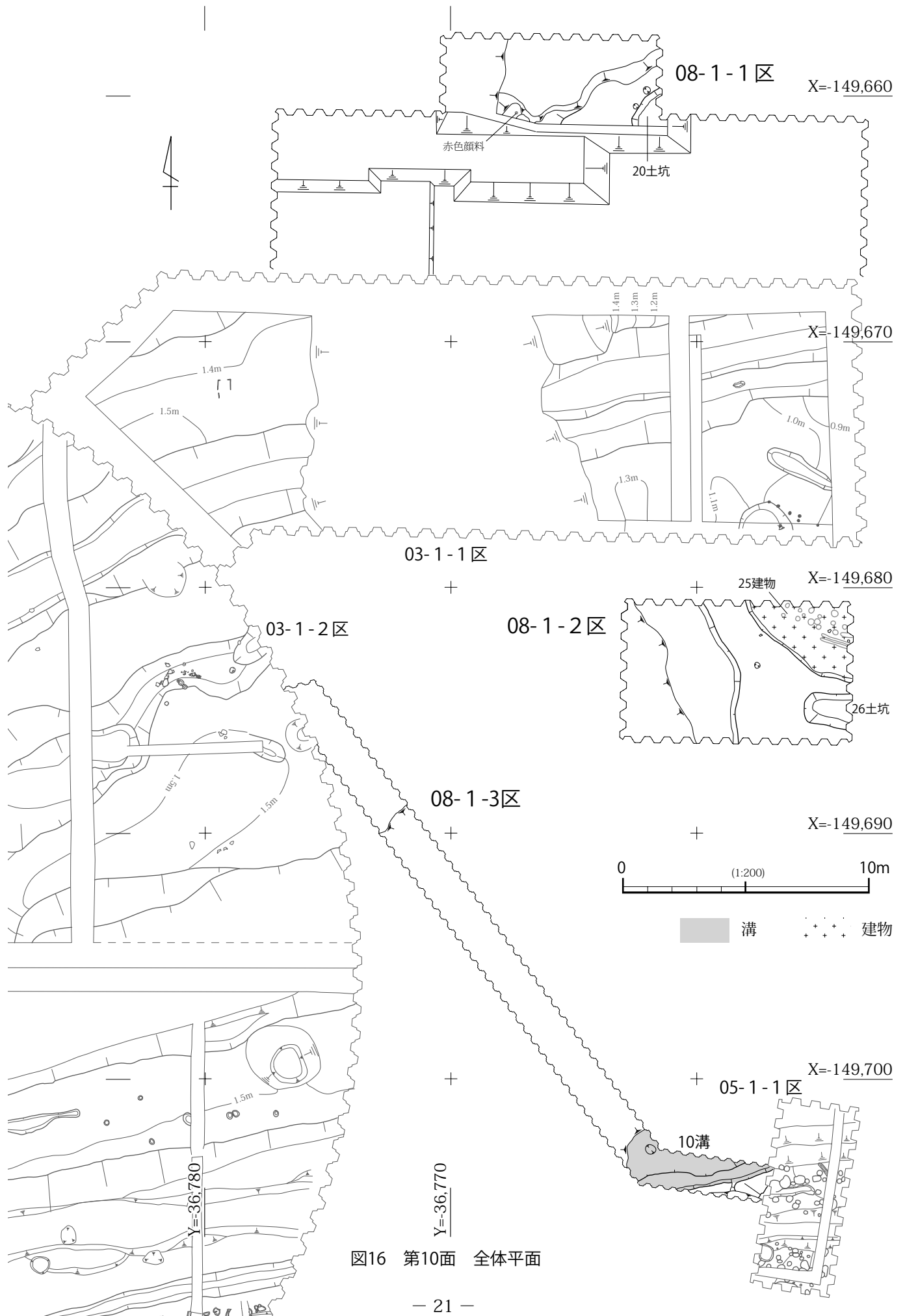


图16 第10面 全体平面

る。被熱温度は高くないが、長時間受けたものと推測される。bからdは遺構面上から出土した人頭大の巨礫である。特に加工痕は認められないが、自然には存在しないため人為により移動されたものと考えられる。b・dは花崗岩、cは片麻岩である。eからiは動物遺体である。g・h左はイノシシの歯牙、h右はシカの角、iは魚類（フナ属）・鳥類等の骨片である。詳細は第4章第5節に記す。f・h右・iは被熱を受けている。

## 2. 第10面(弥生時代前期末～中期)

第10面は土壌化層である第13層の上面にあたり、第12層を除去した調査区のほぼ全域において確認した。遺構面の標高はT.P.+1.1mから+1.5mを測る。下面と同様、各調査区ともに検出範囲が狭小であるために正確な地形等は不明であるが、整地や盛土といった地形の改変はみられないことから、下面を踏襲した、南へと緩やかに下降する後背地にあったと推測する。第10面の遺構としては、落込み・溝・土坑・建物・ピットを検出した。

08-1-1区は、調査区北側の突出部のみの調査となり、上面からの攪乱を除く微高地上において土坑を検出した(図16、図版7)。微高地の標高はT.P.+1.45m前後を測り、わずかに北東へと下降する様子が認められる。調査区の北西側2分の1は第8面の流路による上層からの攪乱として表示するが、第12層の除去中に落込み側に向かってやや低く堆積する様子が看取され、当時は北西に向かって下降するような地形を呈した可能性も考えられる。なお、遺構面西端の攪乱との境界付近から、赤色顔料(ベンガラ)が出土した(図版7)。周辺に遺構等はみつからず、詳細は不明である。

本調査区の南東隅において、土坑を1基検出した(図版7)。**20土坑**は東西約1.15m、南北約1.25m、深さ約27cmの規模で確認し、現状では扇形を呈する。埋土はブロック土を含むシルト混じり中粗砂であり、基盤となっている砂は本遺構の周辺にみられない土である(図17)。遺構の一部を検出したに過ぎず、全体の規模はまったく不明であるが、埋土に流水性の自然堆積がみられないことから、本書では土坑と判断した。遺構内からの出土遺物は皆無である。

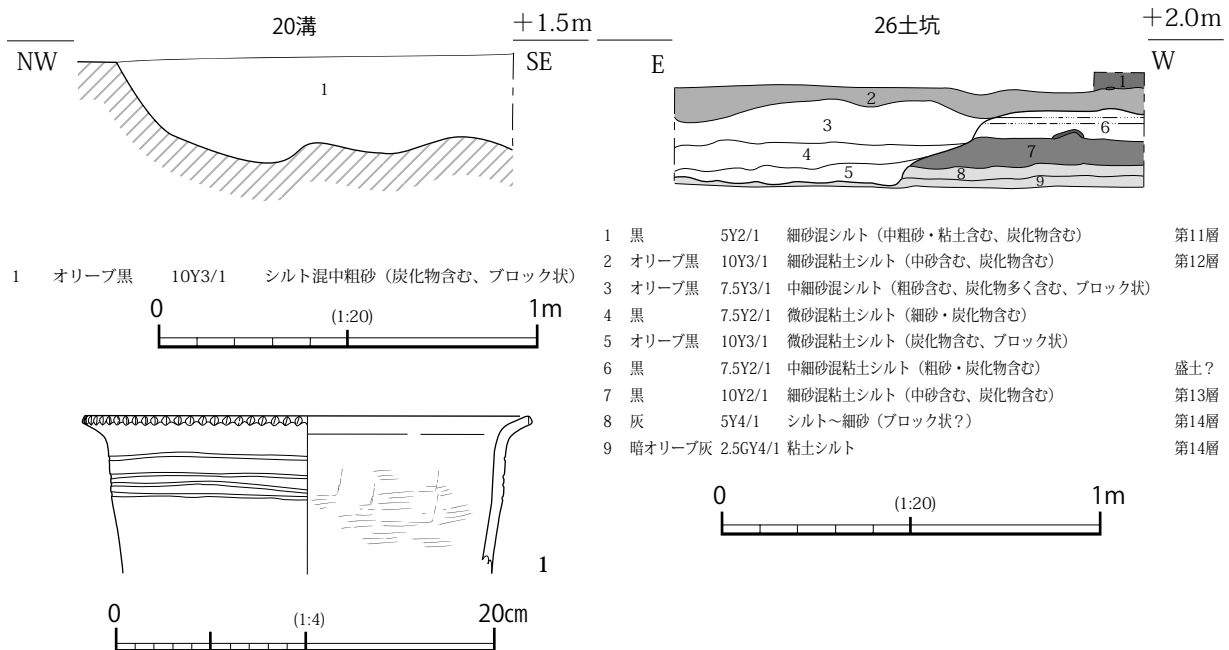


図17 08-1-1区 20溝 断面、08-1-2区 26土坑 断面・出土遺物

08-1-2区は、攪乱以外の調査区のほぼ全域に、良好に残存する旧地表面の第10面を検出した（図16）。標高はT.P.+1.1mから+1.3mを測り、基本的には下面を踏襲した南西へ下降する緩斜面地形にあったと考えるが、遺構の掘削等による微細な改変を受け、中央が馬の背状にわずかに高く南東と北西に向かって緩やかに下降する。遺構としては、建物址・土坑を検出した。

調査区の南東部において、隅丸長方形を呈する土坑の一部を検出した（図16、図版8）。26土坑の確認した規模は長さ約1.8m、幅約1.2m、深さ約20cmであり、埋土はブロックと炭化物を含む砂混じり粘土シルトである（図17）。土坑の肩口に掘削時の排土を盛った形跡がみられるが、その用途や遺構の性格は不明である。遺構内から、口縁端部に刻目を施し、頸部に3条の沈線を巡らすI様式後半の弥生式土器の甕が出土した（図17、図版49）。

26土坑の北側、調査区の北東部において浅い窪みと炭化物の集積を検出し、25建物とした（図16、図版8）。第6面における18溝の下層に一致するため、当初は関連遺構の可能性を考慮したが、間に土壌化層を挟むことから別遺構と判断した。確認できた範囲は、建物全体の4分の1程度と思われる。断面観察によると、基盤層（汜濫堆積物）と土壌化層が互層にみられる周辺部と異なり、本遺構内のみが炭層を挟むブロック土の重積となっており、また不明瞭ながら、いずれも第13層上面に収斂する様子が認められた（図18、図版8）。建物の周囲の第13層は周辺の同層よりも厚く、上半がややブロック状を呈

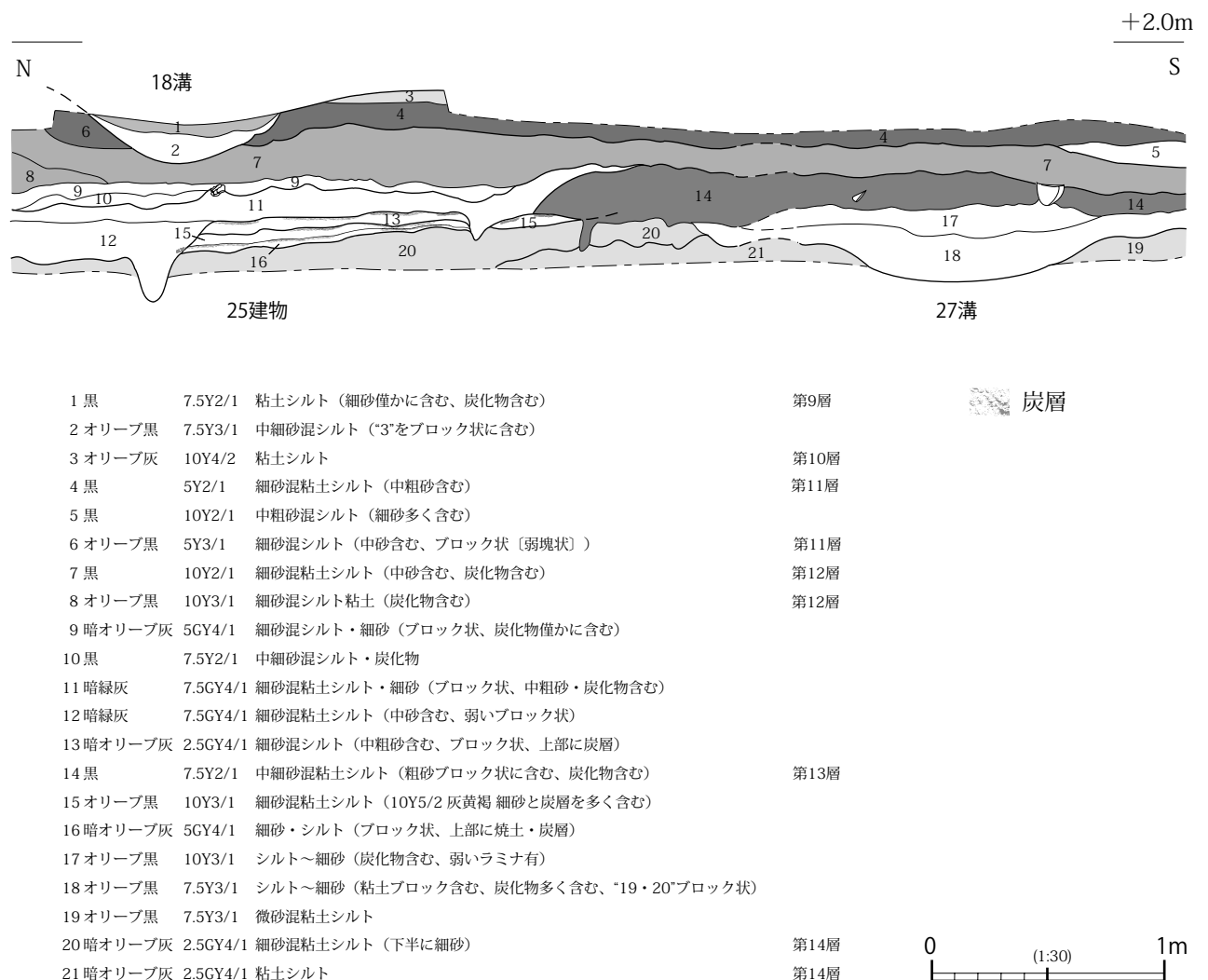


図18 08-1-2区 25建物 断面

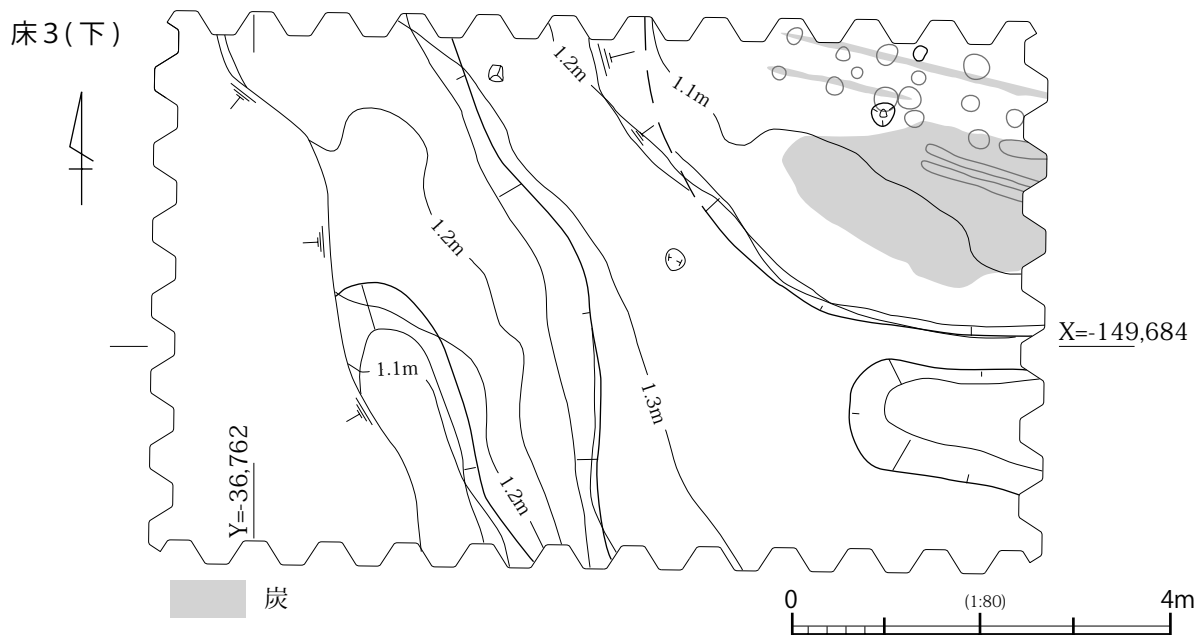
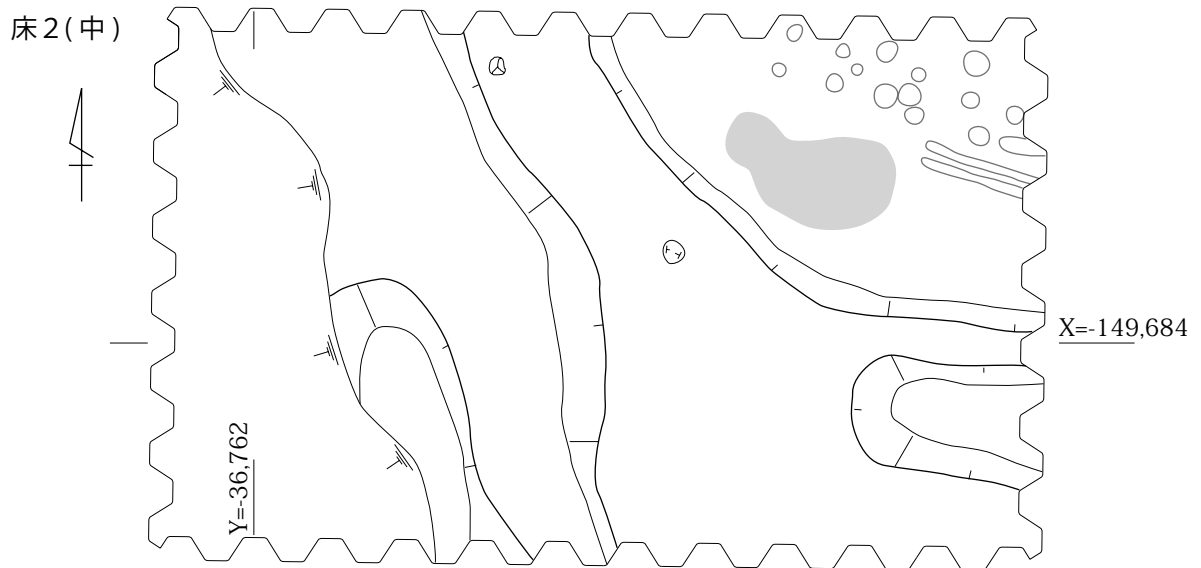
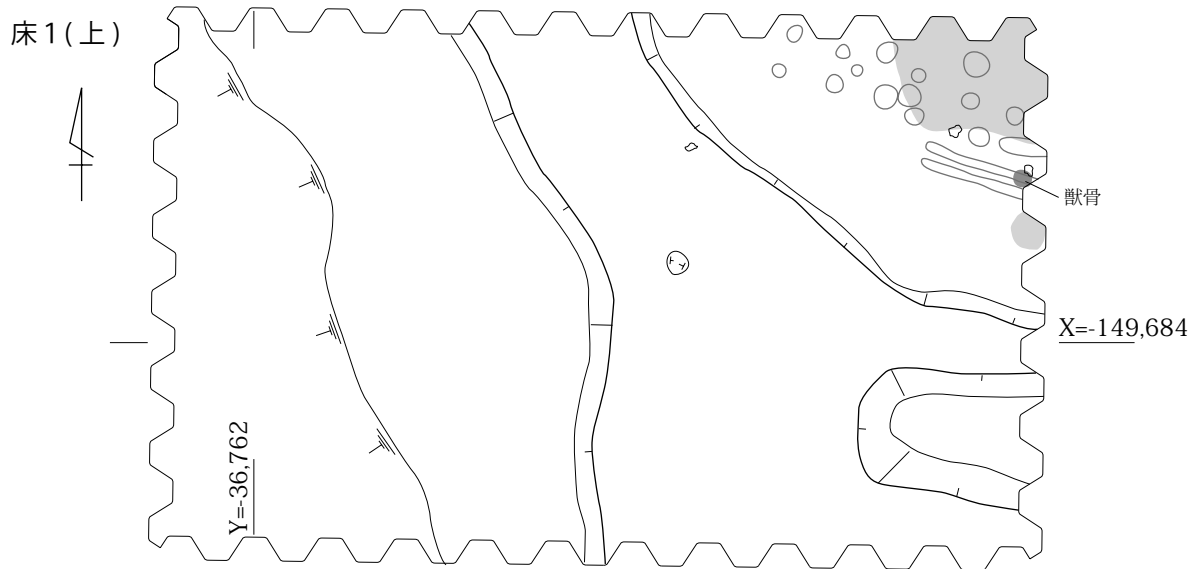


図19 08 - 1 - 2区 25建物 床1~3変遷

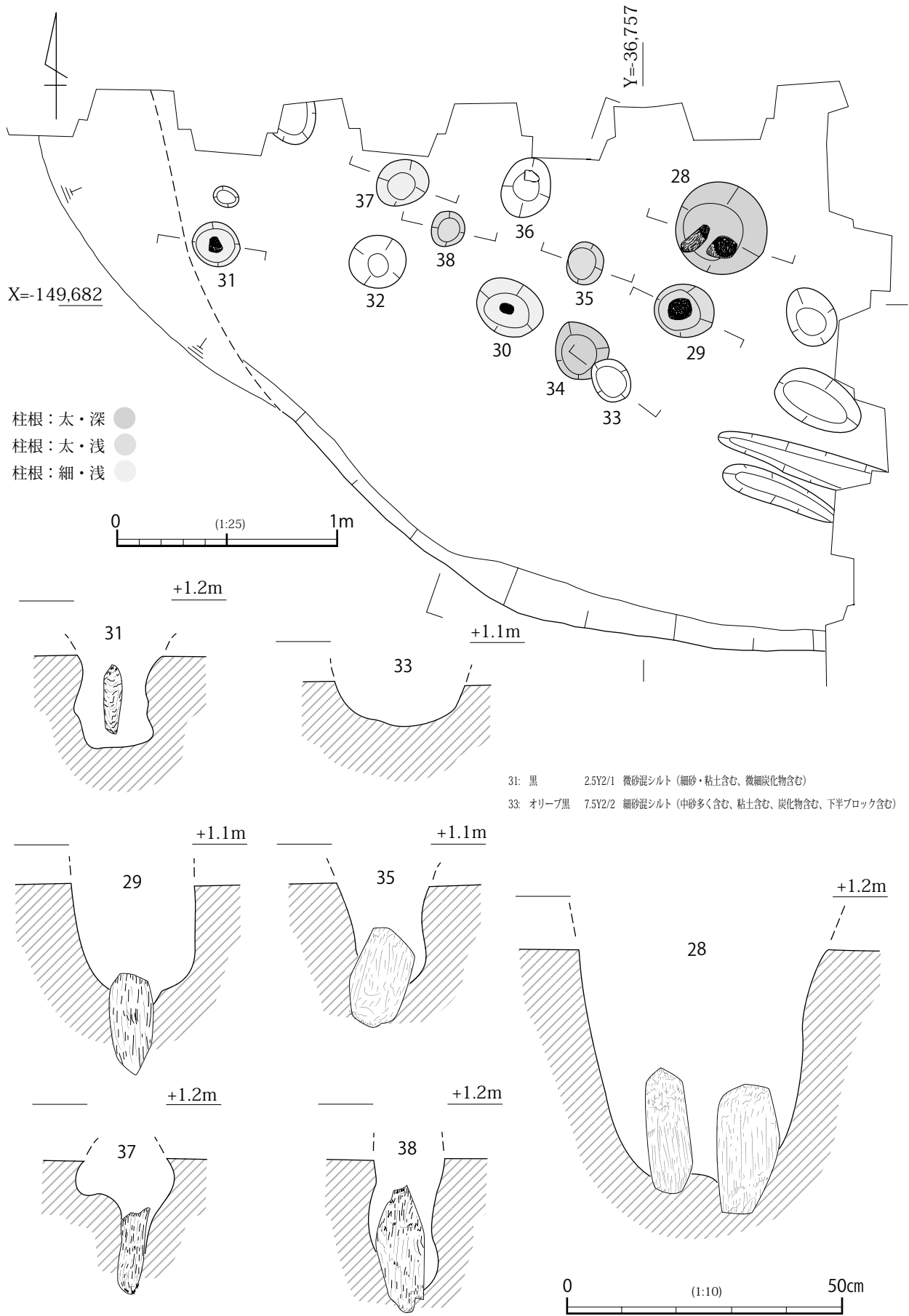


図20 08-1-2区 25建物・ピット群 平面、ピット28・29・31・33・35・37・38 断面

すことから、建物掘削に伴う排土を盛土した可能性も考えられるが、明確な形状を示すまでには至らなかった。建物内は層厚数cmから15cm程度のブロック土が重層しており、各ブロック土に踏み固められたような状況は観察できないものの、ほぼ平坦に整地された様子が看取される。炭層は底面から3層分の埋土上面にのみ出土し、上部の埋土には認められない。現地調査では、上記の炭層検出面を建物の床面と想定し、上から順に床1（上）、床2（中）、床3（下）とした（図19、図版9）。ただし、炭層の存在が必ずしも床面を規定する条件ではなく、整地土の作業単位等といった別の可能性も考えられる。図19の建物内にグレーで図示するピット群は、床面をすべて除去した最下面において検出した遺構である。複数の床面のものが混在すると考え、比較できるようにすべての床面に表示したものである。なお、検出した炭層については内容物の同定分析を行い、また、炭化物の放射性炭素年代測定も実施している。それらの詳細な成果は、第4章第2節・第3節に記載する。

**床1**は、第12層を除去して検出した炭化物の混じるブロック土を3層ほど取り除いた最上位の床面である。T.P.+1.24mから1.28mにほぼ平坦に検出され、遺構肩口との比高差は約30cmを測る。平面規模は、東西約4.4m、南北約3.4mを測り、遺構肩がやや直線的にのびる。炭層は層厚約1.0cmを測り、床面の北東隅を中心に東西約1.6m、南北約1.2mの範囲に広がる。炭層の中から、多量のイネ関連とヒエ等の炭化物が出土している。炭層から外れた東端部より、シカの後頭骨がほぼ完形で出土した（図版47）。なお、図18の北側にみる凹みは30ピットの断面であり、同遺構が当該床面に帰属することは明らかである。また、図版では建物内に自然石が存在するが、上層の出土遺物と本遺構との関連を検討するために残したものであり、建物に伴わないことが判明したため図示しない。

**床2**は、床1の炭層と基盤層を除去した中位面であり、T.P.+1.18mから1.24mに検出した。床面は上面と同様にほぼ平坦を呈する。遺構肩が南西にやや突出して丸みを帯びた形状であり、東西約4.9m、南北3.4mを測る。炭層は層厚が約1.0cmであり、上面と異なる南西部において東西約1.8m、南北約1.2mの範囲に分布する。炭層には、イネ等の栽培種以外に炭化材片が多く含まれる。

**床3**は、炭層を伴うブロック土の下位面に相当する。T.P.+1.12mから1.22mに検出し、わずかではあるが、上位の2面に比してやや傾斜がきつく感じられる。平面形は、南西への張り出しが強く、円弧に近い形状を呈する。西端部は床2の拡張により肩部を攪乱されるものの、基盤層が残存していたために復元可能であった。炭層は3面中最も広範に検出し、床面の南寄りに東西約2.8m、南北約1.8mの範囲に堆積する。層厚もあり、基盤層のブロックと混在する箇所もみられる。炭層からはイネや炭化材の他、多数の動物遺存体が出土した。

床3の基盤層を除去すると、第14層の露頭において複数のピットを検出した（図20、図版9・10）。狭い範囲に多数のピットが存在することから、建て替えにより増加した可能性が高く、この点は複数の床面を設定したことと合致する。直径10cmから40cmまでの計14基のうち、8基から柱根が出土した。柱根はいずれも加工痕が残り、人為的に埋められた様子から、建物に伴う構造材の一部と判断する。出土した柱根は直径の規模や底面の高さの組合せから分類が可能であり、図20に示した。建物内における配置等は不明であるが、分類した各々について、ピットがほぼ均等に分布する点は注目される。また、断面から床1に帰属することが明らかな30ピットを手掛かりにすると、床3は**28・34**ピット、床2は**29・35・38**ピット、床1は**30・31・37**ピットの対応する可能性が高いと考えられる。これらの柱に使用された樹種は後述するが、図示した以外には31ピットのコナラ垂属、34ピットのヤブツバキが挙げられる。35ピットの柱根については放射性炭素年代測定を実施しており、396-353calBC（54.6%）の結果を得

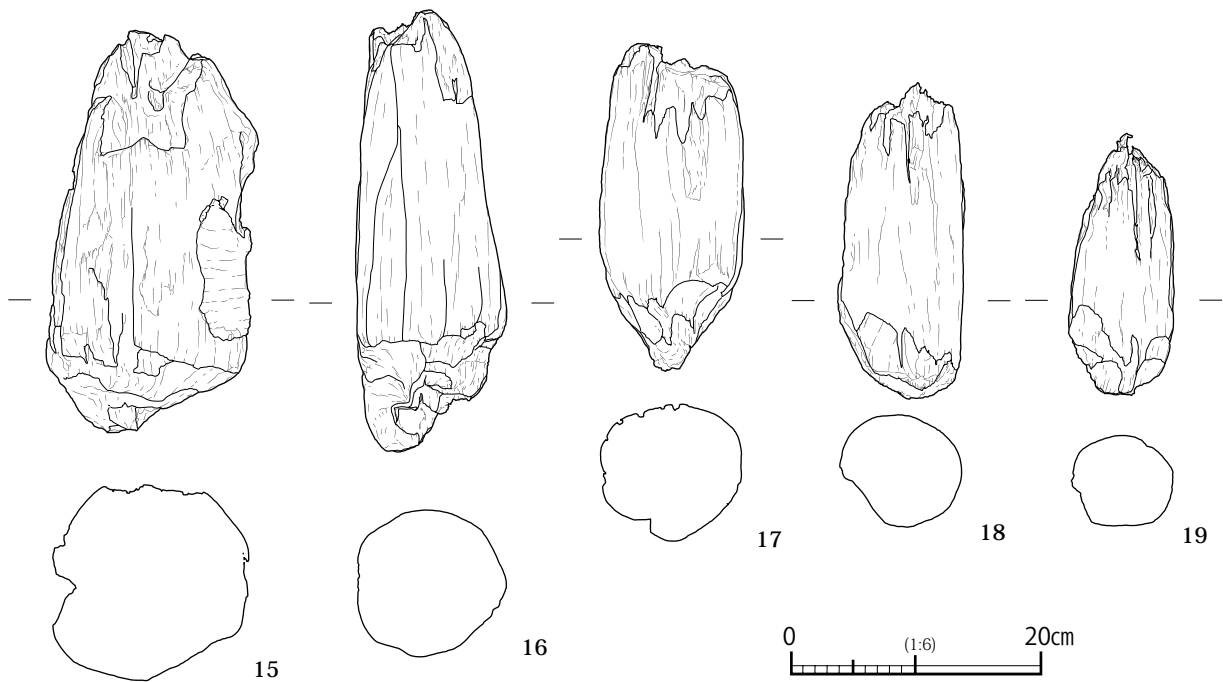
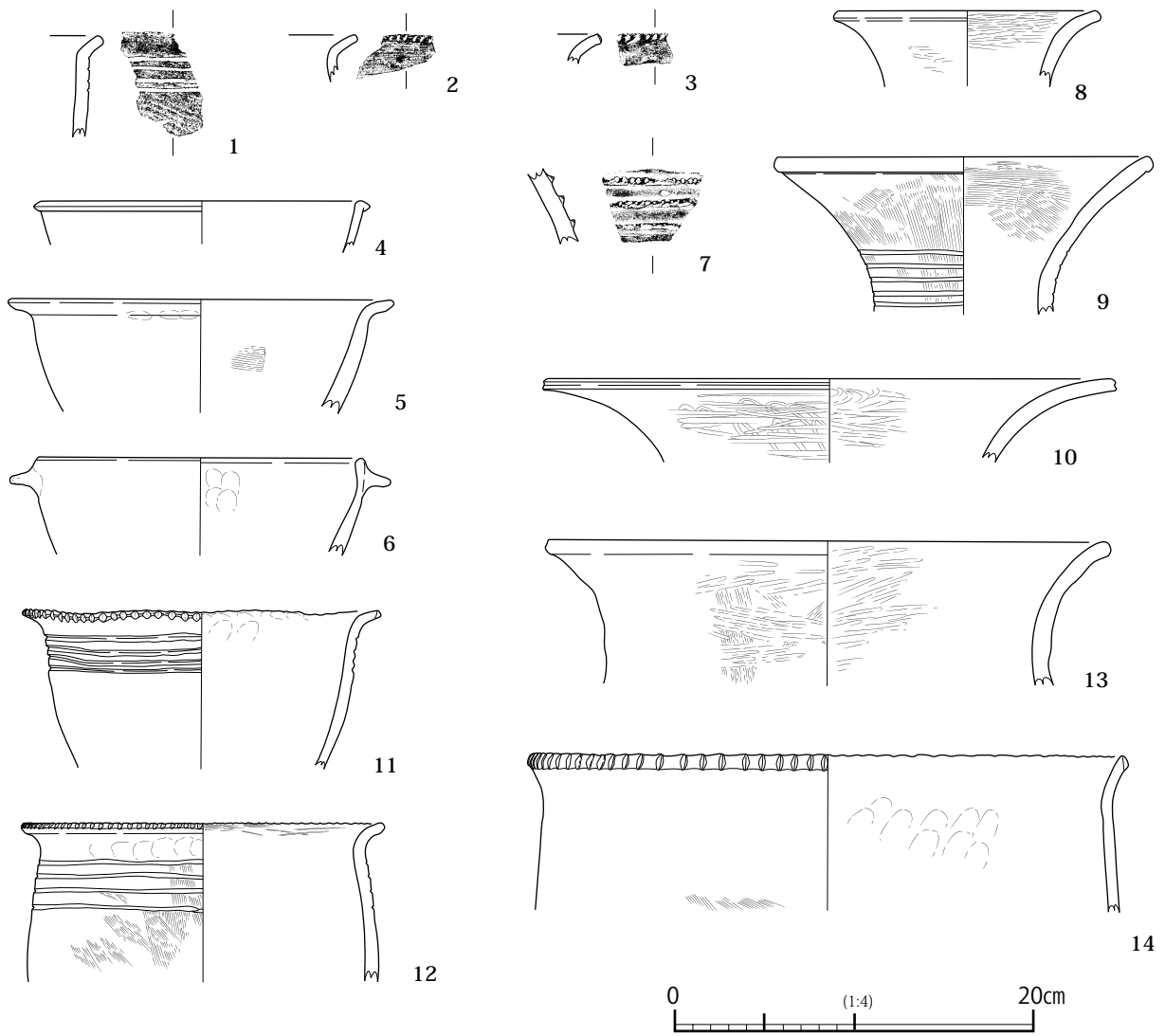


图21 08-1-2区 25建物 出土遺物



ている。先述の床面における炭層も同様に年代測定を行っており、重複する年代範囲からB.C.300後半頃の建物であると推定する。

25建物から出土した遺物としては弥生式土器・石器と、その他に種子・動物遺体（骨）を特徴とする（図21、図版45～48）。1～4・6・11・12・14は甕の破片である。大半は口縁端部に刻目を施し、頸部に数条の沈線を巡らす。1は端部に刻目が施さず、4は口縁端部外面に突帯？を巡らせる。6は把手

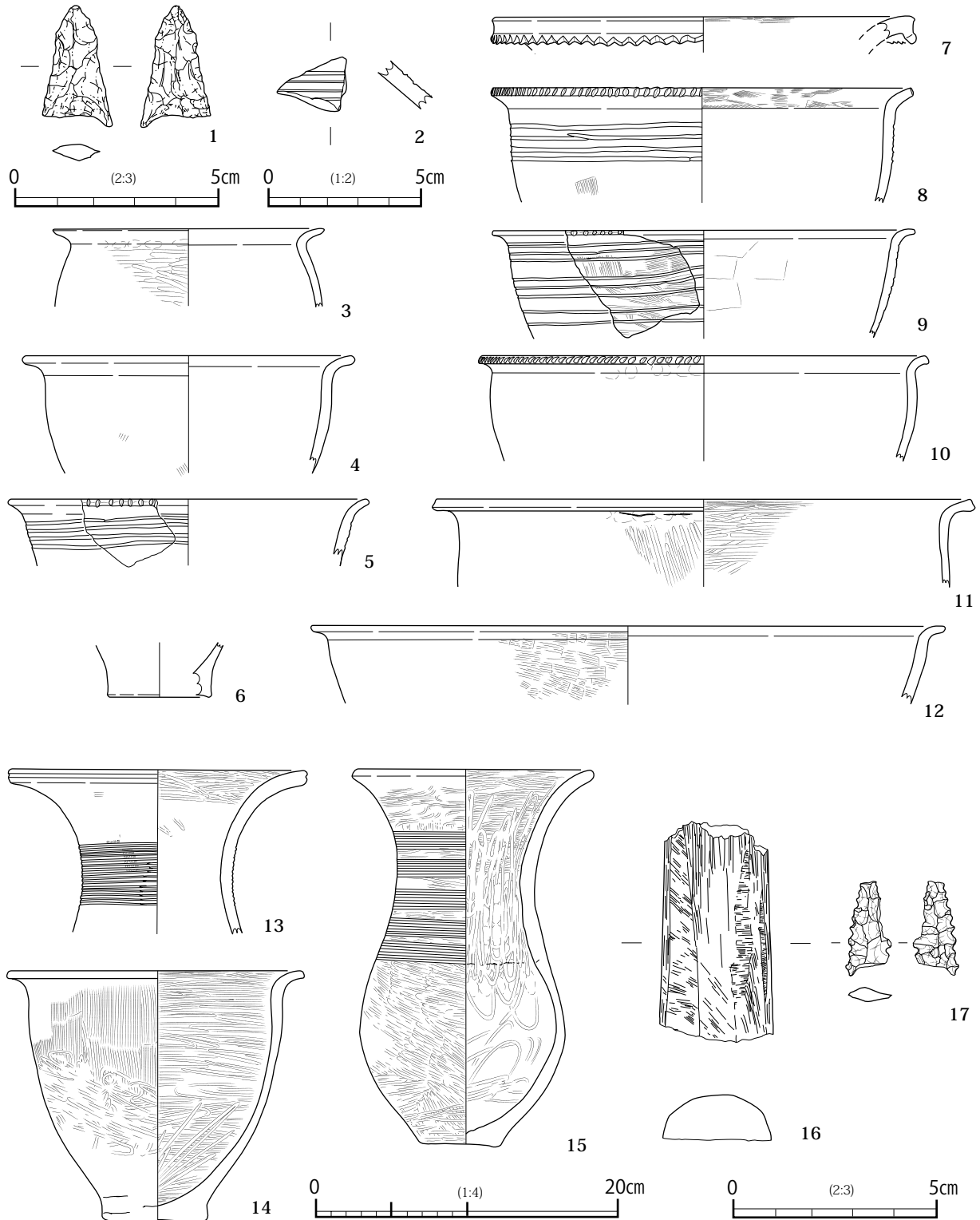


図22 08-1-3区 10溝、08-1-2区 第12層、08-1-3区 第10面 出土遺物

付の甕と思われる。14は沈線を施さない大型品である。5は口縁部を屈曲する鉢である。7～13は壺の破片である。7は刻目を施した貼付突帯を巡らす体部片であるが、体部は暗茶褐色を呈する生駒西麓産の胎土を用い、突帯には乳白色の異なる胎土を使用する。9は頸部に沈線を数条、10は口縁端部に凹線を巡らせる。13は口縁端部に刻目が無く、器面内外の全体をミガキ調整により仕上げる。生駒西麓産の壺である。15は35ピット、16は38ピット、17は29ピット、18は28ピット、19は37ピットから出土した柱根である。いずれも底面には加工痕が認められるものの、上端は腐朽が著しい。樹種は15・19がアカガシ亜属、16がコナラ亜属、17がムクノキ、18がクスノキである。図版48 - aは28ピット、bは34ピットから出土した柱根である。図版46 - aは床2から出土した微細剥離の残る剥片であり、bは最下面から出土した石核である。石核は、旧石器時代のもと思われる風化した剥離と、弥生時代の剥離が混在する珍品である。図版47は動物遺体（骨）である。aは最下面から出土した哺乳類の焼けた長骨片である。dは床1から出土したシカの後頭骨であり、大きさからオスの可能性が高い。b・cは床2から出土した哺乳類の歯と魚類の椎骨を含む骨片、e・fは床3から出土した魚類（ナマズ他）の椎骨や鱗骨と、種不明の骨片である。詳細は第4章第5節に記載する。

08 - 1 - 3区では、後世の攪乱を除く調査区の北端と南端において、第10面を検出した（図16、図版11）。標高はT.P.+1.2 mから+1.4 mを測り、調査区の北端については南に向かって下降する緩斜面の地形が看取される。一方、南端は下の第11面における12溝が埋没することにより高地化し、標高上は北端と同程度の高さとなっている。調査区の北端では遺構がまったくみられず、南端において溝を1条検出した。

**10溝**はほぼ東西方向にのびる溝であるが、北半が後世の流路による攪乱で失われ、南肩のみを検出した（図16、図版11）。残存する幅は約2.6 mであり、約6 mにわたって確認したが、東西とも調査区外に続く。隣接する05 - 1 - 1区に攪乱として図示する東西方向の溝があり、連続する遺構となる可能性は高い。関連する土砂を埋土や盛土と捉える点では相違ないものの、その単位を複数の遺構面に対応するかどうかの解釈で差が生じたものと思われる。今回の調査では、各層の出土遺物に明確な時期差がみられないことから、同一遺構面の中での造成単位と判断した。しかし、図化するには至らなかったものの、上層ほど櫛描文の比率が増加する傾向は認められることから、今後の調査成果によっては本遺構の帰属面や時期比定に変更の生じる可能性はある。

溝肩の標高はT.P.+1.75 mであり、底面は調査深度以下となるために未検出であり、確認した範囲で最深部が約1.0 mを測る（図7）。埋土は灰色から黒色を呈し、炭化物を含む砂混じり粘土シルトのブロック土と、粘土シルトや砂礫の重層である。これらを自然堆積物や崩落土（土壌化層相当）あるいは盛土として分類すると、組合せにより3つの段階に設定できる。前述のとおり、各層に明確な時期差がみられないことから、暗色土に対して基本層序上の第12層（1）から（3）を設定した。遺構平面図としての記録は省略し、出土遺物のみ分層発掘する。なお、最下層の泥層に地震による変形構造が認められ、先述の25建物周辺の第14層にも同様の変形構造がみられることから、同じ地震に因る可能性がある。

溝内からの出土遺物には、弥生式土器の壺・甕・鉢や石器・動物遺体（骨）がみられる（図22、図版49・50）。1は凹基無茎式の石鏃である。2は沈線を巡らす壺の肩部片であり、外面に赤彩がみられる。3～6・8・10～12は甕であり、5・8のような刻目と沈線を施すものと、11のように内外面ともミガキ調整を施すものが混在する。7は垂下する口縁端部に鋸歯状の刻目を施す壺であり、9は多条の沈線を巡らす鉢の破片である。

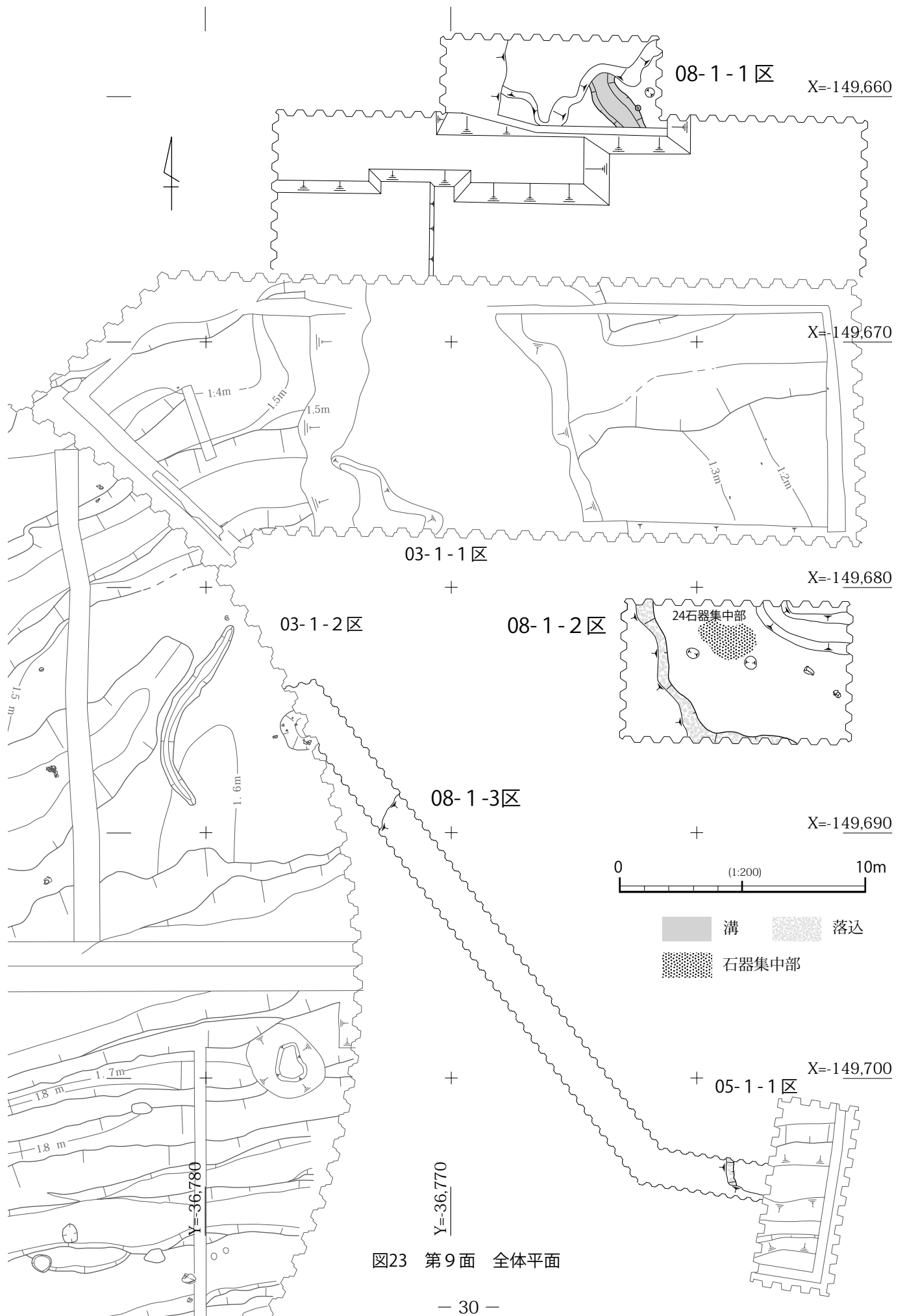


图23 第9面 全体平面

第10面を覆う第12層は、本遺構面を検出した調査区のほぼ全域において検出した。08-1-1・2区および08-1-3区の北端では層厚が5cmから20cmを測り、08-1-3区の南端については、遺構面を構成する土壌としては残存しておらず、第10面の10溝の埋土中に相当層を確認したのみである（図5～7）。土質は砂混じりの粘土シルトを主とし、08-1-1区では砂質が主体となる。08-1-2区の一部を除き、ほとんどの調査区においてブロック状を呈する点が特徴的である。層内から、弥生式土器の甕・壺・鉢、石器が出土した（図22、図版51）。

14は鋸歯状の側縁をもつサヌカイト製石鏃である。15はスレート製石棒の破片である。16は甕の口縁部であり、口縁端部には刻目がみられず、内外面ともミガキ調整を行う。17・18は頸部に直線文を施す壺である。壺・甕における器形の変化や櫛描文が出現する点から、これらの遺物はⅡ様式の古い段階と考えられ、第12層を弥生時代中期初頭以降に比定する。

## 2. 第9面(弥生時代中期初頭以降)

第9面は第12層上面の旧地表であり、第11層を除去した調査区のほぼ全域において検出した。遺構面の標高は、T.P.+1.2mから+1.7mを測る。全体的な地形としては、遺構面の検出範囲が狭小であるため不明な点が多いものの、東側が高く、西に向かって下降する傾向が看取される。各調査区における最高所はいずれも調査区の東端周辺にあり、標高は一様にT.P.+1.7m付近を示す。下の第10面までのような北から南に向かう緩斜面は、第12層を挟んで大きく変化したことが明らかといえる。先述のよう

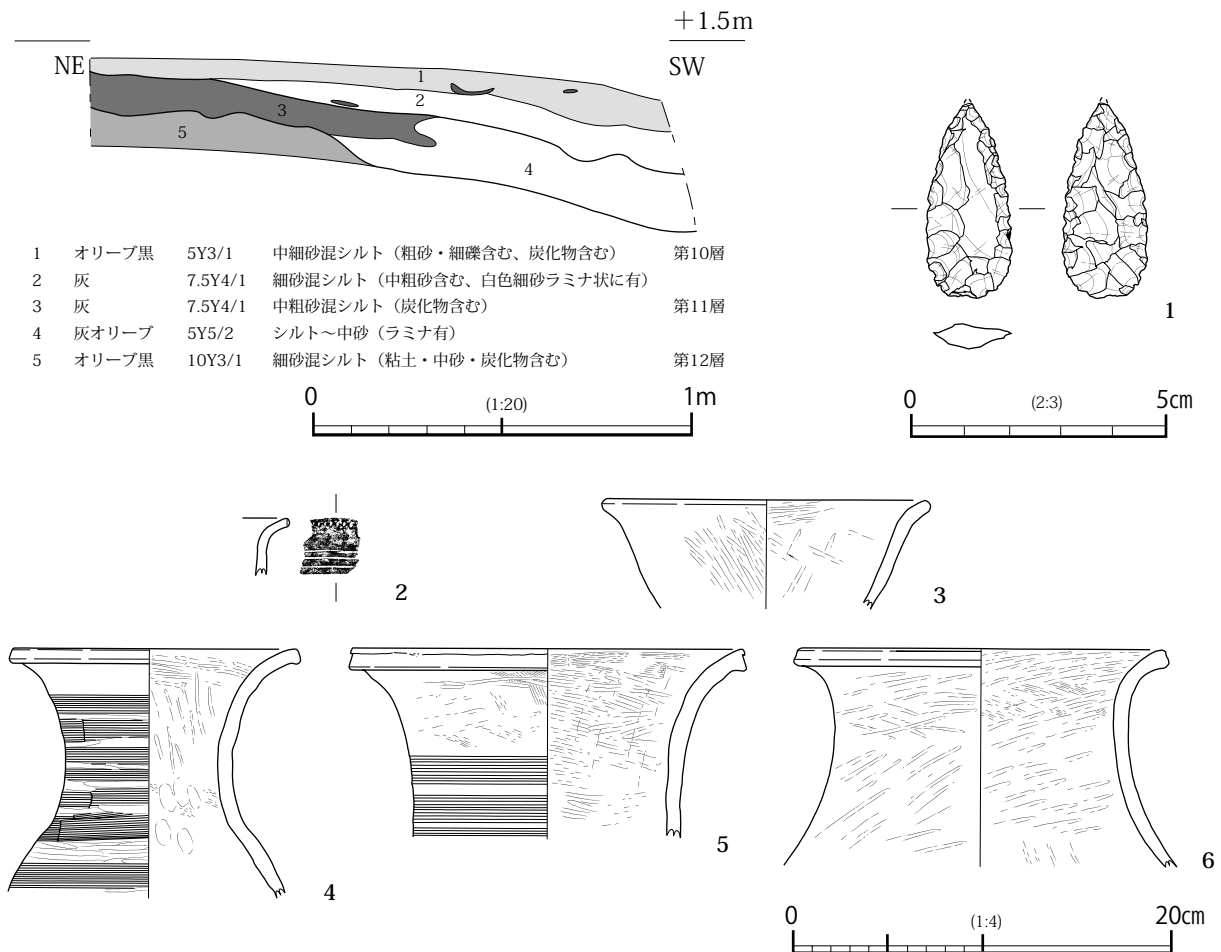


図24 08-1-2区 20落込 断面・出土遺物

に、第12層の多くがブロック状を呈することから推測すると、調査区の周辺一帯において大規模な造成が行われた可能性も考えられる。第9面における遺構はピット・溝・落込みがあり、他に剥片を中心とする石器の集中部を検出した。

08-1-1区は調査区北側の突出部のみの調査であり、流路による攪乱を除く南東部において遺構面を検出した(図23、図版12)。本調査区の第12層は08-1-2区などと異なり、砂に含まれたシルトブロックが潰れて不定形になったような状態がみられる。やや軟弱な地盤であるため盛土成形されたようにはみえないが、断定はできない。検出遺構としてはピット・溝を挙げられるが、第12層上面では遺構形状が非常に不鮮明であったため、同層の中位付近まで掘り下げて検出を行った。

溝は幅約1.2mを測るが、実際は倍程度の大きさであったと思われる。深さは45cm以上に達する可能性があり、埋土は上を覆う土壌化層の第11層が堆積するのみである。遺物は出土していない。ピットは、図上では肩部に接するように示しているが、本来は溝内に存在したと考えられる。溝に伴う可能性があるものの、詳細は不明である。

08-1-2区では、西側の流路による攪乱を除く調査区の全域において、遺構面を検出した。ただし、第10面検出時に平面上でブロック土が見えてしまったことから、部分的に掘り過ぎを生じている。特に調査区の北東部に溝状の攪乱を示しているが、上面の遺構掘削に際し、第12層のブロック土を溝の埋土と誤認してやや掘り過ぎてしまった。遺構面の標高はT.P.+1.35mから+1.75mを測り、地形は北東を高所として南西に向かって下降しており、比高差が約40cmの緩斜面である。遺構としては、落込み以外に石器の集中部を検出した(図23、図版12)。

調査区の西側、上面からの攪乱の縁辺に沿うように、幅60cm前後の落込みを検出した。**20落込**の確認した範囲における深さは約30cmであり、南端では攪乱から外れて東へと屈曲しながらのびる様子が看取される。当初は攪乱の掘り残しと考えたが、断面の観察により、表土である第10層から第12層が下降する点や、それぞれの間層に自然堆積物がみられる点から、遺構として判断した(図24)。この落込みは本遺構面を初現として、この後、複数面にわたって同様の地形が存在することが明らかとなった。やや推測の域を出ないが、第6面の流路につながる地形であった可能性も考えられる。20落込からは多量の弥生式土器と、石器が数点出土した(図24、図版52)。1は円基無茎式の石鏃である。2は口縁端部に刻目を施し、頸部に沈線を巡らす甕の口縁部片である。3は内外面にミガキ調整を施す鉢である。4から6は壺の破片であり、6はI様式の様相を残すものであるが、4は頸部に多条の直線文を巡らすII様式と考える。図版52-aは海綿質のみが残存する哺乳類の骨片である。

第11層の掘削中、調査区中央の北寄り部分において石器がまとまって出土したため、**24石器集中部**として調査を行った(図23、図版13・14)。石器の検出範囲は南北約1.6m、東西約2.2mを測る楕円形を呈し、第11層内から第10面にかけて分布する。当初、調査区の東側より第11層の除去を行っていたところ、サヌカイト製剥片が散見され、通常の包含層遺物として取り上げた。しかし、急激に出土頻度が増加したため、より慎重に精査を行い、可能な限り個体の掌握に努めた。剥片および石器は総数668点に達し、これを上中下の3回に分けて検出した。これは調査の便宜上によるものであり、分割自体に意味を持たない。上部検出時は各個体の座標をトータルステーションを用いて計測し、中下部はデジタル写真測量を行い、後日、クラボウ製Kuraves-Kを用いて座標値を算出した。取得した座標データは461点を数え、分布状況をグラフ化した。図25の上半は、平面分布とX・Y軸からみた高さ分布に個体重量を反映させたものである。中心から離れる大型品は石剣もしくは石戈の破片とハンマーであり、これら

を除くと、分布の集中部から外側に、また低位置から高位置に向かって重量物から軽量物に変化することがわかる。高低の分布については、これらが同一面の遺物と考えられるならば、本来はあり得ないことであるが、このような事例は多く、主に生物擾乱による土中の移動と考えられている。この場合、生物擾乱に重量の与える影響が大きいことを示唆するものである。図25下半のグラフは、平面分布を任意の高さで輪切りにしたものである。2段階から5段階の高さに試みに分割して分布を調べた結果、3段階に分割したものが最も顕著な傾向を得られた。図は左から右へ順に上段を示しており、分布が拡大す

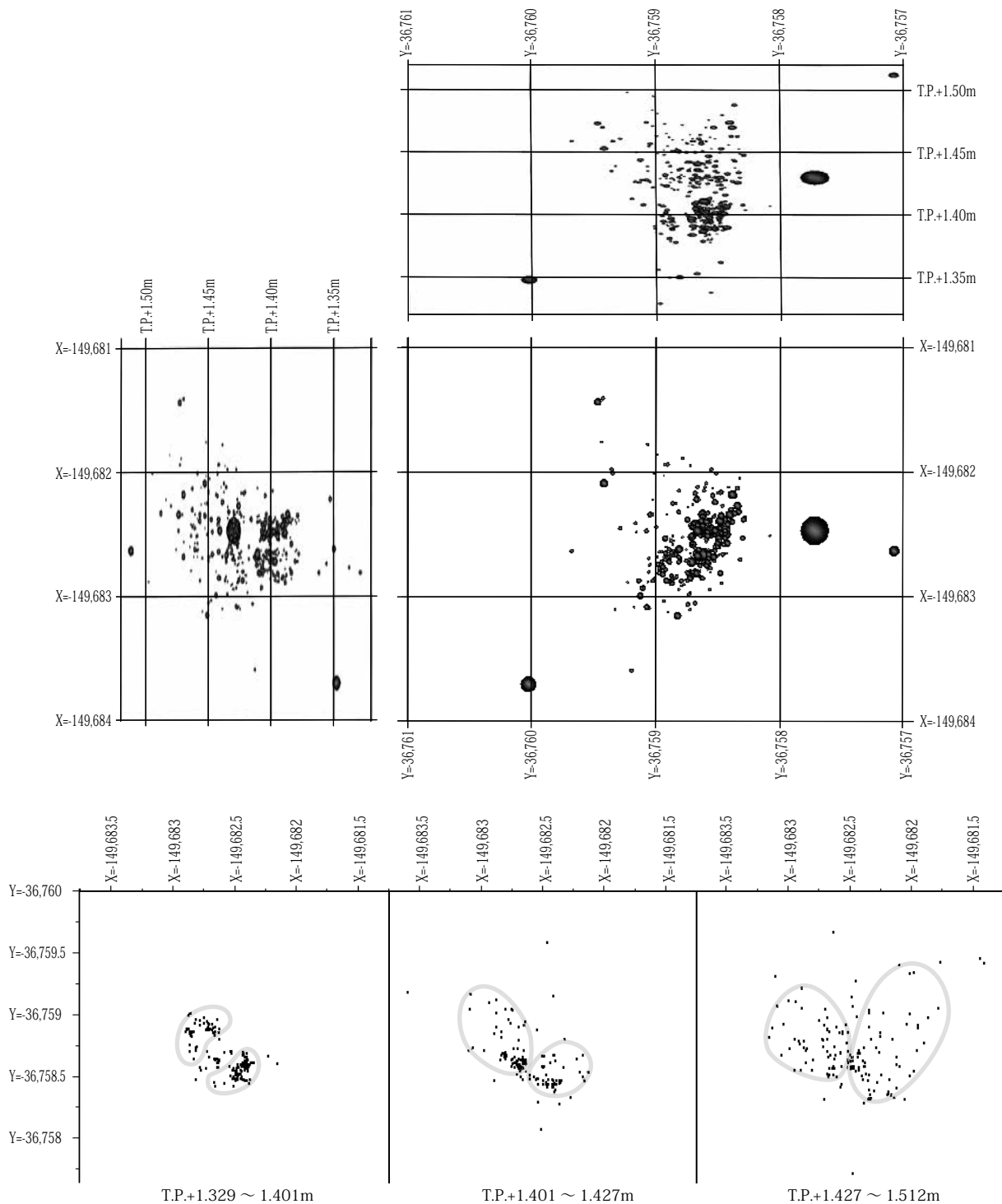


図25 08 - 1 - 2区 24石器集中部 出土分布

る様子を確認できる。また、左端の下段を示す分布では、中央にやや空白の部分があり、その両側に石器が集中する。この下段を分布の中心と考えると、石器は左上方と右上方のほぼ2方向に拡がっていく様子が看取される。これらの分布結果から24石器集中部は石器製作の痕跡と考え、しかも、単独のヒトが座した状態でわずかな回数の作業をした可能性が高いと推測する。

出土した石器の約98.4%が剥片であり、その他に石鏃・石錐・石戈（石剣）・ハンマー・楔形剥片・残核が含まれる。また、わずかな土器片と歯牙が出土している（図26、図版53～55）。

1は垂下する口縁端部の外面に格子文を施す壺で、2は端部を折り曲げる無頸壺の口縁部片である。3は円基無茎式、4・5は尖基無茎式の石鏃である。6は石錐である。7は二次加工のある剥片、8は微細剥離の残る剥片である。9は楔形石器、10は残核、11は石核を転用したハンマー、12は未成品の石

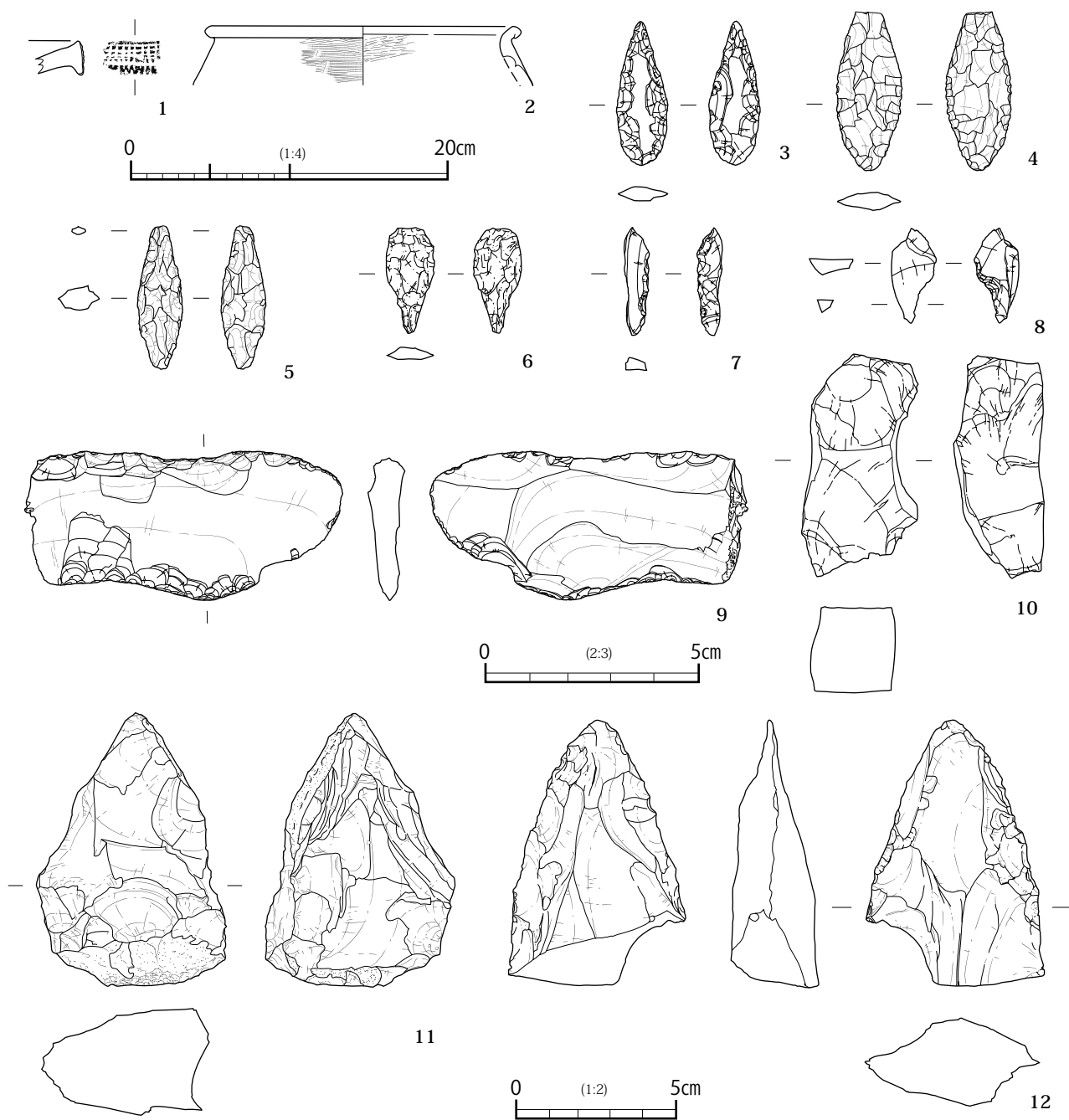


図26 08 - 1 - 2区 24石器集中部出土遺物

剣あるいは石戈の先端部片と思われる。図版53 - a は石器集中部から出土した剥片、図版54 - a は自然面の残る楔形石器、図版55 - a はエナメル質のみ残存する哺乳類の歯である。

第11層は、第9面を検出した調査区のほぼ全域において確認した。層厚は数cmから20cm前後を測り、08 - 1 - 1・2区では概して薄く、08 - 1 - 3区は北端と南端のいずれにおいてもやや厚みを持つ（図5～7）。土質は黒色を呈する砂混じりの粘土シルトを主とし、炭化物を含む土壌化層である。層内から、弥生式土器の甕・壺・鉢、石器が出土した（図27、図版55～58）。

1・2は円基無茎式、3は平基無茎式の石鏃である。5は緑泥石片岩の石庖丁片、

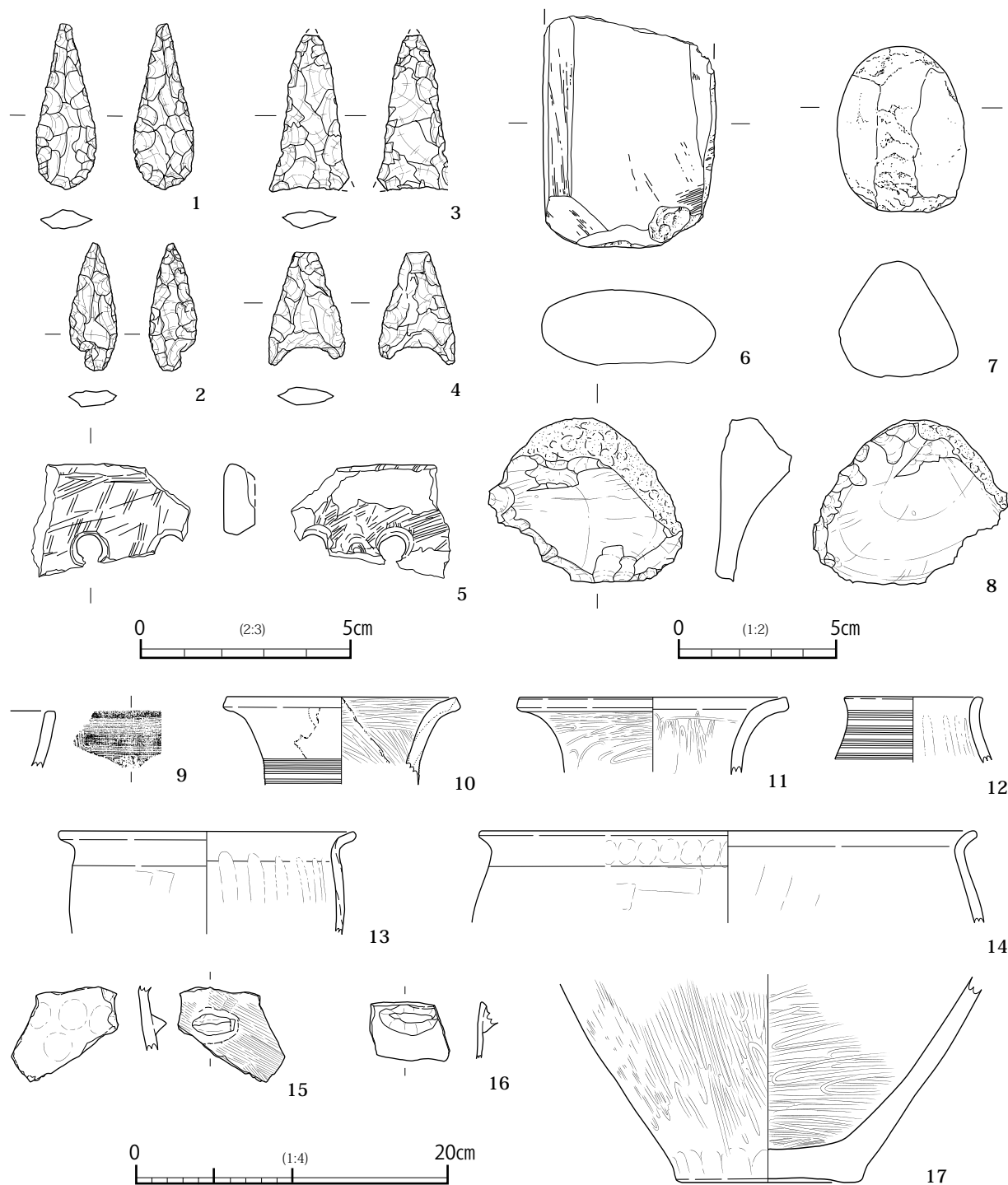


図27 08 - 1 - 1～3区 第11層 出土遺物



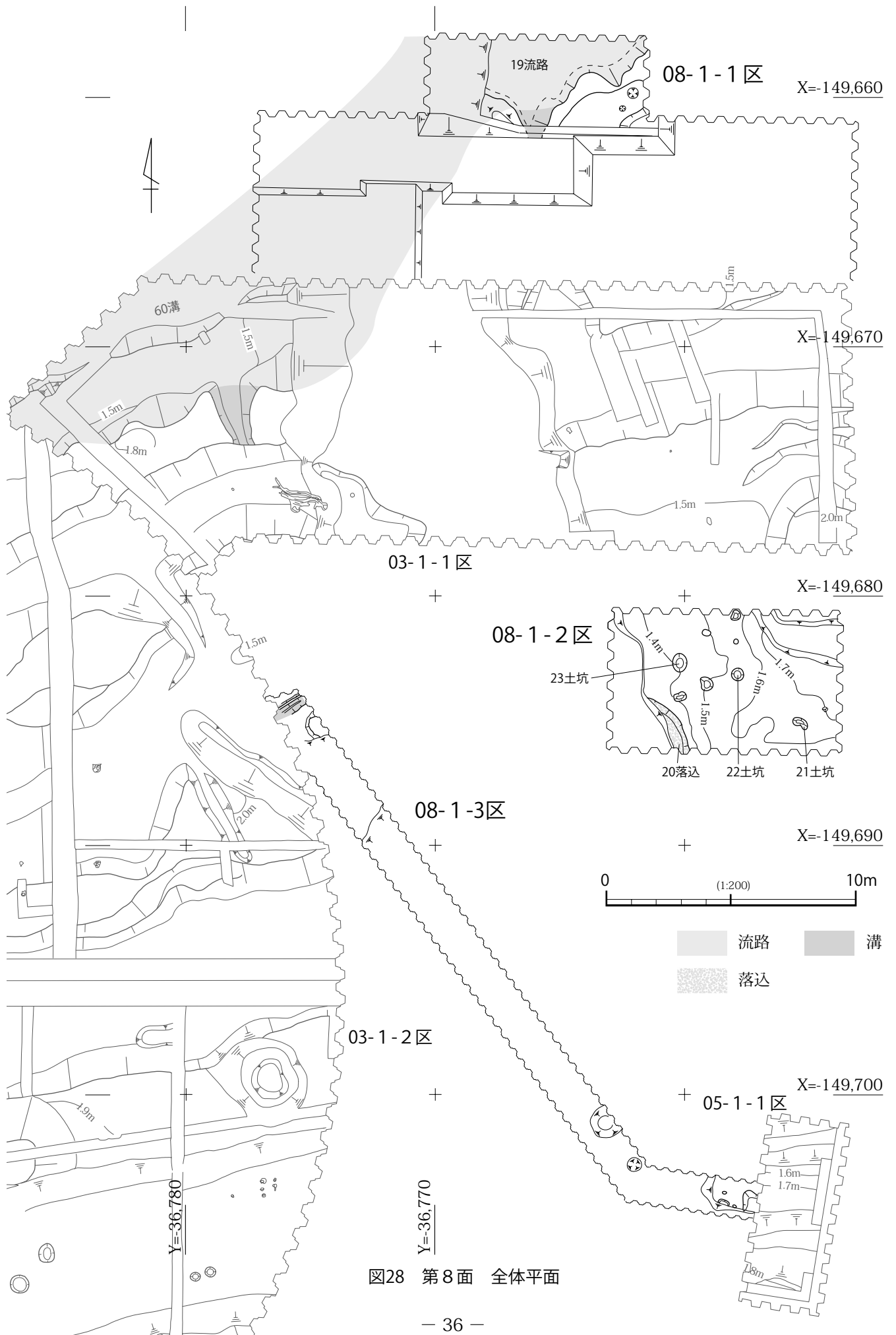


图28 第8面 全体平面

6は砂質ホルンフェルスの磨製石斧、7は石英閃緑岩の敲打具、8はハンマーに転用した剥片である。図版56 - aは敲打痕の残る楔形石核である。bは角閃石閃緑岩の自然石である。9から12は壺であり、9は流水文を描く細頸壺、12は直線文を描く短頸壺である。13から17は甕であり、13は生駒西麓産である。16は把手付の直口甕である。17の見込みには粒形の明瞭な炭化米が厚く付着する。図版58 - aは同心円状の突帯に刻目を施した体部の破片である。bからdは25建物が埋没した上面より出土した自然石である。いずれも自然に当地でみられる石ではなく、b・dは河原石を割っていることから、人為的に移動されたものといえる。bは片麻岩で外面に煤が付着する。c・dは花崗岩であり、cは被熱によると思われる剥落が表面に認められる。

#### 4. 第8面（弥生時代中期前半）

第8面は土壌化層である第11層の上面にあたり、第10層を除去した調査区のほぼ全域において検出した。遺構面の標高はT.P.+1.4mから+1.9mを測る。地形は下面を踏襲しており、08-1-1・2区では北東から南西に向かう緩やかな傾斜地を呈しており、攪乱のために断定はできないものの、08-1-3区では調査区の中央部を低位とする緩やかな凹地であったと思われる。遺構としては、流路・溝・土坑を検出した。

08-1-1区では、北側の突出部分において流路や土坑を確認した（図28、図版15）。本調査区における旧地表は流路と土坑に挟まれた馬の背状の狭い範囲であり、標高はT.P.+1.60mから+1.75mを測る。調査区の南東に検出した土坑は、遺構のごく一部であるため詳細が不明である。埋土は第10層であり、水成の堆積物がみられないことから、土坑と考える。

調査区北側の大部分では、第10層を除去すると、砂を主とする氾濫堆積物を検出した。19流路の堆積物は北に大きく落ち込んでおり、遺構の底面が調査深度限界をはるかに超えていたため、埋土の中位付近までを確認した。確認した範囲では幅3m以上を測り、断ち割り断面によると、底面の標高はT.P.+0.6mに達し、深さは約1.1mを測る。埋土は粘土シルトから細礫の互層であり、堆積状況から激しい流水によるものであったことがわかる（図29、図版15）。西側が上面からの攪乱により不明であるが、

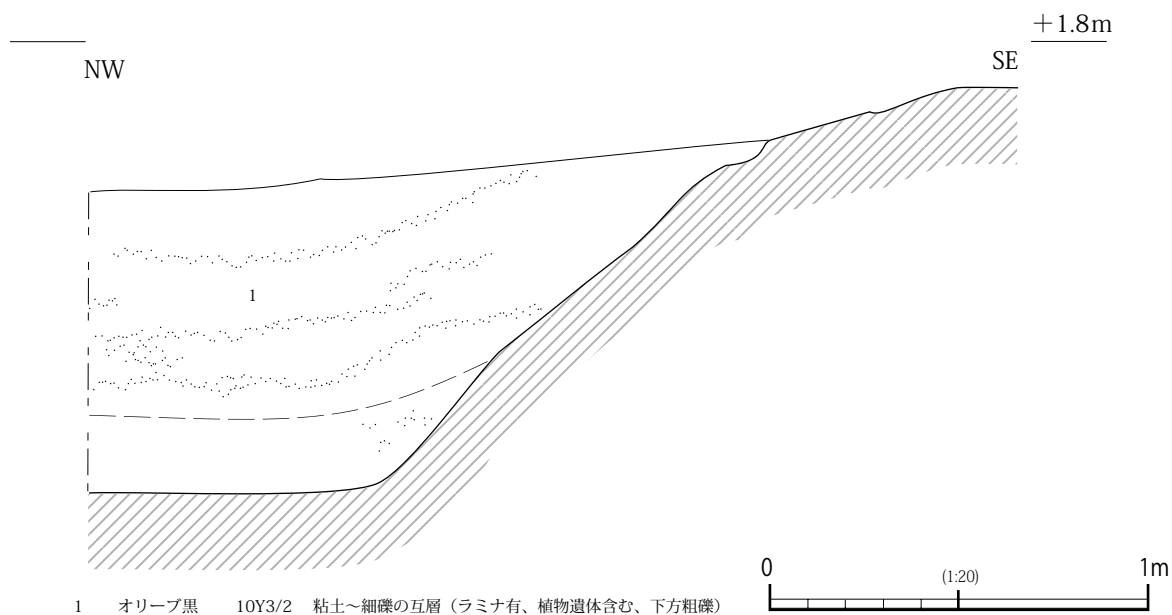


図29 08-1-1区 19落込 断面

南西から北東に向かったのびる流路が存在したと推測する。同様の遺構として03-1-1区に60溝があることから、連続して1つの流路を形成していた可能性が高い。なお、調査区の南端において、19流路から幅約1mの溝状にのびる遺構を検出した。すぐに調査区外となるため詳細は不明であるが、取水口や排水口であった可能性がある。これらの遺構から遺物はまったく出土しなかった。

08-1-2区では、攪乱を除く全域において良好に残存する旧表土の第11層を検出した。遺構面の標高はT.P.+1.4mから+1.8mを測り、東から西に下降する緩斜面の地形を呈する。遺構としては、土坑・落込みを確認した(図28、図版16)。

**20落込**は、調査区の南西部において攪乱の縁辺に沿うような形状を呈する。本遺構面を覆う第10層の除去中、同層と異なるシルト質の堆積と、その下層の第11層が下降する状況が認められたため遺構と判断した(図24)。上部の埋土を除去すると深さ約25cmの落込みとなり、遺構内から大量の土器が出土した(図版16)。しかし、遺物の大半が下層より露頭するものであると分かったため、本遺構面には伴わないものとして取り扱った。ただし、出土遺物には時期の混在が認められることから、下面から継続して20落込が存在していたと推測する。

上記以外には、緩斜面上において6基の土坑を検出した(図版16)。いずれの土坑も、埋土は第10層が堆積する。**22土坑**は直径約50cmの円形で深さ約22cmを測るが、それ以外は径30cmから75cmの不定形で深さ5cm前後と浅い土坑である(図30)。22土坑以外は自然地形の可能性が高い。遺物は主に22土坑から出土し、弥生式土器や自然木がみられる(図30、図版59)。1は22土坑から出土した、口縁部が外側に屈曲する大型の鉢である。2は**23土坑**から出土した大型の壺である。

08-1-3区は、調査区の北端と南端において第8面を確認した。地形は基本的に下面を踏襲するが、

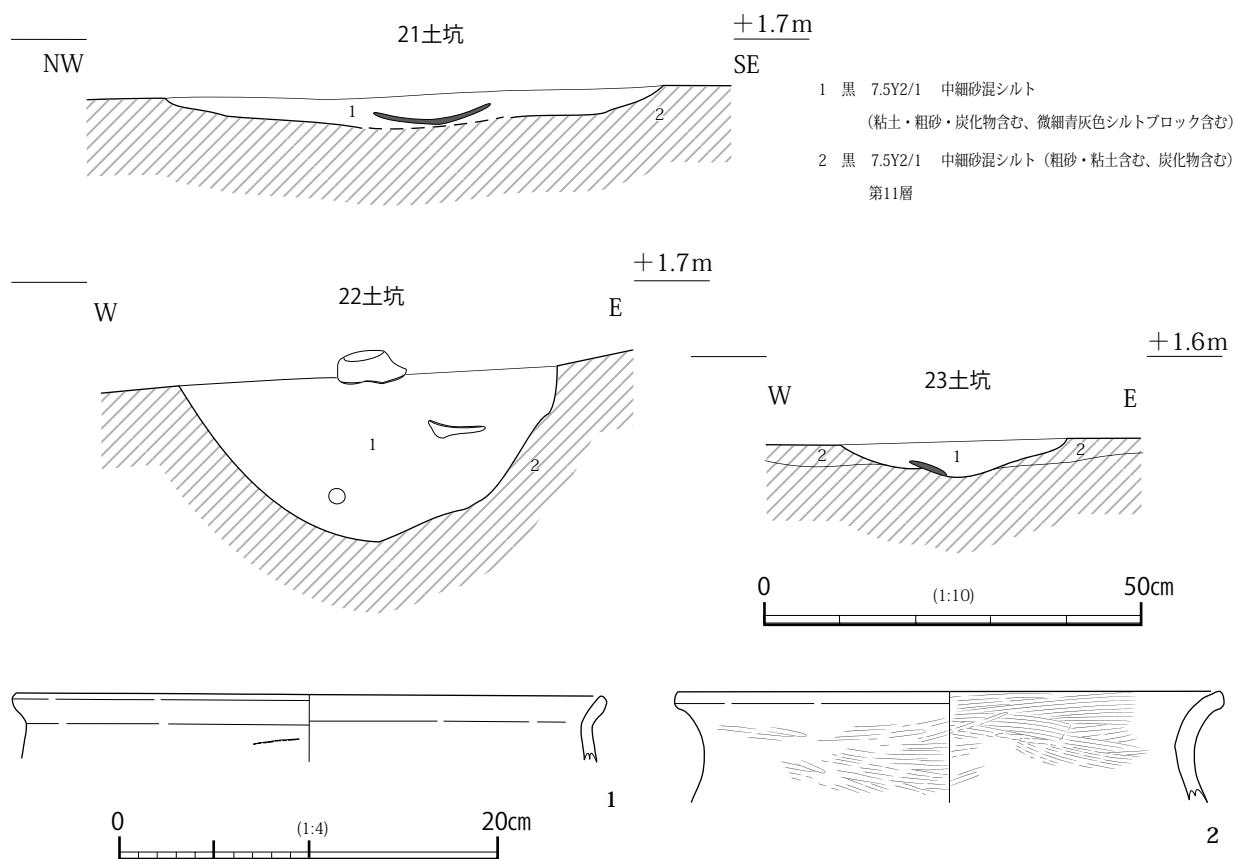


図30 08-1-2区 21・22・23土坑 断面・出土遺物

南端部については溝の埋没による高地化が進んだようである。遺構としては溝・土坑・ピットを検出した(図28、図版17)。

調査区の北端部では、南側の大半の旧地表面を掘り過ぎにより削平してしまった。精査では遺構を検出できなかったものの、08-1-2区のような浅い遺構を消失した可能性がある。一方、遺構面が残存する北側では、低い畦状の高まりを伴う小溝や小さな高まりを検出した。畦状の遺構は水田畦畔の可能性が高いものの、隣接する調査区に延長がみられないことから詳細は不明である。高まりについても同様である。

調査区の南端は、極めて狭小な検出範囲の中で土坑とピットを確認した。土坑はいずれも後世の攪乱により大半を失っており、詳細は不明である。埋土に第10層が堆積し、遺構も浅いことから、08-1-2区と同様の自然遺構であると思われる。

第8面を覆う第10層は、同面を検出した調査区のほぼ全域において検出した。土質は灰色から暗オリーブ灰色を呈する粘土から微砂を主とし、ラミナや植物遺体がみられることから、弱い流水や止水性の堆積物と考える(図5~7)。08-1-1・2区では、標高に関係なく層厚10cm前後で地形に沿って堆積するのに対し、08-1-3区では低所が厚く、高所が薄く堆積し、埋没後の標高はほぼ同じ高さとなる。第10層は水成の堆積と考えられることから、一時的に最も高所のT.P.+1.9m以上の標高まで冠水した可能性が高い。同層から、弥生式土器の甕・壺や石器が出土した(図31、図版59・60)。

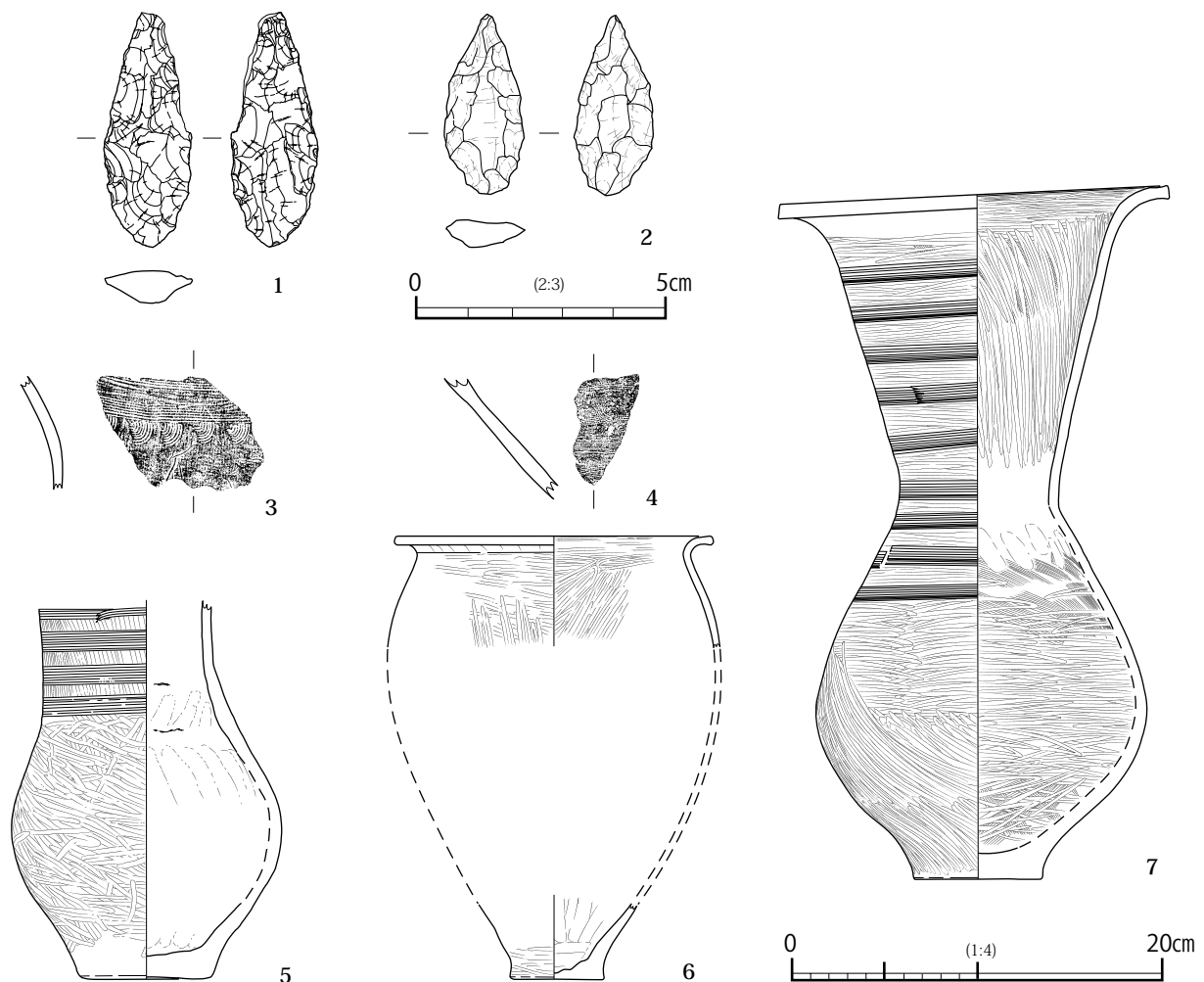


図31 08-1-2・3区 第10層 出土遺物

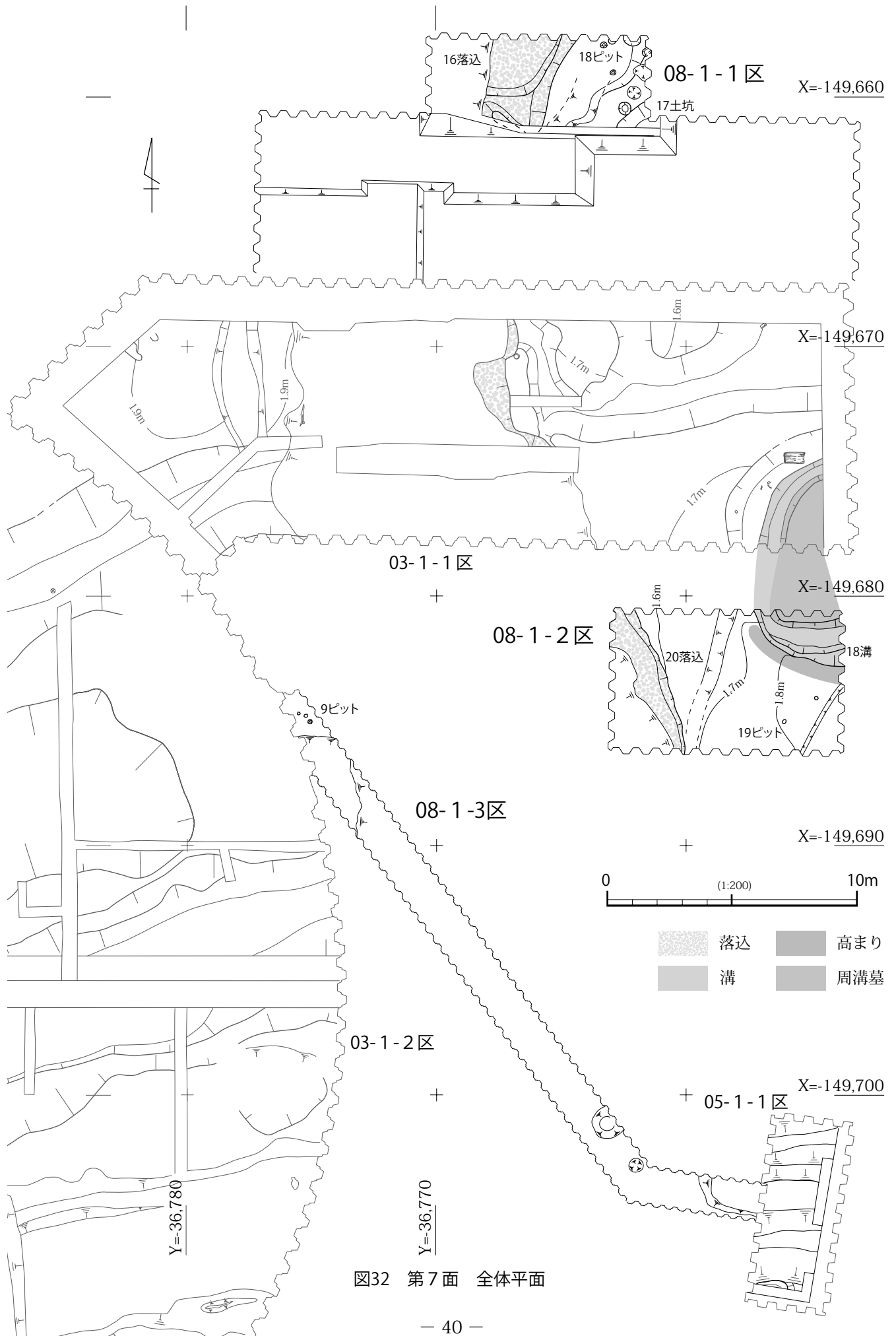


図32 第7面 全体平面

1・2は円基無茎式の石鉢である。3は直線文と扇形文、4は流水文を施す壺の肩部片である。5は壺の下半部であり、頸部に直線文を巡らす。6は底部と口縁部を図上復元した甕である。7はほぼ完形に近い壺である。9段に施された直線文の上にはそれぞれ1条の沈線を巡らす。また、頸部以上と体部にそれぞれ異種の胎土を用いて製作されている。なお、5・7は層内に横倒しのままに埋没した状態で出土した(図版19)。図版60-aからcは楔形剥片である。a・cは敲打痕、bは微細剥離痕が残る。cは楔形として使用した際に起こった縦割が認められる。

## 5. 第7面(弥生時代中期中葉)

第7面は、自然堆積物である第10層の上面にあたり、土壌化層の第9層を除去した調査区のほぼ全域において検出した。遺構面の標高は、08-1-1・2区がT.P.+1.5mから+1.8mであるのに対し、08-1-3区がT.P.+1.8m以上と、下面までの地形の高低と逆転する。個々の調査区における地形は下面を踏襲することから、周辺一帯の中でも低位な部分にのみ影響が及ぶような地形変化が起こったと考えられる。全体的には、各調査区における高地部分の標高が揃うことから、平坦化の初期段階に相当するといえよう。本遺構面における遺構としては、落込み・溝・土坑・ピットがあげられる。

08-1-1区では、調査区北側の突出部において、T.P.+1.45mから+1.80mの範囲に遺構面を確認した(図32、図版18)。地形は基本的に下面を踏襲したものであり、高所からは17土坑や18ピット等を検出したが、それらに出土遺物はほとんどみられなかった。調査区の中央付近では、第8面の流路が埋没した上面において、それよりもやや北寄りに向かってのびる16落込を検出した。遺構の位置と形状から、下面における19流路の跡として残った自然地形と考えられる。埋土は第9層が一様に堆積するが、同層を除去した遺構の北半において、ブロック土の広がりを検出した。ブロック土は深さ約15cmを測る方形の窪みに堆積しており、層内に遺物は含まれない。おそらく整地等の人為的な痕跡と推測する。

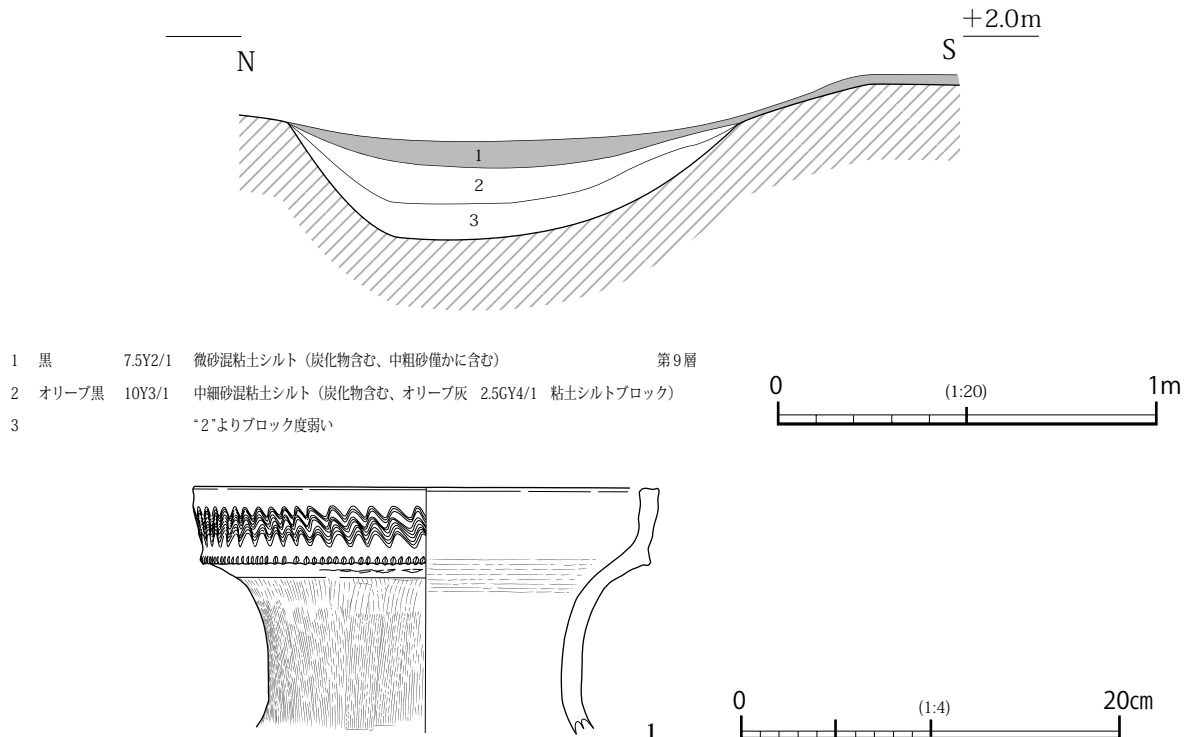


図33 08-1-2区 18溝 断面・出土遺物



図34 第6面 全体平面

08-1-2区では、西側の攪乱を除くほぼ全域において遺構面を確認した。標高はT.P.+1.6mから+1.8mを測り、東から西に緩やかに下降する地形を呈する。遺構としては落込み・溝・ピットを検出した(図32、図版19)。

**20落込**は、本遺構面の基盤である第10層が上面の攪乱と無関係に西へ下降する状況を確認したことから、遺構の存在を確信したものである。現地調査では、これが下面の地形を考える上での契機となった。同様の地形変化が北側の03-1-1区においても確認されており、初現は異なるものの、08-1-1区の落込みへと接続していた可能性が考えられる。

**18溝**は調査区の北東部において位置し、屈曲して北と東の調査区外へと伸びる遺構である(図版20)。幅80cmから1.9m、深さ30cm前後を計り、埋土はオリブ黒色の中細砂混じり粘土シルトに第10層のブロックが含まれる(図18・33、図版20)。上部の第9層が溝内や底面にみられないことから、本遺構面に帰属するものと判断した。また、同溝の北側にあたる調査区界とのわずかな場所において、ブロック土の集積を検出した。しかし、同地点に断面観察用のトレンチを設定していたことと、遺構を誤認していたため、記録を行うことはできなかった。18溝の形状と人為的なブロック土の存在、03-1-1区の南東に示された24溝や高まりの記録から、当地に方形周溝墓の存在した可能性が高いと推測する。なお、18溝の南肩付近では、明確な形状を示すことはできないが、帯状にのびる盛土の痕跡も確認している。溝の埋土から、弥生式土器の壺・甕や石器が出土した(図33、図版61)。1は複合口縁の外面に波状文と刻目を施す壺である。図版61-aは石核である。

08-1-3区では、調査区の北端と南端において第7面を検出したものの、遺構面の残存状態は良好ではなく、北端部においてピット数基を確認したのみである。

## 6. 第6面(弥生時代中期後半)

第6面は氾濫堆積物の第8層を除去した面であり、調査区のほぼ全域において確認できる。遺構面の標高はT.P.+1.5mから+2.1mを測り、南側の08-1-3区が北側の08-1-1区より高所となる。本遺構面の旧表土である第9層は各調査区において一様に残存するものの、遺物等の出土はほとんど認められない。遺構としては、流路・落込み・溝を検出した。

08-1-1区では、調査区の西部を南北にのびる**14流路**と、その東側に下面の**16落込**の名残と、南東部に**15溝**を検出した(図34、図版21)。15溝は下面の17土坑と同位置であるが、埋土に水成の堆積物がみられることから溝とした。

**14流路**は遺構の一部を確認したのみであり、大半は未調査地に位置する。調査区北西端の床付面において下層の露頭を確認したことから、流路の幅は約7.5mと推測する。遺構の深さは1.3mを超え、調査深度の限界に達する。埋土の土質や遺構の位置・形状から、14流路は南側の03-1-1区の20大溝、08-1-2区の**17流路**、08-1-3区の**8流路**に連続することが明らかである(図34、図版22・23)。また、08-1-2区付近では幅約13mと、南に位置するほど流路の規模が大きくなる。旧地表への侵食や堆積状況と合わせると、本流路が南から北に向かって激しく氾濫した結果によるものと考えられる。下面の調査において本流路とほぼ同様の位置に落込み等の自然地形の存在を確認しており、窪んだ土地に氾濫が流入したか、あるいは小規模な流路が氾濫により拡張したものと推測する。なお、08-1-3区の南端において、同じ氾濫堆積物が東に屈曲する状況を確認した。隣接する05-1-1区の2004溝や2002溝が同一面に帰属するとのことであるが、平面形の復元には西側の252大溝と関連もあり、向後の



検討を要する。08-1-2区17流路、08-1-3区8流路から多量の遺物が出土しており、弥生式土器の壺・甕・鉢・蓋や、その他に土製品・石器・木器がみられる（図35～37、図版61～67）。

図35は17流路および溢流した第8層より出土した遺物である（図版61・62）。1から3は甕であり、1・2は生駒西麓産である。2は内面全体にコゲが付着する。4から8は壺であり、4・6・8が生駒西麓産である。5は垂下する口縁下端に鋸歯状の刻目を施す。6は頸部に突帯を巡らす。7・8は直線文と扇形文を施す肩部片である。9は一部に研磨痕がみられることから、磨製石剣の未成品（事故品）と考える。10は上下端に削痕が残る、カヤ製の加工木である。図版62-aは緑泥石片岩製の石庖丁である。

図36・37は8流路から出土した遺物である（図版63～67）。図36-1は外反する口縁端部に刻目を施す甕である。2から7は壺である。2は口縁端部をやや凹ませ、直線文を巡らす。3は櫛描列点文を施す体部片である。4は拡張した口縁部外面の中央に沈線を巡らせ、上下に列点文を羽状に施す。6は口縁端部を下にわずかに拡張し、頸部に直線文を巡らす。7は強くヨコナデした口縁端部に廉状文を施す。8から12は鉢である。8・9は直立する口縁部外面に櫛描列点文を施す。10から12は把手付鉢であり、

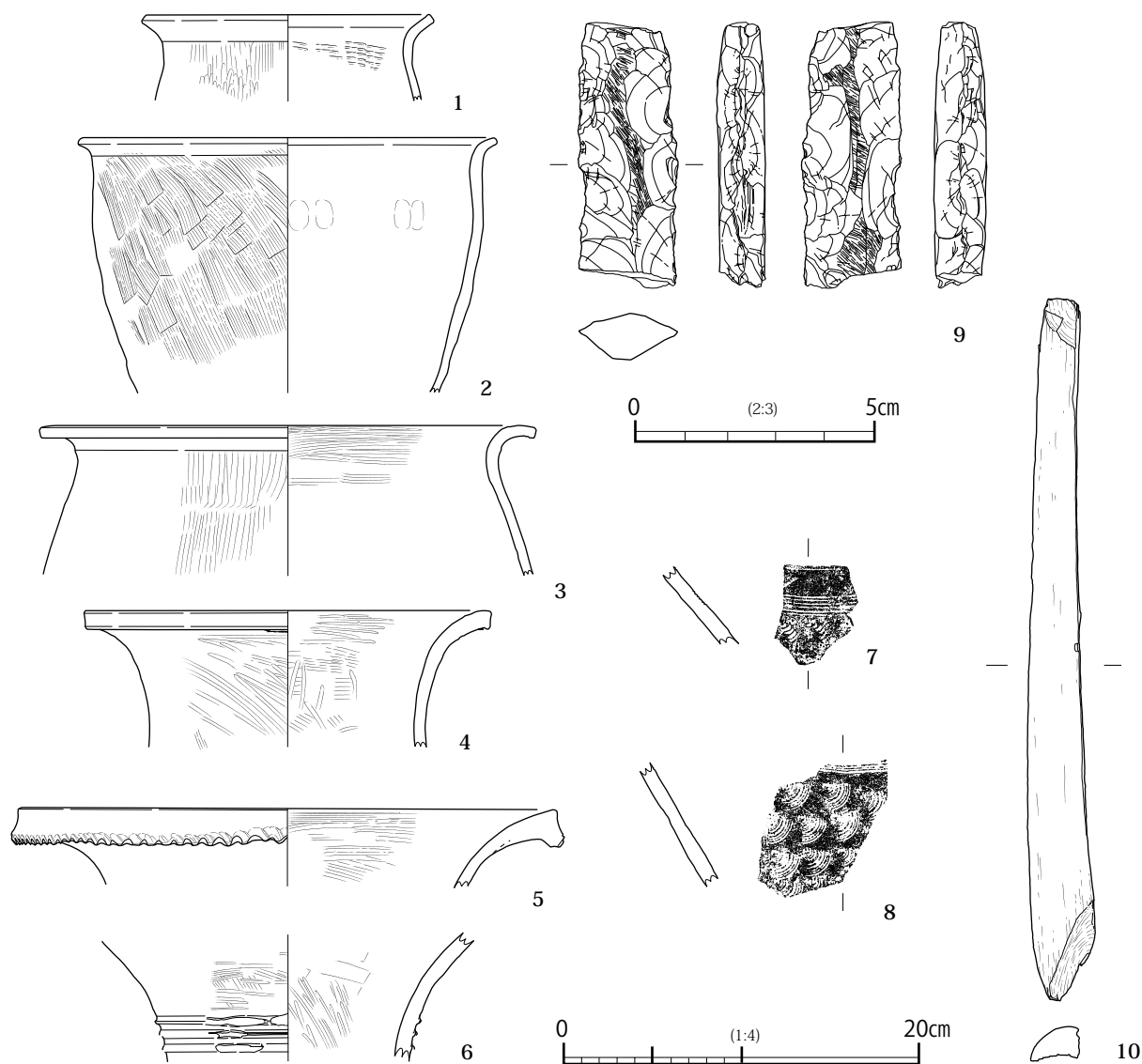


図35 08-1-2区 17流路・第8層 出土遺物

10ではやや外傾する口縁部を持つ。13・14は蓋であり、14では有孔がみられる。15は高杯の杯部である。16は有孔壺の底部、17は無頸壺である。18はわずかに折り曲げた口縁部をもつ無頸壺であり、外面に廉状文・直線文・波状文を巡らす。19から24は甕である。22は外傾する口縁端部に刻目を施す。24・25は大型品であり、小さく外反する口縁端部が上下にやや肥厚する。

図37- 1 から 3 は石鏃である。1 は尖基無茎式の下部を折損、2 は円基無茎式の未成品である。3 は大型の未成品である。4 は軽石の一部であり、側面に直線の研磨痕、上面に竹管状の先端を回転研磨した痕跡が残る。5・6 は緑泥石片岩の石庖丁の破片である。7・8、および図版67- a は楔形剥片である。9・10は土器片を転用した土製円板である。図版67- b は第8層より出土したイノシシの切歯骨である。

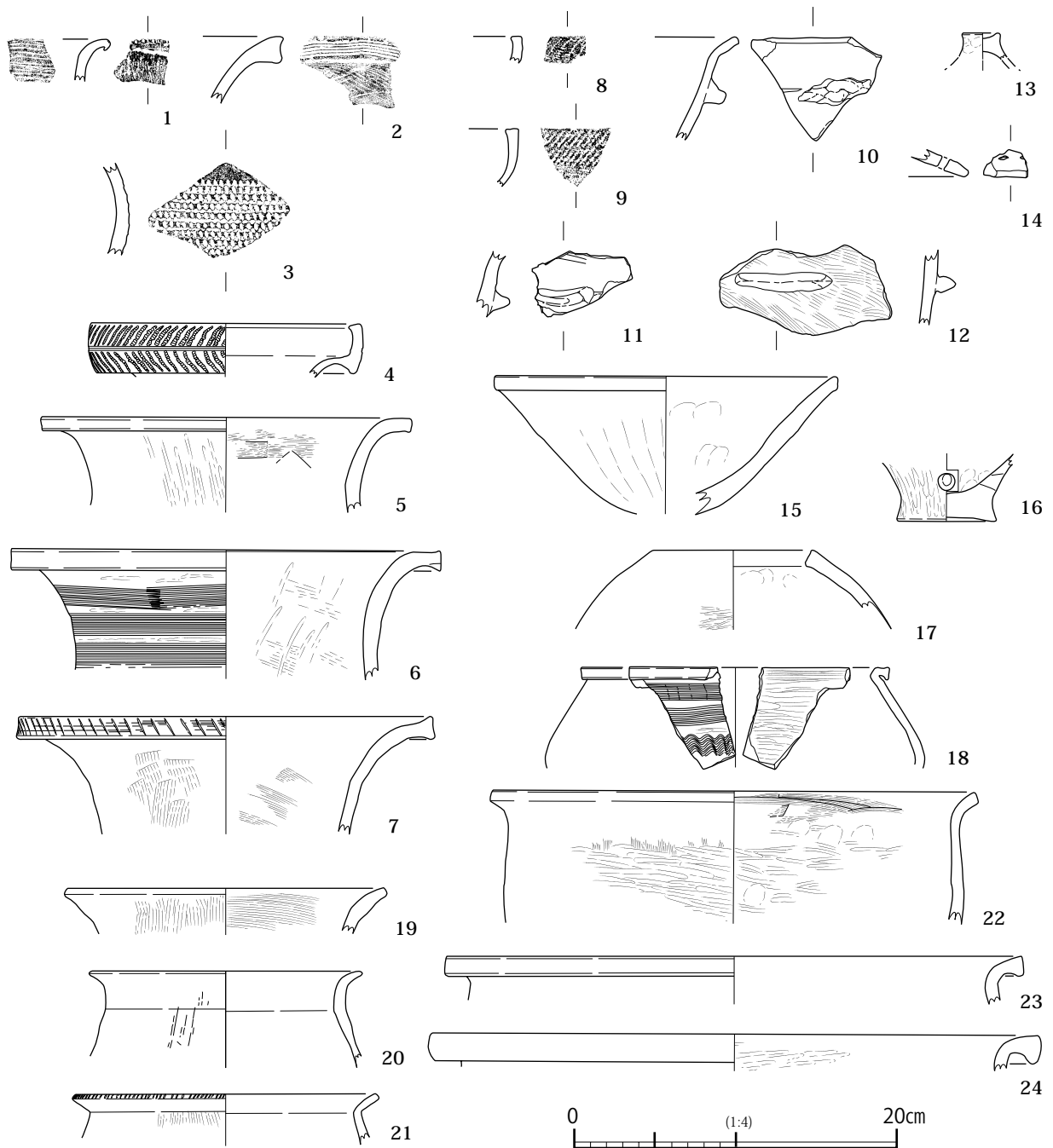


図36 08- 1 - 3区 8流路 出土遺物 (1)

08-1-2区では、17流路以外に調査区の北東部において18溝と高まりを検出した（図34、図版22）。18溝については、本遺構面では埋土上部に薄く堆積する第8層を除去したのみであり、浅く窪む形状を確認するに止まる（図18、図版22）。

08-1-3区では、8流路以外には、調査区の北端において幅約30cmの浅い溝を検出したのみである（図34、図版23）。

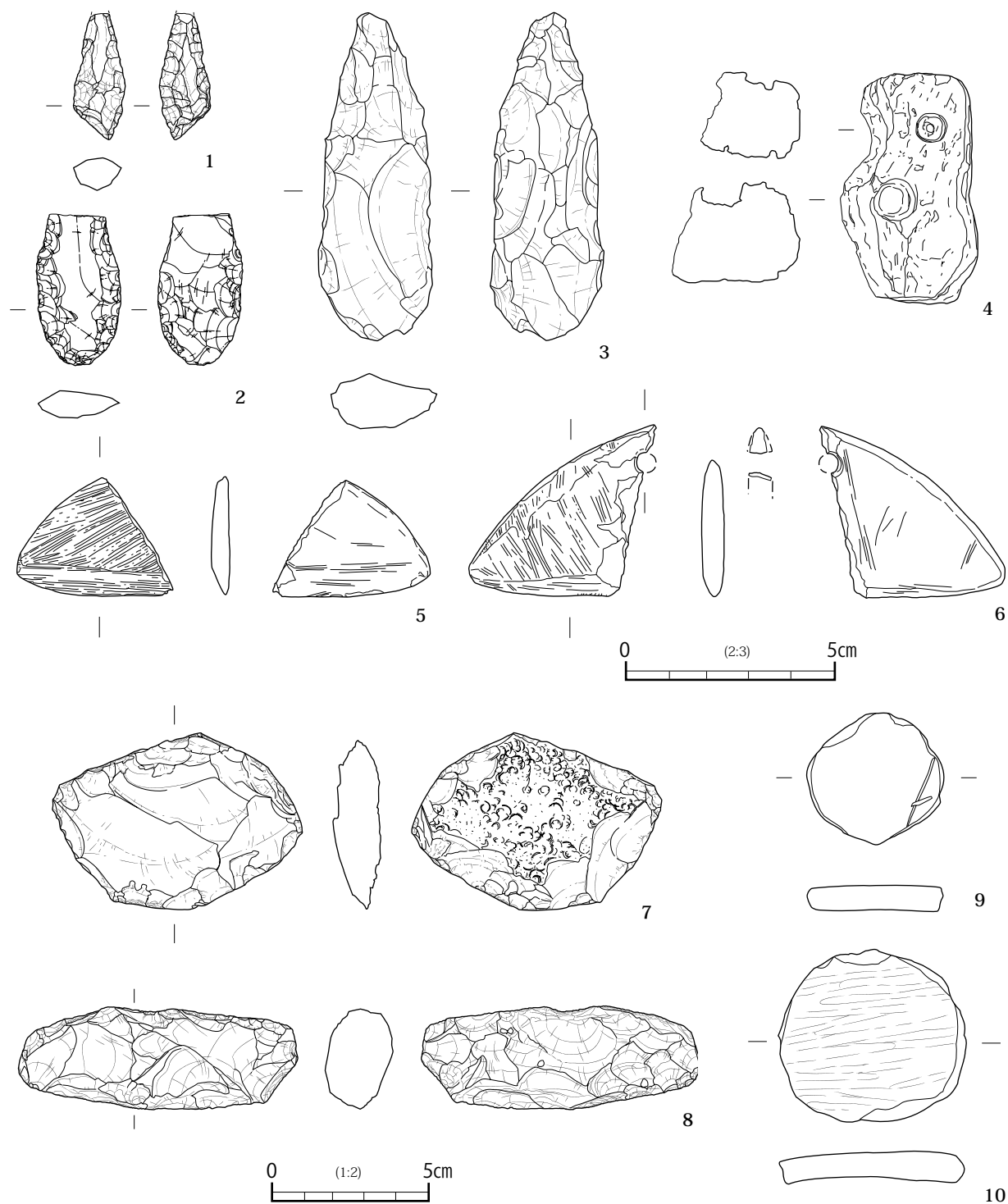


図37 08-1-3区 8流路 出土遺物（2）

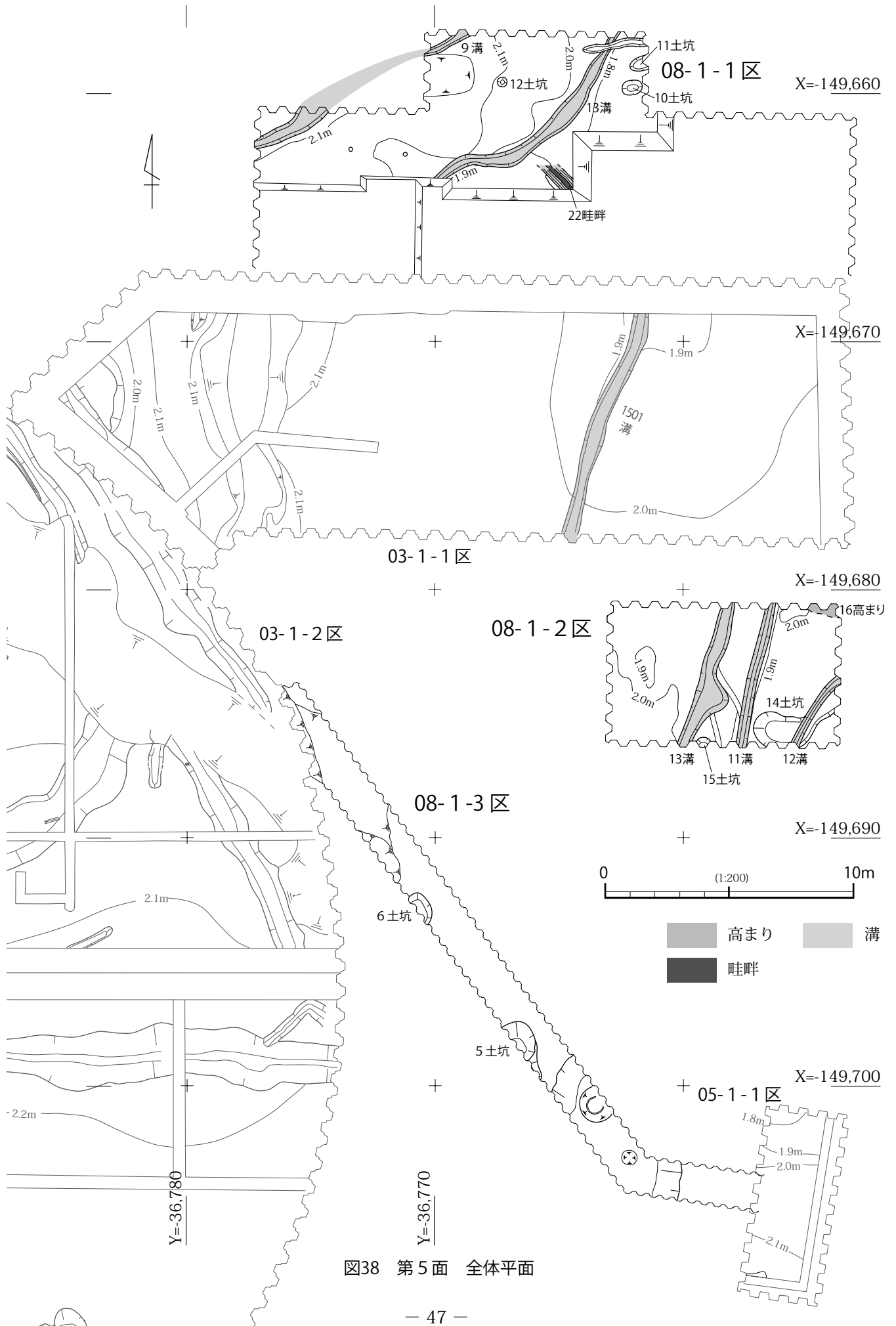


図38 第5面 全体平面

## 7. 第5面（弥生時代中期末）

第5面は、第8層の土壌化層である第7層を除去した調査区のほぼ全域において検出した。第8層を供給した下面の流路の埋没により、遺構面の標高はT.P.+1.85mから+2.20mを測り、全域的に高地化が進む。08-1-1・2区においては下面における流路部分と平坦部分の高低関係が逆転しており、西

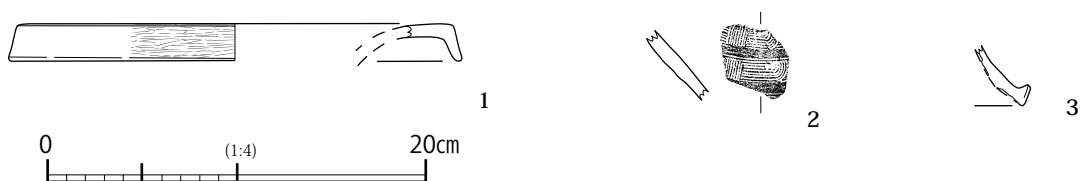
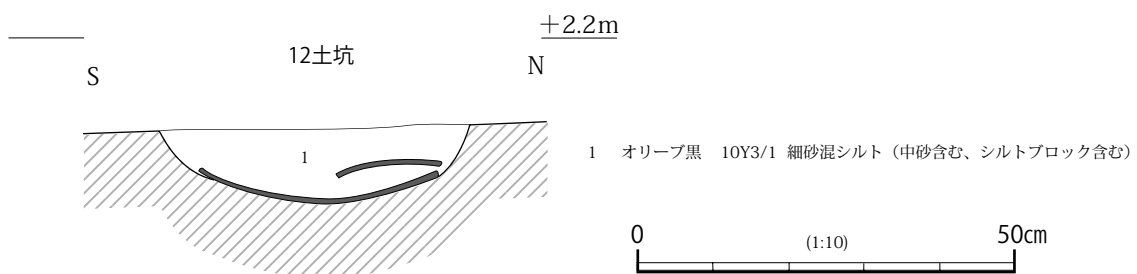
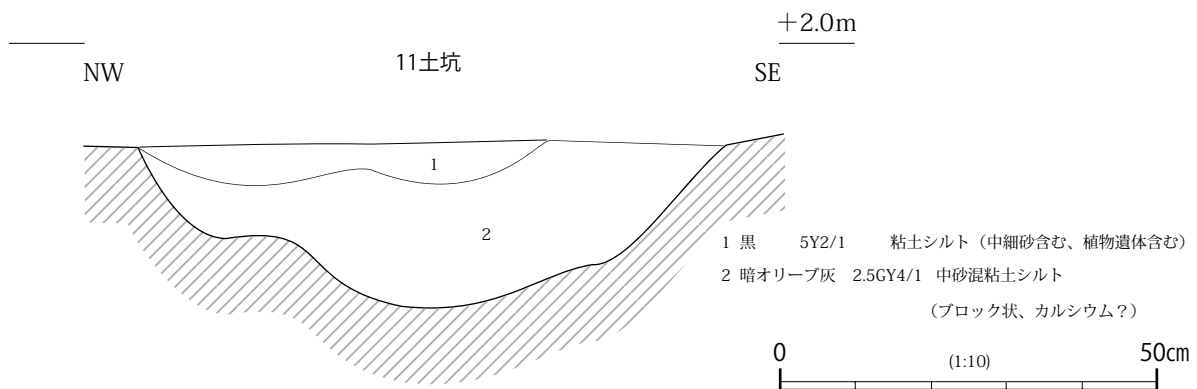
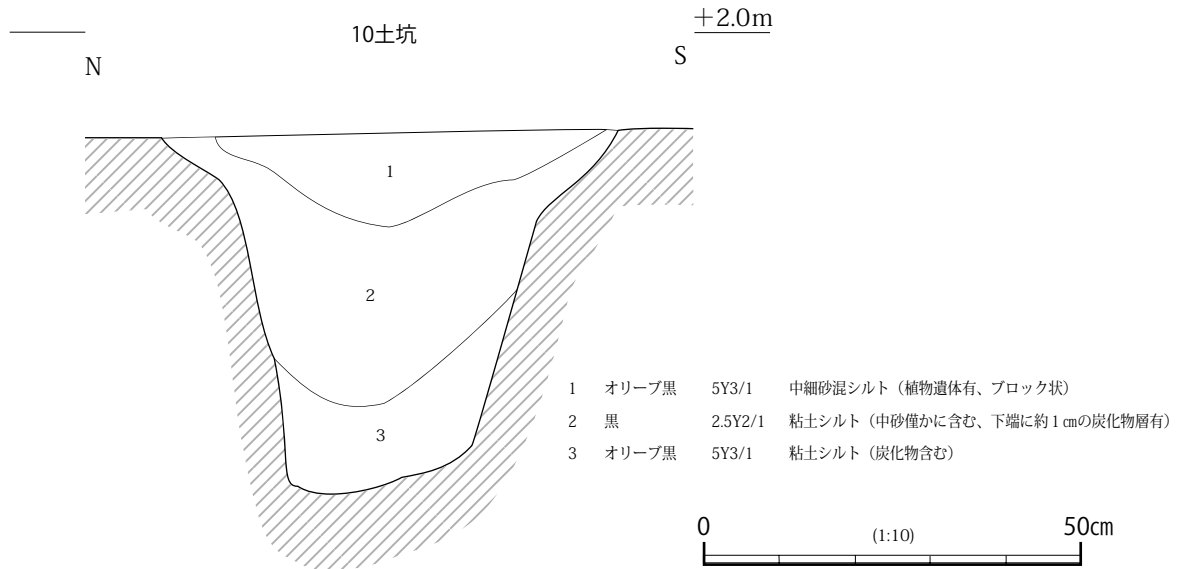


図39 08-1-1区 10~12土坑 断面、9溝・12土坑 出土遺物

から東へと緩やかに下降する地形に変化した。08-1-3区についても同様と思われるが、後世の攪乱により調査区北半の遺構面が失われたため、詳細は不明である。ただし、第6面では調査区の中で最も高所となっていた08-1-3区は、再び低地化したようである。

08-1-1区は、調査区の北西半において残存状態の良好な第5面を確認した。調査区の西寄りを高所とする緩斜面上において、溝・土坑・畦畔等の遺構を検出した。

10土坑から12土坑は調査区の北側に位置し、径40cmから78cmを測る円形や楕円形を呈する（図38、図版24）。いずれの遺構も、埋土は遺構面を覆う第7層に類する砂混じり粘土シルトを主とするものの、遺構の深浅は大きく異なる。10土坑は深さ約48cmを測る円柱形に近い断面を呈するが、12土坑の深さは約10cmと浅く、内部から弥生式土器の大型壺片が出土した。壺は頸部以上と底部を除く体部のみの破片であり、土坑の底面に貼り付けられたような形で出土した。辛うじて肩部の円形浮文が残る生駒西麓産の土器である（図版68-a）。

9溝と13溝は、14流路が埋没して形成した微高地の傾斜に沿うように、南西から北東にほぼ並行してのびる2条の溝である（図38、図版25）。幅30cmから70cm、深さ約20cmを測り、埋土は第7層と第8層

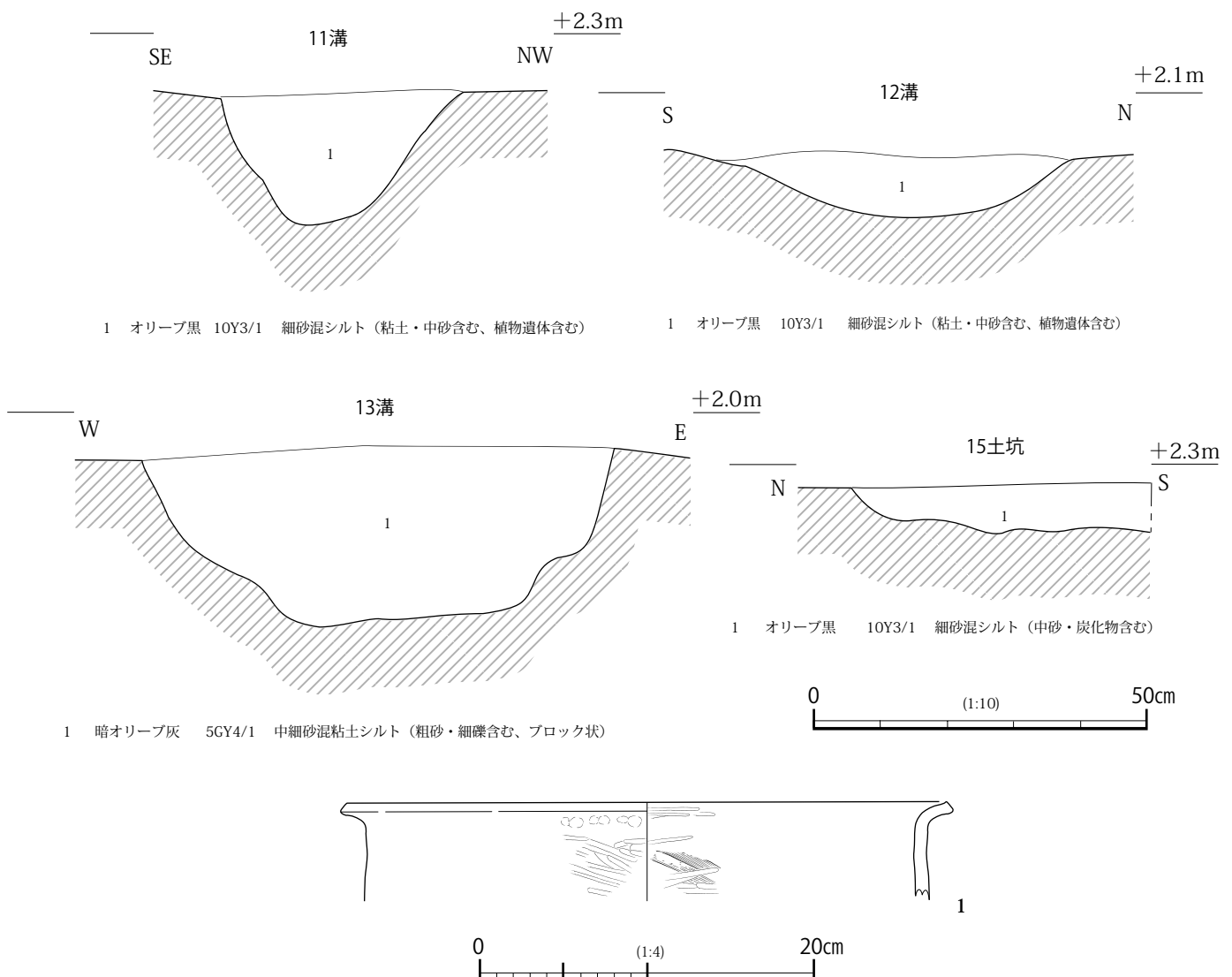


図40 08-1-2区 11~13溝・15土坑 断面、13溝 出土遺物

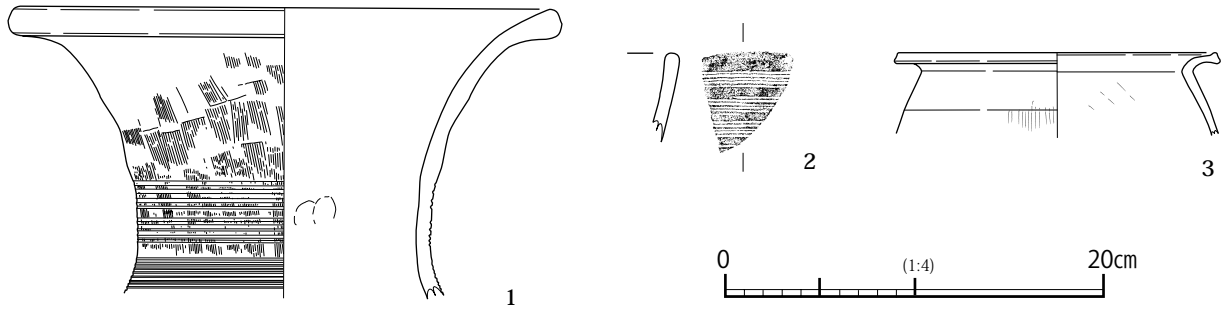


図41 08-1-3区 6土坑、08-1-1区 第7層 出土遺物

のブロック土である。9溝からは土器片がわずかに出土した（図39、図版68）。1は垂下する口縁端部を持つ高杯である。2は直線文と扇形文を組み合わせた流水文を描く壺の体部片、3は脚部片である。

08-1-2区では、T.P.+2.0m前後を測るほぼ平坦な第5面上において、溝・土坑・高まりを検出した。

11溝と13溝は、調査区中央付近を並行しながら南南西から北北東にのびる溝であり、03-1-1区の1501溝はまったく同じ方向を示す（図38、図版25・26）。12溝は調査区の南東を南西から北東にのびており、08-1-1区の溝に近い。いずれも延長が確認されておらず、性格は不明である。埋土は、11・12溝と15土坑が第7層とほぼ同質であり、13溝と14土坑が第8層を含むブロック土である（図40、図版26）。出土遺物は概して少なく、13溝から甕の口縁部片が出土した（図40、図版68）。

08-1-3区は、調査区の北半が第4層の氾濫により削平され、南半を中心に遺構面を確認した。標高がT.P.+1.9m前後を測るほぼ平坦な地形を呈し、落込み・土坑を検出した。

いずれも形状が不定形であり、埋土には植物遺体を多量に含むシルトが堆積することから、下面の8流路が埋没した後に残った自然遺構と考える（図38、図版27）。特に南側の調査区が屈折する付近において検出した落込みでは、埋土から粘土化したシジミ貝の遺体が大量にみついている。出土遺物は非常に少なく、6土坑などからわずかな土器片がみつかった（図41、図版68・69）。1は頸部に直線文が巡る広口壺である。2は口縁端部付近まで直線文を施す細頸壺の破片と思われる。図版68-bは5土坑から出土したカガミガイ科と推測する海水産二枚貝の殻体片である。

第7層は、下面の流路から溢流した第8層が周辺一帯に堆積した後、表土化した層である。08-1-1・2区では土壌化が非常に顕著にみられる一方、08-1-3区では植物遺体を多く含む泥質土が堆積する。これは地形的な影響によるものと考えられ、08-1-3区は永く低湿な環境にあったと推測される。同層からは、弥生式土器の破片が出土した（図41、図版69）。3は外反する口縁端部を上部にわずかに拡張する甕である。

## 8. 第4面（弥生時代後期）

第4面は、土壌化層である第7層の上面に相当し、調査区のほぼ全域において検出した。遺構面の標高はT.P.+1.9mから+2.4mを測る。地形は基盤層である第8層の堆積による影響が大きく、流路の埋没部が高くなり、後背地が低くなるという、いわゆる地形の逆転現象が起こっている。また全体的には、北側の調査区から南に向かって低くなる傾向が看取される。08-1-1区から08-1-2区にかけて、流路の埋没によって形成された微高地と緩斜面を利用した水田と、これに伴う水路を検出した（図

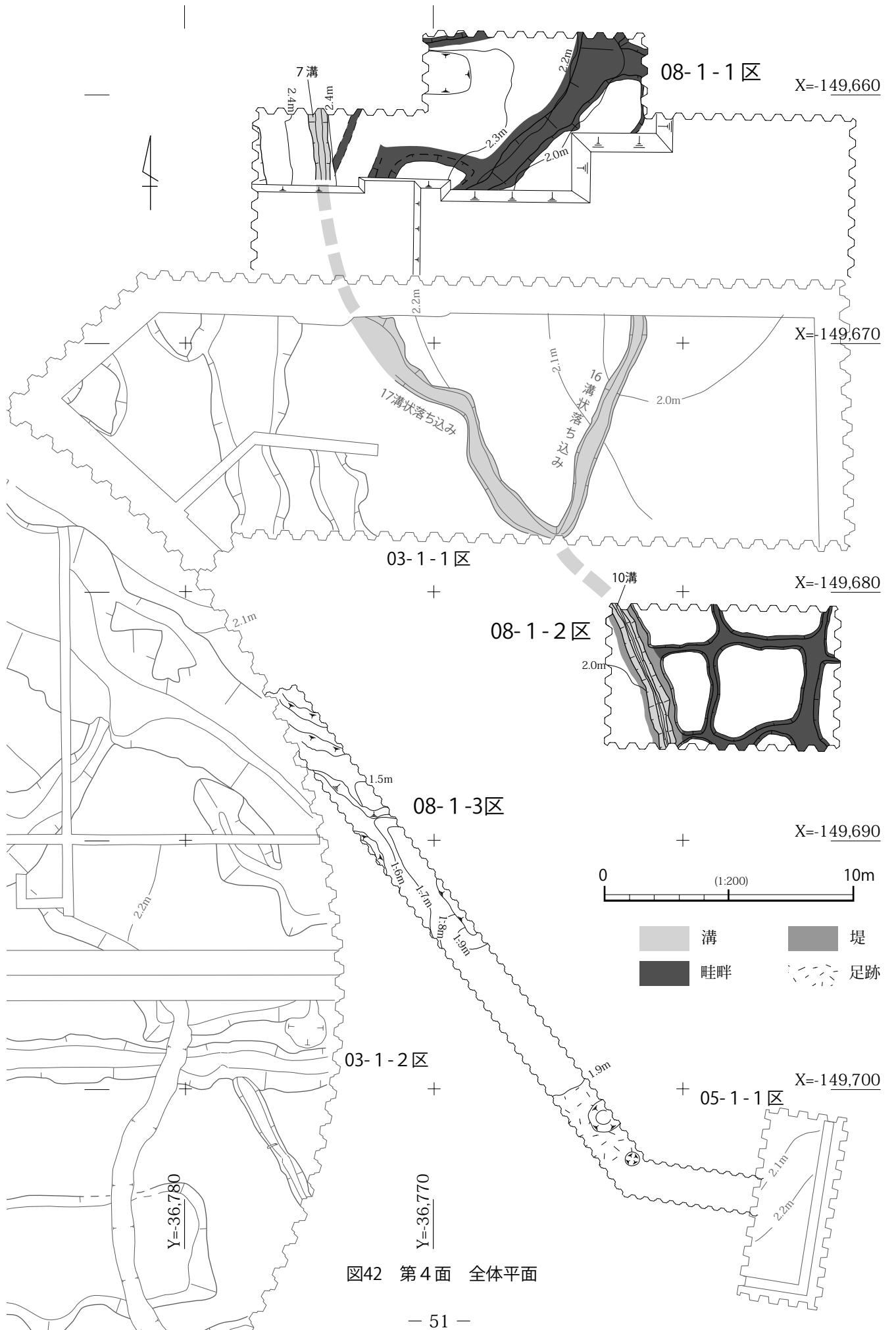


图42 第4面 全体平面



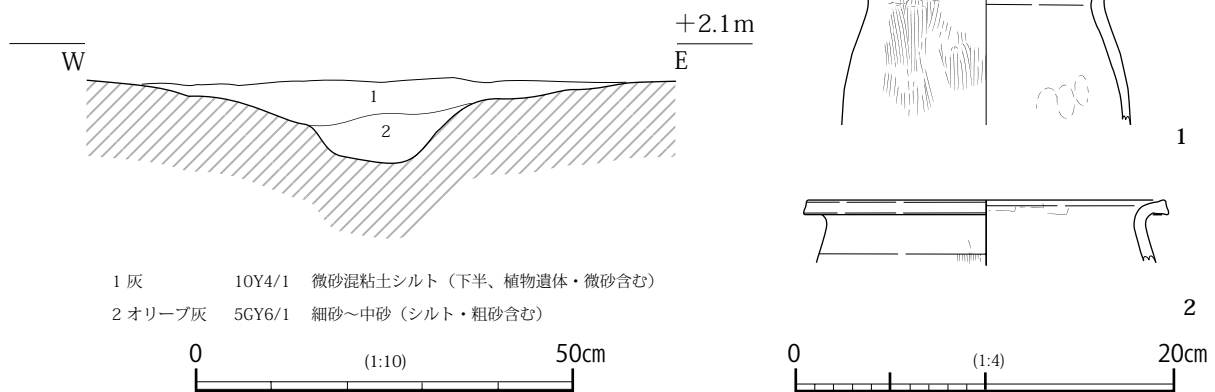


図43 08-1-2区 10溝 断面、08-1-3区 第6層 出土遺物

42、図版28・29)。一方、08-1-3区は上層の第6層による侵食が著しく、特に調査区の北半では遺構面はほとんど残存しなかった。南半に残存する遺構面では、炭化物や植物遺体を多量に含む泥土が堆積し、上層を埋土とするヒトの足跡を多数検出した(図42、図版31)。

08-1-1区では、調査区の中央付近に厚く堆積する第7層を検出した(図6)。他の地点と異なり、層厚約40cmを測り、土壌化層の中に微細なシルト等を含むブロック状を呈することから、人為的に移動された土層と考える。下面の14流路が埋没した上部に位置し、元から高い地形にあったと思われることから、水田域の造成と水利を得るために地形を改変したことによるものと推測する。この微高地の裾部に沿って南西から北東にのびる幅1.4m前後の**水田畦畔**は、上下の高低差が約20cmもあり、水田域内の幹線としての役割を担っていたと考えられる。

調査区の西側では**7溝**を検出した(図42、図版29)。幅約70cm、深さ約10cmを測り、南北にのびて調査区外に達する水路である。現地では、西側にほぼ並行する8溝を本遺構面に伴う水路と考えたが、断面の精査を行ったところ、埋土の層序から帰属面の異なることが判明した。ただし、当該箇所は上層が非常に薄層であるため、不確定な部分も多い。これに連続すると思われる溝が、03-1-1区の17溝状落ち込みであり、08-1-2区の10溝へと続く。

08-1-2区では、調査区の全域において残存状態の非常に良好な第4面を確認した。T.P.+2.0m前後のほぼ平坦な地形を呈し、調査区の西側に**10溝**と、そこから東に広がる**水田面**を検出した(図42、図版29・30)。10溝は幅約60cm、深さ約10cmを測り、中央部が段状に細くなる(図43、図版30)。埋土の上半が泥質、下半が砂質であることから、遺構内にみえる段差は流水の侵食による形状と思われる。また、溝の南側では遺構検出時に破堤の痕跡を確認した。08-1-1区の7溝との比高差から、水路は南流した可能性が高く、これを確保するために前述のような地形の嵩上げを行ったことも考えられる。

第6層は、第4面を覆う氾濫堆積物である。層厚は70cm以下であり、低所では厚く、高所では薄く堆積する。土質は、08-1-1・2区や08-1-3区南側では粘土シルトを主とするのに対し、08-1-3区北側では砂礫となる。調査範囲が狭小なために方向は定かでないが、北半にみる攪乱は氾濫の中心となった流路が調査区を斜交した痕跡と考える。遺構面、層ともに遺物は非常に少なく、弥生式土器がわずかに出土した(図43、図版69)。1・2は外反する甕の口縁部であり、2は口縁端部を強くナデ、わずかに上部に拡張する。図版69-aは、研磨痕の残る軽石である。

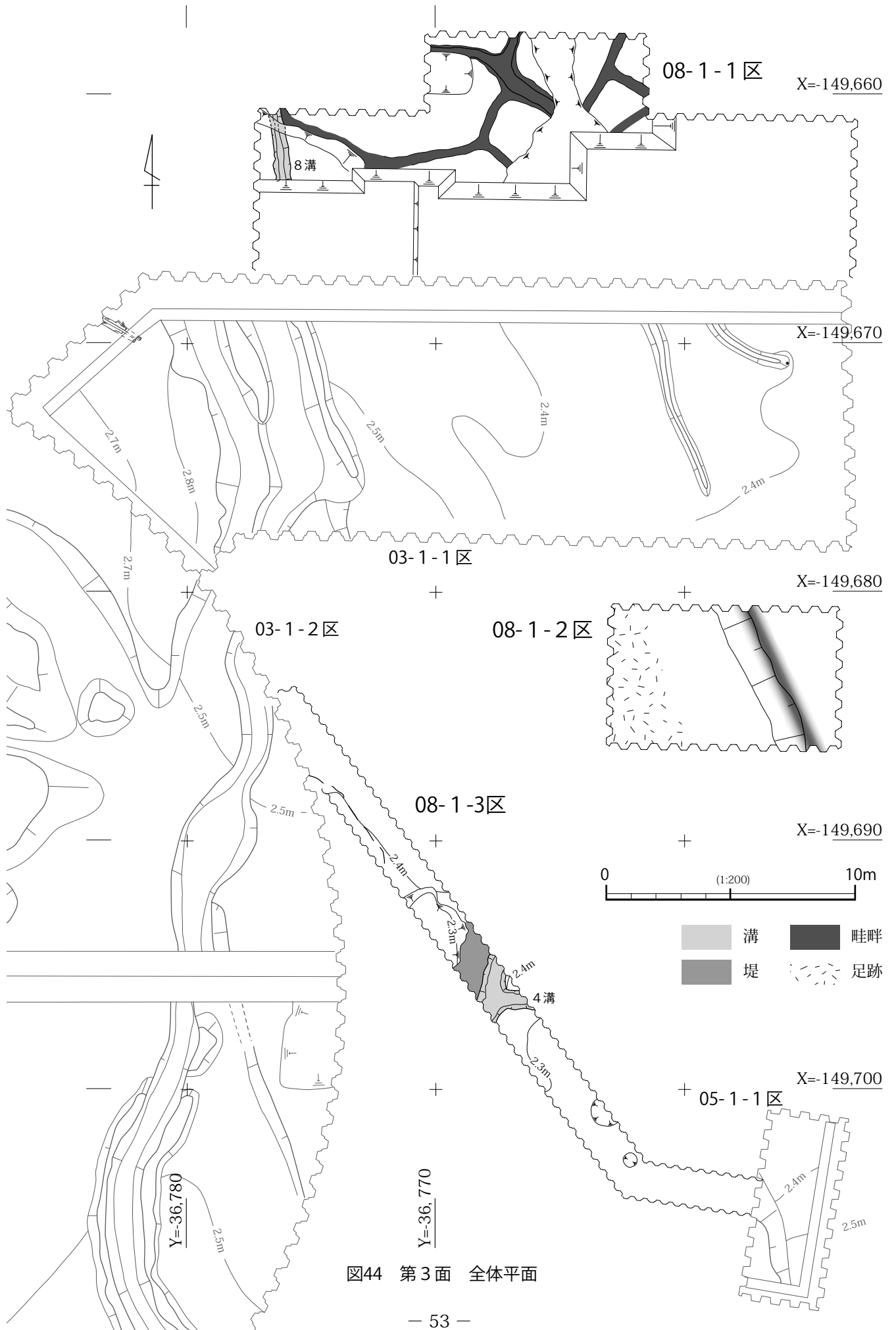


図44 第3面 全体平面

## 9. 第3面（弥生時代後期末）

第3面は土壌化層である第5層の上面にあたり、上部を覆う氾濫堆積物の第4層を除去した調査区の全域において検出した。第5層は氾濫堆積物である第6層を基盤として土壌化した層であり、遺構面の地形も同層の堆積に既定された。下面における造成等による地形変化は、埋没のために平坦化された。ただし、下面の地形を踏襲した微地形が残っており、本遺構面では地形の改変などは認められず、自然地形のままを利用して水田域が形成されたようである。遺構としては、水田畦畔・水路・堤がみられる。

08-1-1区では、網状に広がる**水田畦畔**と調査区の西側に水路を検出した（図44、図版32）。水田は、基本的に下の第4面と同様の東に下降する緩斜面上の、標高がT.P.+2.4mから+2.6mに形成される。調査区西側の**8溝**は、下面において検出した水路である（図版28・29）。溝の周辺は第5層の残存状態が良好ではなく、遺構検出を誤認したものである。幅約60cm、深さ約15cmを測り、埋土は第5層に類する泥土が堆積する。

08-1-2区は西に向かって下降する緩斜面の地形を呈し、標高はT.P.+2.15mから+2.40mを測る。調査区中央の東寄りにおいて、緩斜面に沿うように南東から北西にのびる段差を検出した（図44、図版32）。断面を精査し、水田畦畔の残りであることが判明した（図版32）。調査区西側ではヒトの足跡を多数検出し、低湿な地形であったことがわかる。

08-1-3区は、調査区の中央付近を高所として、北と南にほぼ平坦な地形が広がる。標高はT.P.+2.3mから2.5mを測り、一様に第5層が残存するものの、水田畦畔等は検出されなかった。最も高所な地点において、**4溝**を検出した（図44、図版33）。溝は幅80cmから1.0m、深さ約20cmを測り、T字形を呈する接合部である。西肩はやや土質が荒れており、整形された可能性が高いものの、基本的には自然地形の高まりを利用して開削したものと考える。

本遺構面を覆う氾濫堆積物の第4層は調査区の全域に厚く堆積しており、層厚は80cmから1.0mに達する。08-1-1区では中砂から細礫、08-1-3区では粘土から細砂と、北に向かって堆積物が粗粒化しており、氾濫の中心は北側に存在すると推測する。磨耗が著しいものの、同層からまとまった土器が出土している（図45、図版69）。1は小型の叩き甕、2はV様式系の叩き甕である。

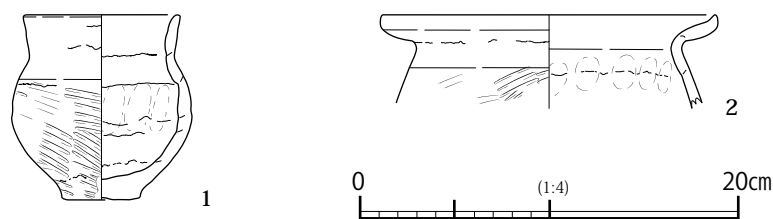


図45 08-1-1区 第4層 出土遺物

## 10. 第2面（古墳時代～古代）

第2面は、土壌化層である第3層の除去面であり、第4層の氾濫堆積物直上となる。本遺構面では、氾濫収束直後の状況と第3層の形成中に掘削された遺構を検出した。しかし、全体的には遺構から出土する遺物が非常に少なく、それぞれの時期を比定するまでに至っていない。調査区の全域に厚く堆積する第4層は氾濫堆積物であり、埋積後の景観は以後の平坦地形の契機になったものである。

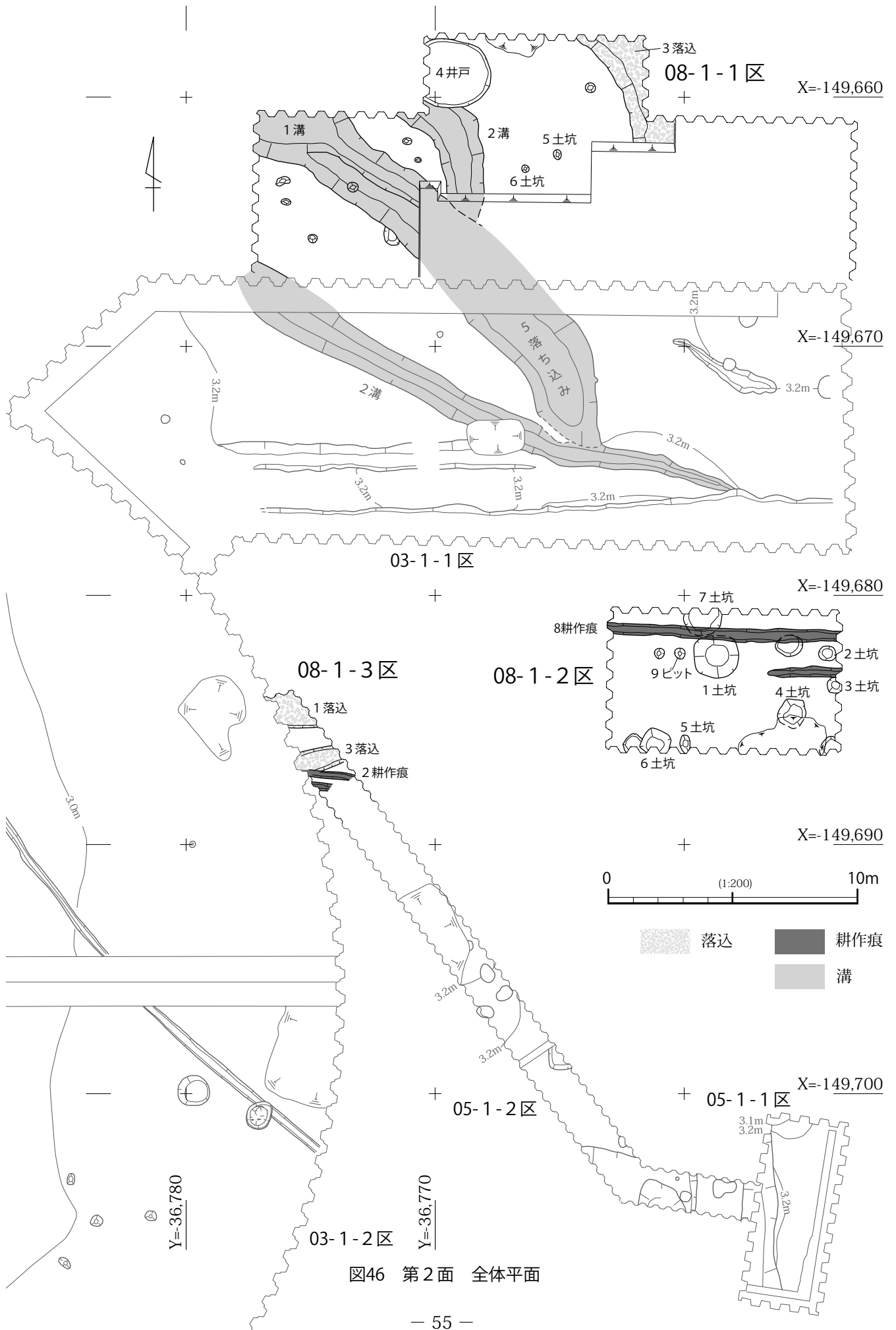


図46 第2面 全体平面

08-1-1区では、調査区のほぼ西半において遺構面を確認し、落込み・溝・井戸・土坑・ピットを検出した(図46、図版34)。標高はT.P.+3.15mから+3.30mを測り、北に向かってわずかに上昇するが、ほぼ平坦な地形を呈する。

調査区北側の突出部の西端において、井戸を1基検出した(図46)。**4井戸**は、南北径約2.75m、東西径推定3.3m、深さ約1.9mを測る。平面がほぼ円形を呈し、円筒状で下部に水溜めをもつことから、井戸側等の構造部材が抜き取られた井戸と考える。遺構の切り合いから2溝より新しいことは明らかであるが、他の遺構埋土が旧表土である第3層に類するのに対し、4井戸のみブロック土を呈する(図5、図版35)。上面の第1面では本遺構を検出できなかったものの、断面を精査すると、第2層を切り込む掘形が確認できることから、限りなく第1面に近い時期に掘削されたものと考え。井戸内から遺物はほとんど出土しなかった。

**1溝**は、調査区の西部において北東方向へ直線的にのびる遺構であり、幅約2.5m、深さ約30cmを測る(図46、図版34)。埋土は中細砂混じり粘土シルトであり、本来の形状は南辺が段状を呈し、北側に幅約1.2mの細い溝状の最深部があったと推測する(図47、図版35)。両端とも調査区外にのびており、南東側は03-1-1区の5落ち込みに一致すると考える。遺構から土師器・須恵器・石が出土した。図版70-aは花崗岩の石であり、表面に弱い磨耗痕が認められる。欠損するために全体は不明であるが、台石のように使用されたものと推測する。

**2溝**は、1溝から4井戸に向かって屈曲しながらのびる溝である(図46、図版34)。幅約1.7m、深さ約24cmを測り、断面は逆台形を呈する(図47、図版35)。埋土は1溝と同様であり、第3層に酷似する。1溝との接合部分は調査区外に相当するため掘削を行っていないが、床付精査中の観察により、2溝が1溝より先行することを確認した。溝内から土師器・須恵器がわずかに出土した(図47、図版70)。1は須恵器の杯蓋であり、頂部に「×」状のヘラ記号を施す。7世紀前半の所産である。

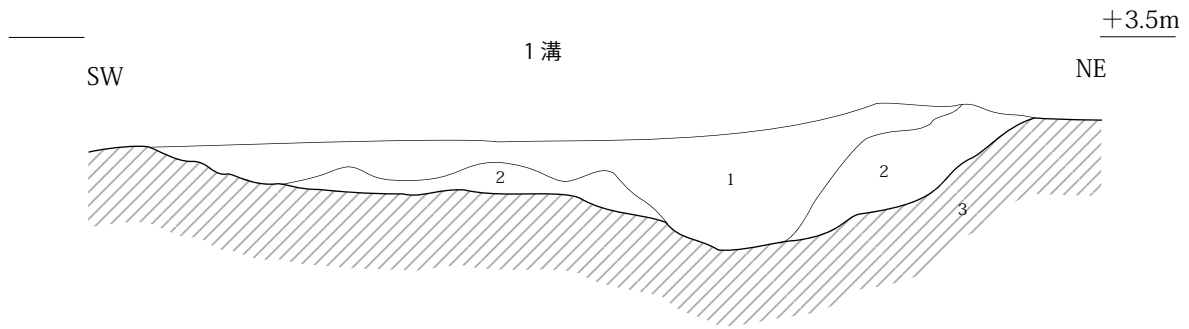
調査区の南西隅においても溝の一部を検出しており、旧調査区から連続するものと考え。

調査区の北東部では、やや湾曲しながら北東にのびる**3落込**を検出した(図46、図版34)。遺構の東半が不明確であり、埋土がやや泥質であることから、落込みとして区別する。遺構から土師器・須恵器・埴輪片が出土した(図47、図版70)。2は円筒埴輪の一部である。外面は縦方向の一次ハケ調整のみを行い、低平で断面台形のタガを巡らす。黒斑は認められず、方形の透かしを穿孔する。6世紀前半のものとして推測する。南側の調査区外の平坦部においても、同様の円筒埴輪が出土する(図版35)。円形透かしを持つことから別固体と考えられ、当地周辺に古墳が存在した可能性を示唆する。溝や落込みは、いずれもほぼ北西南東の同じ方向にのびており、同様の埋土がみられることから、第4層の氾濫堆積が収束した後に残った自然遺構と考える。

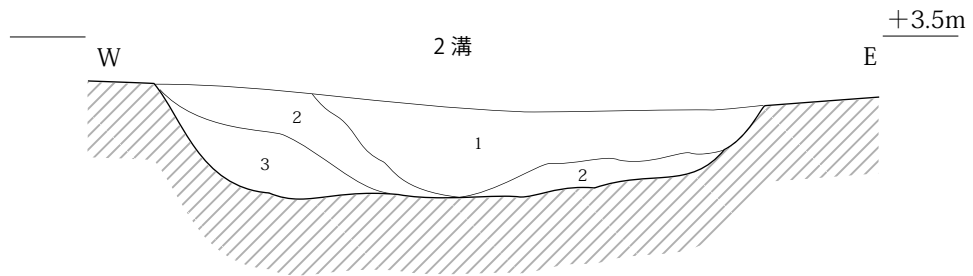
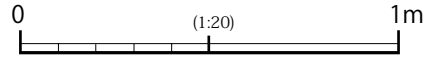
08-1-2区では調査区の全域において遺構面を確認し、耕作痕・土坑・ピットを検出した(図48、図版36)。標高はT.P.+3.2m前後を測り、ほぼ平坦な地形を呈する。

調査区の北側を東西にのびる**8耕作痕**などは、幅約40cm、深さ10cm未満を測り、周辺の土坑より上位にあることから、第1面の掘り残しと考える。

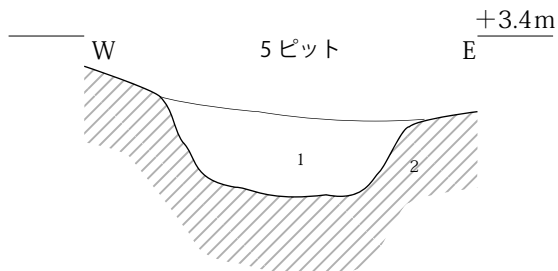
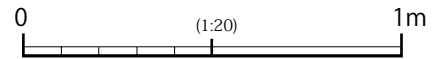
**1土坑**は、調査区中央の北寄りに検出した(図46、図版36)。平面は直径約1.8mの円形、断面はすり鉢状を呈し、深さ約48cmを測る(図48、図版36)。平面の精査に際して焼土や炭化物の集中を検出したため、被熱痕に注意して調査を行ったが、遺構壁面等には認められなかった。埋土の上位ほど炭化物が多いことから、炉等の上部構造が存在した可能性も考えられるが、周囲から金属製造に関連するよう



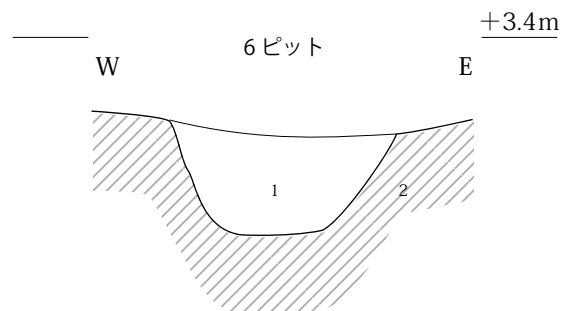
- 1 灰黄褐 10YR4/2 中細砂混粘土シルト (細礫含む、マンガン斑)
- 2 "1"浸透部分
- 3 にぶい黄橙 10YR7/3 細砂～細礫 (シルト含む、マンガン?鉄分?)



- 1 黒褐 2.5Y3/2 中細砂混シルト (粘土含む、マンガン斑有、ややブロック状)
- 2 "3"+ "1"小ブロック状
- 3 "1"浸透部分



- 1 灰黄褐 10YR4/2 中細砂混粘土シルト (細礫含む、マンガン斑)
- 2 灰黄褐 10YR4/2 細砂～細礫 (シルト・中礫含む、マンガン)



- 1 黒褐 2.5Y3/2 中細砂混シルト (粘土含む、マンガン斑有、ややブロック状)
- 2 灰黄褐 10YR4/2 細砂～細礫 (シルト含む、全体にマンガン)

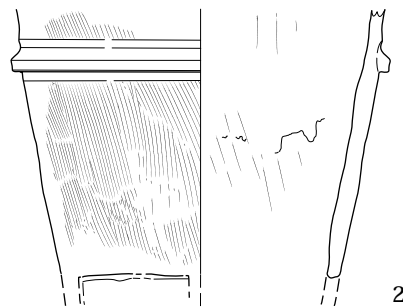
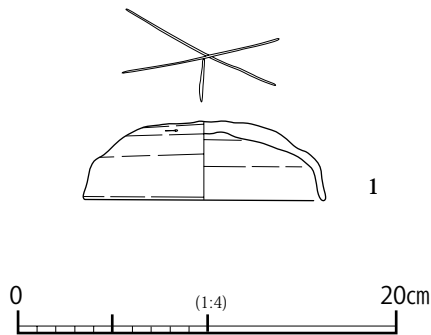
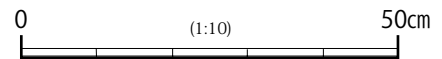


図47 08 - 1 - 1区 1～2溝、5・6ピット 断面、2溝・3落込 出土遺物

な遺物はみつからなかった。埋土からは布留式期の土師器細片が出土し、須恵器はみられない。

**7土坑**は1土坑の北側、調査区境に位置するため、遺構の北側が調査区外に及ぶ。検出した平面はやや不定形を呈し、東西約2.25m、南北約1.25m、深さ約28cmを測る(図49、図版37)。第3層が遺構上面を覆うことから土壌化以前に埋没したことは明らかであり、本調査区において検出した遺構の中でも古い様相を示す。遺構内部、埋土の中位付近から、遺物がまとまって出土している。遺物は、土師器の壺・甕(有孔含む)・高杯・器台が出土した(図49、図版71)。1は小型丸底壺、2は平底鉢、3は小型器台の脚部、4は杯部に稜を持つ高杯、5・6は甕、7は広口壺である。一括性が極めて高く、庄内期前半の土器である。

**5土坑**と**6土坑**は、調査区の南西部に検出し、埋土が上部を覆う第3層に酷似する。**9ピット**は、調査区の北西部に検出し、埋土が第3層と下層である第4層とのブロック土である(図50、図版37)。深さ50cmから60cmを測り、遺構としては安定するものの、いずれからも遺物が出土しなかった。

08-1-3区では、工事手法上拡張した北端にのみ遺構面を確認した。標高はT.P.+3.1m付近を測り、遺構としては落込み・耕作痕を検出した(図47)。遺物の出土はみられないものの、08-1-2区等と同時期と考える。

本遺構面を覆う第3層は、基盤の第4層が土壌化したものであり、調査区のほぼ全域において一様に確認できる。層厚は5cmから10cmを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。ただし、08-1-2区の南西半の

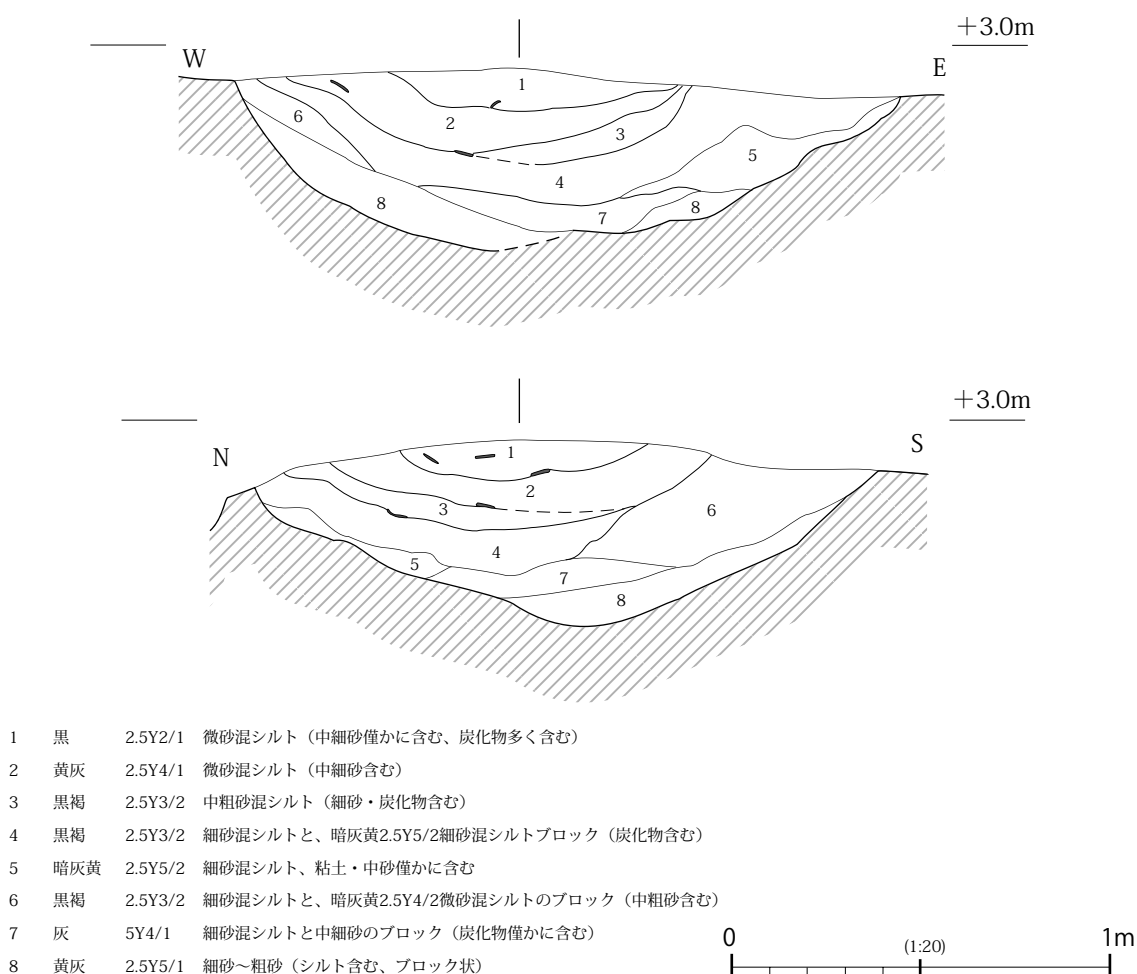


図48 08-1-2区 1土坑 断面



- |               |                          |     |
|---------------|--------------------------|-----|
| 1 暗灰黄 2.5Y4/2 | 中粗砂混シルト (斑鉄有)            | 第2層 |
| 2 暗灰黄 2.5Y5/2 | シルト (中粗砂・炭化物僅かに含む、斑鉄有)   | 第3層 |
| 3 黄灰 2.5Y4/1  | 細砂混シルト (中砂含む、斑鉄有)        |     |
| 4 黒褐 10YR3/1  | 中粗砂混シルト (細砂・炭化物含む)       |     |
| 5 黄灰 2.5Y5/1  | 細砂~中砂 (シルト含む)            |     |
| 6 灰 5Y4/1     | 細砂混粘土シルト (炭化物含む、マンガ・斑鉄有) |     |

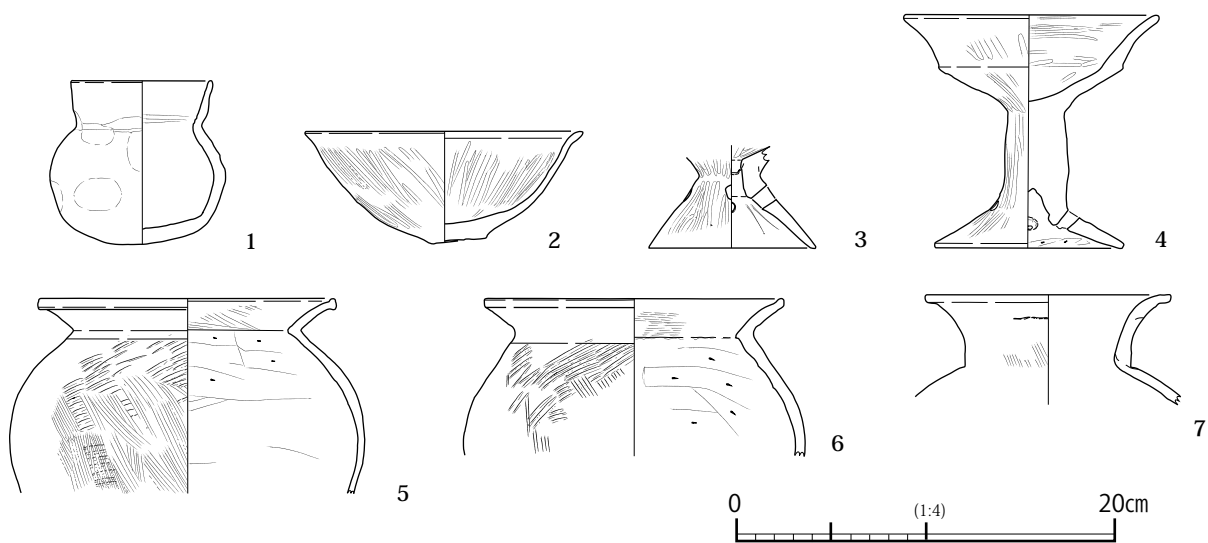
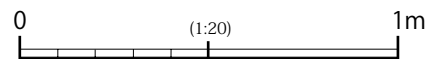


図49 08 - 1 - 2区 7土坑 遺物出土状況・断面・出土遺物



み、上層からの削平が著しく、遺構面の残存状態が不良である。層内から、土師器甕・高杯、須恵器・杯身・器台甕が出土した（図50、図版72）。1・2はミニチュア土器であり、3は口縁端部を丸く収めた土師器甕、4は円形透かしを穿つ円筒埴輪片である。先述の円筒埴輪と同様、一次調整のみであり、低平なタガを巡らす。タガの下方に円形の透かし孔を穿つ。

### 11. 第1面（中世以降）

第1面は、第1層と第2層を除去した08-1-1・2区において検出した。ただし、08-1-2区の

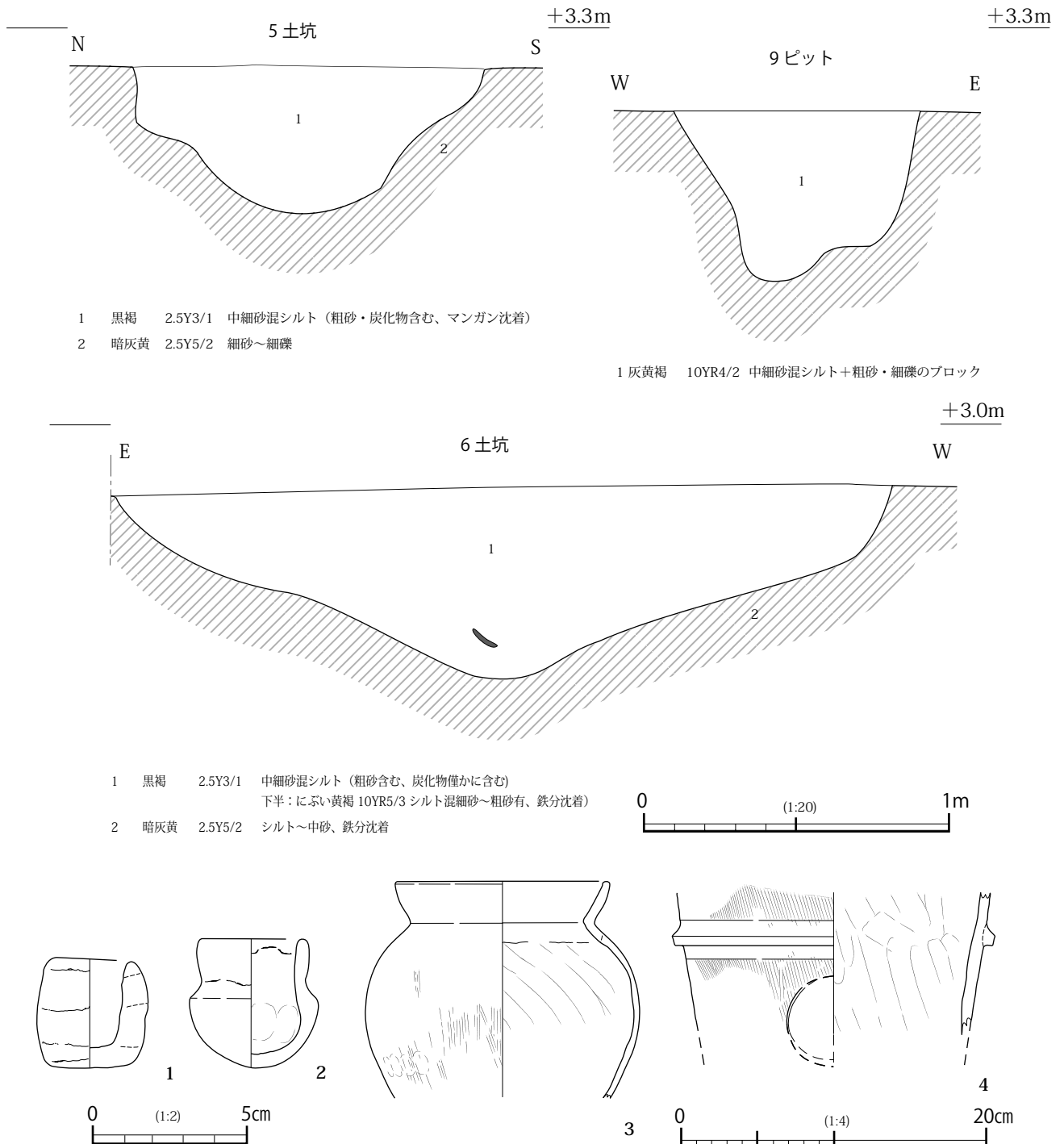


図50 08-1-2区 5・6土坑、9ピット 断面、第3層出土遺物

南半は上層の攪乱により、遺構面がほとんど削平されていた。いずれの調査区も、標高がT.P.+3.25m付近のほぼ平坦な地形を呈し、遺構は東西方向の耕作痕を検出したのみである(図51、図版38)。耕作痕の大半は幅30cm前後、深さ約5cmを測り、第2層を埋土とする。08-1-1区や既知の耕作痕は、いずれもほぼ一定の間隔に配されることから、畝の畝間溝である可能性が高い。遺構からの出土遺物はみられないものの、第2層より龍泉窯系青磁碗の破片が出土した(図51、図版72)。

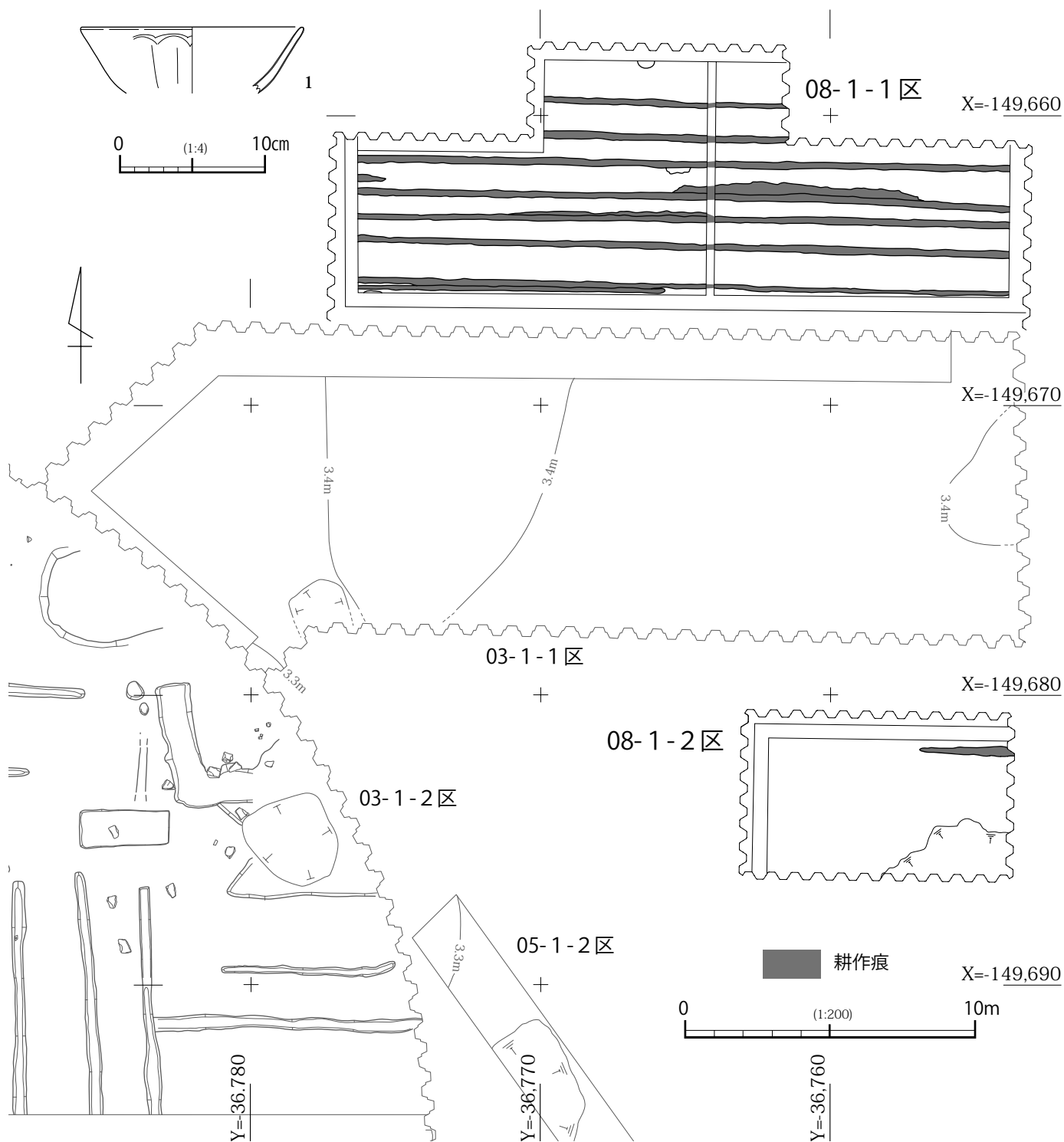


図51 第1面 遺構平面、第1層出土遺物

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 はじめに

山賀遺跡では、過去の調査において総合的な自然科学分析が実施されており、すでに詳細な報告がなされている。今回の調査は範囲が狭小で期間も短いため、特徴的な事項を抽出し、本報告書において直接活用できる内容に限定した。実施した分析の目的と概要について、以下に簡単に記す。

#### 1. 石材鑑定

第9面では石器製作址と思われる遺構がみつき、600点近い石器や剥片が出土した。また、遺構面や包含層からも多数の石質遺物が出土している。これらの石材を鑑定することにより、石質遺物の用途や産地を考える重要な手掛かりを得ることを目的とした。石器や剥片に使用されるサヌカイトは二上山系の良質なものであり、巨礫類は生駒山系の花崗岩等を川原石から収集してきたものであることがわかった。

#### 2. 放射性炭素同位体年代測定

第10面において検出した25建物は、複数の床面らしきものや柱根を検出したが、部分的で出土遺物も少ないため、不明な点が多かった。床面の炭化物と柱根の年代測定を行うことにより、B.C.300後半頃の遺構であることが判明した。I様式の土器に付着したコゲの年代値が近似することも注目される。一方、方形周溝墓の可能性のある第6面の18溝では、出土した炭化米からB.C.100後半頃に開口していたことがわかり、遺構を考える上での手掛かりが得られた。

#### 3. 大型植物遺体同定

第10面の25建物の床面では複数の炭層を検出し、内容物の同定分析により、多数の種子や炭化米・炭化材、動物遺体が混入することがわかった。これらの炭層が人為的なものであることがわかり、周辺土壌との関連から、当時の植生環境を知る重要な手掛かりともなった。

#### 4. 動物遺体同定

第11面から第9面にかけて、25建物や10・12溝等から多くの動物遺体（骨）が出土した。25建物内の資料の鑑定により、当時の食生活あるいは祭祀に関わる所見が得られた。また、当時はシカやイノシシが入手し易く、ナマズ等の魚類が収穫可能な自然環境にあったこともわかった。

#### 5. 樹種鑑定

各遺構面や包含層、遺構した出土した木質遺物の樹種を鑑定した。概して、暖帯の森林に生育する樹木であり、既往の微化石分析において考察された植生分布にみる近隣に繁茂していた森林地帯から調達されたものと考えられる。

## 第2節 山賀遺跡出土石器・剥片の石材

### 1. はじめに

平成20年12月から平成21年3月にかけて実施した山賀遺跡の発掘調査では、石製遺物の石器や剥片が多数出土した。これらの総点数は800点近くに達し、そのほとんどは弥生時代前期から中期の包含層や遺構から出土したものである。石器の種類としては石鎌・楔形石器（剥片）・石庖丁が多く、石錐・石棒・石剣・磨製石斧等がわずかにみられる。石器製作過程に産出された剥片は、出土点数の4分の3以上を占める。特に製作址と考えられる遺構からは、今回の調査において出土した剥片総数のうちの90%以上が出土する。これらの石器・剥片の石材を鑑定することにより、詳細な分類と産地の推定を行うものである。

### 2. 分析の方法

石器や剥片の石材に関する岩石学的検討は、主として肉眼（ルーペ観察を含む）と実体双眼顕微鏡による鉱物組成と組織の観察を基に岩石種同定を行った。時間的な制約の関係から、石材がサヌカイト質岩石以外のものを抽出し、この27点について詳細な検討を行った。サヌカイト質岩石を石材とする資料については、『久宝寺遺跡出土サヌカイト質石器・剥片の石材』（2007）における分類を基に、観察と分類を行った。

### 3. 分析結果について

岩石種同定を行った資料と結果の一覧については、表2に示すとおりである。資料と岩石の詳細については、各項目を参照されたい。

また、サヌカイト質岩石を使用する石器・剥片については、山賀遺跡出土資料を概観する限り、総じて良質なものが多いと感じられた。比較資料とした久宝寺遺跡の出土資料に比べ、斑晶の確認できないものが殆どである。観察できても微結晶のものばかりで、数も圧倒的に少ない。『久宝寺遺跡出土サヌカイト質石器・剥片の石材』（2007）の分類に照らし合わせると、サヌカイトAグループに属するものが多くを占め、Bグループが混じる構成と考えられる。産地としては二上山地域と考えてほぼ間違いなく、観察によると、川原石から採取したと思われる資料もあり、柔軟に石材を確保した様子がうかがえる。

### 参考文献

富田克敏 2007 「久宝寺遺跡出土サヌカイト質石器・剥片の石材—弥生時代前期及び中期遺構面出土石器・剥片の岩石学的検討—」『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ—分析・考察・付表編—』、（財）大阪府文化財センター、p89—112.

表2 - 1 石材鑑定分析資料の一覧および分析結果

鑑定 No.	遺物 No.	調査 区	登録 No.	地区割	遺構面	遺構名	層名	出土年月日	器形 状況	長軸	短軸
1	写51-a	2	86	8L-6i	10	石1—	—	20090305	置石?	(21.7)	(15.0)
2	写44-d	2	88	8L-6i	(11)	石2—	13	20090305	置石?	(14.2)	(13.55)
3	写44-c	2	87	8L-6i	(11)	石1—	13	20090305	置石?	(20.6)	(14.3)
4	写44-b	2	89	8L-6i	(11)	石3—	13	20090305	置石?	(18.35)	(14.4)
5	写58-b	2	58	8L-6i	9	石2—	—	20090228	置石?	(16.6)	(15.6)
6	写58-c	2	57	8L-6i	9	石1—	—	20090228	置石?	(16.3)	(15.6)
7	写58-d	2	59	8L-6i	9	石3—	—	20090228	置石?	(45.2)	(26.3)
8	写70-a	1	17	8L-8g	2	1溝	—	20081225	台石?	(16.0)	(13.2)
9	写44-a	2	75	8L-6i	—	—	13	20090304	鋳型? 砥石?	(11.1)	(5.7)
10	写43-c	2	75	8L-6i	—	—	13	20090304	砥石	(15.3)	(7.8)
11	15-5	2	83	8L-6i	—	—	13	20090305	石棒	(9.6)	(3.8)
12	22-16	2	51	8L-6・7i	—	—	12	20090223	石棒	(5.5)	(2.8)
13	写49-a	2	64	8L-6i	10	26土坑	—	20090302	自然石	(2.8)	(1.4)
14	写56-b	2	46	⑥ 8L-6i	—	—	11	20090219	自然石	(6.5)	(5.6)
15	27-6	2	46	⑥ 8L-6i	—	—	11	20090219	磨製石斧	(7.4)	(5.6)
16	27-7	2	44	① 8L-6・7i	—	—	11	20090219	敲打具?	(4.0)	(2.1)
17	27-5	2	44	③ 8L-6・7i	—	—	11	20090219	石庖丁	(3.8)	(2.7)
18	写62-a	2	28	8L-7i	6	17流路	—	20090204	石庖丁?	(15.9)	(8.7)
19	15-4	3	34	8M-6a	—	—	13(黒)	20090312	石庖丁?	(4.4)	(3.0)
20	—	3	20	8M-7a	6	8流路	—	20090303	自然石?		
21	—	3	20	8M-7a	6	8流路	—	20090303	自然石		
22	—	3	20	8M-7a	6	8流路	—	20090303	自然石		
23	37-5	3	21	8M-7a	6	8流路	—	20090303	石庖丁	(3.8)	(2.9)
24	37-6	3	18	8L-7j,8j	6	8流路	—	20090303	石庖丁	(4.5)	(4.2)
25	37-4	3	19	8L-7j,8j	6	8流路	—	20090303	砥石	(5.6)	(3.3)
26	写69-a	3	10	8L-7j	—	—	6	20090219	砥石	(5.8)	(4.25)
27	27-8	2	60	⑩ 8L-6i	9	24石器集中部	—	20090302	ハンマー	(6.25)	(5.25)

表2 - 2 石材鑑定分析資料の一覧および分析結果

厚	残存率	重量 (g)	外面調整	材質	自然的特徴	人為的特徴
(13.0)	100	6.5 (kg)	煤付着、磨耗痕、破断?	含ざくろ石、黒雲母片麻岩	生駒山系～	被熱温度は低い (高いと雲母が痛む)
(9.65)	—	2,940		細粒白雲母・黒雲母花崗岩	平坦部は石の摂理面	
(7.35)	—	2,450		粗粒黒雲母片麻岩		
(10.4)	100	4,270	弱い煤付着	縞状中粒黒雲母花崗岩	河床の巨礫	
(11.2)	100	3,250	煤付着	片麻岩黒雲母		河原石を割ったもの
(13.6)	100?	5 (kg)	剥離	中粒黒雲母花崗岩		河原石を割ったもの
(16.5)	100?	18.5 (kg)		少し縞状 粗粒黒雲母花崗岩	巨礫	人為の痕はみられないが、自然では運ばれない大きさ
(6.2)	100?	2,020	磨耗痕	細粒黒雲母花崗岩		
(5.2)	—	180.6	被熱痕、煤付着	シルト質砂岩 セリサイト (金雲母) 含む		被熱温度は高くないが、長時間か?
(5.5)	100?	767.5	平坦・溝状研磨痕	シルト質砂岩 セリサイト (上記No.9 : 写44 - a より、量が少ない)		
(3.0)	<20	162.8		細粒黒雲母片麻岩		
(1.1)	<20	32.5	擦痕、研磨痕	スレート	変成を受けている粘板岩	
(1.0)	—	3.8		玉髓またはメノウ	少し粒子が粗い	
(3.6)	—	159.5		角閃石閃緑岩		
(2.4)	30	154.8	敲打痕	砂質ホルンフェルス	砂岩の熱変成	敲打中に折損?、二次利用?
(2.8)	100	42.0	敲打痕	石英閃緑岩	被熱無く、風化	細かな作業に使用?
(0.8)	<20	10.8	穿孔	結晶片岩 緑泥石片岩		
(1.15)	50?	172.6	擦痕、剥離	緑泥石片岩		
(0.5)	<20	8.8		緑泥石石英片岩		
	—	56.9	煤付着	黒雲母花崗岩	変成 (黒雲母)	被熱による
	—	8.8		赤色チャート		
	—	13.8		火砕粒		
(0.45)	<20	6.1		緑泥石石英片岩		
(0.55)	<20	12.5	穿孔	緑泥石石英片岩		
(2.4)	100?	11.8	穿孔状研磨痕	軽石		玉類の仕上げ用?
(3.2)	100?	16.1	研磨痕	軽石		
(2.4)	100?	178.5	敲打痕	サヌカイト (良質)		弱い敲打に使用

## 第3節 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

山賀遺跡は大阪府八尾市新家町5丁目に位置し、遺跡の時期は弥生時代前期から中世である。山賀遺跡出土試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表3のとおりである。

08-1-2区の第6面（弥生時代中期）からは墳丘墓の一部の可能性がある溝が検出され、溝内より炭化種実が採取された。溝内出土の炭化種実破片6点を測定試料とした（PLD-13113）。

同じ08-1-2区の第10面（弥生時代中期前半）からは25建物が検出され、3面の床面が確認された（床1～3）。床面と床面との時期差を確認するために、床1出土炭化材（PLD-13110）と床3出土炭化材（PLD-13111）を測定試料とした。炭化材はいずれも破片であり、最外年輪が確認できなかった。しかし、形状の観察からそれほど年輪数の多くない枝状の材と考えられたため、樹皮に近い部位と判断した。その他、25建物に伴うと思われるものの属する床面が不明の柱根について、時期を確認するために最外年輪を採取し測定試料とした（PLD-13112）。

08-1-3区の第13-1層より畿内I様式の甕が出土し、胴部外面に付着する炭化物を測定試料とした（PLD-13114）。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 3. 結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図52に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はA.D.1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲

表3 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-13110	調査区：08-1-2区 グリッド：8L-6i 遺構面：第10面 遺構：25建物 層位：床1	試料の種類：炭化材 試料の性状： 最外年輪以外で樹皮に近い部分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス
PLD-13111	調査区：08-1-2区 グリッド：8L-6i 遺構面：第10面 遺構：25建物 層位：床3	試料の種類：炭化材 試料の性状： 最外年輪以外で樹皮に近い部分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス
PLD-13112	調査区：08-1-2区 グリッド：8L-6i 遺構面：第10面 遺構：25建物 登録番号：102	試料の種類：生材（柱根,丸木） 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス
PLD-13113	調査区：08-1-2区 グリッド：8L-6i,8L-7i 遺構面：第6面 遺構：18溝(方形周溝墓?) 登録番号：25,27	試料の種類：炭化種実（6片） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス
PLD-13114	調査区：08-1-3区 グリッド：8M-6a 層位：第13-1層（黒） 登録番号：34 出土年月日：090312	試料の種類：土器附着炭化物 器種：甕 部位：胴部外面 その他：畿内第Ⅰ様式 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N） サルフィックス

表4 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-13110	-26.77 $\pm$ 0.16	2375 $\pm$ 21	2375 $\pm$ 20	502BC (1.3%) 500BC 487BC (20.4%) 461BC 451BC (6.6%) 440BC 418BC (39.9%) 396BC	511BC (95.4%) 394BC
PLD-13111	-28.78 $\pm$ 0.17	2303 $\pm$ 20	2305 $\pm$ 20	399BC (68.2%) 382BC	405BC (93.1%) 361BC 271BC (2.3%) 261BC
PLD-13112	-32.13 $\pm$ 0.14	2267 $\pm$ 21	2265 $\pm$ 20	392BC (50.8%) 359BC 276BC (17.4%) 259BC	396BC (54.6%) 353BC 293BC (40.3%) 230BC 217BC (0.5%) 215BC
PLD-13113	-26.22 $\pm$ 0.13	2121 $\pm$ 20	2120 $\pm$ 20	195BC (41.1%) 147BC 142BC (27.1%) 111BC	203BC (90.1%) 88BC 78BC (5.3%) 56BC
PLD-13114	-18.05 $\pm$ 0.23	2286 $\pm$ 20	2285 $\pm$ 20	396BC (68.2%) 366BC	401BC (79.7%) 357BC 284BC (12.9%) 256BC 246BC (2.8%) 235BC



は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

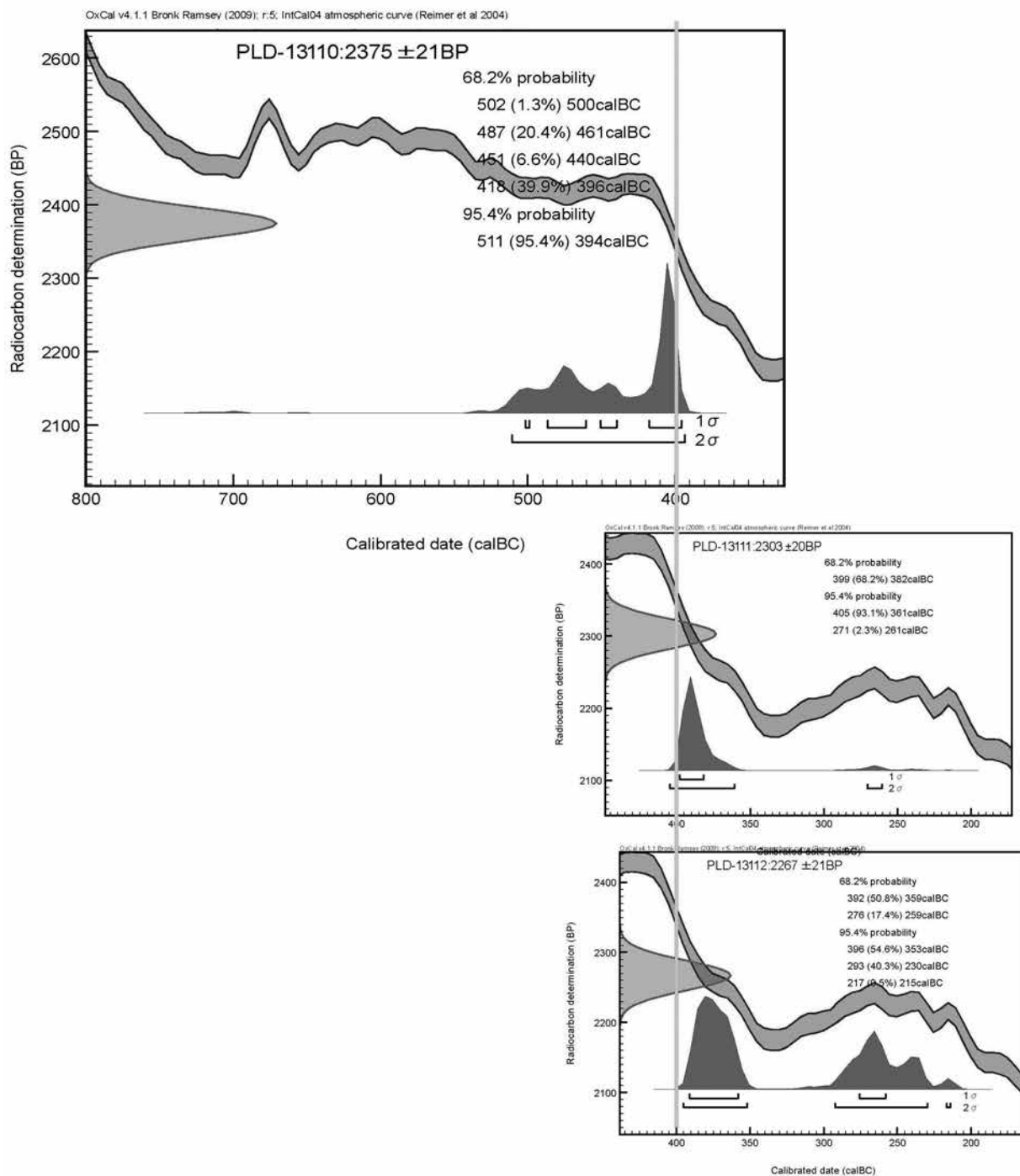


図52 各試料の暦年代較正曲線

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。以下、2の暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

08-1-2区第6面の18溝（方形周溝墓？）出土の炭化種実（PLD-13113）は、203-88calBC（90.1%）および78-56calBC（5.3%）の範囲を示した。

08-1-2区の第10面で検出された25建物の床1出土炭化材（PLD-13110）は、511-394calBC（95.4%）、床3出土炭化材（PLD-13111）は、405-361calBC（93.1%）および271-261calBC（2.3%）の範囲を示した。床1出土炭化材の暦年代範囲は、下位の床3出土炭化材に比べ古い傾向を示しており、床1出土炭化材は古材が利用された可能性がある。ただし、床1出土炭化材の14C年代が暦年較正曲線の比較的平坦な箇所にかかるために、暦年代範囲が古く表現されている可能性があること（図1）、なおかつ、床1と床3の炭化材22点の暦年代範囲が重複していることから、床1と床3の炭化材は同時期という可能性もある。したがって、これらの結果からは、床1と床3の炭化材に時期差があったと断定できない。その他、25建物の柱根（PLD-13112）は396-353calBC（54.6%）、293-230calBC（40.3%）、217-215calBC（0.5%）の範囲を示した。柱根の暦年代範囲は床3の炭化材と重複しており、25建物の建築材だったと言える。

08-1-3区の第13-1層から出土した畿内I様式の甕胴部外面に付着する炭化物（PLD-13114）は、401-357calBC（79.7%）、284-256calBC（12.9%）、246-235calBC（2.8%）の範囲を示した。

#### 参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代. 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

## 第4節 山賀遺跡の大型植物遺体同定分析

### 1. はじめに

今回の山賀遺跡の発掘調査区では、弥生時代前期～中期にかけて形成された氾濫堆積物中の土壌化層準において、弥生時代中期前段階の建物址の可能性のある遺構（25建物）が検出されている。この遺構埋土断面では3層準において炭層が検出されている。本分析調査では、埋土中の各炭層について大型植物遺体同定分析を実施し、当時の植物資源の利用状況に関する情報を得る。

### 2. 試料

試料は、08-1-2区25建物の床1東側炭層、床1西側炭層、床2炭層、床3炭層の4点である。炭層の層位関係は、上位より床1炭層、床2炭層、床3炭層である。これらの炭層は、いずれも著しく擾乱された砂質泥～泥質砂の上面で検出されており、現地性の高い炭層と判断される。

各試料は、粒径別に水洗分類された複数点が存在し、乾燥した状態や水分が多い状態が確認される。具体的には、床1東側炭層と床1西側炭層は各2点（3mm・2mm・2mm以下炭化物）、床2炭層は4点（3mm・2mm・砂サンプル・2mm以下炭化物）、床3炭層は3点（3mm・2mm・2mm以下炭化物）が存在し、3mm・2mm・砂サンプルは乾燥した状態で、2mm以下炭化物は水分が多い状態である。

### 3. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、大型植物遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間には、ハイフォンで結んで表示する。床1東側炭層と床1西側炭層の2mm以下炭化物は、イネの類が多量確認されたため、試料1ccを抽出対象とし、残5ccをイネの類以外の抽出にとどめる。試料中に確認された木材・不明炭化物は、抽出・プラス表示にとどめる。炭化材・残渣は、乾燥試料は重量（g）を、湿潤試料は容量（cc）を表示する。分析後は、大型植物遺体を種類毎に容器に入れて保管する。水分が多い試料は、70%程度のエタノール溶液で液浸する。

### 4. 結果

#### （1）各床面炭層における産状

各床面炭層における大型植物遺体の産状を表5に示す。裸子植物2分類群（針葉樹のモミ属、クロマツ）の葉2個、被子植物15分類群（広葉樹6分類群（ハンノキ属、マタタビ属、キイチゴ属、サンショウ、サンショウ属、ブドウ属）13個、草本9分類群（イネ、ヒエ近似種、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、イノコズチ属、キケマン属、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属（以下キジムシロ類）、ナス科）1114個）の種実1127個、不明種実2個が検出された他に、木の芽、木材、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、部位・種類共に不明の炭化物）、動物遺存体が確認された。

栽培種は、イネの類と胚乳、栽培種の可能性があるヒエ近似種が確認された。特に、炭化したイネの類が多量検出され、全体の87%を占める。以下に、各床面炭層における産状を記す。

表5 各床面炭層における大型植物遺体の産状

分類群	部位	状態	08 - 1 - 2 区				備考		
			25 建 物 址						
			床1 東側 炭層	床1 西側 炭層	床2 炭層	床3 炭層			
木本									
モミ属	葉	破片	先端部	炭化			1		
クロマツ	葉	破片		炭化			1		
ハンノキ属	果序	破片		炭化			1		
マタタビ属	種子	破片					2		
キイチゴ属	核	完形					1		
		破片					1		
サンショウ	種子	完形		炭化			1		
サンショウ属	種子	破片		炭化	1		3	1	
ブドウ属	種子	完形		炭化			1	1	
木の芽				炭化			1		
木材								+	
炭化材				炭化	1.54g +3.5cc	1.49g +3cc	10.67g	8.86g	
草本									
イネ	穎	破片	基部	炭化	500*	300*	64	85	
		破片		炭化	22*	1*	1	5	
	穎・胚乳	完形		炭化				1	
	胚乳	完形		炭化	8	1	8	9	
		破片		炭化	19	10	9	23	
	胚乳?	破片		炭化	8	5		13	
ヒエ近似種	穎・胚乳	完形		炭化	1				
	胚乳	完形		炭化	1				
イネ科	胚乳	完形		炭化		1		3	
カヤツリグサ科A	果実	完形		炭化			4		コウボウシバ近似種
カヤツリグサ科B	果実	完形		炭化				2	コウボウムギ近似種
		破片		炭化				1	
カヤツリグサ科	果実	完形		炭化			1		
		破片		炭化	2				
タデ属	果実	破片		炭化?	2				
イノコズチ属	果実	完形					1		
キケマン属	種子	完形		炭化		1			
キジムシロ類*	核	完形		炭化	1				
ナス科	種子	完形					1		
不明種実		完形		炭化			2		
不明炭化物				炭化	+	+	+	+	
動物遺存体					2		15	169	
				残渣	66.39g +6cc	76.86g +6cc	2188.15g +25cc	1268.44g +20cc	

注) \*キジムシロ類：キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

注) \*イネの穎は、多量確認されたため、試料6ccのうち1ccからの抽出にとどめている。

注) 木材・不明炭化物は、抽出・プラス表示にとどめている。

注) 炭化材・残渣は、乾燥試料は重量(g)を、湿潤試料は容量(cc)を表示する。

・床1 東側炭層

木本は、炭化材が1.54 g + 3.5 cc程度に確認されるのみであった。草本は、イネの穎多量（522個以上）、胚乳27個、胚乳？8個、ヒエ近似種の穎・胚乳1個、胚乳1個、カヤツリグサ科の果実2個、タデ属の果実2個、キジムシロ類の核1個が検出され、炭化している（ただし、タデ属は黒く硬い果皮をもつため、炭化の厳密な判断は困難である）。その他に、最大径4.5 mm程度の動物遺存体2個が確認された。

・床1 西側炭層

木本は、炭化したサンショウ属の種子1個が検出された他に、炭化材1.49 g + 3 cc程度が確認された。草本は、イネの穎多量（301個以上）、胚乳11個、胚乳？5個、イネ科の胚乳1個、キケマン属の種子

1個が検出され、炭化している。

・床2炭層

木本は、モミ属、クロマツの炭化した針葉各1個、ハンノキ属の果序1個、キイチゴ属の核1個、サンショウ属の種子3個が検出された他に、木の芽1個、炭化材10.67g程度が確認され、キイチゴ属以外は炭化している。草本は、イネの穎65個、胚乳17個、カヤツリグサ科（コウボウシバ近似種）の果実4個、カヤツリグサ科の果実1個、イノコズチ属の果実1個、ナス科の種子1個が検出され、イノコズチ属、ナス科以外は炭化している。その他に、炭化した不明種実2個、最大径7mm程度の動物遺存体15個が確認された。

・床3炭層

木本は、マタタビ属の種子2個、キイチゴ属の核2個、サンショウの種子1個、サンショウ属の種子1個、ブドウ属の種子1個が検出された他に、炭化材8.86g程度、木材が確認され、マタタビ属、キイチゴ属、木材以外は炭化している。草本は、イネの穎90個、穎・胚乳1個、胚乳32個、イネ科の胚乳3個、カヤツリグサ科（コウボウムギ近似種）の果実3個が検出され、炭化している。その他に、最大径12mm程度の動物遺存体169個が確認された。

（2）大型植物遺体の記載

<木本>

・モミ属（*Abies*） マツ科

葉の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ0.8～2cm程度、最大幅は先端部近くで2mm程度の線形で扁平。先端部は鈍頭または凹頭。基部はねじれるように楔形に細まり、葉痕（茎に接着する部分）は吸盤状。破片は先端部が確認され、長さ2.2mm、幅1.8mm程度。葉表面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面の溝の両側に白色の気孔帯が配列する。

・クロマツ（*Pinus thunbergii* Parlatores） マツ科マツ属複維管束亜属

針葉の破片が検出された。炭化しており黒色。破片は長さ5mm、径1mm程度の針形で、横断面は半円形。中心部に2個の維管束があり、4～10個程度の樹脂道が葉肉内に点在する。

・ハンノキ属（*Alnus*） カバノキ科

果序の破片が検出された。炭化しており黒色、木質。完形ならば長さ1.2～1.6cm、径1cm程度の卵状楕円体で、果鱗が螺旋状に配列する。破片は基部を欠損し、径2mm程度。果鱗は、長さ1mm、幅0.7mm程度の扇形で、基部はやや薄く楔形、頂部はやや厚く反りかえるように突出し、3～5つに分かれて開く。背面に深い縦溝が目立つ。

・マタタビ属（*Actinidia*） マタタビ科

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば長さ1.8～2.5mm、幅1～1.8mm程度の両凸レンズ状楕円体で、基部は斜切形でやや突出する。破片は大ききさ1.3mm程度。種皮は硬く、表面には円・楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

・キイチゴ属（*Rubus*） バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、長さ1～1.5mm、幅0.8mm、厚さ0.5mm程度の扁平な半円～三日月状半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・サンショウ（*Zanthoxylum piperitum* DC.） ミカン科サンショウ属

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ2.9mm、幅2mm、厚さ1.5mm程度のやや扁平な倒卵体。

腹面正中線上基部に斜切形の臍がある。内果皮は硬く、表面には浅く細かな網目模様がみられるが、磨耗しており不明瞭。なお、臍を欠損する破片をサンショウ属としている。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ3.2mm、径3.5mm程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部は細く嘴状に尖る核嘴がある。背面は、正中線上の頂部から長さ0.5mm程度の部分に灰褐色、長さ1.3mm、幅0.7mm程度の卵形の合点があり、細い溝に囲まれる。腹面は正中線上に(鈍)稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各1個の長さ1.2mm、幅0.4mm程度の倒皮針形で深く窪む核窪がある。種皮は薄く硬く、断面は柵状。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎の破片が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4~5.5mm、幅2.5~3.5mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が縦列する。表面に穎が付着する個体もみられる(床3炭層)。

胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6~7.5mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。破片は主に基部の果実序柄が確認される個体を抽出し、大きさ1~2mm程度。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

胚乳と穎(果)が付着した胚乳が確認された。炭化しており黒色、穎が付着した胚乳は長さ2mm、幅1.2mm、厚さ1mm程度、胚乳は長さ1.3mm、幅1mm、厚さ0.5mm程度の狭卵~半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの3分の2以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面またはやや平滑。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳が確認された。ヒエ近似種よりも細身で小型の胚乳をイネ科としている。胚乳は炭化しており黒色、長さ1~1.2mm、径0.6~0.8mm程度の広卵-楕円体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が確認された。炭化しており黒色。形態が異なる複数種のうち、特徴的な2分類群をA、Bとしている。

・カヤツリグサ科A：コウボウシバ近似種 (*Carex* cf. *pumila* Thunb.) スゲ属

果実は、長さ3.5mm、径1.9mm程度の三稜状狭倒卵体、頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面に微細な網目模様がある。

・カヤツリグサ科B：コウボウムギ近似種 (*Carex* cf. *kobomugi* Ohwi) スゲ属

果実は、長さ5.2mm、径2mm程度の鈍三稜状長楕円体、両端は切形で断面は三角形。果皮表面に微細な網目模様がある。

・その他のカヤツリグサ科

果実は、長さ1.5 mm、径1.2 mm程度のレンズ状広倒卵体、頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は粗面 - 微細な網目模様がある。

・タデ属 (Polygonum) タデ科

果実の破片が検出された。黒色、完形ならば長さ2.5 - 3 mm、径2 mm程度の背面正中線上に鈍稜のある広卵体。頂部は尖り、花柱を欠損する。表面には明瞭な網目模様がある。破片は長さ1.8 mm、幅1.5 mm程度。

・イノコズチ属 (Achyranthes) ヒユ科

果実と花被が検出された。黒褐色の果実を包む花被は、淡褐色、長さ4 mm、径1.2 mm程度の皮針状円柱体。基部の両側から針状の小苞が伸び、先端は外側にやや曲がる。表面には縦線条がある。

・キケマン属 (Corydalis) ケシ科

種子が検出された。炭化しており黒色、径1.7 mm程度の両凸レンズ状腎状円形。基部は切形でやや突出し、長方形の臍がある。種皮表面は平滑で光沢が強く、微細な縦長の網目模様が臍を取り囲むように同心円状に配列するが、磨耗しており不明瞭。

・キジムシロ属 - ヘビイチゴ属 - オランダイチゴ属 (Potentilla - Duchesnea - Fragaria) バラ科

核 (内果皮) が検出された。炭化しており黒色、径1 mm程度のやや偏平な腎形。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・ナス科 (Solanaceae)

種子が検出された。淡灰褐色、径1.5 mm程度の偏平で歪な腎臓形。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する。

## 5. 考察

今回調査を行った3層準の炭層は、堆積層の層相から判断して、各面機能時に人為的に形成された炭層である可能性が高い。各炭層から産出した大型植物化石は、ほとんどが炭化しており、炭化した材片や木の芽のほか、動物遺存体なども産出することを合わせ考えると、生活残滓や燃料材として利用されたものの残滓であることが示唆される。

各炭層の産出分類群の構成をみると、草本類は各炭層で概ね類似し、炭化した栽培種のイネの穎を主体とする。このほか炭化した栽培種の可能性があるヒエ近似種の穎・胚乳、炭化したイネ科の胚乳、カヤツリグサ科の果実、キケマン属の種子、キジムシロ類の核、非炭化のイノコズチ属の果実、ナス科の種子、炭化の判断が困難なタデ属の果実が産出する。これらの分類群のうち、栽培種以外は、生態性を踏まえると、調査区周辺に普通に生育していたと考えられる種類であり、燃料材や人体に付着するなど何らかの過程を経て遺構内に持ち込まれたものと推定される。また、栽培種のイネとヒエ近似種については当時利用されていた穀類であったことが示唆され、精米後の残滓を燃料として利用していた可能性がある。

一方、木本類の産状は各炭層で多少異なる。床1炭層では、炭化したサンショウ属の種子が産出するが、炭化した木本類由来の遺体は木材以外産出しない。床2炭層では、炭化したモミ属の針葉・クロマツの針葉・ハンノキ属の果序・サンショウの種子が産出し、炭化材片も多い。床3炭層では非炭化および炭化した植物化石が混在しており、非炭化のものとしてマタタビ属の種子・キイチゴ属の核、木材、炭化したものとしてサンショウの種子・サンショウ属の種子・ブドウ属の種子、炭化材が産出する。こ

のように木本類の産状は各炭層で多少異なっているが、その差異が示す要因については不明である。なお、産出分類群のうち針葉樹は、産出部位が葉からなり、焚きつけ材などとして持ち込まれた可能性がある。また、マタタビ属、キイチゴ属、ブドウ属やサンショウは有用植物でもあり、人間が利用したものの残滓に由来する可能性がある。

## 6. まとめ

弥生時代中期前段階の25建物址の3層準の床面炭層について大型植物遺体分析を実施した結果、以下の事項が明らかとなった。

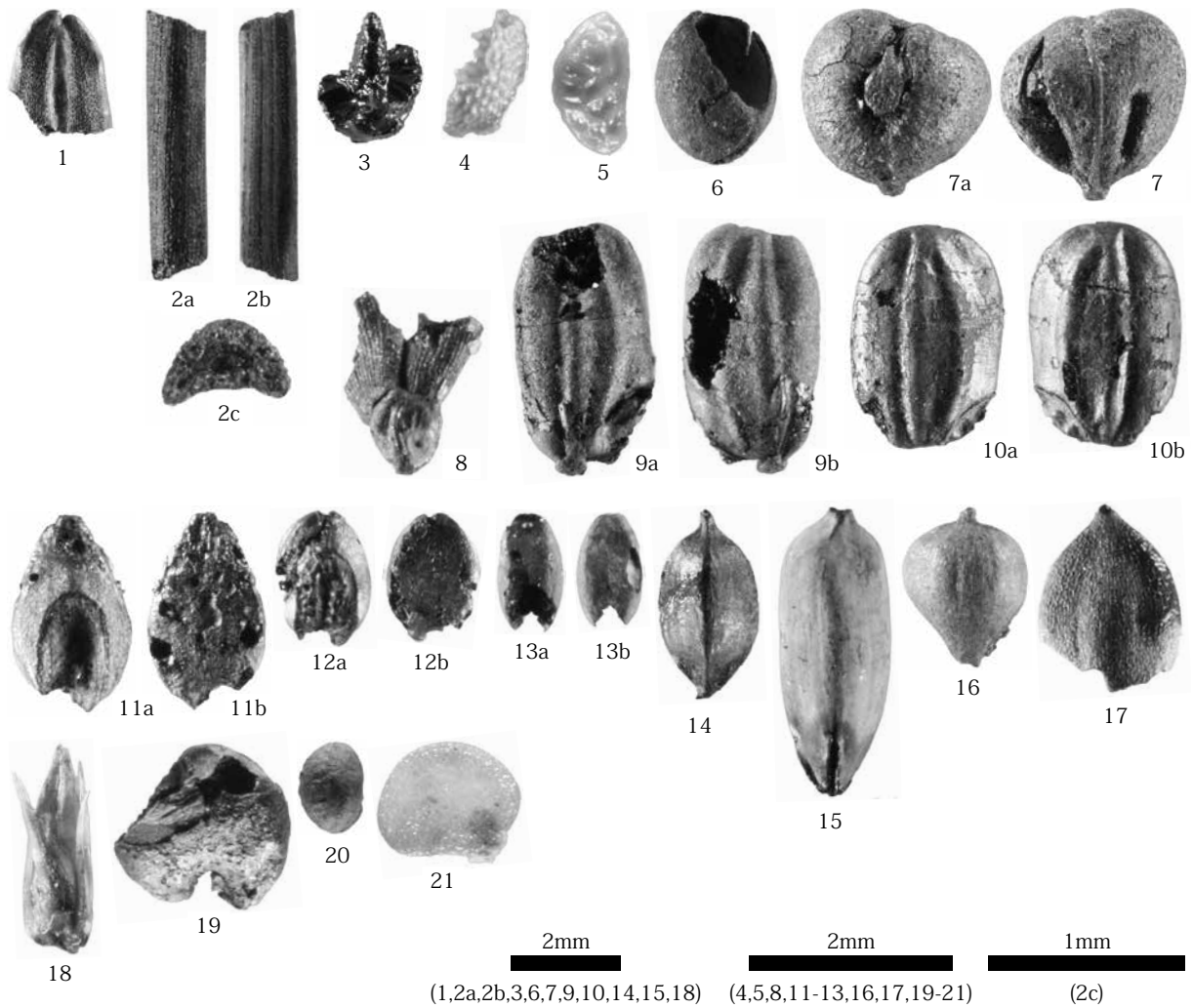
- 1) いずれの炭層も炭化植物遺体が主体をなし、栽培種のイネの穎を主体とする組成を示した。イネの精米作業などによって生じた籾殻などを焚きつけ燃料として利用している可能性が高く、炭層が人為的に形成された炭層であることが示唆される。
- 2) 床2・床3の炭層からは木本由来の植物遺体が産出する。これらは産出部位から燃料材として持ち込まれたものの燃焼後残滓の可能性はある。

## 引用文献

石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会、328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会、642p.





1. モミ属 葉(25豎穴建物跡;床2炭層)
2. クロマツ 葉(25豎穴建物跡;床2炭層)
3. ハンノキ属 果序(25豎穴建物跡;床2炭層)
4. マタタビ属 種子(25豎穴建物跡;床3炭層)
5. キイチゴ属 核(25豎穴建物跡;床3炭層)
6. サンショウ 種子(25豎穴建物跡;床3炭層)
7. ブドウ属 種子(25豎穴建物跡;床3炭層)
8. イネ 穎(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
9. イネ 穎・胚乳(25豎穴建物跡;床3炭層)
10. イネ 胚乳(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
11. ヒエ近似種 穎・胚乳(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
12. ヒエ近似種 胚乳(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
13. イネ科 胚乳(25豎穴建物跡;床3炭層)
14. カヤツリグサ科A 果実(25豎穴建物跡;床2炭層)
15. カヤツリグサ科B 果実(25豎穴建物跡;床3炭層)
16. カヤツリグサ科 果実(25豎穴建物跡;床2炭層)
17. タデ属 果実(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
18. イノコズチ属 果実(25豎穴建物跡;床2炭層)
19. キケマン属 種子(25豎穴建物跡;床1西側炭層)
20. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(25豎穴建物跡;床1東側炭層)
21. ナス科 種子(25豎穴建物跡;床2炭層)

写真2 大型植物遺体

## 第5節 山賀遺跡の動物遺体同定分析

### 1. はじめに

今回の山賀遺跡の発掘調査では、弥生時代前期から中期にかけての遺構や包含層から、多数の動物遺体（歯牙・骨片）が出土している。これらの動物遺体を分析調査することにより、当時の生態環境や動物資源の利用状況に関する情報を得る。

### 2. 試料

試料は、08-1-2区および08-1-3区の遺構や包含層から出土した19グループ（登録番号）・48十数100点である。それらの大半は、08-1-2区25建物と08-1-3区10・12溝から出土したものであり、共伴する土器から、弥生時代前期末から中期前半にかけてのものと考えられる。試料と出土層位・遺構の関係については、表6に示す。

各試料は、現地調査時に掘削土層中より出土したものであるが、特に08-1-3区25建物については、遺構内の埋土（床面）に堆積する炭化物層を水洗した際に出土したものが圧倒的に多い。水洗は、現地にて2mm以上のメッシュを使用して行い、肉眼による抽出を実施したが、後述の大型植物遺体同定分析において多数の骨細片が新たにみつかったことから、現地調査や水洗において見落としした資料も少なくないと想像される。

### 3. 分析方法

試料は、肉眼および双眼実体顕微鏡下等で観察し、必要なものにはノギス等を用いて採寸した。今回の試料には、人為的な加工痕や骨角器の未製品がみられないことから、実測図は作成していない。代わりに、遺物撮影時にスケールを写し込んでおいたので、図版の写真を参照されたい。

### 4. 結果

全体的にイノシシの出土が最も多く、どの時期にも見られる。また、1才未満の幼体から成体まで、年齢層にも幅がある。シカの出土は少ないが、写47-dは特に大きく、オスと推測される。写44-iはフナ属の主鰓蓋骨で、体長15cm程度と推測される。

遺構からみると、25建物内はシカを中心とする哺乳類がまとまって出土するが、魚類・鳥類等も多数みられ、中には被熱を受けて黒変あるいは白変した焼骨が含まれる。ナマズ7点には、体長30cm以上の大型と、体長20cmから30cmの中型、体長20cm以下の小型個体が混在する。シカ・イノシシと魚類が多いことから、おそらく食用であったと思われるが、大型哺乳類は単に食用だけではなく、骨格器や毛皮など、日常生活の必需品だったと思われる。今回の資料の中には、加工品かどうかわからないものが1点みられる。また、解体痕と思われる傷もあり、食用と材用の両方の目的があったと考えられる。溝やその周辺には、イノシシなどの大型哺乳類が多い結果となった。

表6 - 1 動物遺体同定分析資料の一覧および分析結果

遺物No.	登録No.	調査区	地区割	層位/遺構面	遺構名	出土年月日	調査備考	遺構時期
写44 -h・i	34	3	8M-6a	第13-1層（黒）		20090312		弥生前期末
写44 -f	35	3	8M-6a	第13-2層（灰）		20090313		弥生前期末
写40 -a	37	3	8M-6a,7a	第11面	12溝	20090316		弥生前期末
写44 -b・c	43	3	8M-6a	第11面	12溝	20090318	7ㄱ 外し	弥生前期末
写44 -e	50	3	8M-6a	第13層		20090318	7ㄱ 外し (断面・層5内)	弥生前期末
写44 -g	81	2	8L-6i	第13層		20090305		弥生前期末
写47 -d	62	2	8L-6i	第10面	25建物（東）	20090302	床 1	弥生前期末～中期初
写47 -b・c	分析 3	2	8L-6i	第10面	25建物	20090307	床 2	弥生前期末～中期初
写47 -f・e	分析 4	2	8L-6i	第10面	25建物	20090307	床 3	弥生前期末～中期初
写47 -a	72	2	8L-6i	第10面	25建物	20090304	床 3 ㄱ-ㄴ	弥生前期末～中期初
写44 -h・i	29	3	8M-6a,7a	第12層（2）	10溝	20090311	第13層崩落土	弥生中期前
写50 -b~e	31	3	8M-6a,7a	第12層（3）	10溝	20090311	底、植物遺体層	弥生中期前
写50 -f	36	3	8M-6a,7a	第12層（3）	10溝	20090316		弥生中期前
—	48	3	8M-6a	第12層（2）	10溝	20090318	7ㄱ 外し (断面・層9内)	弥生中期前
写55 -a	60	2	8L-6i	第9面	24石器集中部	20090302		弥生中期前
写52 -a	61	2	8L-7i	第9面	20落込	20090302	7ㄱ 外し	弥生中期前
写67 -b	27	2	8L-7i	第8層		20090202		弥生中期中
写68 -b	12	3	8L-7j	第5面	5土坑	20090226		弥生中期後？

表6-2 動物遺体同定分析資料の一覧および分析結果

種名	出土部位		詳細	備考	資料番号 (安部) [丸山]
	左右	部位名			
哺乳類		四肢骨片	2		(34-1) [16]
哺乳類		四肢骨片	1	焼骨、被熱による褐色変化	(34-2) [18]
シカ		角	約2cm遺存	焼骨	(34-3)
イノシシ	右	下顎第1切歯	頰側のエナメル質のみ遺存		(34-4)
フナ属	左	主鰓蓋骨(関節付近)	5		(34-5) [15]
鳥類?		長骨片	1		(34-6) [17]
哺乳類		骨片	1	焼骨	(35)
シカ	左	下顎骨	下顎枝の下顎高より上方が遺存、筋突起の先端破損	関節頭周辺に解体痕あり、大きい	(37)
大型哺乳類 (シカ?)		舌骨	破片1		(43-1)
イノシシ	左	大腿骨	近位端見癒合、遠位部破損、骨頭から約8cm遺存	幼体、近位端(骨端なし) 前後径15.15 横径29.92	(43-2)
大型哺乳類		長骨片	1		(50)
イノシシ	右	下顎第3大白歯	歯冠のみ出土、未萌出	近遠心径 33.51	(81-1)
イノシシ	左	下顎第3大白歯	歯冠のみ出土、未萌出	近遠心径 32.72	(81-2)
シカ	—	後頭骨	大後頭孔と底部のみ遺存	大きいため?	(62-A, C, D)
シカ?		骨片	1		(62-B, E, F)
哺乳類		歯	1破片		(分析3-1)
魚類、不明		椎骨(尾椎)、骨片	1、多数		(分析3-2) [14]
ナマズ他	—	椎骨(尾椎、腹椎)	多数	焼骨6を含む 被熱による白色変化2を含む	(分析4-A) [4~13]
骨片		骨片	多数	焼骨10を含む	(分析4-B) [3]
ナマズ 魚類	右 —	鱭棘(胸関節部付近) 鱭棘(担鱭骨)	2	被熱による黒色変化	(分析4-その他1) [1・2]
不明		骨片	1	加工?	(分析4-その他2)
不明		骨片	多数	うち1/3が焼骨	(分析4-その他3)
哺乳類		長骨片	骨幹約4cm遺存、 骨幹は横径約1cmの三角柱	焼骨	(72)
大型哺乳類		骨片	1		(29)
シジミガイ科?			3		(31)
イノシシ	—	後頭骨	右後頭頸周辺のみ遺存	大きいので成体	(31-1)
シカ	—	腰椎	後関節突起部破損、 後椎体板未癒合	椎体下面に解体痕あり	(31-2)
イノシシ	右	肩甲骨	肩甲頸から後方約8cm遺存		(31-3)
イノシシ	左	第3中手骨	遠位端未癒合	幼体、全長37.95	(31-4)
シカ	—	腰椎	後関節突起部のみ遺存	31-2と同一個体?	(31-5)
哺乳類	不明	肩甲骨?	骨片 1		(31-6)
イノシシ	右	下顎骨	第3乳白歯~第1大白歯の歯槽部 遺存、第3・4乳白歯釘植	摩耗は少ないので1歳程度 m3の頬舌径4.56 近遠心径12.59 m4の頬舌径8.19 近遠心径21.95	(36)
哺乳類		骨片	7	焼骨1を含む	(48)
哺乳類		歯	2 エナメル質の細片のみ遺存		(60)
哺乳類		不明	海綿質のみ遺存		(61)
イノシシ	左	切歯骨	第1切歯(永久歯)の萌出開始	1才前後	(27)
カガミガイ科?			2		(12)

## 第6節 樹種鑑定

山賀遺跡の今回の調査において出土した木質遺物に関する樹種鑑定の結果を以下に示す。

表7 出土木質遺物一覧

No	遺物No	調査区	地区割	層位/遺構面	遺構名	年月日	備考	内容	時期	樹種
1	35-10	08-1-2	8L-7i	第6面	17流路	20090202		加工木	弥生中期	カヤ
2	写48-a	08-1-2	8L-6i	第10面	28ピット	20090305	東側	柱根	弥生中期	クスノキ
3	21-18	08-1-2	8L-6i	第10面	28ピット	20090307	西側	柱根	弥生中期	クスノキ
4	21-17	08-1-2	8L-6i	第10面	29ピット	20090307		柱根	弥生中期	ムクノキ
5	—	08-1-2	8L-6i	第10面	31ピット	20090307		柱根	弥生中期	コナラ亜属
6	写48-b	08-1-2	8L-6i	第10面	34ピット	20090307		柱根	弥生中期	ヤブツバキ
7	21-15	08-1-2	8L-6i	第10面	35ピット	20090307		柱根	弥生中期	アカガシ亜属
8	21-19	08-1-2	8L-6i	第10面	37ピット	20090307		柱根	弥生中期	アカガシ亜属
9	21-16	08-1-2	8L-6i	第10面	38ピット	20090307		柱根	弥生中期	コナラ亜属
10	—	08-1-3	8M-6a,7a	第12層(2)	10溝	20090311	第13層崩落土?	火付木?	弥生前～中期	ヒノキ
11	—	08-1-3	8M-7a	第12層(2)相当?	—	20090311		加工木(大)	弥生前～中期	ヒノキ
12	—	08-1-3	8M-7a	第12層(2)相当?	—	20090311		加工木(小)	弥生前～中期	ヒノキ
13	12-1	08-1-3	8M-6a,7a	第11面	12溝	20090317		板状	弥生前～中期	アカガシ亜属
13	12-2	08-1-3	8M-6a,7a	第11面	12溝	20090317		板状	弥生前～中期	アカガシ亜属
14	—	08-1-3	8L-8i	第11面	11木棺墓	20090317		木棺墓小口板	弥生前～中期	ヒノキ
15	—	08-1-3	8L-8i	第11面	11木棺墓	20090317	廃棄	木棺墓側板	弥生前～中期	ヒノキ
16	—	08-1-3	8M-6a	第12層(2)	10溝	20090318	碎片	容器	弥生前～中期	ヤマグワ
17	—	08-1-2	8L-7i	第7面	17流路	—	肩口	立木根	弥生中期	ヤマグワ

## 第5章 まとめ

第3章における調査成果の報告では記せなかった点について簡単な考察を加え、まとめに代えたい。本章で対象とする内容は、既知の調査成果との関連と特徴的な遺構に関する検討の2点である。今回の調査を行った結果は、基本的に既知の調査成果を追随するものであった。しかし、遺構面の捉え方や名称、地形や遺構の復元等に微妙な差異や食い違いがみられる場合があり、今後の調査のためにも整理を行う必要性を感じた。

既知の調査成果との関連については、本調査区に隣接する『山賀遺跡』（2007年）と、本遺跡を広範に調査した『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』（1986年）を取り上げて検証を行うこととする。

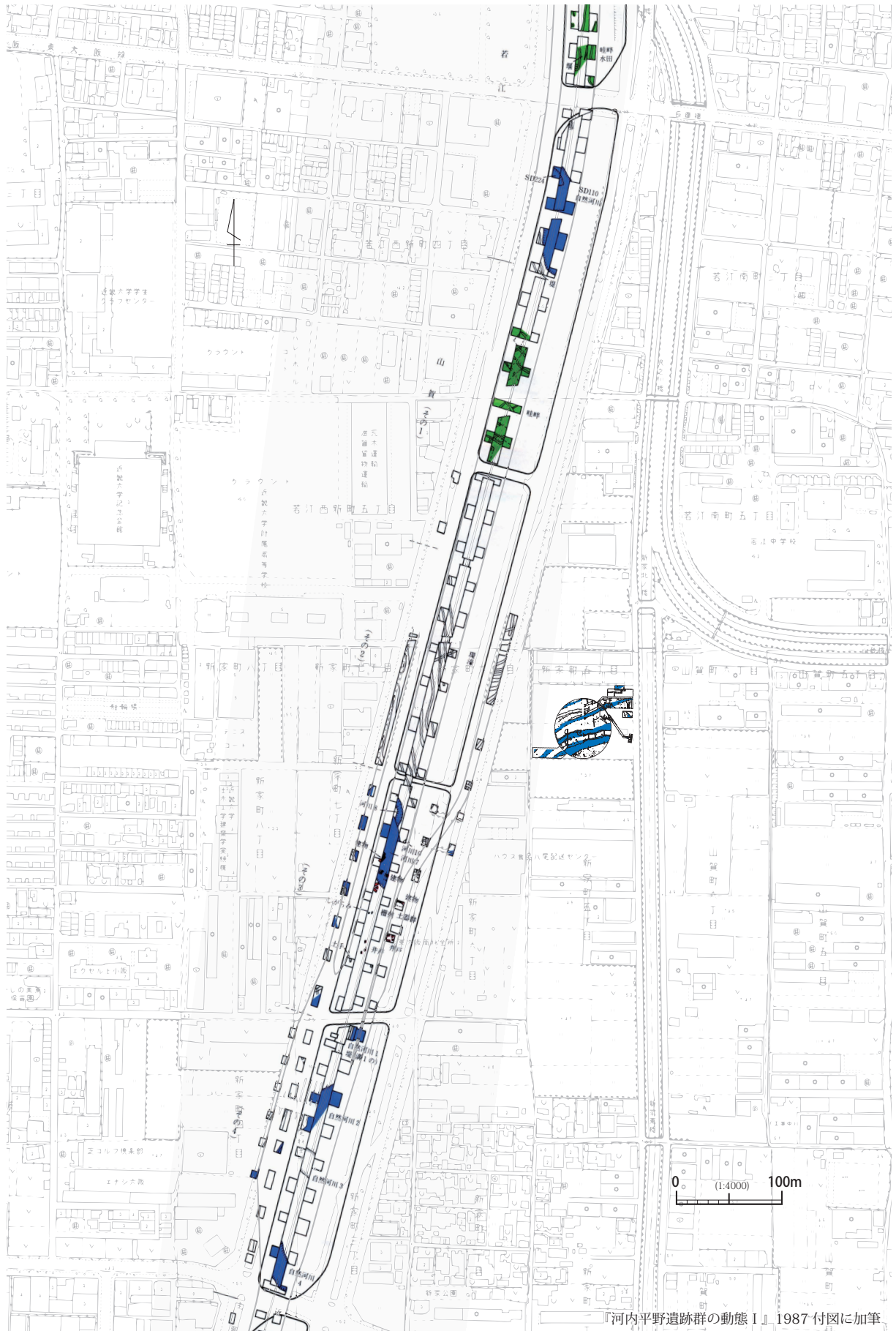
また、遺構等の個々の事例に関しては、本報告書内の調査成果における検討を避けてきたため、本章においてまとめて行うことにする。

### 第1節 基本層序について

今回の調査は、2007年発行の『山賀遺跡』に記載された基本層序を手掛かりとして実施したものであり、遺構面についてはほぼ跡付けることができた。ただし、土層については若干の差異が生じたため、同一の層序を設定することは困難であった。この整合についてまとめたものが表8である。層序において、部分的に細分が認められるものの、基本的な層位関係は同一である。また、弥生時代中期以前の第10層以下において、調査区が隣接しながら土質が不一致な層については、対応図の層番号に [] を記し

本報告書			山賀遺跡 (2007年発行)			河内平野遺跡群の動態Ⅰ					
08-1調査 (1~3区共通)						第Ⅱ章第3節第6項 山賀遺跡 (中央部)					
遺構面	層序	層年代	層序	特徴	遺構面	図3 No.	図43 No.	図322 No.	層序	遺構面	特記
第1面	第1層	近現代	第0層	現代盛土	第1面	1	1			明治時代以降	
	第2層	中世~近世	第1層	オレンジシルト	第1面	2	3			江戸時代	
第2面	第3層	古墳~平安			第2面	3	4	1		鎌倉~室町時代	
	第4層	弥生後期末~	第2層	砂層	第2面	4	5	2		奈良~平安時代	
第3面	第5層		第3層	自然堆積層	第3面	7	[7]	[7]		古墳時代	
	第6層	V様式?			第3面	11	32	8		弥生時代後期(4)	中央部分
第4面	第7層		第4層	土壌化層・畦畔検出面	第4面	18	45	9		弥生時代後期(3)	中央部分
	第8層	IV様式?	第5層	第4層基盤層	第4面	F	64	b1		弥生時代後期(1)	
第5面	第9層		第6層	土壌化層・溝底絶面	第5面	26	80	11		弥生時代中期(3)	Ⅲ~Ⅳ様式
	第10層	Ⅱ様式新~Ⅲ様式?	第7層	第6面基盤層	第5面	30	92	[14]		流水堆積	
第6面	第11層		第8層	黒色盛土層	第6面	[38~4]	[97]	[17]		粘土	
	第7面	Ⅱ様式前?	第9層	黒色盛土層	第6面	[57~59]	[117]	[17]		弥生時代中期 (1)	水田・Ⅱ様式方形周溝墓群
第7面	第8層	I様式末~Ⅱ様式初	第10層	盛土層下半	第7面	[72]	[129]	[18]		粘土	中央部分
	第8層	I様式	第11層	自然堆積層	第7面	[88]	[144]	[23]		河川堆積物	
第8面	第9層				第8面					弥生時代前期 (3)	水田・河川・溝等
	第9層				第8面					灰色系粘土	
第9面	第10層				第9面						
	第10層				第9面						
第10面	第11層				第10面						
	第12層				第10面						
第11面	第13層				第11面						
	第14層				第11面						

表8 山賀遺跡における基本層序の対照 (近畿自動車道・2007・2009)



『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』1987付図に加筆  
 図53 弥生時代前期（Ⅰ様式）の山賀遺跡

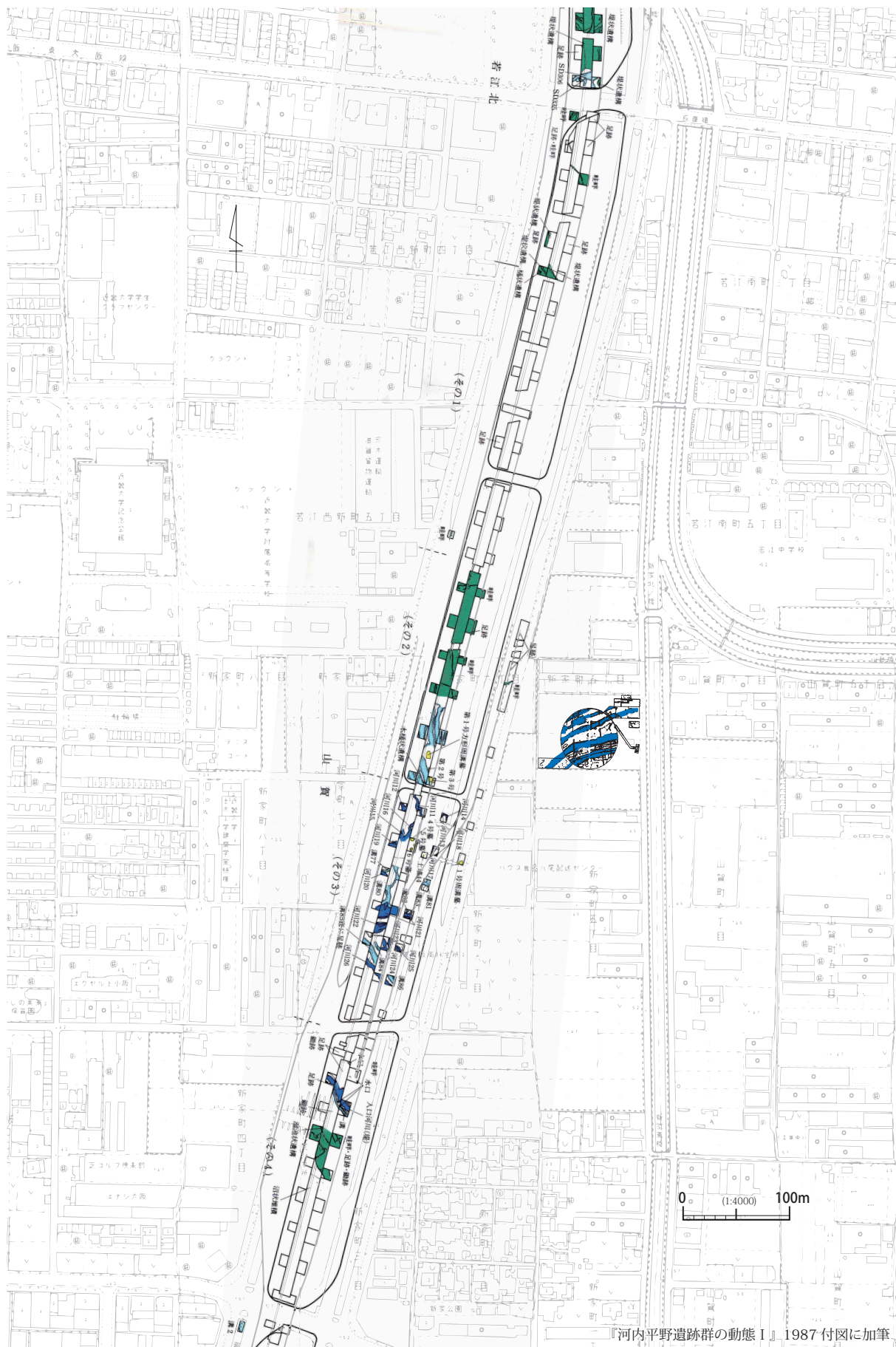
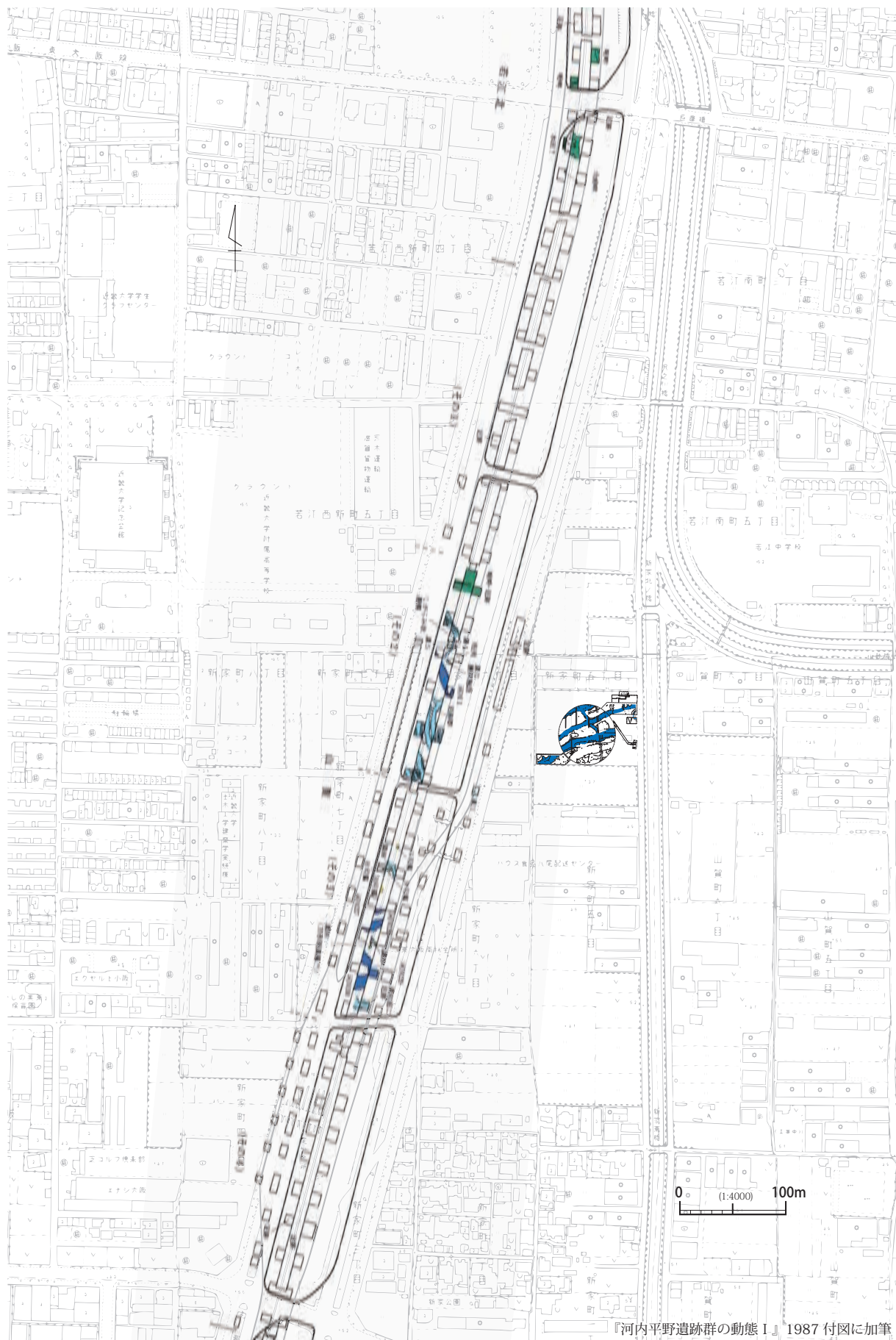


図54 弥生時代中期（Ⅱ様式前半）の山賀遺跡





『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』1987付図に加筆  
 図55 弥生時代中期（Ⅱ様式後半）の山賀遺跡

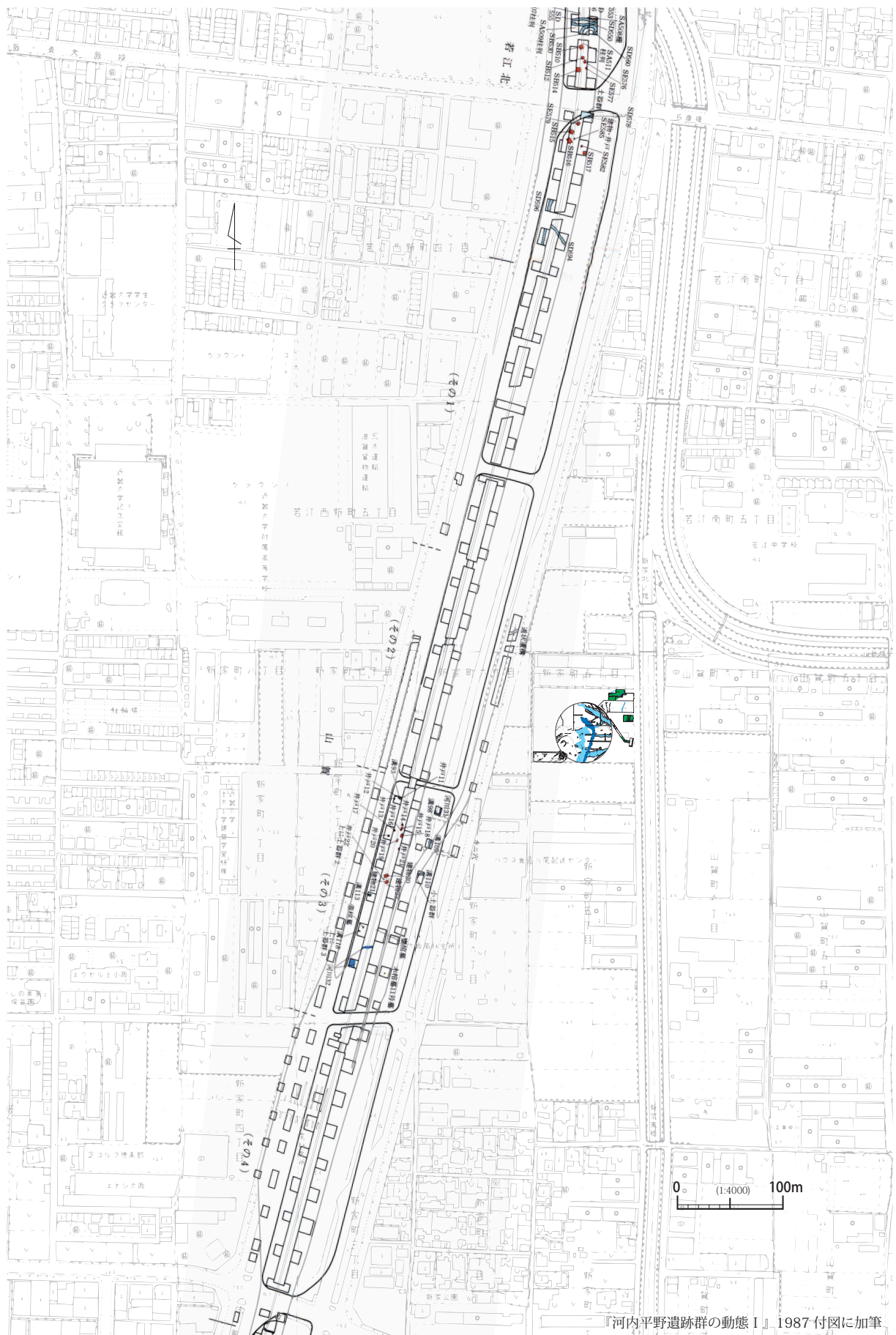
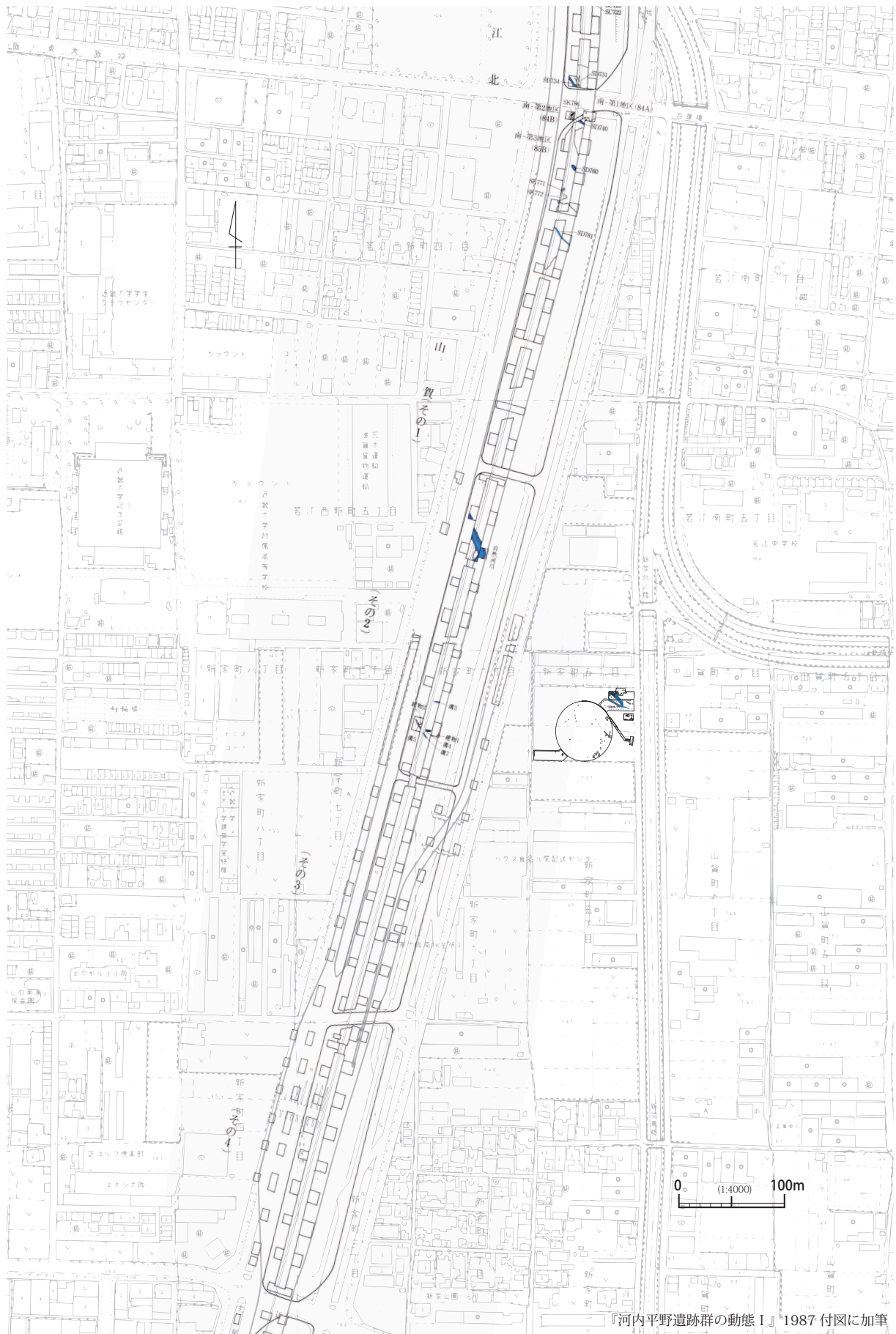


図56 弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の山賀遺跡



『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』1987付図に加筆  
 図57 弥生時代末～古墳時代初（庄内期）の山賀遺跡

た。この差異については、土地利用が狭い範囲で変化していた可能性が高く、わずかな違いが土質の差となって表れたものとする。

『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』に記された基本層序を簡単にまとめた。

弥生時代前期（1）面は、縄文時代晩期の遺物を含む第1黒色粘土層の上面に相当するが、遺構は少ない。第1黒色粘土層上に堆積する灰色系粘土層上面では、全体的に水田・河川・溝等の遺構が多く検出され、弥生時代前期（2）面とする。場所によってはさらに細かく遺構面を分けられる可能性がある。

弥生時代中期（1）面は、弥生時代前期（2）面の直上に堆積する粘土層を基盤層とし、遺跡北部と南部に水田、中央部にⅡ様式の方形周溝墓がみついている。弥生時代中期（2）面は、中期（1）面上に堆積する粘土層を基盤として広がるが、顕著な遺構はみられない。遺跡の北半部では流水砂層が堆積し、この上面に弥生時代中期（2）の遺構面が続く。この上に厚い流水堆積層が全体に広がっており、遺跡南部では同砂層上面にⅢ～Ⅳ様式期の遺構を検出し、弥生時代中期（3）面とした。

弥生時代後期（1）面は、弥生時代中期（3）面とほぼ同一である。遺跡北東部では、部分的に堆積した粘土層上面において、弥生時代後期（2）面がみられる。その上部に堆積する2つの粘土層は、それぞれの上面が弥生時代後期（3）面と後期（4）面に相当し、遺跡の北半部にほぼ共通する。遺跡中央部では、弥生時代中期（3）・後期（1）面を覆う黒色の砂混粘土層の上面が、弥生時代後期（3）・（4）面に相当し、遺跡南部では部分的に分離が可能である。弥生時代後期（5）面は、全体的には後期（3）・（4）面と同一であるが、遺跡中央部では北流する河川を埋没した堆積物上面に分化する。

古墳時代初期（庄内期）面が弥生時代後期（5）面を検出した上部に部分的にみられるものの、多くは間層を挟まずに古墳時代後期面が連続する。奈良時代以降は、平安時代までの古代面、中世面、近世面、明治時代以降の面におおむね分けられる。しかし、顕著な遺構はみられず、古代に条里制による耕地化が進められて以来、水田・畠として利用されてきた。

以上が、山賀遺跡における遺構面の概要である。今回の調査区に最も近い層序を示すのは遺跡中央部付近であり、層の特徴や遺構面の時期から対照関係を表7に示した。これによると、層序の変化としてはおおむね一致することが分かる。弥生時代の中期から後期にかけてでは、遺構面の数や時期に若干の差が認められるものの、この期間は『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』の中でも遺跡内に偏りがみられたほどである。土質からも堆積状況が激しく変化した時期であることは明らかであり、場所により土地利用に大きな差が生まれたと推測する。弥生時代中後期の層序の対照を検討する際、第8層の氾濫堆積物を鍵層と捉えたが、そういう点では一様に存在した層とするには注意が必要かもしれない。今回は前後の遺構面に調和が取れていることから、一定の成果として評価できるものとして提示した。

## 第2節 遺構面について

第1節における層序の対照を基に遺構面の接合を行い、山賀遺跡における土地利用の違いや変遷を検討する。『山賀遺跡』（2007年）（以下、山賀2007）の遺構面との接合については、あまり明文化しなかったものの、調査成果内に平面図を作成して必要に応じて適宜説明を行ってきた。ここではより広範な視点から、遺構面の変遷について検証を試みる。

『河内平野遺跡群の動態（以下、動態）Ⅰ・Ⅱ』（1986・1990年）では、山賀遺跡を含む周辺の旧地表を復元する際に弥生時代前期から古墳時代初頭を5面に整理している。それぞれの旧地表面は時期に

よって区別されることから、これを手掛かりとして本報告内の適当な遺構面を抽出した（図53～57）。各遺構面の概要と相違点について簡単にまとめてみる。

動態Ⅰによると、縄文時代晩期以前は遺構や遺物が散見される程度のため、当地周辺は季節的・一時的な漁労活動の場として想定されていたが、**弥生時代前期（Ⅰ様式）**の中段階以降になると、定住的な集落を形成するようになったとされている（図53）。本調査においても、弥生時代前期の新段階以降の出土遺物が急激に増加することから、この頃から一時的ではないヒトの関わりを想像することは難くない。動態Ⅰでは、遺跡北半部に河川と水田域、環濠を隔てた南半部に堤を持つ河川や建物・井戸が検出されており、生産域を伴う集落が復元されている。本調査区では目立った遺構は確認できなかったものの、山賀2007では調査区の大半を占める東西方向の溝群と、南端部にやや遺構の密な区域を確認しており、調査区の南側に溝に囲まれた集落の存在した可能性が考えられる。河川については、現地性の確実なものとは氾濫による後出のものとを判別することが難しく、位置関係を特定し難い。ただ、少なくとも大小の河川が網状流する氾濫平野に人々が進出してきたことは間違いなく、本格的な水田耕作の開始とそれに伴うムラの拡大を行いつつ、自然環境との共存を模索した時期と考えられる。

**弥生時代中期（Ⅱ様式前半）**になると、動態Ⅰでは遺跡中央のやや南寄りに墓域が形成され、墓の間を縫うようにのびる河川や溝の存在する様子がうかがえる（図54）。水田域は、この区域の北端と南端に帯状に広がっていたと考えられる。遺跡の北部については、空白地帯を隔てて、再び水田等が散見される。前段階において集落の形成がみられた地区は、河川と墓域に大きく様変わりする。これらの河川は自然のものと捉えられることから、集落域が侵食されたために当地を放棄し、代わりに墓域として利用したか、あるいは被害者らをその場で弔ったのであろう。水田域は下面の河川や溝の上部に位置しており、埋没後の地形を利用したものと考えられる。このことから、氾濫等による自然環境の変化が遺跡の様相に大きな影響を与えたことがわかる。動態Ⅰでは、当該期に集落が移動した可能性を示唆している。山賀2007においても、ピットや土坑が濃密な下面と異なり、溝以外には木棺墓が認められる程度となる。これだけの変化が生じたのに対し、溝群は下面から連綿と存在し続ける点にはやや違和感があり、雑音が含まれている可能性も考えられる。

**弥生時代中期（Ⅱ様式後半）**では、下面と比べて基本的な土地利用に変化はないようである。遺跡の中央付近に人為の跡が残る河川や溝とわずかな水田域が認められ、その南側に河川が隣接する墓域が存在する（図55）。前段階から遺構の数が減少することから、集落の移動に伴い、当地周辺がやや荒れた（自然に帰った）ものと推測する。生活領域を完全に放棄するまでに至らない理由としては、わずかでも残った水田と墓ではないかと想像する。山賀2007や当調査においても、第8面から第6面にかけて、遺構・遺物共に非常に希薄な面が続いており、当地周辺の当時の状況が看取される。

**弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）**になると、状況にやや変化がみられる。動態Ⅰでは、下面まで墓域となっていた遺跡中央のやや南寄り付近において、井戸・建物等がまとまって検出されるようになり、集落の形成が認められる（図56）。同様の変化は、遺跡北端の若江北遺跡との境界付近にもみられる。本遺構面の基盤層が大量の氾濫堆積物であることから、周辺環境や地形に大きな変化が起こったためと考えられる。弥生時代前期から中期にかけて河川等の侵食によって低湿地化した地区が、氾濫によって微高地化したことにより、再び集落域として利用されるようになったものと推測する。一方、水田等の生産域が動態Ⅰでは未確認であったが、今回の調査区と山賀2007において確認することができた。中央部は溝や落込みがみられる低地となっており、その東側に形成された緩斜面を利用して新たな水田域を開発

したようである。対する西側では弧状に巡る溝や小穴がみつかり、動態Ⅰにみる集落域の続きに相当すると思われる。この景観は小さな変化を繰り返しながら、弥生時代後期末の氾濫堆積物（第4層）によって埋没するまで発達したと考えられる。

弥生時代末～古墳時代初（庄内期）は上記のとおり、再び大規模な氾濫が発生した後に形成された景観である。動態Ⅰでは、遺跡の中央付近にわずかな建物群と、北端部に小規模な遺構群がみられるだけの限定的な分布となる。同様の傾向は山賀2007と本調査においても確認され、遺構の希薄な状態がみられる。明確な集落域等を想定することは困難であるが、遺構は散見されるため、当地が完全に放棄されたわけではないだろう。当該期以降、周辺において大規模な集落が形成されることから、共同体の再編が行われた可能性もあり、それに伴って土地利用が大きく変化したとも考えられる。

以上のように、動態Ⅰ・山賀2007・本調査における各調査所見は概ね整合しており、地形や植生等の周辺環境の変化に伴い、遺跡の変貌する様子を知ることができた。大別すると、弥生時代中期前半、中期後半、末期にそれぞれ画期があり、山賀遺跡内の土地利用に明らかな変化が認められる。概括的ではあるが、立地条件の良い微高地上に集落を形成しながら周辺の傾斜地に水田域を開発していたものが、立地条件の悪化により放棄地や墓域へと変化し、条件が好転すると再び開発を始めるというような、当時の人々と自然との関わりや共存方法が浮かび上がってきた。向後の調査では、人為に深く関わる自然の変化に注意しながら、遺構面の復元を行わねばならないと強く感じた。

### 第3節 溝群について

山賀2007の調査では、弥生時代前期から中期前半にかけて、ほぼ東西方向にのびる溝群が検出されている。今回の調査では、その位置関係からほとんどの溝の続きを検出する予定であったが、08-1-3区においてほぼ同位置に検出した第10面10溝と第11面12溝の2条を確認したのみである（図9・16）。特に08-1-3区は、今回の調査地のほぼ中央を南北にのびる第6面の流路により大半の遺構面が失われたことが原因となっている。

複数の遺構面を切り込む溝や流路については、遺構内にみる埋土に対する氾濫堆積物や埋め戻し土・崩落土の区別、溝肩から後背地への地形変化等、複雑な要素が関連し合うため帰属面の判断が非常に難しい。遺構肩部の層序では溝等から溢流した自然堆積物が存在し、これらと埋土との関連も検討しなければならない。

山賀2007における溝群の詳細な断面を確認していないため言及は避けなければならないが、複数の溝の埋土に氾濫堆積物の存在が確認できる。一方、溝周縁辺部の層序では、堆積物や周辺土壌を利用した盛土の存在や、弥生時代前期（第11面）以降に最大2度の溢流が発生したことを示している。また、第11面と第10面上にみる溢流堆積物は南から北へと減少し、逆に調査区の南端部には認められないことから、これらの供給源となった溝や河川の存在を示唆している。南北の断面上では、北半部と南半部の溝の形状には差異が認められるが、これは氾濫供給源との関係の差によるものと想像する。南半部の溝は、氾濫による侵食を除いたとしても、北半部の同一遺構面の溝に対して底面が低位であり、機能の異なっていた可能性は高い。

同種の遺構として、動態Ⅱでは大溝群に関する記載がある。こちらはほぼ南北方向にのびる8条の溝と9条の土手で構成され、埋土は概ね下層が流水堆積物、中層がブロック土、上層がやや止水の堆積物

となっている。注目すべき点は、埋土の大部分がブロック土に占められており、人為的に埋められた可能性が高いということである。流水堆積の認められない溝もあることから、非常に短期間だけ機能した排水用溝であり、不要になったため埋め戻したと考えられている。これ以外に、各溝および土手内から土器や石器の出土が少ない点においても、山賀2007の溝群とはやや様相が異なる。

山賀2007の層序では、弥生時代前期以前に北から南へと河川の移動した形跡が認められ、当時の環境変化の激しかったことは明らかである。松田順一郎氏によると、縄文時代晩期末から弥生時代後期にかけて河内湖の水位が上昇し、埋積の進んだ河川は弥生時代前期以降に活発に氾濫を繰り返すようになったとされている。動態Ⅱに記されているが、氾濫によって滞水してしまった肥沃な後背地を開発するために排水用の浅い溝を開削し、再び耕地化する際に埋め戻したものとすれば、自然環境の変化とも一致する。先にも述べたようにすべての溝に適用することは困難であるが、短期間で埋没し、上面を耕土が覆う溝も多いことから、「溝」としての表現を考慮する必要がある。なお、本調査の08-1-3区において検出した第10面10溝と第11面12溝については、埋土中に流水堆積物が少なく、出土した土器や動物遺体は碎片ばかりであることから、動態Ⅰに記載された特徴に合致する点が多く、水利用ではなく開発用の溝であった可能性が高いと考える。

## 第4節 木棺墓について

今回の調査では、08-1-3区において第11面に11木棺墓を検出した(図9・13)。遺構の詳細については本文を参考にされたい。第13層相当層をほぼ除去した面に小口板や側板の下端が存在することから、本来はこの上部に木棺本体が存在したことは明らかである。わずかに残った上層を観察してみたものの、堀形は確認できなかった。山賀2007における19基の木棺のほとんどでも同様の状態が報告されており、調査手順の具体を詳細に記載している。

一般的に、埋葬時に木棺が地表に露出していたとは考えにくく、古く沖縄地方の風葬以外にそのような事例は知られていない。当地周辺における既知の弥生時代の墓は、棺を地中深くに埋設するか、あるいは上部に土盛りを行ったもののいずれかである。11木棺墓は、残存状態の良好な小口板が棺の内側に倒れ込んでいたことから、木棺の高さを小口板の高さと等量もしくはそれ以上と仮定し、木棺の位置や墳丘・墓壙を推測してみたい。巨摩・若江北遺跡方形周溝墓の事例から、封土の厚みを埋葬施設の深さの2分の1から等分に相当すると考えた場合、埋葬時の地表面はほぼ第10層途中から上面の標高となる。この場合、第8面以前に埋葬されたと考えられ、山賀2007における第8面から第10面検出の時期と一致する。調査成果では第11面検出の遺構として報告を行ったが、帰属面が異なるのは明らかである。山賀2007では19基の木棺のうち14基は溝と溝の間の盛土内から出土し、残りのうちの4基は調査区北半から出土したとされている。本調査区の11木棺墓は、後者のグループと同じ立地である。ただし、遺構の周辺に溝が近接する点では、前者と何ら変わるところはない。一方、動態Ⅰにおいて墓が報告されるのは弥生時代中期のみであり、本調査区における相当面は第9面から第5面となる。この点においては、11木棺墓のような第11面や第10面における検出が本来の帰属面ではないとする考えに一致する。Ⅱ様式前半では小規模な方形周溝墓が数基検出されたのみであるが、Ⅱ様式後半になると方形周溝墓以外に木棺墓・土器棺墓もみついている。Ⅲ～Ⅳ様式では出土件数が激減し、わずかな土器棺墓と木棺墓を確認したのみである。いずれの時期においても、墓の出土地は遺跡中央のやや南寄り、山賀2007調査区の

南西部に集中する。Ⅲ～Ⅳ様式では墓の周辺に井戸や建物が多数検出されており、やや特異な環境であることから、みつかった墓も屋敷墓のような性格のものであった可能性がある。Ⅱ様式の墓は、いずれも周辺に溝や河川が広がっており、山賀2007や本調査区で検出したものとまったく同じ立地環境である。逆に言うと、墓域としてこのような土地を選んだか、あるいは形成したかである。広大な墓域の中での差異と考えられなくもないが、動態の側では同様の立地条件において方形周溝墓を多数築造していることから、同様の埋葬施設が存在した可能性を否定することはできない。今回の調査では、08-1-2区の北東部から03-1-1区南東部にかけて方形周溝墓と推定する遺構を検出しており、今後、墓域の広がりを考える上で重要な手掛かりとなるであろう。

## 第5節 建物について

08-1-2区の第10面に検出した25建物は、遺構全体の一部を検出したのみであるが、遺構底面にほぼ水平に堆積するブロック土と間層の炭層、直径8cmから16cmの柱根を残すピット、まとめて出土した魚類や哺乳類の焼骨と炭化米といった状況証拠から、建物址の可能性が高いと判断した。

遺構底面に堆積する複数の埋土については、炭化物や微細遺物に関する分析の結果、ヒトの営為によって形成されたことが判明し、複数の床面が存在した可能性は極めて高い。また、その分析内容から、水田耕作だけでなく狩猟や漁労を生業とした当時の生活様式の一片も垣間見ることができた。また、ナマズからは水田に関わる水利環境、シカ・イノシシからは建物周辺の地形等といった自然環境を知る貴重な手掛かりとなる。

隣接する山賀2007では、当該期におけるピットの検出は多いものの、建物の報告はみられない。その西側に位置する動態においても、掘立柱建物に比して竪穴建物の検出は少なく、美園遺跡のみと記されている。それらの建物の特徴としては、方形と円形・楕円形の平面形があり、円形の規模は径4mから6m、壁高0.1m前後のものが多く、その立ち上がりが全く無いものもあるらしい。動態では、壁の立ち上がりに注目し、美園遺跡のものは平地住居かそれに近い形態との指摘を行っている。本調査の25建物は、規模が一回り大きいものの、壁高は14cmから20cmと動態と同様の低い傾向が認められる。位置的にやや離れているため一概には言えないが、当地域に特徴的な住居となる可能性も考えられる。

## 参考文献

- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1987 『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』  
同 上 1991 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』  
同 上 1993 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』  
同 上 1996 『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』
- 財団法人大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』  
同 上 2007 『山賀遺跡』  
同 上 2007 『シンボジウム弥生人の住まいを探るー長原遺跡・八尾南遺跡・久宝寺遺跡ー』
- 地学団体研究会大阪支部 1991 『大地のおいたち』
- 松田順一郎 1991 「楔形両極石核の分割に関する実験」『光陰如矢』



表9 掲載遺構一覧(1)

調査区名	地区割(Ⅲ-Ⅳ)	遺構面	遺構名	遺構備考	法量(長*短*深)(m)	時期	掲載図・写真		
08-1-1	8L	6~8g	第1面	—	耕作痕	—	中近世	—	
08-1-1	8L	8g	第2面	1	溝	(8.7)*2.7*0.12	7c前半?	図46・47、図版35	
08-1-1	8L	7g	第2面	2	溝	(4.1)*2.0*0.26	7c前半?	図46・47、図版35	
08-1-1	8L	7g	第2面	3	落込	(5.5)*(2.2)*0.16	7c後半?	図46	
08-1-1	8L	7f	第2面	4	井戸	2.9*(1.5)*—	6c?	図46、図版35	
08-1-1	8L	7g	第2面	5	土坑	0.4*0.3*0.12	古代?	図46・47、図版35	
08-1-1	8L	7g	第2面	6	土坑	0.3*0.3*0.15	古代?	図46・47	
08-1-1	8L	7f・g	第3面	—	畦畔	水田	—	弥生後期?	—
08-1-1	8L	8g	第3面	8	溝	(2.9)*0.6*0.8	弥生後期?	図42、図版28・29	
08-1-1	8L	8g	第4面	7	溝	第3面下面?	(2.4)*0.6*0.15	弥生後期?	図44、図版29
08-1-1	8L	7f・g	第4面	—	畦畔	水田	—	弥生後期?	—
08-1-1	8L	7f・8g	第5面	9	溝	(9.6)*0.8*0.22	弥生中期後半	図37、図版25	
08-1-1	8L	7f	第5面	10	土坑	0.8*0.6*0.29	弥生中期後半?	図38・39、図版24	
08-1-1	8L	7f	第5面	11	土坑	(0.7)*0.6*0.11	弥生中期後半?	図38・39	
08-1-1	8L	7f	第5面	12	土坑	0.4*0.4*0.05	弥生中期後半	図38・39、図版24	
08-1-1	8L	7f・g	第5面	13	溝	(9.4)*0.7*0.18	弥生中期後半	図38	
08-1-1	8L	7g	第5面	22	溝	—	—	図38	
08-1-1	8L	7f	第6面	14	流路	第8層の供給源	(3.4)*(2.8)*0.98	弥生中期後半?	図34、図版21
08-1-1	8L	7g	第6面	15	溝	(1.3)*(1.0)*0.04	弥生中期後半?	図34、図版18・21	
08-1-1	8L	7f	第7面	16	落込	14流路の前身?	(3.7)*(2.5)*—	弥生中期	図32
08-1-1	8L	7g	第7面	17	土坑	0.5*0.5*—	弥生中期?	図32	
08-1-1	8L	7f	第7面	18	ピット	0.3*0.3*—	弥生中期	図32	
08-1-1	8L	7f	第8面	19	流路	(6.0)*(5.0)*0.8	弥生中期	図28・29、図版15	
08-1-1	8L	7f・g	第9面	—	落込	—	弥生中期?	—	
08-1-1	8L	7g	第10面	20	土坑	(2.0)*(1.3)*0.29	弥生前期?	図16・17、図版7	
08-1-1	8L	7g	第11面	21	ピット	0.3*0.3*0.09	弥生前期?	図9、図版3	
08-1-2	8L	6i	第2面	1	土坑	1.8*(1.6)*0.37	7c?	図46・47、図版36	
08-1-2	8L	6i	第2面	2	土坑	7.0*5.5*0.13	古代	図46	
08-1-2	8L	6i	第2面	3	土坑	0.6*(0.4)*—	古代?	図46	
08-1-2	8L	6i	第2面	4	土坑	1.1*(0.7)*0.14	弥生末?	図46	
08-1-2	8L	7i	第2面	5	土坑	(0.6)*0.4*0.24	古墳時代?	図46・50、図版37	
08-1-2	8L	7i	第2面	6	土坑	1.3*(0.8)*0.31	古代?	図46・50	
08-1-2	8L	6i	第2面	7	土坑	2.3*(1.3)*0.18	庄内期	図46・49、図版37	
08-1-2	8L	6i	第2面	8	耕作痕	(8.3)*(0.5)*0.07	中世	図46	
08-1-2	8L	7i	第2面	9	ピット	0.5*0.4*0.32	古代?	図46・50、図版37	
08-1-2	8L	6i	第4面	—	畦畔	水田	—	弥生後期?	—
08-1-2	8L	7i	第4面	10	溝	(6.2)*0.7*0.09	弥生後期?	図42、図版30	
08-1-2	8L	6i	第5面	11	溝	(6.0)*0.4*0.13	弥生中期後半	図38・40、図版26	
08-1-2	8L	6i	第5面	12	溝	(3.2)*0.3*0.15	弥生中期後半	図38・40、図版26	
08-1-2	8L	6i	第5面	13	溝	(6.0)*0.6*0.2	弥生中期後半	図38・40、図版26	
08-1-2	8L	6i	第5面	14	土坑	2.4*(1.4)*0.1	弥生中期後半	図38	
08-1-2	8L	6i	第5面	15	土坑	(0.5)*(0.4)*0.07	弥生中期後半?	図38・40、図版26	
08-1-2	8L	6i	第6面	16	高まり	—	弥生中期中頃	図38	
08-1-2	8L	7i	第6面	17	流路	第8層の供給源	(6.0)*(2.4)*1.38	弥生中期後半?	図32・34、図版22
08-1-2	8L	6i	第7面	18	溝	周溝の可能性?	(4.2)*1.2*0.26	弥生中期前半	図32・33・34、 図版20・22
08-1-2	8L	6i	第7面	19	ピット	—	弥生中期後半?	—	
08-1-2	8L	6i	第8面	21	土坑	自然?	0.6*0.3*0.04	弥生中期	図28・30
08-1-2	8L	6i	第8面	22	土坑	—	弥生中期	図28・30	
08-1-2	8L	7i	第8面	23	土坑	自然?	0.8*0.6*0.05	弥生中期?	図28・30
08-1-2	8L	7i	第9面	20	落込	第7面まで残る	(2.6)*(0.7)*0.38	弥生中期前半	図24・28、図版16
08-1-2	8L	6i	第9面	24	石器集中部	—	1.4*2.2*—	弥生中期前半?	図23・25、図版13 ・14
08-1-2	8L	6i	第10面	25	建物	28~38ピット	(3.3)*(2.5)*0.22	弥生前期末?	図16・18~20、 図版8~10
08-1-2	8L	6i	第10面	26	土坑	—	(2.1)*1.6*0.3	弥生前期末?	図16・17
08-1-2	8L	6i	第10面	28	ピット	25建物内	0.42*0.41*0.41	弥生前期?	図20、図版10
08-1-2	8L	6i	第10面	29	ピット	25建物内	0.28*0.25*0.21	弥生前期末?	図20、図版10
08-1-2	8L	6i	第10面	30	ピット	25建物内	0.3*0.25*—	弥生前期末?	図版10
08-1-2	8L	6i	第10面	31	ピット	25建物内	0.22*0.2*0.17	弥生前期末?	図20、図版10

表10 掲載遺構一覧（2）

調査区名	地区割(Ⅲ-Ⅳ)	遺構面	遺構名	遺構備考	法量(長*短*深)(m)	時期	掲載図・写真
08-1-2	8L 6i	第10面	32 ピット	25建物内	0.24*0.24*—	弥生前期末?	図20
08-1-2	8L 6i	第10面	33 ピット	25建物内	0.2*0.17*0.08	弥生前期?	図20
08-1-2	8L 6i	第10面	34 ピット	25建物内	0.25*0.25*—	弥生前期末?	図20
08-1-2	8L 6i	第10面	35 ピット	25建物内	0.2*0.17*0.18	弥生前期末?	図20、図版10
08-1-2	8L 6i	第10面	36 ピット	25建物内	0.28*0.22*—	弥生中期初?	図20
08-1-2	8L 6i	第10面	37 ピット	25建物内	0.22*0.22*0.15	弥生前期末?	図20、図版10
08-1-2	8L 6i	第10面	38 ピット	25建物内	0.16*0.15*0.24	弥生前期末?	図20
08-1-2	8L 6i	第11面	27 溝		(7.5) *1.1*0.23	弥生前期?	図10、図版4
08-1-3	8M 7a	第1面	7 井戸		—	近代	—
08-1-3	8L 8i	第2面	1 落込		(1.7)*(1.3)*—	中世	図46
08-1-3	8L 8i	第2面	2 耕作痕		(1.8)*0.3*0.02	7c?	図46
08-1-3	8L 8i	第2面	3 落込		(1.5)*0.9*0.18	7c?	図46
08-1-3	8L 7j	第3面	4 溝		2.3* (1.7) *0.15	弥生後期?	図44、図版33
08-1-3	8L 7j	第5面	5 土坑		1.6* (0.8) *—	弥生中期	図38
08-1-3	8L 8j	第5面	6 土坑		1.3* (0.3) *—	弥生中期	図38
08-1-3	8L 7・8j 8M 7a	第6面	8 流路	第8層の供給源	22.6*(1.5)*1.03	弥生中期後半?	図34、図版23
08-1-3	8L 8i	第7面	9 ピット		—	弥生中期	—
08-1-3	8M 6a・7a	第10面	10 溝	第12層(1)~(3)	(4.4) *1.5*—	弥生前期末?	図16、図版11
08-1-3	8L 8i	第11面	11 木棺墓		(0.9) * (0.6) *0.23	弥生中期?	図9・13、図版5
08-1-3	8M 6a・7a	第11面	12 溝		(2.0) * (1.0) *0.3	弥生前期新?	図9・12、図版6
08-1-3	8L 8i	第11面	13 落込		(3.0) * (1.5) *—	弥生前期?	図9、図版5
08-1-3	8L 8i	第11面	14 溝		(1.6)*0.5*—	弥生前期?	図9、図版5
08-1-3	8L 8i	第11面	15 土坑		(0.9)*(0.8)*—	弥生前期?	図9
08-1-3	8L 8i	第11面	16 土坑		(0.4)*(0.3)*—	弥生前期?	図9

表11 - 1 掲載遺物一覧 (1)

挿図No.	遺物No.	図版No.	遺構面	遺構名	層名	種別	器形	口径	底径	器高	重量(g)	残存率
8	1	39	—	—	14	弥生土器	鉢	—	—	(6.4)	—	5%以下
8	2	39	—	—	14	弥生土器	鉢	—	—	(2.9)	—	5%以下
11	1	39	11	27溝	—	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	—	5%以下
12	1	39	11	12溝	—	木製品	板状	幅(3.3)	厚(1.1)	(30.0)	—	—
12	2	40	11	12溝	—	木製品	板状	幅(22.3)	厚(6.4)	(53.2)	—	—
12	3	39	11	12溝	—	弥生土器	甕	—	—	(6.2)	—	5%以下
12	4	39	11	12溝	—	弥生土器	壺	—	—	(6.8)	—	5%以下
12	5	39	11	12溝	—	弥生土器	甕	(37.4)	—	(7.5)	—	5%以下
12	6	39	11	12溝	—	弥生土器	甕	(19.6)	—	(5.2)	—	5%以下
12	7	39	11	12溝	—	弥生土器	鉢	(35.5)	—	(10.0)	—	5%以下
14	1	42	—	—	13	縄文土器	深鉢?	—	—	(3.7)	—	5%以下
14	2	41	—	—	13	弥生土器	甕	—	—	(5.7)	—	5%
14	3	42	—	—	13	弥生土器	無頸壺	(8.5)	—	(4.1)	—	5%以下
14	4	42	—	—	13	弥生土器	無頸壺	(10.1)	—	(5.3)	—	5%以下
14	5	42	—	—	13	弥生土器	壺	(21.5)	—	(5.7)	—	5%以下
14	6	41	—	—	13	弥生土器	壺	(23.6)	—	(11.9)	—	40%
14	7	42	—	—	13	弥生土器	壺	(27.6)	—	(6.7)	—	5%
14	8	41	—	—	13	弥生土器	壺	(22.3)	—	(17.1)	—	40%
14	9	42	—	—	13	弥生土器	壺	(23.6)	—	(23.0)	—	60%
14	10	42	—	—	13	弥生土器	甕	—	—	(5.9)	—	5%以下
14	11	42	—	—	13	弥生土器	壺	—	—	(1.7)	—	5%以下
14	12	41	—	—	13	弥生土器	壺	—	7.0	(5.2)	—	10%
14	13	42	—	—	13	弥生土器	甕	(21.5)	—	(9.7)	—	5%
14	14	41	—	—	13	弥生土器	甕	(24.7)	—	(7.7)	—	5%以下
14	15	41	—	—	13	弥生土器	甕	(29.0)	—	(13.4)	—	5%
14	16	42	—	—	13	弥生土器	鉢	(35.4)	—	(6.9)	—	5%
14	17	41	—	—	13	弥生土器	鉢	(34.4)	—	(5.8)	—	5%
15	1	43	—	—	13	石製品	石鏃	長(3.4)	幅(1.9)	厚(0.5)	3.8	80%
15	2	43	—	—	13	石製品	石鏃	長(7.1)	幅(2.85)	厚(0.7)	13.3	100%
15	3	43	—	—	13(黒)	石製品	不明	長(5.5)	幅(5.2)	厚(0.9)	26.2	20%以下
15	4	43	—	—	13	石製品	石庖丁?	長(4.4)	幅(3.0)	厚(0.5)	8.8	20%以下
15	5	43	—	—	13	石製品	石棒	長(9.6)	幅(3.8)	厚(3.0)	162.8	20%以下
17	1	49	10	26土坑	—	弥生土器	甕	(23.4)	—	(8.3)	—	15%
21	1	45	10	25建物	—	弥生土器	甕	—	—	(5.7)	—	5%以下
21	2	45	10	25建物	(西)	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	—	5%以下
21	3	45	10	25建物	(西)	弥生土器	甕	—	—	(2.2)	—	5%以下
21	4	46	10	25建物	(西)	弥生土器	甕	(18.0)	—	(2.5)	—	5%以下
21	5	46	10	25建物	(東)	弥生土器	鉢	(21.0)	—	(6.3)	—	20%
21	6	46	10	25建物	(東)	弥生土器	把手付甕?	(18.0)	—	(5.5)	—	5%以下
21	7	46	10	25建物	(東)	弥生土器	壺	—	—	(5.6)	—	5%以下
21	8	46	10	25建物	(西)	弥生土器	広口壺	(14.4)	—	(4.3)	—	5%以下
21	9	45	10	25建物	(東)	弥生土器	壺	(20.8)	—	(8.8)	—	20%
21	10	46	10	25建物	(西)	弥生土器	広口壺	(31.3)	—	(4.6)	—	10%
21	11	45	10	25建物	最下面	弥生土器	甕	(19.6)	—	(8.9)	—	10%
21	12	45	10	25建物	(東)	弥生土器	甕	(20.0)	—	(8.8)	—	20%
21	13	46	10	25建物	(東)	弥生土器	甕	(32.0)	—	(8.0)	—	5%以下
21	14	45	10	25建物	(東)	弥生土器	甕	(32.8)	—	(8.7)	—	25%
21	15	48	10	35ピット	—	木製品	柱根	幅(10.3)	厚(10.4)	(21.4)	—	—
21	16	48	10	38ピット	—	木製品	柱根	幅(7.8)	厚(7.8)	(23.4)	—	—
21	17	48	10	29ピット	—	木製品	柱根	幅(7.7)	厚(7.2)	(17.4)	—	—
21	18	48	10	28ピット	—	木製品	柱根	幅(6.5)	厚(5.9)	(16.7)	—	—
21	19	48	10	37ピット	—	木製品	柱根	幅(5.5)	厚(4.7)	(13.2)	—	—
22	1	50	—	10溝	12	石製品	石鏃	長(2.7)	幅(1.65)	厚(0.4)	1.6	95%
22	2	50	—	10溝	12	弥生土器	壺	—	—	(1.9)	—	5%以下
22	3	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(17.8)	—	(5.2)	—	5%
22	4	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(21.8)	—	(7.8)	—	5%以下
22	5	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(23.6)	—	(4.4)	—	5%以下
22	6	50	—	10溝	12	弥生土器	甕?	—	(6.6)	(3.6)	—	5%以下
22	7	49	—	10溝	12	弥生土器	広口壺	(27.4)	—	(1.8)	—	5%以下
22	8	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(27.7)	—	(7.6)	—	10%
22	9	49	—	10溝	12	弥生土器	鉢	(27.8)	—	(7.1)	—	5%以下

表11 - 2 掲載遺構一覧 (1)

外面調整 (人為的特徴)	内面調整 (自然的特徴)	外面色調	内面色調	胎土(材質)	焼成	特徴
沈線	ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR7/2	密	良好	
ヨコナデとハケ	ユビオサエとナデ	黄灰2.5Y6/1	灰黄2.5Y6/2	密	良好	
ヨコナデ	ナデ	灰黄褐10YR5/2	暗灰黄2.5Y5/2	密	良好	
		—	—	アカガシ亜属		
		—	—	アカガシ亜属		
口縁部ユビオサエ後ヨコナデハケ	ナデ	暗灰N3/	暗灰黄2.5Y5/2	密	良好	
突帯文	ハケとミガキ	灰白5Y7/1	灰オリーブ5Y6/2	密	良好	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ヨコナデユビオサエ後ナデ	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄2.5Y6/3	密	良好	
口縁部ヨコナデナデ	口縁部ヨコナデユビオサエ後ナデ	黒10Y2/1	黒褐10Y3/1	密	良好	外面スス付着
ミガキ	ユビオサエ後ミガキ	にぶい黄2.5Y6/3	灰黄2.5Y6/2	密	良好	
		灰黄褐10YR5/2	灰黄2.5Y6/2	密	良	
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	灰黄褐10YR4/2	暗灰黄2.5Y5/2	やや粗	良	外面スス付着
ヨコナデ櫛描直線文	ヨコナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	やや粗	良、軟質	
口縁部ヨコナデ竹管文と沈線	口縁部ヨコナデナデ	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	やや粗	良好、軟質	生駒西麓産
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	にぶい黄橙10YR6/3	灰黄2.5Y6/2	やや粗	良	
口縁部ヨコナデハケ後沈線	板状工具による擦過痕	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙5YR7/4	密	良好	
ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	密	良	
口縁部ハケ後ミガキ、頸部ハケ後付加条沈線	口縁部ハケ、頸部ミガキ	にぶい赤褐5YR5/4	にぶい赤褐5YR5/4	密	良、やや軟質	生駒西麓産
ナデ後ヘラミガキヘラ描沈線文	ナデとハケ板状工具による擦過痕	灰褐7.5YR5/2	灰褐7.5YR5/2	密	良、やや軟質	生駒西麓産
ナデ	ナデとヘラミガキ	にぶい橙5YR6/4	にぶい黄橙10YR6/3	密	良	
ナデ後刺突文	ナデ	灰黄褐10YR6/2	灰黄2.5Y6/2	やや粗	良	
ユビオサエとハケ	底部ユビオサエ板状工具による擦過痕	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2	密	良	外面スス付着
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	褐灰10YR4/1	灰黄2.5Y6/2	やや密	良	外面スス付着
口縁部ナデ、胴部ハケ	口縁部ナデ、胴部ハケ後ナデ	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR6/2	やや粗	不良	
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	黒褐2.5Y3/1	暗灰黄2.5Y5/2	やや粗	良	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ハケナデ	灰黄褐10YR6/2	にぶい黄褐10YR5/3	密	良	
口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	やや粗	良	
折損		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
未成品(失敗した後、石核か?)		—	—	サヌカイト		
		—	—	緑泥石石英片岩		
		—	—	細粒黒雲母片麻岩		
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデハケ後ミガキ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	やや粗	良	
沈線とタタキ	不明	黄灰2.5Y4/1	黄灰2.5Y4/1	やや粗	良	
ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄2.5Y6/2	オリーブ黒5Y3/1	やや粗	良	
ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐10YR3/1	黄灰2.5Y4/1	やや粗	良	
ヨコナデ	ヨコナデ	暗黄灰2.5Y4/2	暗黄灰2.5Y5/2	やや粗	良好	
口縁部ヨコナデナデ	ミガキとハケ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	密	良	
ナデ	ヨコナデとユビオサエ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	密	良	
ミガキ?	ミガキ	褐灰5YR5/1	褐灰7.5YR4/1	密	良好	
ミガキ痕	ミガキ	黄灰2.5Y4/1	褐灰10YR4/1	密	良好	
ハケ後沈線	ハケとナデ	黄灰2.5Y4/1	黄灰2.5Y4/1	密	良	
ミガキ	ミガキ	灰黄2.5Y7/2	にぶい黄褐10YR7/2	密	良好	
沈線とナデ	口縁部ユビオサエナデ	オリーブ黒5Y3/1	暗灰黄2.5Y5/2	密	良	
ユビオサエと細かなハケ	ユビオサエ後ナデ	黒7.5Y2/1	灰5Y4/1	密	良	
ヨコナデ後ミガキ	ミガキ	褐灰10YR4/1	にぶい褐7.5YR5/3	密	良好	
口縁部ヨコナデユビオサエとナデ	口縁部ヨコナデハケ後ナデ	黒N1.5/	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗	良	
		—	—	アカガシ亜属		
		—	—	コナラ亜属		
		—	—	ムクノキ		
		—	—	クスノキ		
		—	—	アカガシ亜属		
折損		—	—	サヌカイト		
沈線	ナデ	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6	密	良好	赤彩
口縁部ヨコナデユビオサエとミガキ	口縁部ヨコナデナデ	褐灰10YR4/1	黒褐10Y3/1	やや粗	良好	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ヨコナデナデ	黒10Y2/1	黒褐10Y3/1	粗	良好	外面スス付着
沈線	ナデ	黒5Y2/1	にぶい黄2.5Y6/3	粗	良好	
ナデ	ナデ	暗灰N3/	暗灰N3/	粗	良好	
ヨコナデ	ミガキ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい褐7.5YR5/4	密	良好	
口縁部ヨコナデ沈線	口縁部ヨコナデハケ後ナデ	黒褐2.5Y3/1	黄灰2.5Y5/1	密	良好	
口縁部ヨコナデハケ後沈線	口縁部ヨコナデナデ	黄灰2.5Y5/1	灰黄褐10YR5/2	粗	良好	

表12 - 1 掲載遺物一覧 (2)

挿図No.	遺物No.	図版No.	遺構面	遺構名	層名	種別	器形	口径	底径	器高	重量(g)	残存率
22	10	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(29.4)	—	(7.0)	—	5%以下
22	11	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(35.2)	—	(5.8)	—	10%
22	12	49	—	10溝	12	弥生土器	甕	(41.8)	—	(5.2)	—	5%
22	13	51	—	—	12	弥生土器	壺	(19.5)	—	(10.9)	—	20%
22	14	51	10	—	—	弥生土器	甕	(19.1)	7.0	16.6	—	40%
22	15	51	10	—	—	弥生土器	壺	15.3	5.4	25.2	—	80%
22	16	51	—	—	12	石製品	石棒	長(5.5)	幅(2.8)	厚(1.1)	32.5	20%以下
22	17	51	—	—	12	石製品	石鏃	長(2.2)	幅(1.05)	厚(0.35)	0.7	50%以下
24	1	52	9	20落込	—	石製品	石鏃	長(3.9)	幅(1.7)	厚(0.5)	3.2	100%
24	2	52	9	20落込	—	弥生土器	甕	—	—	(3.1)	—	10%
24	3	52	9	20落込	—	弥生土器	鉢?	(16.8)	—	(5.8)	—	20%
24	4	52	9	20落込	—	弥生土器	壺	(14.9)	—	(13.2)	—	30%
24	5	52	9	20落込	—	弥生土器	壺	(20.6)	—	(10.0)	—	20%
24	6	52	9	20落込	—	弥生土器	壺	(19.0)	—	(11.5)	—	50%
26	1	55	9	24石器集中部	11	弥生土器	広口壺	—	—	(2.2)	—	5%以下
26	2	55	9	24石器集中部	11	弥生土器	甕	(19.2)	—	(3.7)	—	5%以下
26	3	53	9	24石器集中部	11(上)	石製品	石鏃	長(3.4)	幅(1.2)	厚(0.35)	1.6	100%
26	4	53	9	24石器集中部	—	石製品	石鏃	長(3.8)	幅(1.5)	厚(0.4)	2.7	95%
26	5	53	9	24石器集中部	—	石製品	石鏃?	長(3.4)	幅(1.05)	厚(0.55)	1.8	95%
26	6	53	9	24石器集中部	—	石製品	小型石鏃	長(2.45)	幅(1.1)	厚(0.3)	0.8	100%
26	7	53	9	24石器集中部	—	石製品	不明	長(2.5)	幅(0.6)	厚(0.3)	0.4	—
26	8	53	9	24石器集中部	—	石製品	石鏃?	長(2.2)	幅(1.0)	厚(0.4)	0.9	—
26	9	54	9	24石器集中部	—	石製品	楔形剥片	長(7.5)	幅(6.8)	厚(0.8)	26.7	100%
26	10	55	9	24石器集中部	11(上)	石製品	残核	長(5.3)	幅(2.8)	厚(2.0)	39.7	—
26	11	54	9	24石器集中部	—	石製品	ハンマー	長(8.4)	幅(5.3)	厚(3.35)	178.5	100%?
26	12	54	9	24石器集中部	—	石製品	石戈?	長(8.35)	幅(5.5)	厚(2.8)	94.3	50%以下
27	1	56	—	—	11	石製品	石鏃	長(4.0)	幅(1.45)	厚(0.4)	2.3	99%
27	2	56	—	—	11	石製品	石鏃	長(3.1)	幅(2.1)	厚(0.35)	1.4	95%
27	3	56	—	—	11	石製品	石鏃	長(3.7)	幅(1.8)	厚(0.4)	2.4	100%
27	4	56	—	—	11	石製品	石鏃	長(2.3)	幅(1.8)	厚(0.4)	2.0	90%
27	5	55	—	—	11	石製品	石庖丁	長(3.8)	幅(2.7)	厚(0.8)	10.8	20%以下
27	6	55	—	—	11	石製品	磨製石斧	長(7.4)	幅(5.6)	厚(2.4)	154.8	30%
27	7	55	—	—	11	石製品	敲打具?	長(4.0)	幅(2.1)	厚(2.8)	42.0	100%
27	8	56	—	—	11	石製品	ハンマー?	長(6.25)	幅(5.25)	厚(2.4)	61.6	100%
27	9	57	—	—	11	弥生土器	壺	—	—	(3.6)	—	5%以下
27	10	57	—	—	11	弥生土器	壺	(14.7)	—	(5.6)	—	5%以下
27	11	57	—	—	11	弥生土器	壺	(16.9)	—	(4.9)	—	5%
27	12	57	—	—	11	弥生土器	短頸壺	(8.4)	—	(4.2)	—	5%以下
27	13	57	—	—	11	弥生土器	甕	(18.8)	—	(6.6)	—	5%以下
27	14	57	—	—	11	弥生土器	甕	(31.5)	—	(5.9)	—	5%以下
27	15	57	—	—	11	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	—	5%以下
27	16	57	—	—	11	弥生土器	把手付直口甕	—	—	(3.6)	—	5%以下
27	17	58	—	—	11	弥生土器	甕	—	12.0	(11.8)	—	10%
30	1	59	8	22土坑	—	弥生土器	甕	(31.0)	—	(3.5)	—	5%以下
30	2	59	8	23土坑	—	弥生土器	甕	(28.4)	—	(5.8)	—	20%
31	1	60	—	—	10	石製品	石鏃	長(4.8)	幅(1.75)	厚(0.65)	5.4	95%
31	2	60	—	—	10	石製品	石鏃	長(3.65)	幅(3.2)	厚(0.6)	3.4	100%
31	3	59	—	—	10	弥生土器	壺	—	—	(6.1)	—	5%以下
31	4	59	—	—	10	弥生土器	壺	—	—	(6.5)	—	5%以下
31	5	59	—	—	10	弥生土器	壺	—	7.1	(20.5)	—	50%?
31	6	59	—	—	10	弥生土器	甕	(16.7)	(5.0)	<24>	—	10%
31	7	59	—	—	10	弥生土器	壺	(21.0)	6.8	37.4	—	80%
33	1	61	7	18溝	—	弥生土器	壺	(24.4)	—	(13.1)	—	20%
35	1	67	—	—	8	弥生土器	甕	(15.8)	—	(4.8)	—	5%以下
35	2	61	6	17流路	—	弥生土器	甕	(23.2)	—	(14.3)	—	10%
35	3	61	6	17流路	—	弥生土器	甕	(27.8)	—	(8.4)	—	5%以下

表12 - 2 掲載遺構一覧 (2)

外面調整 (人為的特徴)	内面調整 (自然的特徴)	外面色調	内面色調	胎土(材質)	焼成	特 徴
口縁部ヨコナデユビオサエ後ナデ	口縁部ヨコナデナデ	にぶい黄2.5Y6/3	暗灰黄2.5Y5/2	粗	良好	
口縁部ヨコナデミガキ	ミガキ	にぶい黄橙7.5YR6/4	暗灰黄2.5Y5/3	密	良好	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ヨコナデナデ	黒褐10Y3/1	にぶい黄橙10YR6/4	粗	良好	
ハケ後丁寧なナデヘラ描沈線	口縁部ミガキ、頸部丁寧なナデ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗	良好、軟質	生駒西麓産
口縁部ヨコナデ、胴部ハケとヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後ヘラミガキ	オリーブ黒5Y3/1	灰黄褐10YR6/2	やや粗	良	
横方向のヘラミガキ後、頸部直線文	ヘラミガキ	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	やや粗	良	
擦痕、研磨痕		—	—	スレート(変成を受けている粘板岩)		
鋸歯状、折損		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
口縁部ヨコナデナデ	口縁部ヨコナデヨコナデ後沈線	褐灰10YR4/1	黄灰2.5Y6/1	密	良	
口縁部ヨコナデナデ後ミガキ	口縁部ヨコナデミガキ	灰褐10YR4/2	にぶい黄橙10YR6/3	密		
口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ後直線文	ミガキとユビオサエ	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	密	良	
ハケ後ミガキ直線文	口縁部ハケユビオサエ後ミガキ	灰褐10YR4/2	黒褐2.5Y3/1	密	良	
口縁部ヨコナデミガキ	口縁部ヨコナデハケ後ミガキ	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙5YR6/4	密	良好	
ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい橙7.5YR7/4	密	良好	
口縁部ヨコナデハケ	ヨコナデ	黒褐10YR3/1	にぶい黄褐10YR5/3	やや粗	良好	
		—	—	サヌカイト		
先端折損		—	—	サヌカイト		
先端折損		—	—	サヌカイト		
二次加工		—	—	サヌカイト		
二次加工		—	—	サヌカイト		
二次加工、割れ		—	—	サヌカイト		
敲打痕		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
敲打痕(弱い)		—	—	サヌカイト(良質)		
折損		—	—	サヌカイト		
先端欠損		—	—	サヌカイト		
ガジリ		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
先端折損		—	—	サヌカイト		
穿孔		—	—	結晶片岩 緑泥石片岩		
敲打痕。敲打中に折損?、二次利用?		—	—	砂質ホルンフェルス(砂岩の熱変成)		
敲打痕。細かな作業に使用?	被熱無く、風化。	—	—	石英閃緑岩		
敲打痕(一方向のみ)		—	—	サヌカイト		
ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐10YR6/2	褐灰10YR5/1	やや粗	良	
ナデ後櫛描直線文	ミガキ	にぶい黄橙10YR6/3	浅黄2.5Y7/3	やや粗	良、やや軟質	
口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後ヘラミガキ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗	良	
櫛描直線文	ユビオサエ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい橙7.5YR7/3	やや粗	良、やや軟質	
口縁部ヨコナデ板状工具による擦過痕	口縁部ヨコナデユビオサエ後ナデ	黒褐10YR3/2	黒褐10YR3/2	やや粗	良、やや軟質	外面スス付着、生駒西麓産
口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR5/3	やや密	良	
ヨコナデとハケ	ユビオサエとナデ	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	密	良	
ナデ	ナデ	黒褐2.5Y3/1	黒褐2.5Y3/1	やや密	良	
ナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐10YR6/2	にぶい褐7.5YR5/3	やや粗	良	
口縁部ヨコナデナデ	口縁部ヨコナデナデ	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	密	良	
口縁部ヨコナデミガキ	ハケ部分的にミガキ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	やや粗	良	
折損		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
ヘラミガキ後直線文	ヘラミガキ	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2	やや粗	良	
ヘラミガキ後直線文	ヘラミガキ	褐灰10YR4/1	にぶい褐7.5YR5/3	やや粗	良	外面スス付着
頸部ハケ後櫛描文、胴部ミガキ	ユビオサエ後ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	密	良好	
口縁部ヨコナデ、胴部ラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2	やや粗	良	
ヘラミガキ後、頸部に直線文	口縁部～頸部ヘラミガキ、体部ハケ後ヘラミガキ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	密	良	頸部下位を境として異種胎土を使用
口縁部ヨコナデ粗いハケとナデ	口縁部ヨコナデ波状文ハケ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	密	良	
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部タタキ後ナデ	にぶい黄褐10YR7/3	浅黄橙10YR8/3	密	良	外面スス付着
ハケメ	ユビオサエナデ	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1	密	良	内面全体にコゲ、生駒西麓産
口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケメ	口縁部ハケメ、胴部ナデ	にぶい赤橙5YR5/3	灰褐7.5YR5/2	やや粗	堅緻	生駒西麓産

表13 - 1 掲載遺物一覧 (3)

挿図No	遺物No	図版No	遺構面	遺構名	層名	種別	器形	口径	底径	器高	重量(g)	残存率
35	4	61	6	17流路	—	弥生土器	壺	(22.8)	—	(7.7)	—	5%以下
35	5	62	6	17流路	—	弥生土器	壺	(30.0)	—	(4.4)	—	5%以下
35	6	62	6	17流路	—	弥生土器	壺	—	—	(9.9)	—	5%以下
35	7	62	6	17流路	—	弥生土器	壺	—	—	(5.7)	—	5%以下
35	8	62	6	17流路	—	弥生土器	壺	—	—	(7.8)	—	5%以下
35	9	62	6	17流路	—	石製品	磨製石剣	長(5.55)	幅(2.05)	厚(1.0)	15.8	25%以下
35	10	62	6	17流路	—	木製品	加工木	幅(3.7)	厚(1.9)	(39.7)	—	—
36	1	63	6	8流路	—	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	—	5%以下
36	2	63	6	8流路	—	弥生土器	壺	—	—	(4.2)	—	15%
36	3	65	6	8流路	—	弥生土器	壺	—	—	(5.7)	—	5%以下
36	4	63	6	8流路	—	弥生土器	壺	(16.6)	—	(3.3)	—	15%
36	5	63	6	8流路	—	弥生土器	壺	(23.0)	—	(5.9)	—	30%
36	6	64	6	8流路	—	弥生土器	壺	(26.3)	—	(8.0)	—	15%
36	7	63	6	8流路	—	弥生土器	壺	(25.4)	—	(7.3)	—	20%
36	8	63	6	8流路	—	弥生土器	鉢	—	—	(1.7)	—	5%以下
36	9	65	6	8流路	—	弥生土器	鉢	—	—	(3.6)	—	5%以下
36	10	64	6	8流路	—	弥生土器	鉢	—	—	(6.4)	—	15%
36	11	65	6	8流路	—	弥生土器	鉢	—	—	(4.1)	—	5%以下
36	12	65	6	8流路	—	弥生土器	鉢	—	—	(5.8)	—	5%以下
36	13	65	6	8流路	—	弥生土器	蓋	—	(2.1)	(1.6)	—	10%
36	14	64	6	8流路	—	弥生土器	蓋	—	—	(1.7)	—	5%以下
36	15	64	6	8流路	—	弥生土器	高杯	(21.0)	—	(8.6)	—	45%
36	16	65	6	8流路	—	弥生土器	有孔壺	—	(6.0)	(4.2)	—	5%
36	17	64	6	8流路	—	弥生土器	無頸壺	(9.8)	—	(4.9)	—	15%
36	18	64	6	8流路	—	弥生土器	無頸壺	(19.0)	—	(6.2)	—	10%
36	19	63	6	8流路	—	弥生土器	甕	(19.6)	—	(2.9)	—	15%
36	20	64	6	8流路	—	弥生土器	甕	(16.6)	—	(6.0)	—	10%
36	21	63	6	8流路	—	弥生土器	甕	(18.6)	—	(3.2)	—	15%
36	22	64	6	8流路	—	弥生土器	甕	(29.8)	—	(8.3)	—	20%
36	23	63	6	8流路	—	弥生土器	甕	(35.6)	—	(3.0)	—	15%
36	24	63	6	8流路	—	弥生土器	甕	(38.0)	—	(2.2)	—	15%
37	1	66	6	8流路	—	石製品	石鏃	長(3.0)	幅(1.15)	厚(0.75)	5.2	80%
37	2	66	6	8流路	—	石製品	石鏃	長(3.6)	幅(1.95)	厚(0.65)	2.2	70%
37	3	66	6	8流路	—	石製品	石鏃	長(5.25)	幅(1.8)	厚(0.85)	9.6	100%
37	4	66	6	8流路	—	石製品	砥石	長(5.6)	幅(3.3)	厚(2.4)	11.8	100%?
37	5	66	6	8流路	—	石製品	石庖丁	長(3.8)	幅(2.9)	厚(0.45)	6.1	20%以下
37	6	66	6	8流路	—	石製品	石庖丁	長(4.5)	幅(4.2)	厚(0.55)	12.5	20%以下
37	7	67	6	8流路	—	石製品	楔形剥片	長(8.1)	幅(5.75)	厚(1.55)	78.2	100%
37	8	67	6	8流路	—	石製品	楔形剥片	長(8.9)	幅(3.2)	厚(2.05)	72.4	100%
37	9	65	6	8流路	—	土製品	円盤	長4.4	短4.2	厚0.8	—	100%
37	10	65	6	8流路	—	土製品	円盤	長5.9	短5.6	厚0.9	—	100%
39	1	68	5	9溝	—	弥生土器	高杯	(23.0)	—	(2.0)	—	5%以下
39	2	68	5	9溝	—	弥生土器	壺	—	—	(4.4)	—	5%以下
39	3	68	5	9溝	—	弥生土器	高杯	—	—	(3.8)	—	5%以下
40	1	68	5	13溝	—	弥生土器	鉢	(36.0)	—	(5.9)	—	5%以下
41	1	69	5	6土坑	—	弥生土器	壺	(28.0)	—	(15.4)	—	20%
41	2	69	5	6土坑	—	弥生土器	壺	—	—	(4.7)	—	5%以下
41	3	69	—	—	7	弥生土器	甕	(16.6)	—	(4.3)	—	5%以下
43	1	69	—	—	6	弥生土器	甕	(14.0)	—	(7.9)	—	5%以下
43	2	69	—	—	6	弥生土器	甕	(13.9)	—	(3.3)	—	5%以下
45	1	69	—	—	4	弥生土器	甕	(8.0)	4.2	9.8	—	50%
45	2	69	—	—	4	弥生土器	甕	(17.5)	—	(5.0)	—	5%
47	1	70	2	2溝	—	須恵器	杯蓋	(12.6)	—	4.2	—	70%
47	2	70	2	3溝	—	土製品	円筒埴輪	—	—	(14.4)	—	5%以下
49	1	71	2	7土坑	—	土師器	小形丸底壺	(7.4)	—	8.6	—	80%
49	2	71	2	7土坑	—	土師器	鉢	(14.6)	3.0	5.9	—	90%
49	3	71	2	7土坑	—	土師器	小形器台	—	(8.8)	(5.4)	—	50%

表13 - 2 掲載遺構一覧 (3)

外面調整 (人為的特徴)	内面調整 (自然的特徴)	外面色調	内面色調	胎土(材質)	焼成	特 徴
口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ	にぶい褐7.5YR5/4	灰黄褐10YR5/2	密	良	生駒西麓産
口縁部ヨコナデ	ヨコナデと粗いハケメ	暗灰黄2.5Y4/2	にぶい黄橙10YR6/3	密	良	
ハケメ後ヘラミガキ	ケズリ後ヘラミガキ	灰黄褐10YR4/2	褐灰10YR4/1	密	良	生駒西麓産
ナデ後直線文と扇形文	ユビオサエ	灰白2.5Y8/2	黄灰2.5Y4/1	粗	良好	
ナデ後扇形文	密なヨコヘラミガキ	暗オリーブ褐2.5Y3/3	灰黄褐10YR6/2	密	良好	生駒西麓産
事故品? 未成品?		—	—	サヌカイト		
		—	—	カヤ		
ミガキ	ミガキ	黒褐2.5Y3/1	暗灰黄2.5Y4/2	密	良好	
口縁部ヨコナデ後直線文、タタキとハケ	口縁部ハケナデ	黒褐2.5Y3/1	褐灰10YR4/1	密	良	
櫛描列点文	ハケ	黒褐2.5Y3/1	灰黄褐10YR4/2	密	良好	
櫛描列点文ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	やや粗	良	
ミガキ	ハケ	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗	良好	
口縁部ヨコナデ直線文	口縁部ヨコナデハケ後ミガキ	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/3	やや粗	良好	
口縁部ヨコナデ簾状文ハケ	口縁部ヨコナデハケ	灰黄2.5Y6/2	灰黄2.5Y6/2	やや粗	良	
櫛描列点文	ナデ	黄褐2.5Y5/3	黄褐2.5Y5/3	粗	良好	
櫛描列点文	ナデ	黄褐2.5Y5/3	黒N2/	粗	良好	内面スス付着
口縁部ヨコナデナデ	口縁部ヨコナデナデ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	粗	良	
ハケとヨコナデ	ナデ	灰黄褐10YR6/2	灰N4/	密	良	
ハケ	ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR5/3	粗	良好	
ユビオサエ後ナデ	ナデ	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2	粗	良好	
ナデ	ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	にぶい赤褐5YR5/4	やや粗	良	
口縁部ヨコナデナデ	口縁部ヨコナデユビオサエ後ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	やや粗	良	
ミガキ	ユビオサエ後ナデ	黒褐10YR3/1	にぶい黄褐10YR5/3	粗	良好	
口縁部ヨコナデ細かいミガキ	ユビオサエとナデ	灰黄褐10YR4/2	灰5Y4/1	やや粗	良	
口縁部ヨコナデ、廉状文と直線文と波状文	ミガキ	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1	密	良	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ヨコナデハケ後ナデ?	暗灰N3/	黄灰2.5Y4/1	やや粗	良	
口縁部ヨコナデミガキ	口縁部ヨコナデナデ	黒褐10Y1.7/1	灰黄2.5Y6/2	密	良	
口縁部ヨコナデハケ	口縁部ヨコナデナデ	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1	密	良	
口縁部ヨコナデミガキ	口縁部ハケユビオサエ後ミガキ	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	密	良	
ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR5/2	やや粗	良好	
ヨコナデ	ヨコナデ後ミガキ	暗オリーブ褐2.5Y3/3	黄灰2.5Y4/1	密	良好	
折損		—	—	サヌカイト		
未成品		—	—	サヌカイト		
未成品(失敗?)		—	—	サヌカイト		
穿孔状研磨痕(玉類の仕上げ用?)		—	—	軽石		
		—	—	緑泥石石英片岩		
穿孔		—	—	緑泥石石英片岩		
敲打痕		—	—	サヌカイト		
		—	—	サヌカイト		
ミガキ?	ナデ?	にぶい黄橙10YR6/3	黒7.5Y2/1	密	良	内面スス付着
ミガキ	ミガキ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	密	良	
ヘラミガキ	ヨコナデ	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	やや密	やや不良	
ヘラミガキ後流水文	ヘラミガキ	にぶい黄2.5Y6/3	にぶい黄2.5Y6/3	やや密	良	
ヘラミガキ	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	やや密	良	
口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	やや粗	良	
口縁部ヨコナデハケ後ナデ直線文	口縁部ヨコナデナデとユビオサエ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	密	良	
直線文	ヨコナデとナデ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗	良	
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	にぶい黄橙10YR5/3	にぶい黄橙10YR6/3	密	やや良	
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR6/2	やや密	良	外面スス付着
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2	やや粗	良	
口縁部ナデ、胴部タタキ後ナデ	ナデ	灰黄褐7.5YR4/2	暗黄褐2.5Y5/2	やや粗	良	
口縁部ヨコナデ、胴部タタキ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR5/4	やや密	良	
口縁部回転ナデ回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1	緻密	不良	天井部にヘラ記号
タテハケ	ナデ	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/4	密	やや不良	1方向にスカシ
口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ	灰白2.5Y7/1	にぶい黄橙10YR7/2	密	良	
タテヘラミガキ	タテヘラミガキ	にぶい黄褐10YR5/3	黄褐2.5Y5/3	密	良好	
タテヘラミガキ	ヘラミガキと板ナデ	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	密	良好	4方向円形スカシ



表14 - 1 掲載遺物一覧 (4)

挿図No.	遺物No.	図版No.	遺構面	遺構名	層名	種別	器形	口径	底径	器高	重量(g)	残存率
49	4	71	2	7土坑	—	土師器	高杯	(13.4)	9.9	12.3	—	70%
49	5	71	2	7土坑	—	土師器	庄内式甕	(15.5)	—	(10.3)	—	10%
49	6	71	2	7土坑	—	土師器	庄内式甕	(15.6)	—	(8.3)	—	10%
49	7	71	2	7土坑	—	土師器	壺	(12.9)	—	(5.8)	—	10%
50	1	72	—	—	3	土師器	小形壺	2.5	2.5	3.6	—	100%
50	2	72	—	—	3	土師器	小形壺	3.3	—	2.2	—	100%
50	3	72	—	—	3	土師器	壺	(13.7)	—	(14.2)	—	30%
50	4	72	—	—	3	土製品	円筒埴輪	—	—	(9.3)	—	5%以下
51	1	72	—	—	1	青磁	碗	(15.2)	—	(4.5)	—	5%以下
—	a	40	11	12溝	—	獣骨	シカ					
—	b	40	11	12溝	—	獣骨	大型哺乳類 (シカ?)					
—	c	40	11	12溝	—	獣骨	イノシシ					
—	a	43	—	—	13	石製品	楔形剥片	長(5.7)	幅(4.2)	厚(1.0)	18.5	100%
—	b	43	—	—	13	石製品	楔形石器	長(6.8)	幅(4.9)	厚(1.25)	29.2	70%
—	c	43	—	—	13	石製品	砥石	長(15.3)	幅(7.8)	厚(5.5)	767.5	100%?
—	a	44	—	—	13	石製品	鋳型?砥石?	長(11.1)	幅(5.7)	厚(5.2)	180.6	—
—	b	44	11	(石3)	13	石製品	置石?	長(18.35)	幅(14.4)	厚(10.4)	4,270	100%
—	c	44	11	(石1)	13	石製品	置石?	長(20.6)	幅(14.3)	厚(7.35)	2,450	—
—	d	44	11	(石2)	13	石製品	置石?	長(14.2)	幅(13.55)	厚(9.65)	2,940	—
—	e	44	—	—	13	獣骨	大型哺乳類					
—	f	44	—	—	13(灰)	獣骨	哺乳類					
—	g	44	—	—	13	歯	イノシシ					
—	h	44	—	—	13(黒)	獣骨	哺乳類他					
—	i	44	—	—	13(黒)	獣骨	哺乳類・鳥類 ・フナ属他					
—	a	46	10	25建物	(東)	石製品	剥片	長(1.75)	幅(1.75)	厚(0.35)	1.4	—
—	b	46	10	25建物	最下面	石製品	石核	長(8.5)	幅(7.3)	厚(3.45)	202.6	—
—	a	47	10	25建物	床3^ -ス	獣骨	哺乳類					
—	b	47	10	25建物	床2	獣骨	哺乳類					
—	c	47	10	25建物	床2	骨	魚類					
—	d	47	10	25建物	(東)床1	獣骨	シカ					
—	e	47	10	25建物	床3	骨	ナマズ他					
—	f	47	10	26建物	床3	獣骨	哺乳類他					
—	a	48	10	28ピット	—	木製品	柱根	幅(7.8)	厚(8.8)	(22.5)	—	—
—	b	48	10	34ピット	—	木製品	柱根	幅(7.9)	厚(8.3)	(35.2)	—	—
—	a	49	10	26土坑	—	石製品	自然石	長(2.8)	幅(1.4)	厚(1.0)	3.8	—
—	a	50	10	10溝	13崩 落土	獣骨	大型哺乳類					
—	b	50	—	—	13(黒)	獣骨	イノシシ					
—	c	50	—	—	13(黒)	獣骨	イノシシ					
—	d	50	—	—	13(黒)	獣骨	シカ					
—	e	50	—	—	13(黒)	獣骨	哺乳類					
—	f	50	10	10溝	12(3)	獣骨	イノシシ					
—	a	51	10	(石1)	—	石製品	置石?	長(21.7)	幅(15.0)	厚(13.0)	6.5(kg)	100%
—	a	52	9	20落込	—	獣骨	哺乳類					
—	a	53	9	24石器集中部	—	石製品	剥片他					
—	a	54	9	24石器集中部	—	石製品	楔形剥片	長(4.6)	幅(2.6)	厚(1.35)	16.4	90%
—	a	55	9	24石器集中部	—	歯	哺乳類					
—	a	56	—	—	11	石製品	楔形石核	長(8.15)	幅(5.7)	厚(3.85)	186.6	100%
—	b	56	—	—	11	石製品	自然石	長(6.5)	幅(5.6)	厚(3.6)	159.5	—

表14 - 2 掲載遺構一覧 (4)

外面調整 (人為的特徴)	内面調整 (自然的特徴)	外面色調	内面色調	胎土(材質)	焼成	特 徴
タテヘラミガキ	杯部ヘラミガキ、脚部ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	密	良	4方向円形スカシ
口縁部ヨコナデ、胴部平行タタキの後ハケメ	口縁部ハケメ後ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい黄橙10YR6/3	灰黄褐10YR5/2	密	良	
口縁部ヨコナデ、胴部平行タタキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	橙5YR6/6	灰黄褐10YR6/2	密	良	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	密	良	
ナデ	ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4	やや密	良	
ナデ	ナデ	浅黄橙10YR8/3	黒褐10YR3/1	やや密	良	黒斑あり
口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄橙10YR7/3	やや密	良	
タテハケ	ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	にぶい橙7.5YR7/4	やや密	良	1方向に円孔
施釉		灰オリーブ7.5Y5/2	灰オリーブ7.5Y5/2	緻密	良	
関節頭周辺に解体痕あり	左下顎骨、下顎枝の下顎高より上方が遺存、筋突起の先端破損	—	—			大きい
	舌骨	—	—			
	左の大腿骨、近位端見癒合、遠位部破損、骨頭から約8cm遺存	—	—			幼体
敲打痕		—	—	サヌカイト		
敲打痕 微細剥離。使用中に縦割れ		—	—	サヌカイト		
平坦・溝状研磨痕		—	—	シルト質砂岩(セリサイト含)		
被熱痕、煤付着(被熱温度は高くないが、長時間か?)		—	—	シルト質砂岩(セリサイト含)		
弱い煤付着	河床の巨礫	—	—	縞状中粒黒雲母花崗岩		
		—	—	粗粒黒雲母片麻岩		
	平坦部は石の摂理面	—	—	細粒白雲母・黒雲母花崗岩		
	長骨片	—	—			
焼骨	骨片	—	—			
	下顎第3大白歯、歯冠のみ出土、未萌出	—	—			
焼骨	骨片、角、長骨片	—	—			
焼骨	長骨片、角、四肢骨、主鯉蓋骨	—	—			
微細剥離		—	—	サヌカイト		
旧石器等の古い石核を再利用か		—	—	サヌカイト		
焼骨	長骨片、骨幹約4cm遺存、骨幹は横径約1cmの三角柱	—	—			
	歯	—	—			
	骨片多数	—	—			
	後頭骨、大後頭孔と底部のみ遺存	—	—			大きいためか?
焼骨6を含む	椎骨(尾・腹)多数、鱗棘(胸・担)	—	—			
焼骨10を含む	骨片多数	—	—			
		—	—	クスノキ		
		—	—	ヤブツバキ		
	少し粒子が粗い	—	—	玉髓またはメノウ		
	骨片	—	—			
	右下顎第1切歯、頰側のエナメル質のみ遺存	—	—			
	後頭骨	—	—			大きいので成体
椎体下面に解体痕あり	腰椎、後関節突起部破損、後椎体板未癒合	—	—			
	肩甲骨?	—	—			
	右下顎骨、第3乳白歯~第1大白歯の歯槽部遺存、第3・4乳白歯釘植	—	—			1歳程度
煤付着、磨耗痕、破断?	被熱温度は低い(高いと雲母が痛む)	—	—	黒雲母片麻岩(含ざくろ石)		生駒山系~
海綿質のみ遺存		—	—			
敲打痕 折損		—	—	サヌカイト		
	エナメル質の細片のみ遺存	—	—			
敲打痕(四方にあり)		—	—	サヌカイト		
		—	—	角閃石閃緑岩		

表15 - 1 掲載遺物一覧 (5)

挿図No.	遺物No.	図版No.	遺構面	遺構名	層名	種別	器形	口径	底径	器高	重量(g)	残存率
—	a	58	—	—	11	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	—	5%以下
—	b	58	9	(石2)	—	石製品	置石?	長(16.6)	幅(15.6)	厚(11.2)	3,250	100%
—	c	58	9	(石1)	—	石製品	置石?	長(16.3)	幅(15.6)	厚(13.6)	5(kg)	100%?
—	d	58	9	(石3)	—	石製品	置石?	長(45.2)	幅(26.3)	厚(16.5)	18.5(kg)	100%?
—	a	60	—	—	10	石製品	楔形剥片	長(6.5)	幅(3.25)	厚(2.6)	47.8	100%
—	b	60	8	—	—	石製品	楔形剥片	長(3.65)	幅(3.4)	厚(0.55)	6.8	100%
—	c	60	—	—	10	石製品	楔形剥片	長(3.9)	幅(3.1)	厚(1.8)	25.4	60%
—	a	61	7	18溝	—	石製品	楔形剥片	長(4.75)	幅(4.4)	厚(2.45)	66.0	80%
—	a	62	6	17流路	—	石製品	石庖丁?	長(15.9)	幅(8.7)	厚(1.15)	172.6	50%?
—	a	67	6	8流路	—	石製品	楔形剥片	長(8.3)	幅(4.8)	厚(1.4)	62.5	100%
—	b	67	—	—	8	獣骨	イノシシ					
—	a	68	5	12土坑	—	弥生土器	甕	—	—	(25.6)	—	30%
—	b	68	5	5土坑	—	貝	カガミガイ科?					
—	a	69	—	—	6	石製品	砥石	長(5.8)	幅(4.25)	厚(3.2)	16.1	100%?
—	a	70	2	1溝	—	石製品	台石?	長(16.0)	幅(13.2)	厚(6.2)	2,020	100%?

表15 - 2 掲載遺構一覧（5）

外面調整（人為的特徴）	内面調整（自然的特徴）	外面色調	内面色調	胎土(材質)	焼成	特 徴
ナデ?	ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	密	良好	
煤付着、河原石を割ったもの		—	—	片麻岩黒雲母		
剥離、河原石を割ったもの		—	—	中粒黒雲母花崗岩		
巨礫（人為の痕はみられないが、自然では運ばれない大きさ）	少し縞状	—	—	粗粒黒雲母花崗岩		
敲打痕		—	—	サヌカイト		
微細剥離痕、使用痕あり		—	—	サヌカイト		
敲打痕、縦割れ		—	—	サヌカイト		
敲打痕 折損		—	—	サヌカイト		
擦痕、剥離		—	—	緑泥石片岩		
		—	—	サヌカイト		
	左第1切歯(永久歯)の萌出開始	—	—			1才前後
ミガキ	ナデ	明黄褐10YR6/6	暗灰黄2.5Y5/2	密	良好	
		—	—			
研磨痕		—	—	軽石		
磨耗痕		—	—	細粒黒雲母花崗岩		



# 図 版

遺構 図版 1 ~ 38

遺物 図版 39 ~ 72



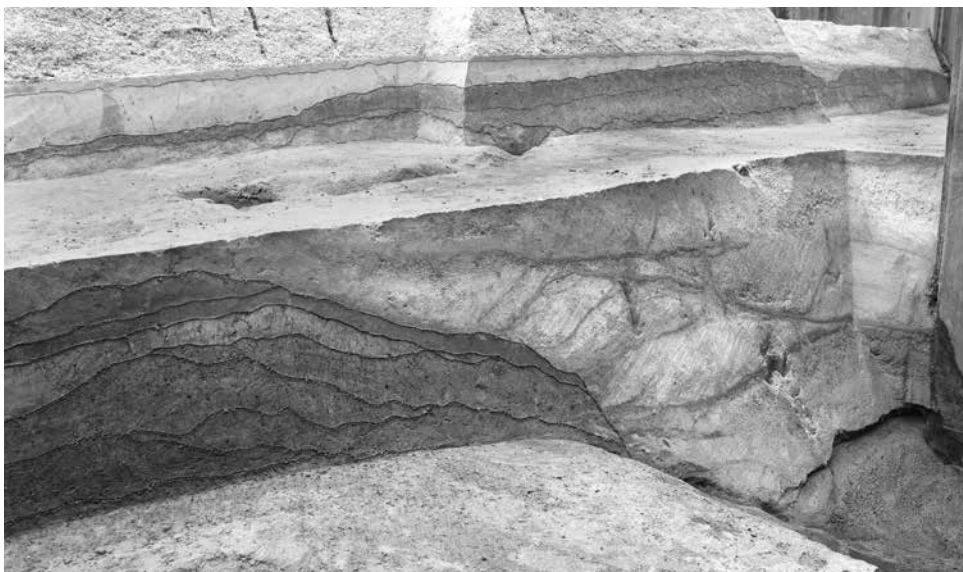
# 図版1 基本層序(1)



1. 08-1-1区 西壁断面（東から）



2. 08-1-1区 南法面断面（北から）



3. 08-1-1区 南法面断面（北から）



## 図版2 基本層序(2)



1. 08-1-2区 西壁断面 (東から)



2. 08-1-3区 東壁断面 (南西から)



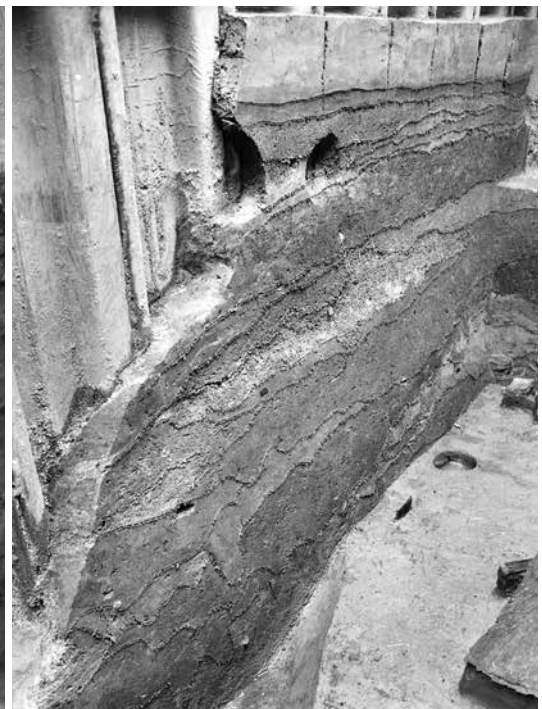
3. 08-1-2区 北壁断面 (南西から)



4. 08-1-3区 東壁断面 (西から)



5. 08-1-2区 南北アゼ断面 (西から)



6. 08-1-3区 北壁断面 (南西から)



1. 08-1-1区 全景（西から）



2. 08-1-1区 21ピット断面（南から）

図版4 第11面 08-1-2区



1. 08-1-2区 全景（西から）



2. 08-1-2区 27溝断面（北西から）



1. 08-1-3区 14溝断面 (南西から)



2. 08-1-3区 13落込断面 (南東から)



3. 08-1-3区 北端全景 (西から)

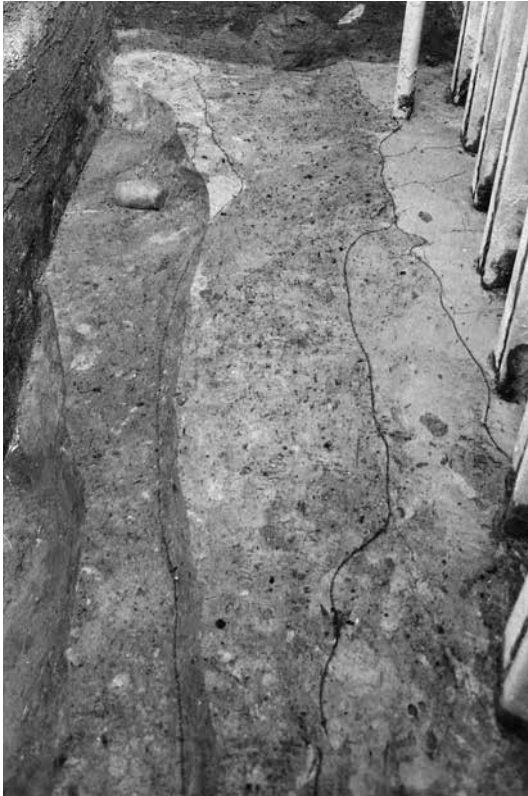


4. 08-1-3区 11木棺墓検出状況 (南西から)



5. 08-1-3区 11木棺墓断面 (西から)

図版6 第11面 08-1-3区



1. 08-1-3区 12溝検出状況（西から）



2. 08-1-3区 12溝近接（西から）



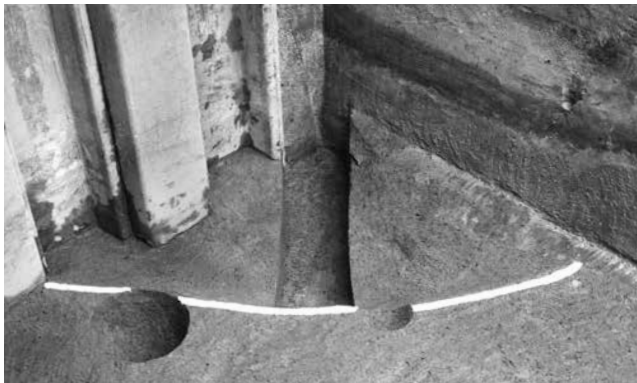
3. 08-1-3区 12溝遺物出土状況（西から）



4. 08-1-3区 12溝断面（西から）



1. 08-1-1区 全景（西から）



2. 08-1-1区 20土坑近接（北西から）



3. 08-1-1区 20土坑断面（南西から）



4. 08-1-1区 赤色顔料出土状況（北から）

図版8 第10面 08-1-2区



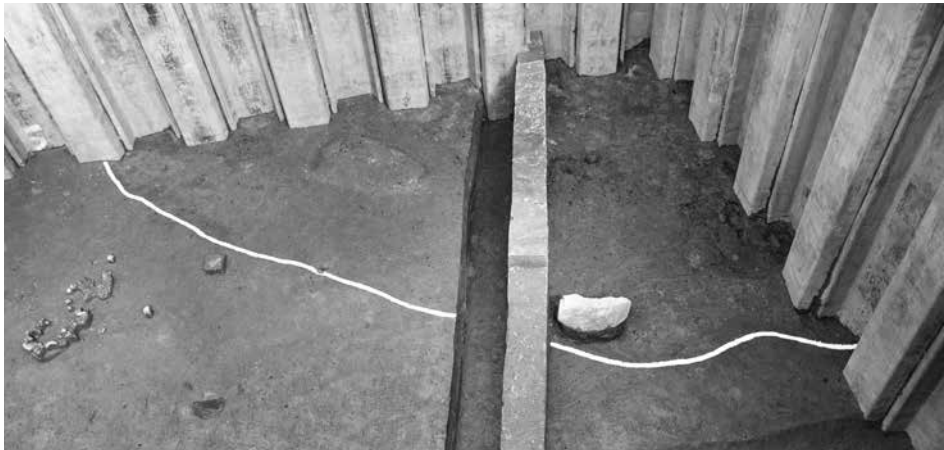
1. 08-1-2区 全景（北から）



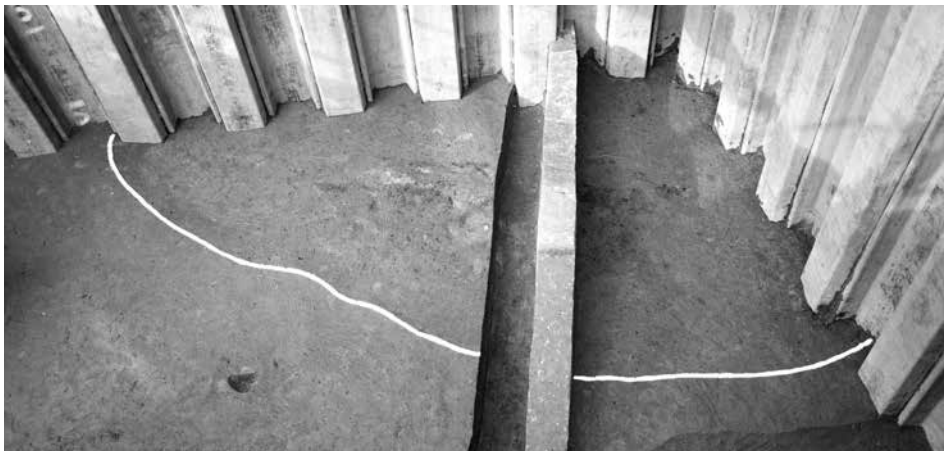
2. 08-1-2区 25建物南北断面（北から）



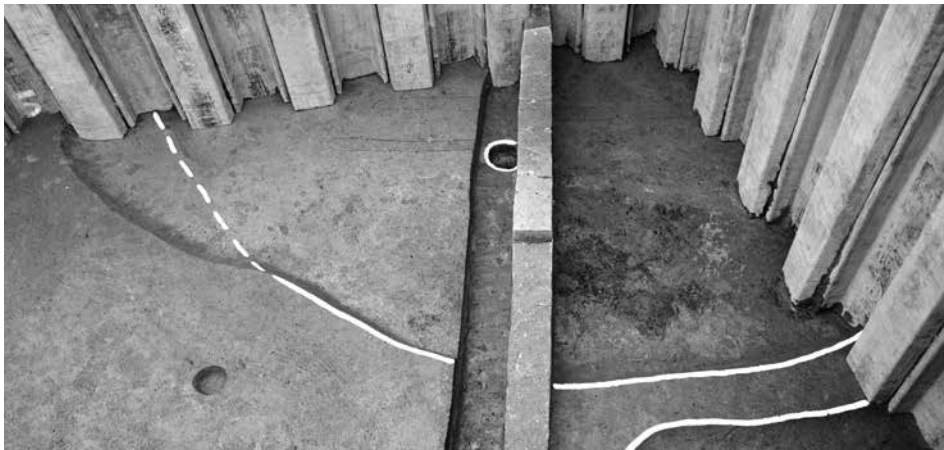
3. 08-1-2区 25建物東西断面（西から）



1. 08-1-2区 25建物(床1)近接(南から)



2. 08-1-2区 25建物(床2)近接(南から)



3. 08-1-2区 25建物(床3)近接(南から)



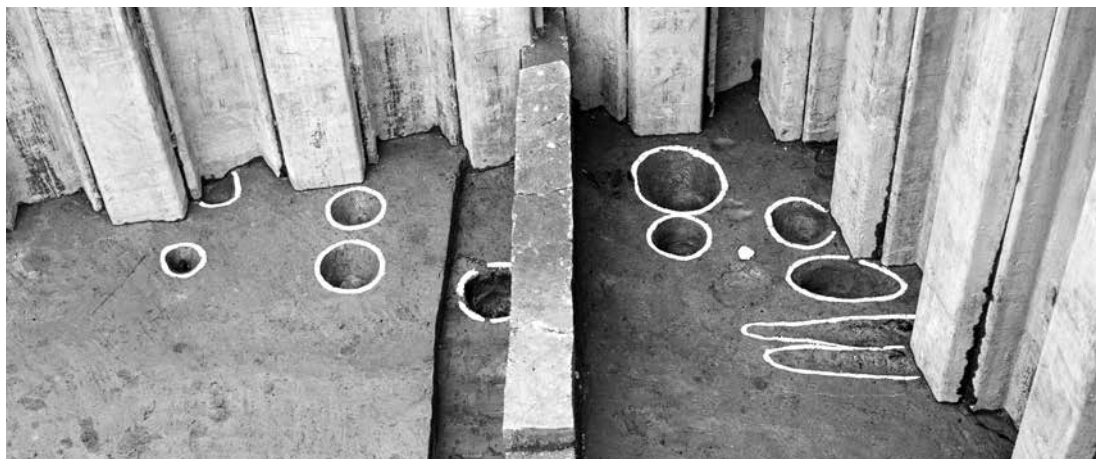
4. 08-1-2区 25建物最終面遺構検出状況(南から)



5. 08-1-2区 25建物最終面遺構検出状況(東から)



図版10 第10面 08-1-2区



1. 08-1-2区 25 建物最終面遺構完掘状況 (南から)



2. 08-1-2区 28・29ピット完掘状況 (南から)



3. 08-1-2区 30ピット完掘状況 (南から)



4. 08-1-2区 28ピット断面 (南から)



5. 08-1-2区 37ピット断面 (南から)



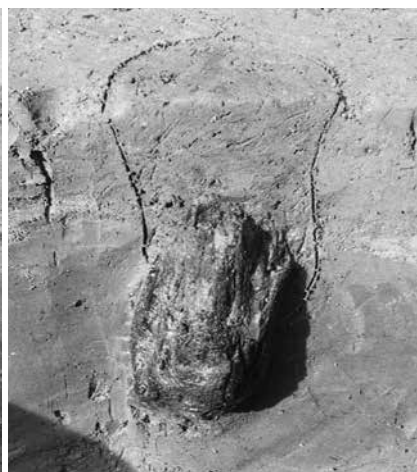
6. 08-1-2区 31ピット断面 (南から)



7. 08-1-2区 38ピット断面 (西から)



8. 08-1-2区 29ピット断面 (南から)



9. 08-1-2区 35ピット断面 (南から)

図版11 第10面 08-1-3区



1. 08-1-3区 北端全景 (南東から)



2. 08-1-3区 10溝検出状況 (南から)



3. 08-1-3区 10溝近接 (西から)

図版12 第9面 08-1-1・2区



1. 08-1-1区 全景（西から）



2. 08-1-2区 全景（北から）

図版13 第9面 08-1-2区



1. 08-1-2区 24石器集中部検出状況（南から）



2. 08-1-2区 24石器集中部出土状況（南西から）

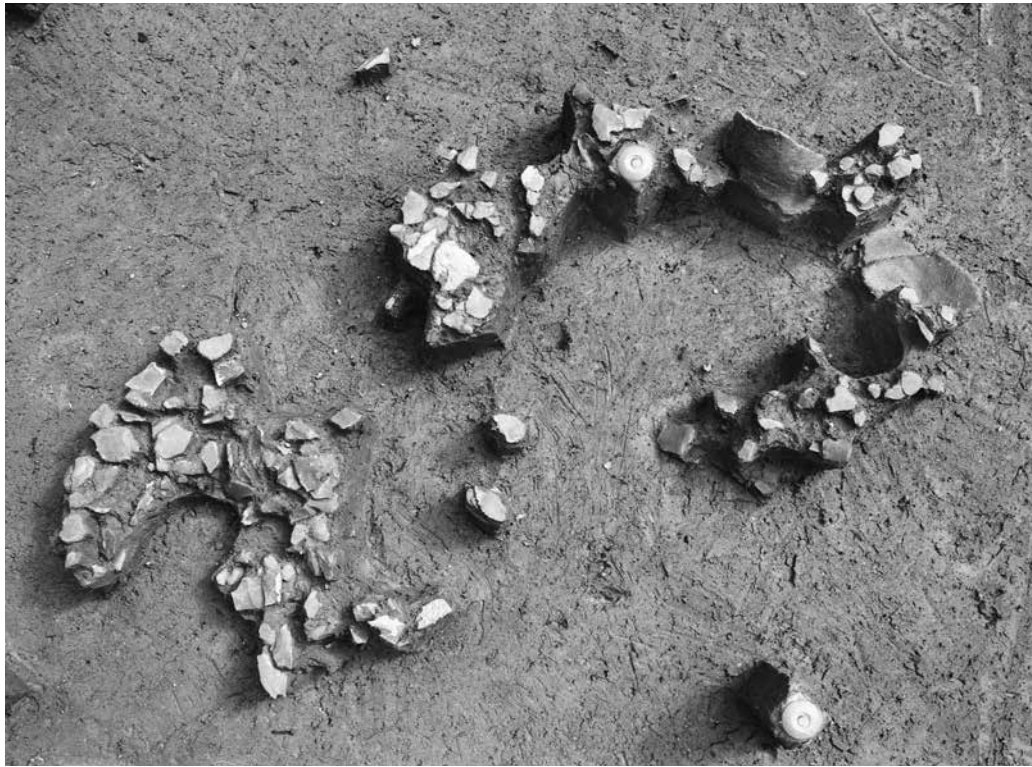


3. 08-1-2区 24石器集中部作業風景（南西から）



4. 08-1-2区 24石器集中部出土状況（南から）

図版14 第9面 08-1-2・3区



1. 08-1-2区 24石器集中部出土状況（北から）



2. 08-1-2区 24石器集中部作業風景（南から）



3. 08-1-2区 24石器集中部出土状況（南から）



4. 08-1-3区 南端全景（西から）

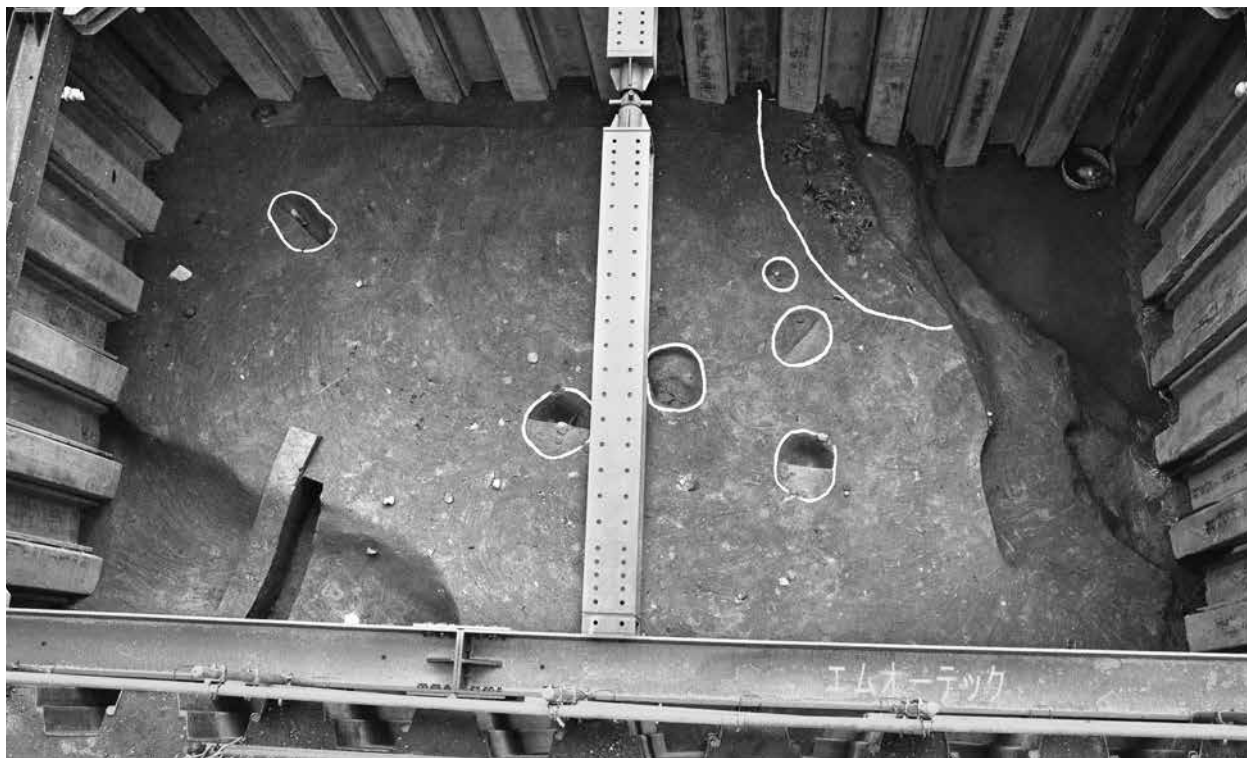


1. 08-1-1区 全景（西から）

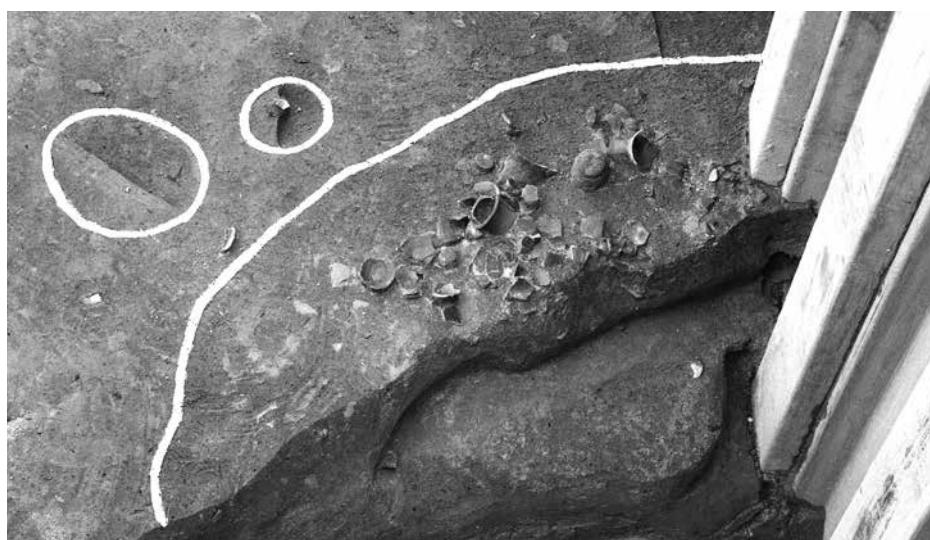


2. 08-1-1区 19流路断面（南西から）

図版16 第8面 08-1-2区



1. 08-1-2区 全景（北から）



2. 08-1-2区 20落込遺物出土状況（西から）



3. 08-1-2区 遺構検出状況（西から）



4. 08-1-2区 遺構掘削状況（西から）



1. 08-1-3区 北端全景 (南東から)



2. 08-1-3区 南端全景 (西から)



図版18 第7面 08-1-1・2区



1. 08-1-1区 全景（西から）



2. 08-1-1区 17土坑近接（北西から）



1. 08-1-2区 全景（北から）



2. 08-1-2区 遺物出土状況（南から）



3. 08-1-2区 第10層遺物近接（南から）



4. 08-1-2区 第10層遺物近接（東から）

図版20 第7面 08-1-2・3区



1. 08-1-2区 18溝近接 (南から)



2. 08-1-2区 18溝断面 (西から)



3. 08-1-3区 北端全景 (南西から)

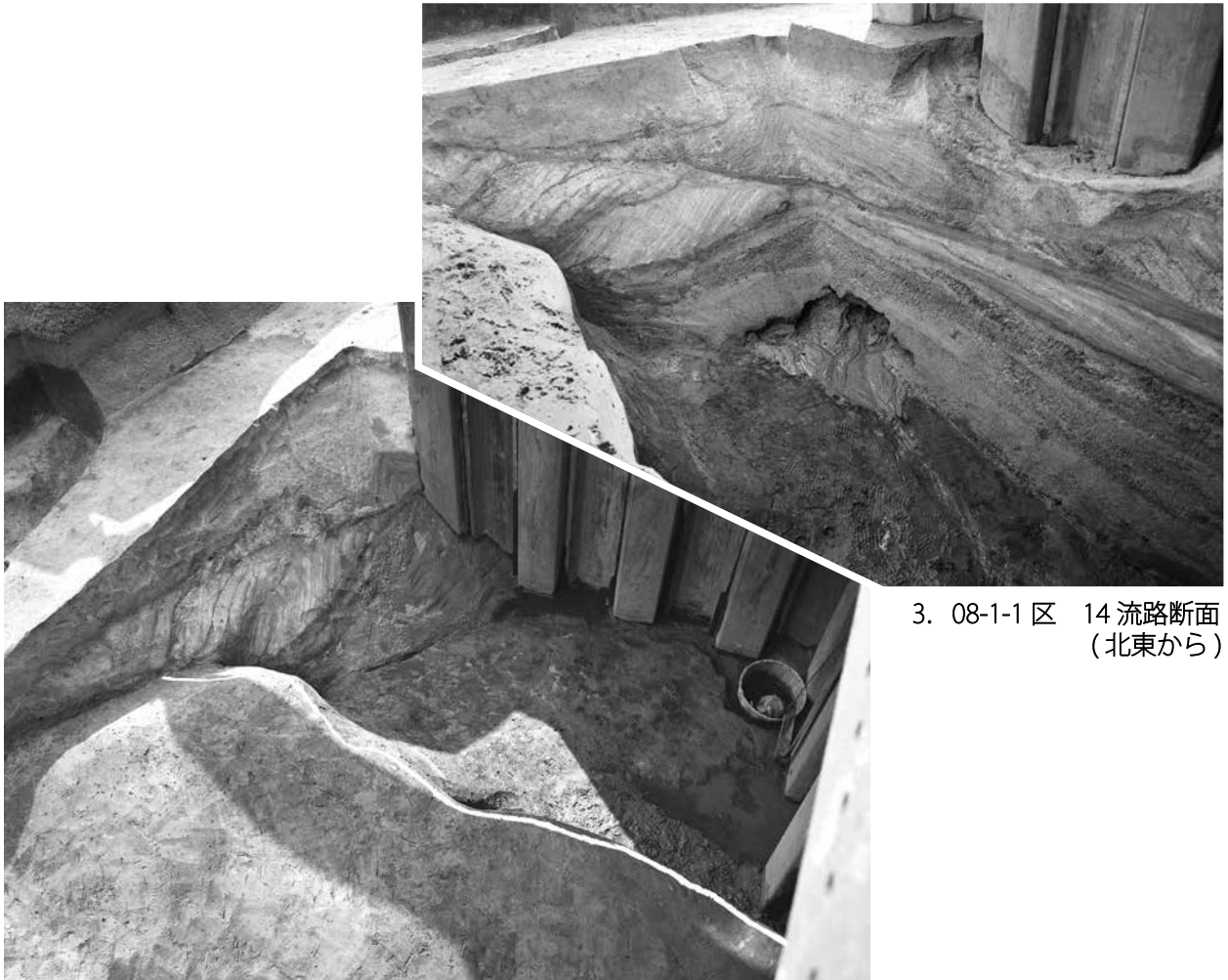
図版21 第6面 08-1-1区



1. 08-1-1区 全景 (西から)



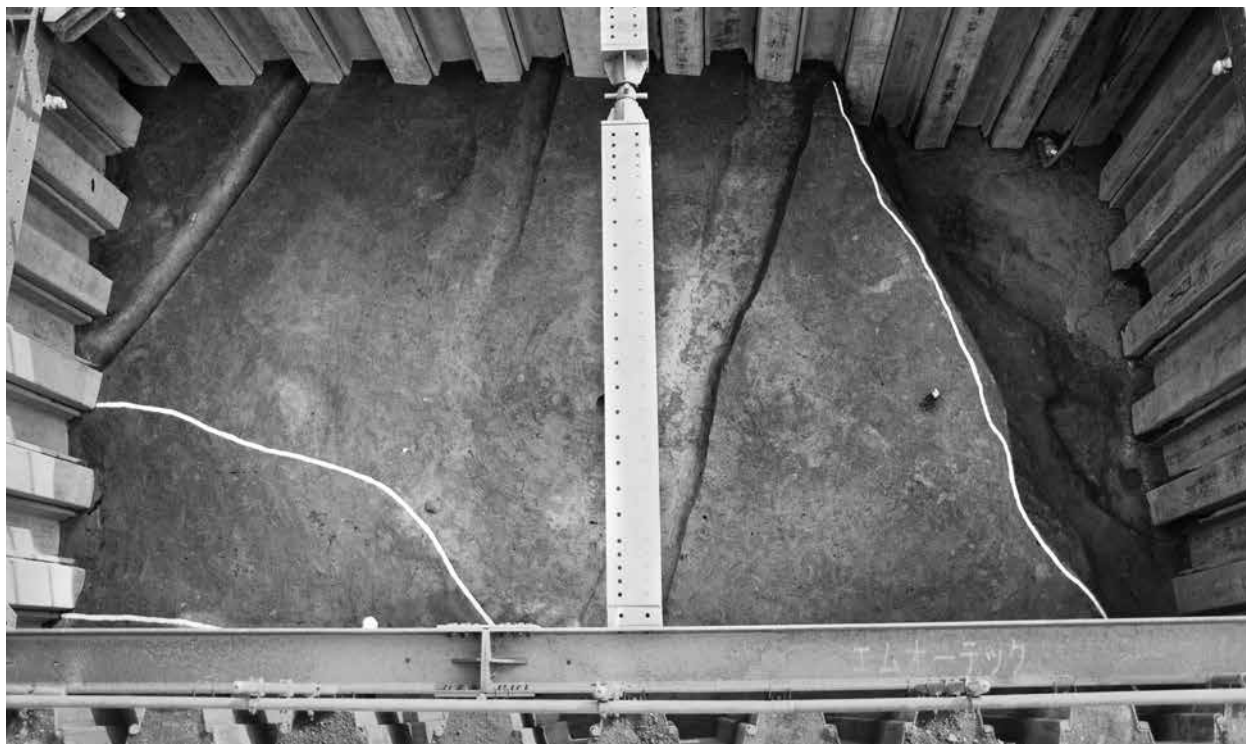
2. 08-1-1区 15溝近接 (北西から)



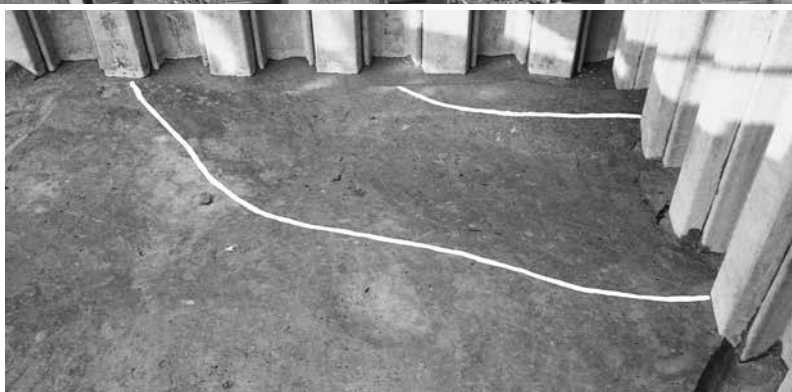
3. 08-1-1区 14流路断面 (北東から)

4. 08-1-1区 14流路近接 (北東から)

図版22 第6面 08-1-2区



1. 08-1-2区 全景（北から）



2. 08-1-2区 18溝近接（南から）



3. 08-1-2区 全景（西から）



4. 08-1-2区 17流路断面（南東から）

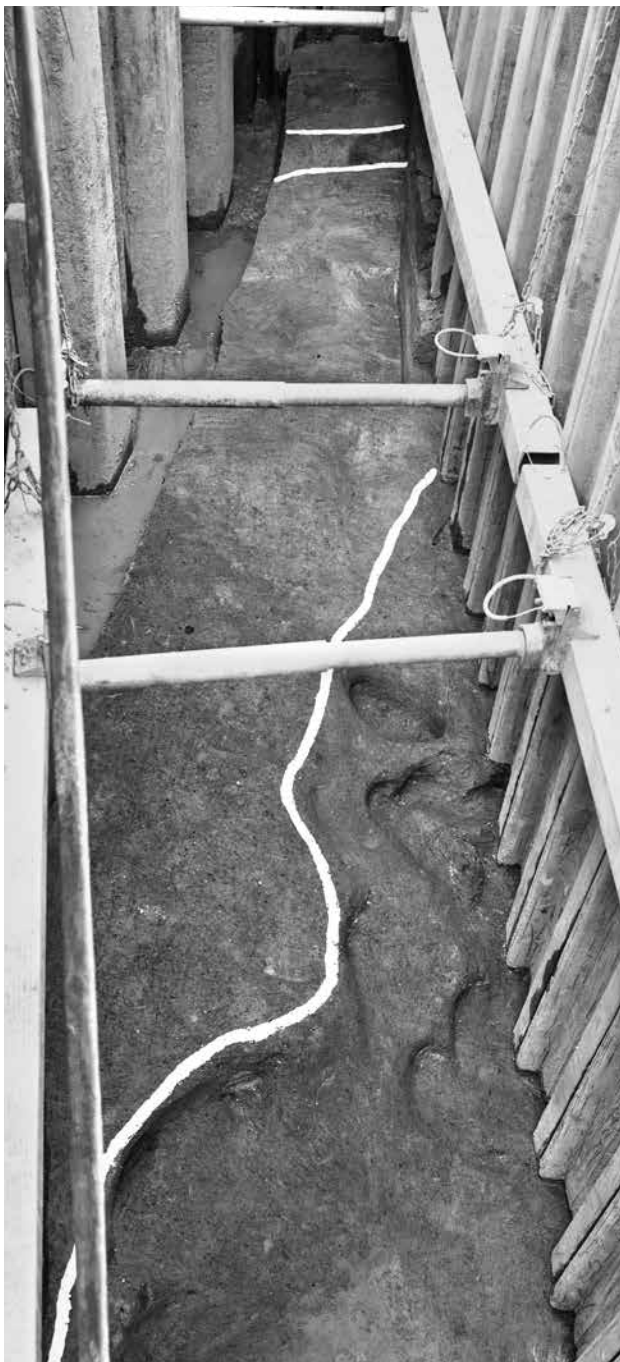
図版23 第6面 08-1-3区



1. 08-1-3区 8流路(北端)検出状況 (南東から)



2. 08-1-3区 8流路(南端)検出状況 (西から)



3. 08-1-3区 北端全景 (南東から)



4. 08-1-3区 南端全景 (西から)



5. 08-1-3区 8流路(南東)断面 (西から)

図版24 第5面 08-1-1区



1. 08-1-1区 全景（北西から）



2. 08-1-1区 12土坑遺物出土近接（南から）



3. 08-1-1区 12土坑断面（東から）



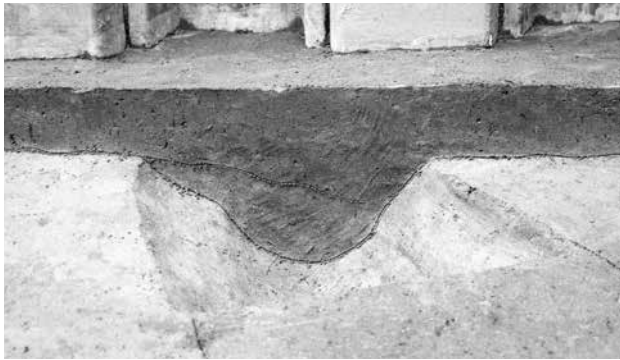
4. 08-1-1区 10土坑近接（西から）



5. 08-1-1区 10土坑断面（西から）



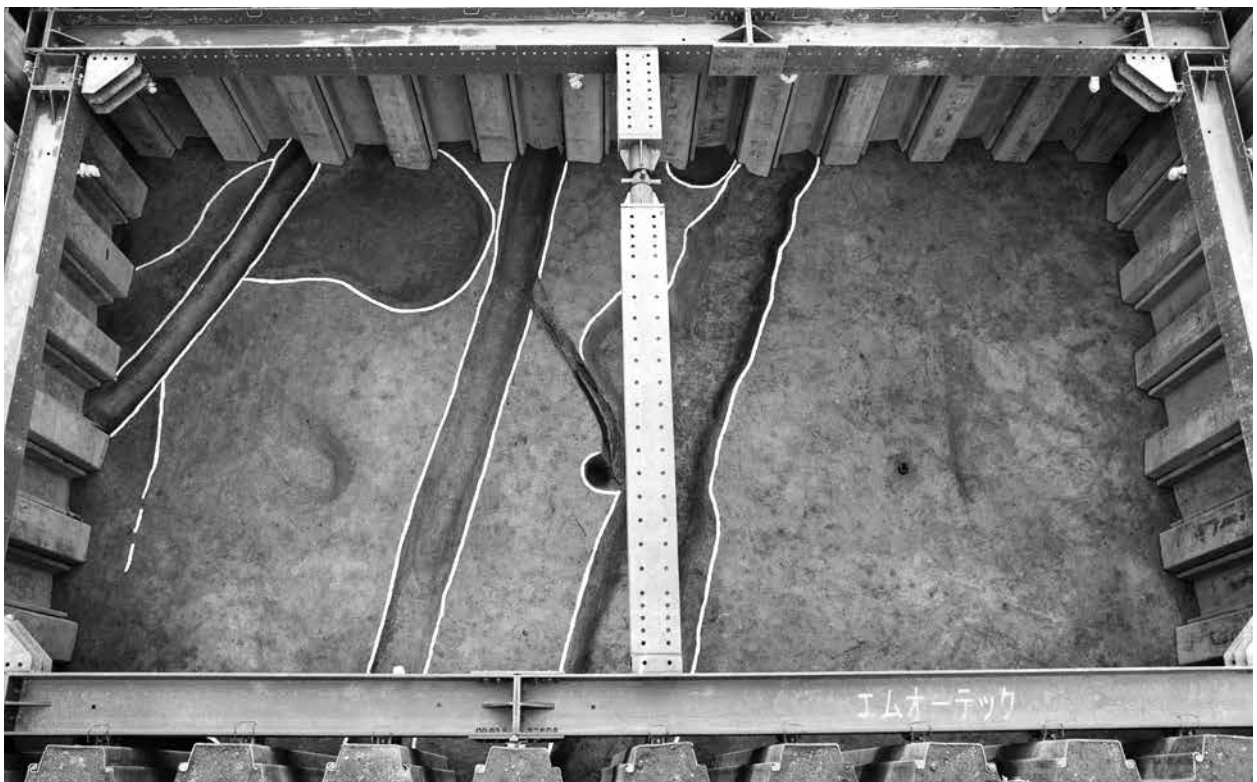
1. 08-1-1区 全景 (南東から)



2. 08-1-1区 9溝(西端)断面 (東から)



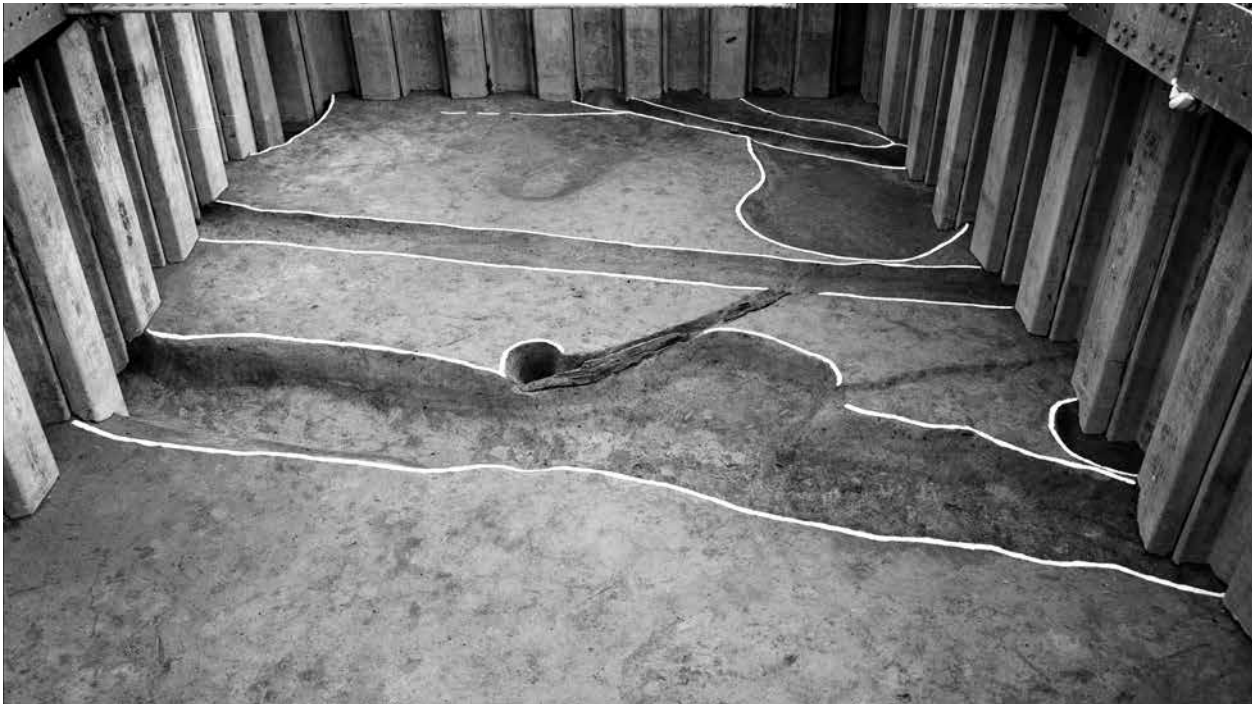
3. 08-1-1区 9溝(東端)断面 (東から)



4. 08-1-2区 全景 (北から)



図版26 第5面 08-1-2区



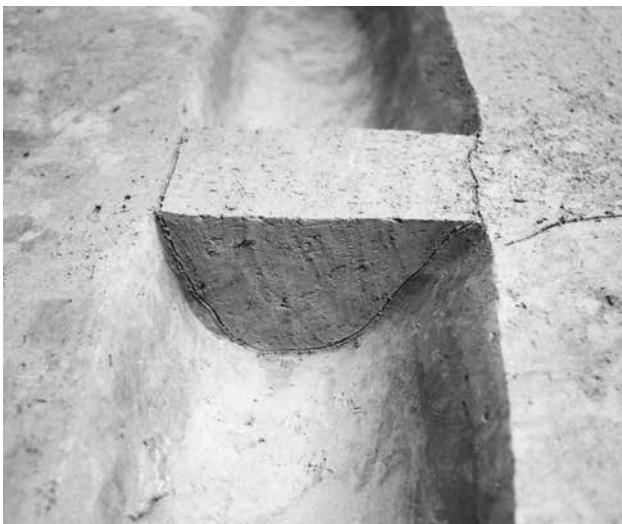
1. 08-1-2区 全景 (西から)



2. 08-1-2区 15土坑断面 (西から)



3. 08-1-2区 13溝断面 (南西から)



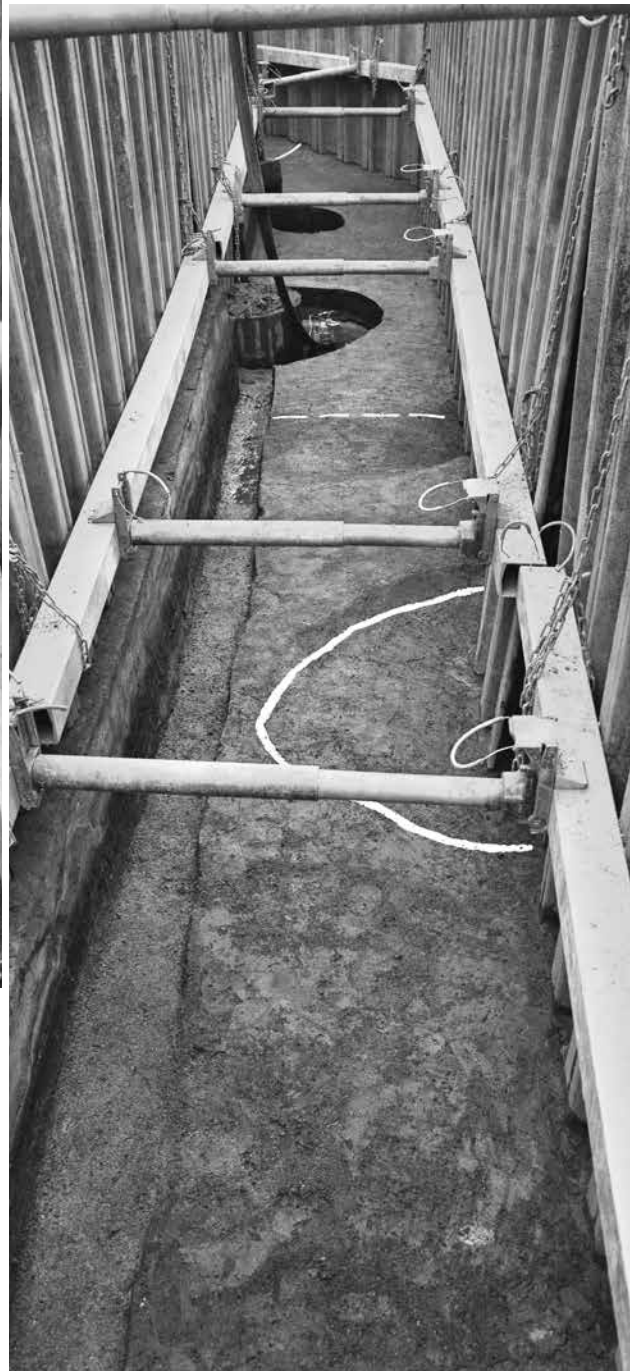
4. 08-1-2区 12溝断面 (南西から)



5. 08-1-2区 11溝断面 (北から)



1. 08-1-3区 北半全景（南東から）



2. 08-1-3区 南半全景（北西から）

図版28 第4面 08-1-1区



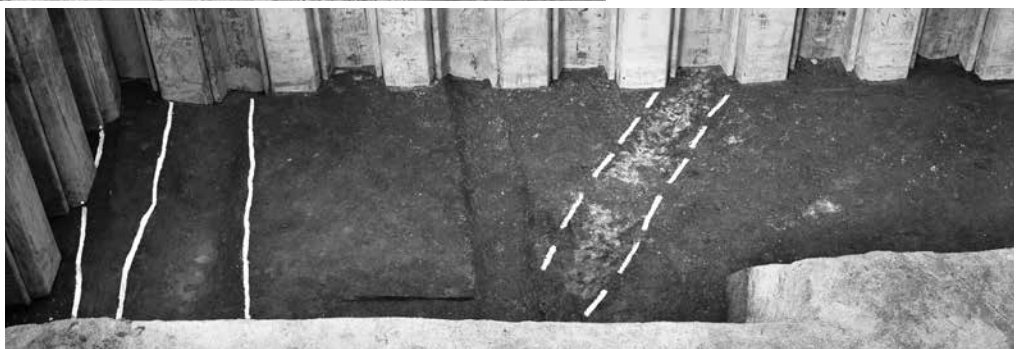
1. 08-1-1区 畦畔検出状況 (西から)



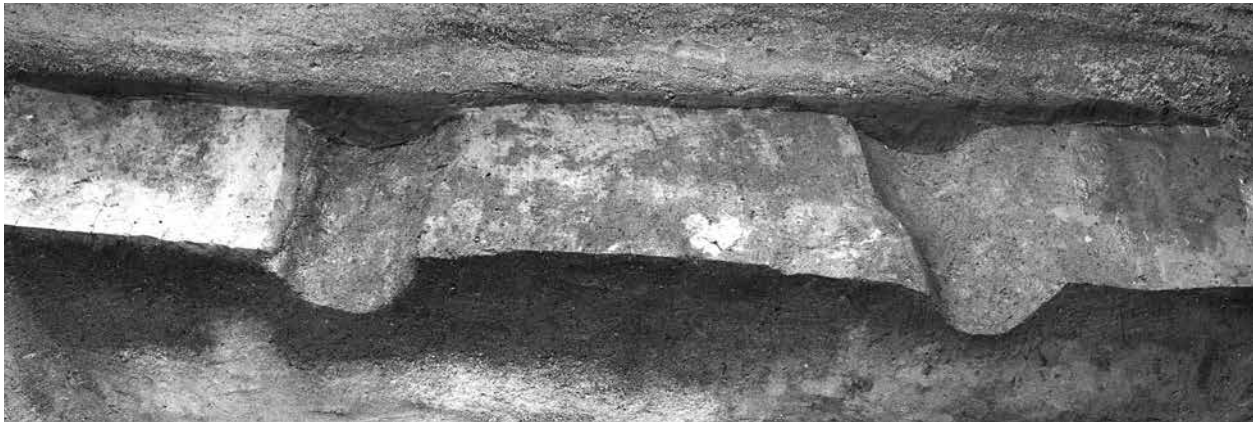
2. 08-1-1区 全景  
(南西から)



3. 08-1-1区 8溝検出状況  
(南から)



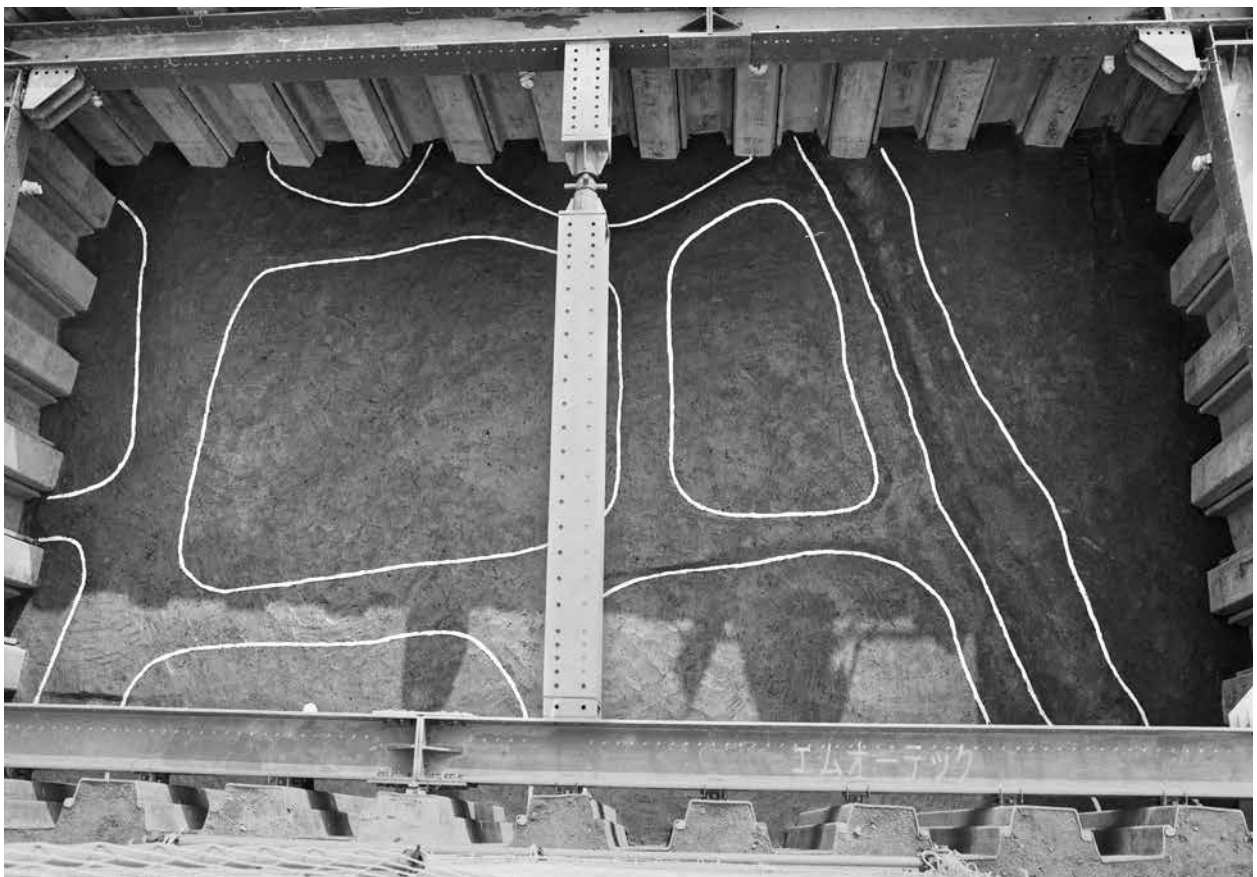
4. 08-1-1区 8溝・疑似畦畔近接 (南から)



1. 08-1-1区 7・8溝近接 (北東から)

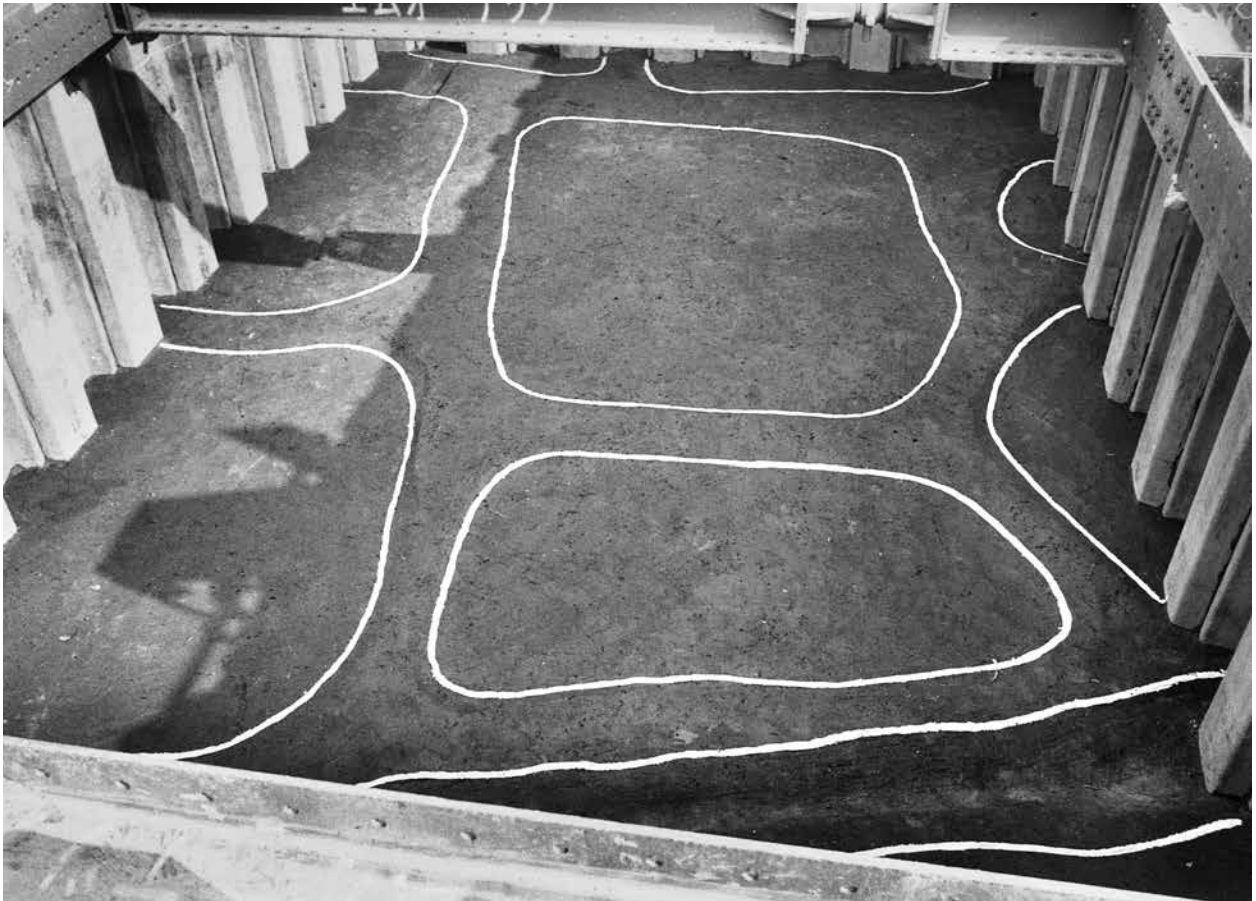


2. 08-1-1区 7・8溝断面 (北から)

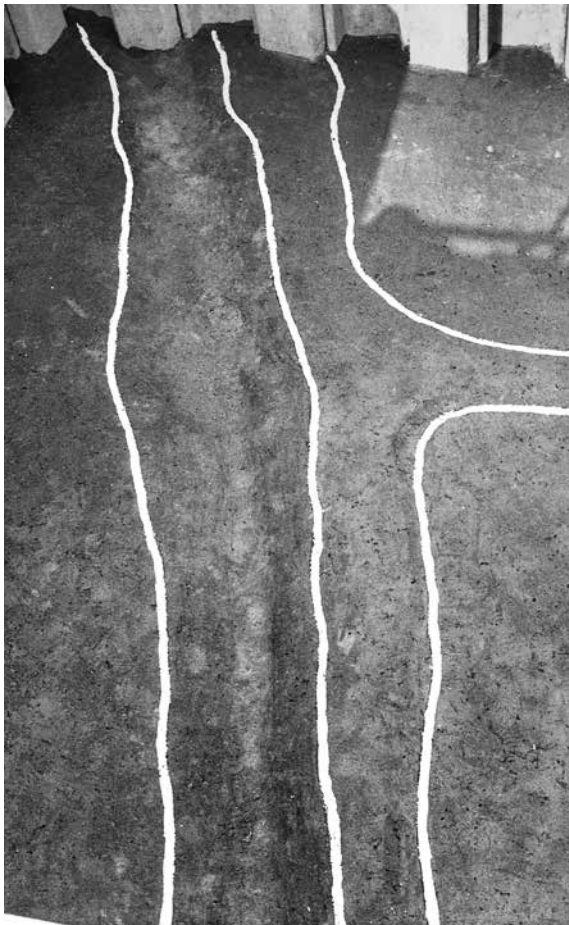


3. 08-1-2区 全景 (北から)

図版30 第4面 08-1-2区



1. 08-1-2区 水田近接（西から）



3. 08-1-2区 10溝断面（南から）

2. 08-1-2区 10溝近接（南から）



1. 08-1-3区 北半全景 (南東から)

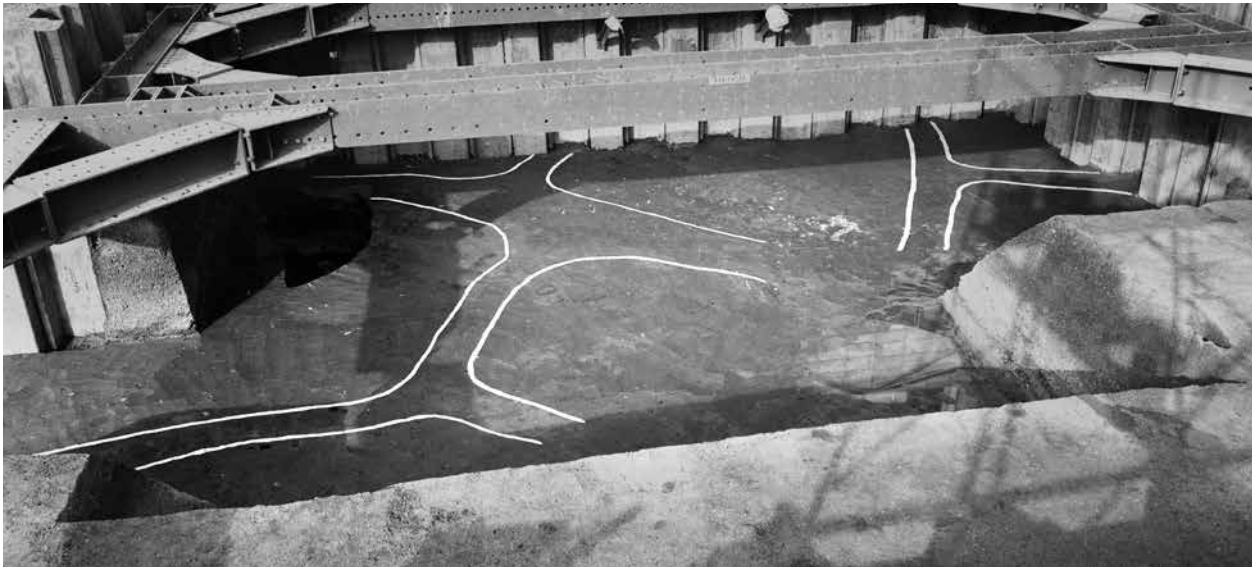


2. 08-1-3区 中央全景 (南東から)

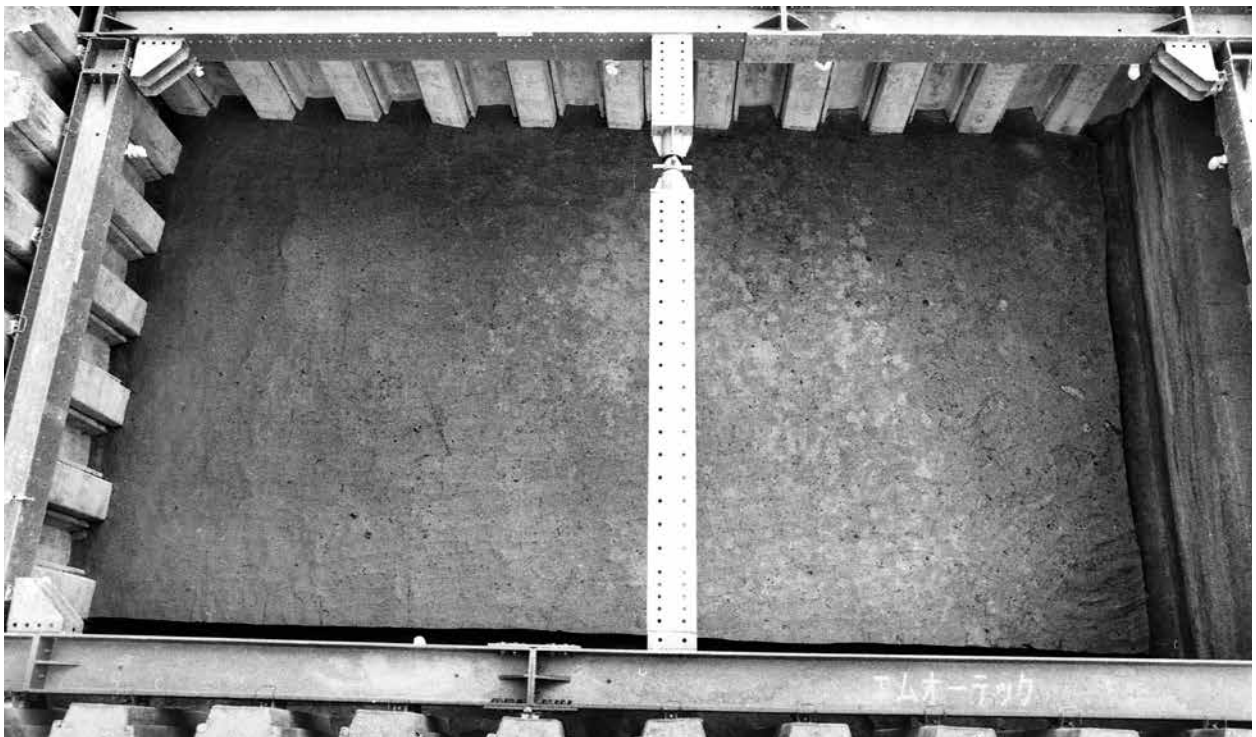


3. 08-1-3区 南端全景 (北西から)

図版32 第3面 08-1-1・2区



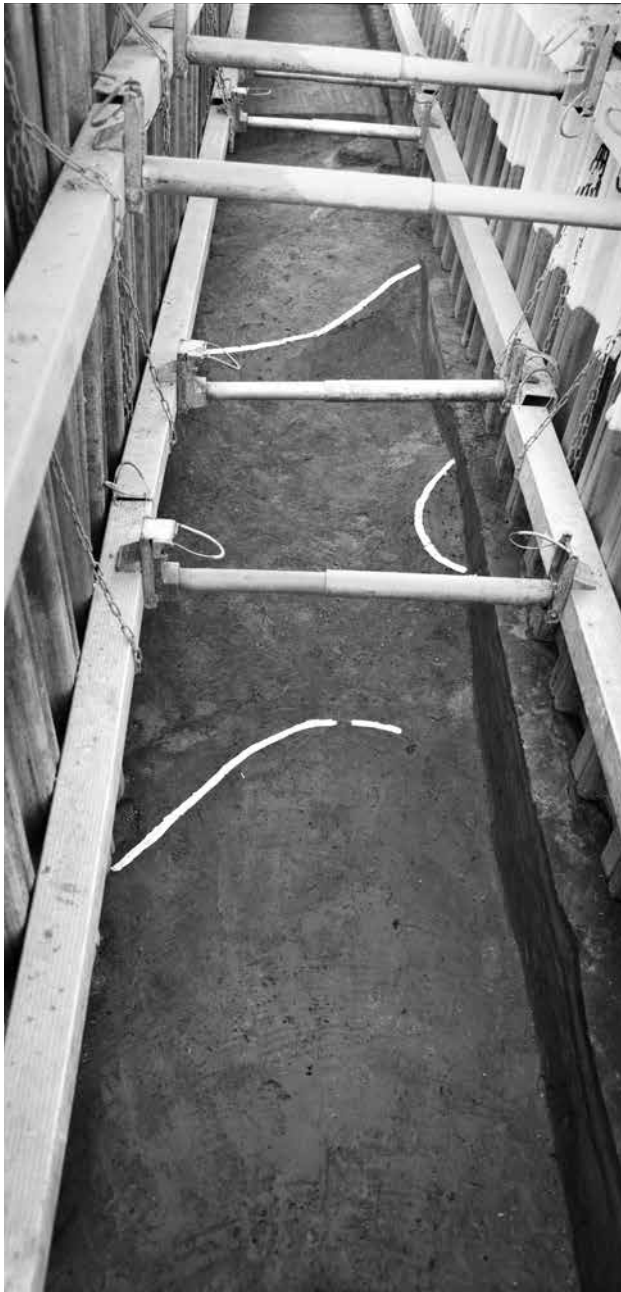
1. 08-1-1区 全景 (南から)



2. 08-1-2区 全景 (北から)



3. 08-1-2区 水田畦畔 (第5層) 断面 (南から)



1. 08-1-3区 中央全景 (北西から)



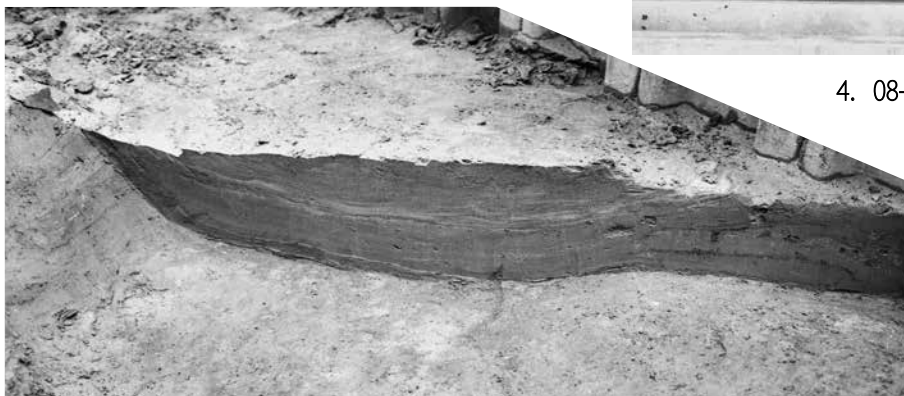
2. 08-1-3区 第6層(氾濫堆積物)検出状況 (南東から)



3. 08-1-3区 東壁断面 (南東から)



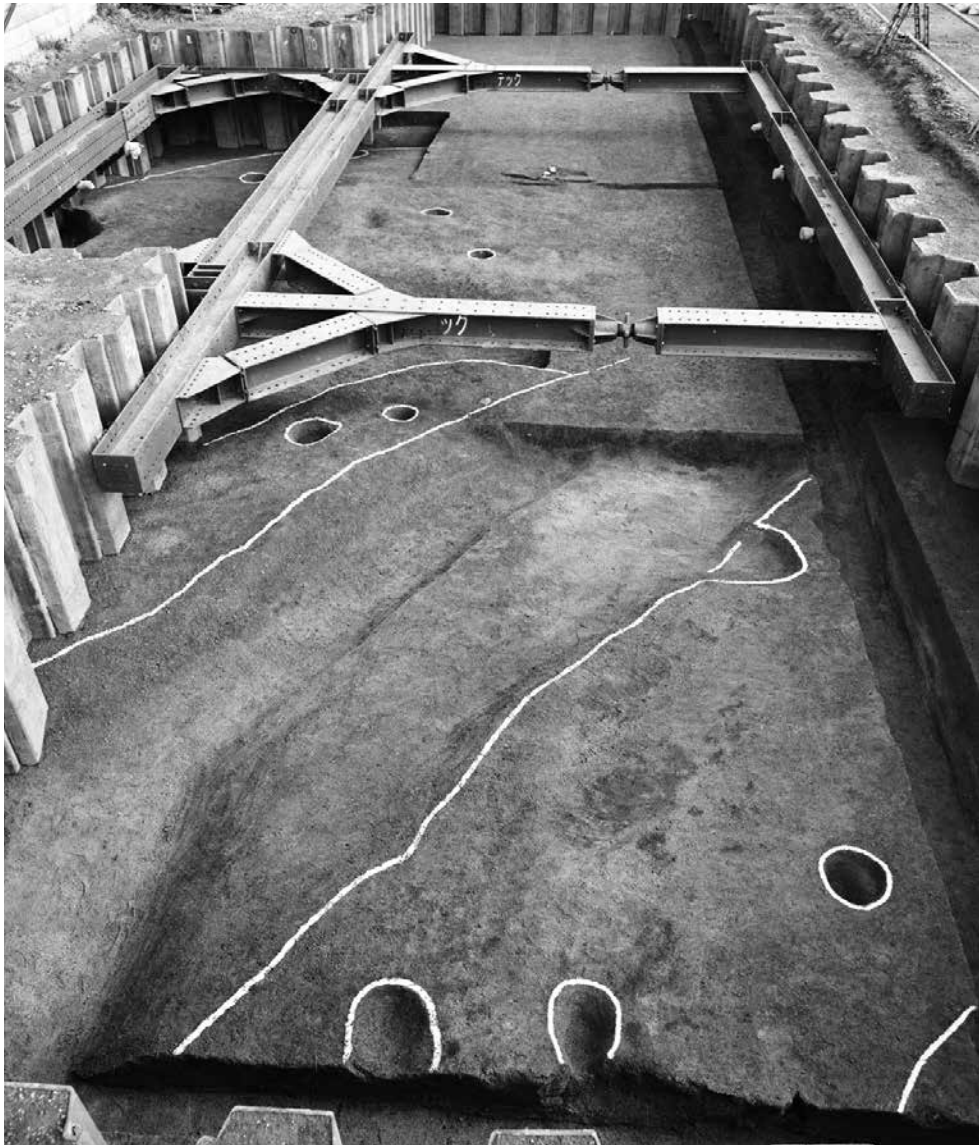
4. 08-1-3区 4溝内噴砂検出状況  
(北東から)



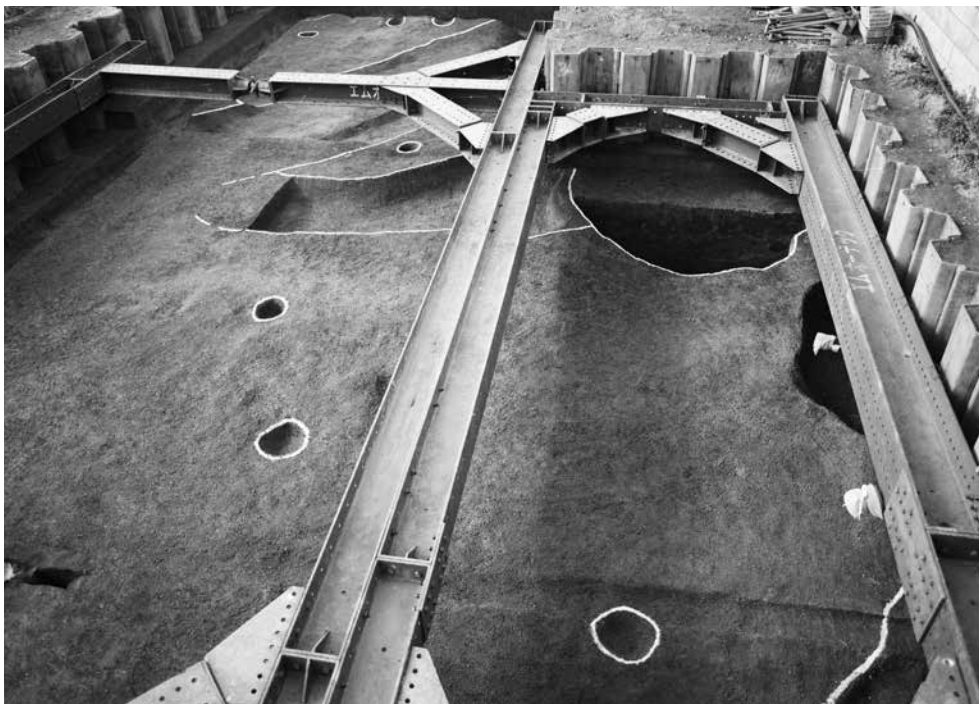
5. 08-1-3区 4溝断面 (北から)



図版34 第2面 08-1-1区



1. 08-1-1区 全景（西から）



2. 08-1-1区 全景（東から）



1. 08-1-1区 4井戸断面 (東から)



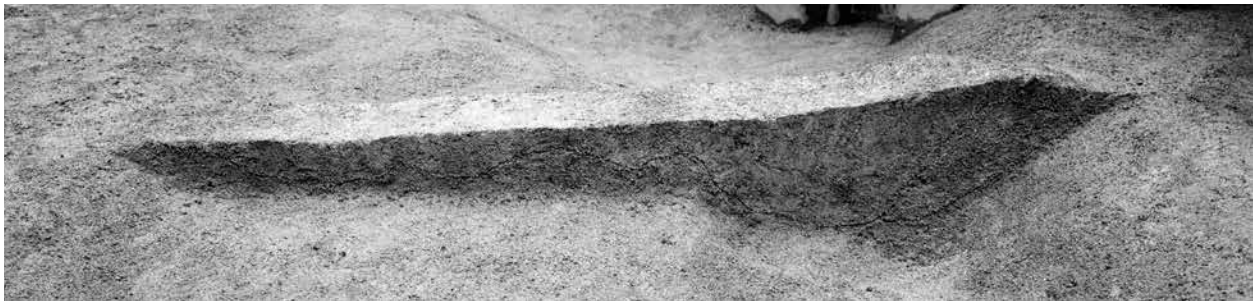
2. 08-1-1区 4井戸底断面 (東から)



3. 08-1-1区 5ピット断面 (南から)



4. 08-1-1区 埴輪・土器出土状況 (南から)

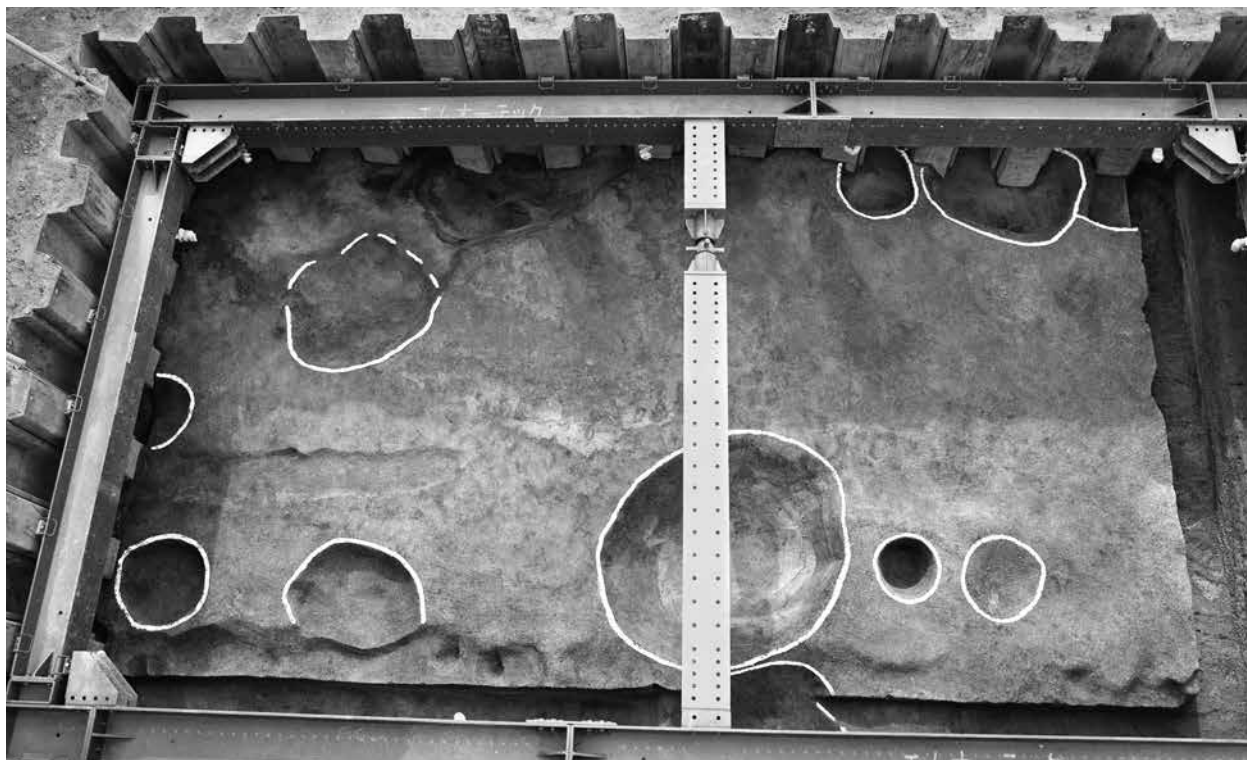


5. 08-1-1区 1溝断面 (南東から)



6. 08-1-1区 2溝断面 (南から)

図版36 第2面 08-1-2区



1. 08-1-2区 全景（北から）



2. 08-1-2区 1土坑検出状況（北西から）



3. 08-1-2区 1土坑断面（南西から）



4. 08-1-2区 1土坑断面（北東から）



1. 08-1-2区 7土坑遺物出土状況 (南西から)



2. 08-1-2区 7土坑断面 (南から)



3. 08-1-2区 5土坑断面 (北から)

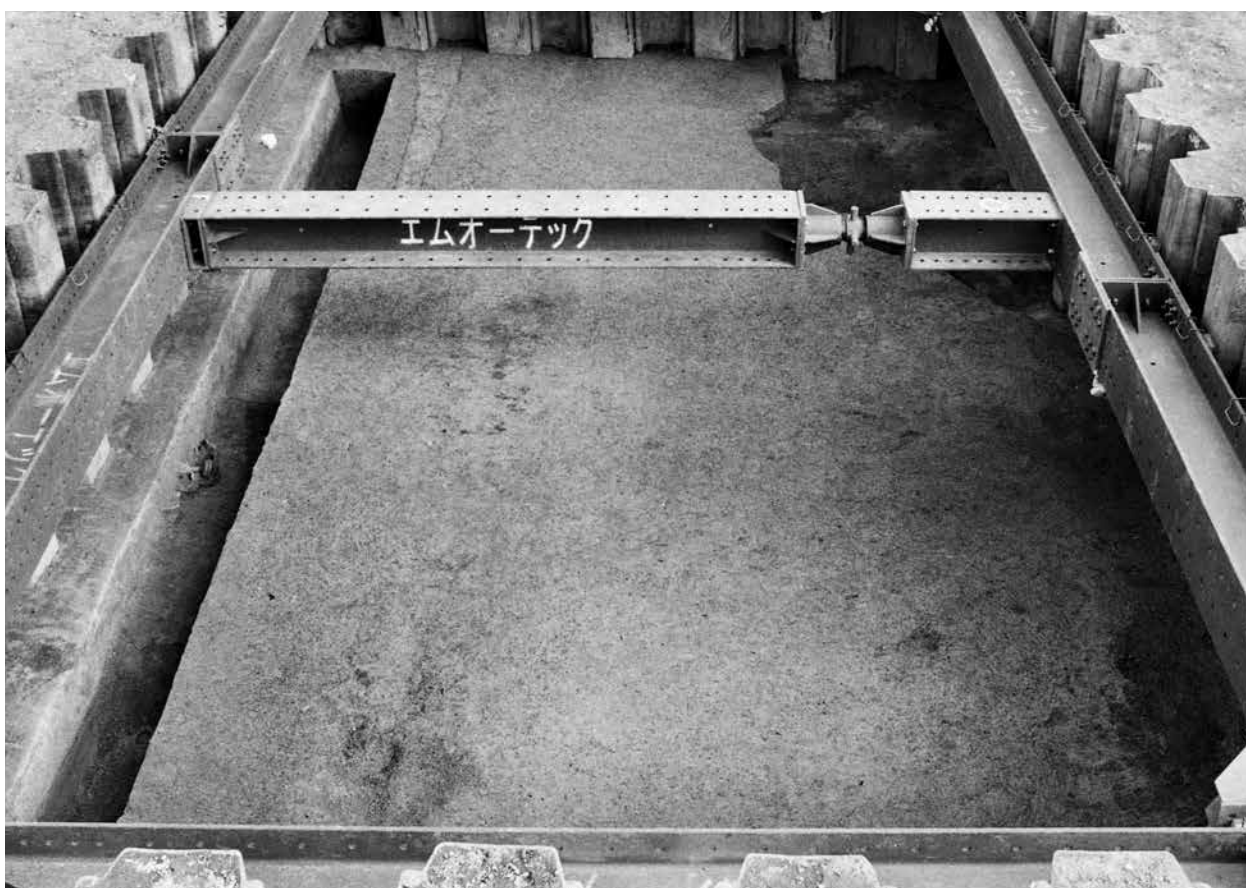


4. 08-1-2区 9ピット断面 (南から)

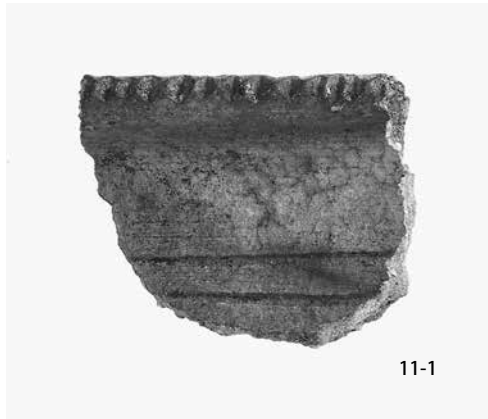
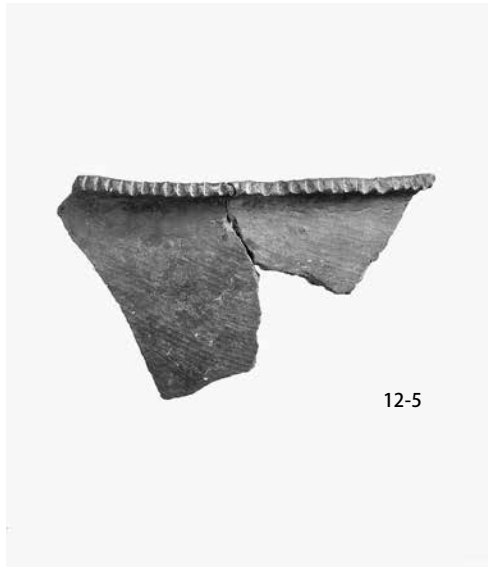
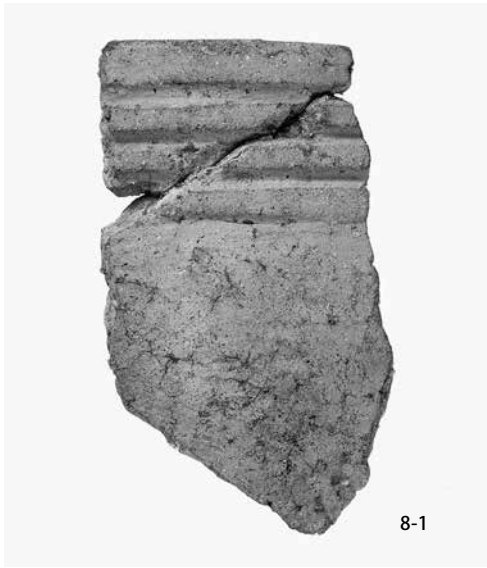
図版38 第1面 08-1-1・2区



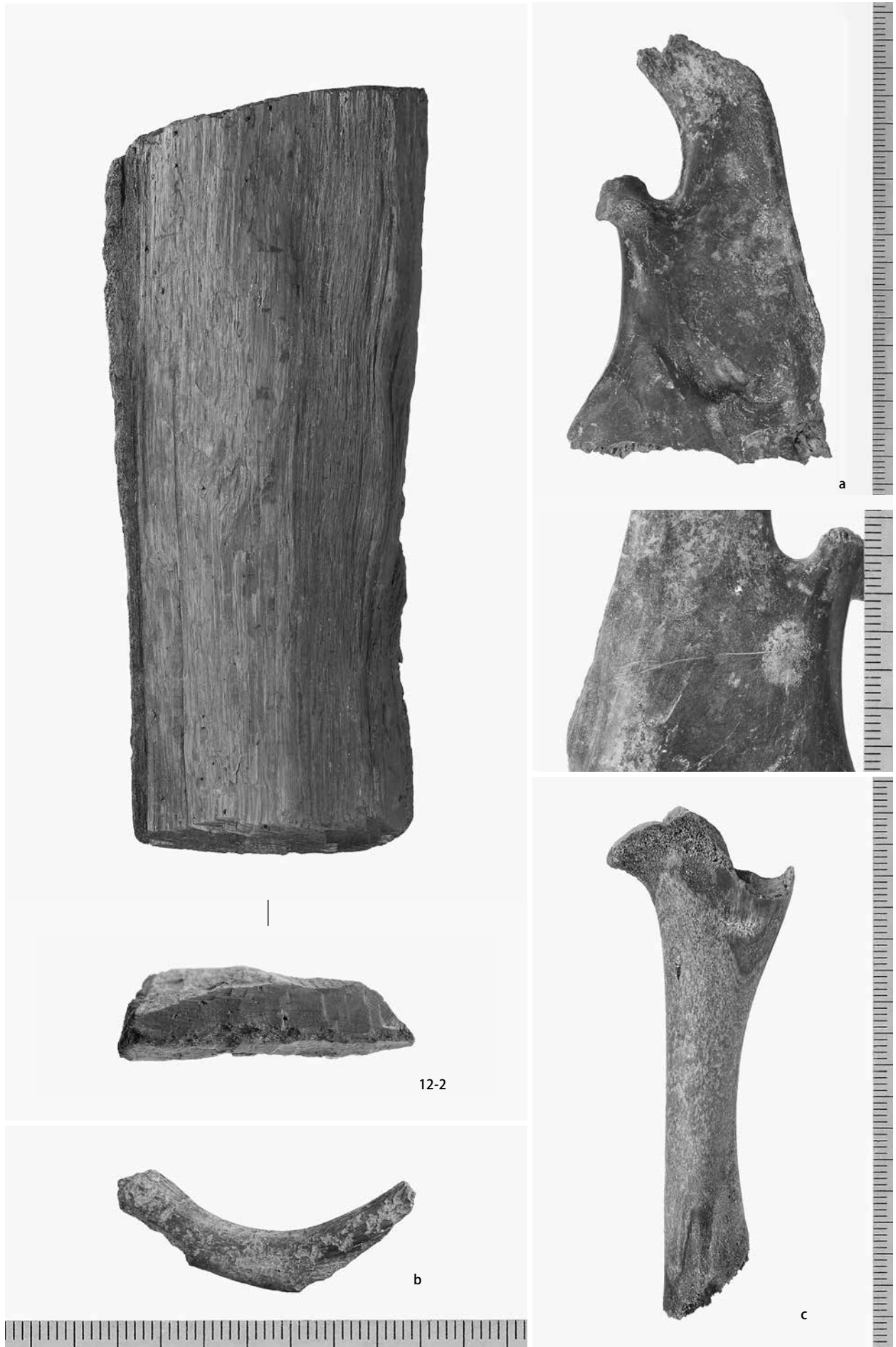
1. 08-1-1区 全景 (西から)



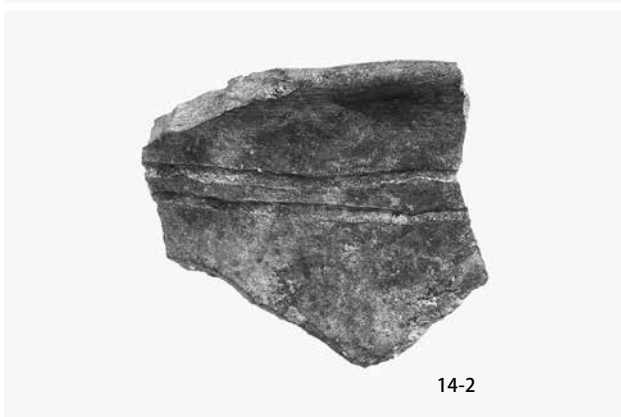
2. 08-1-2区 全景 (西から)



第14層 (8-1·2)、27溝 (11-1)、12溝 [1] (12-1·3~7)

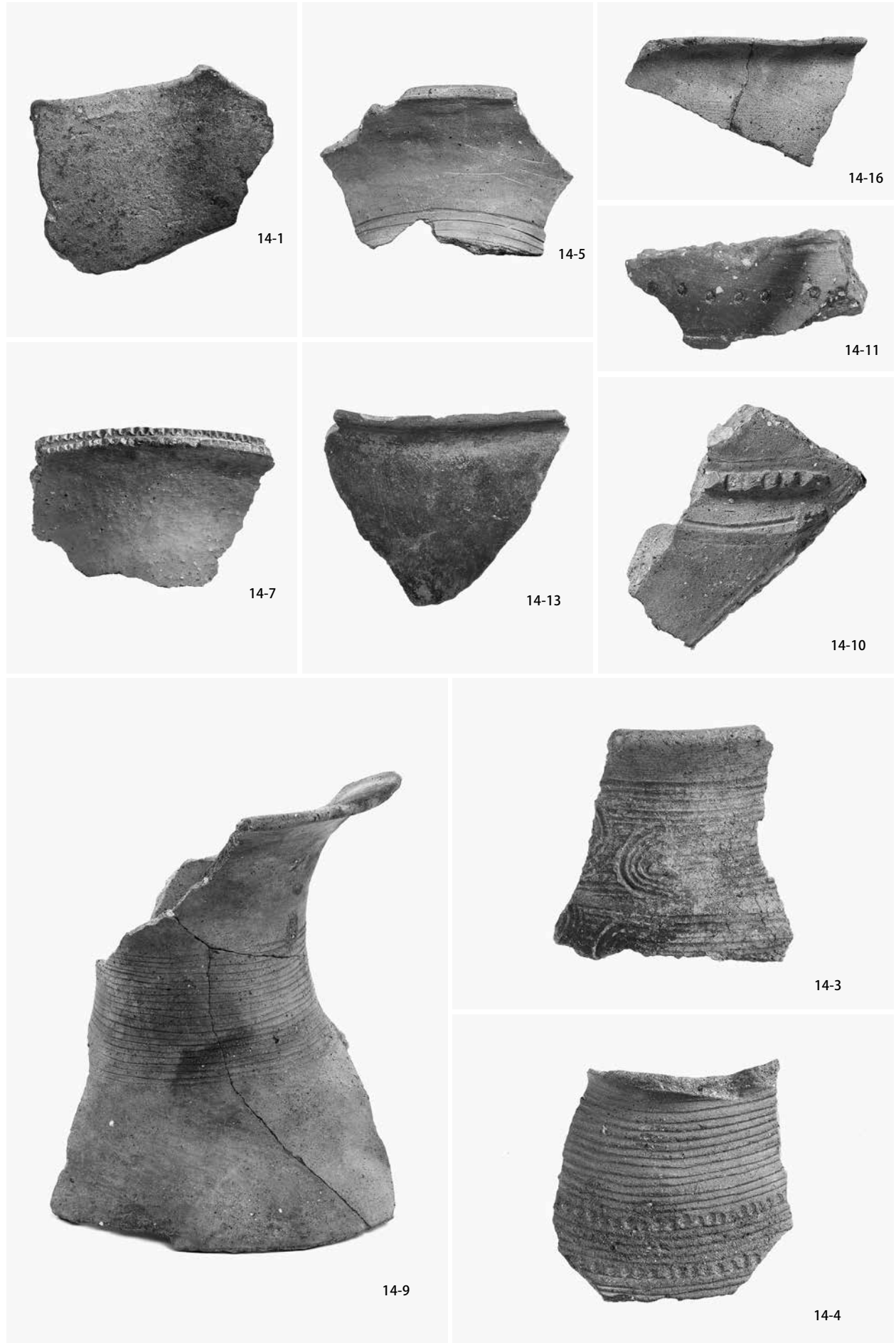


12溝〔2〕(12-2・a～c)

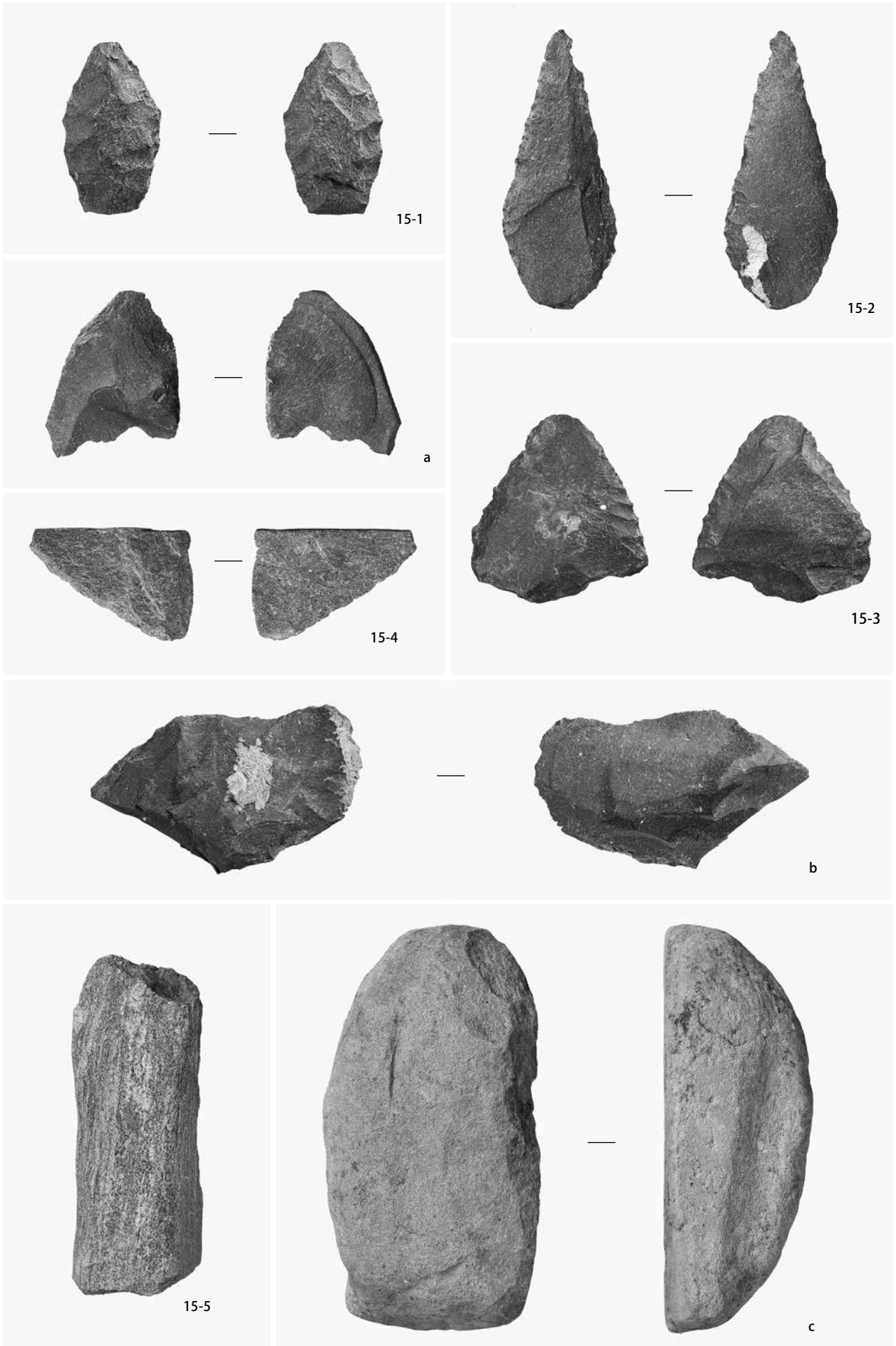




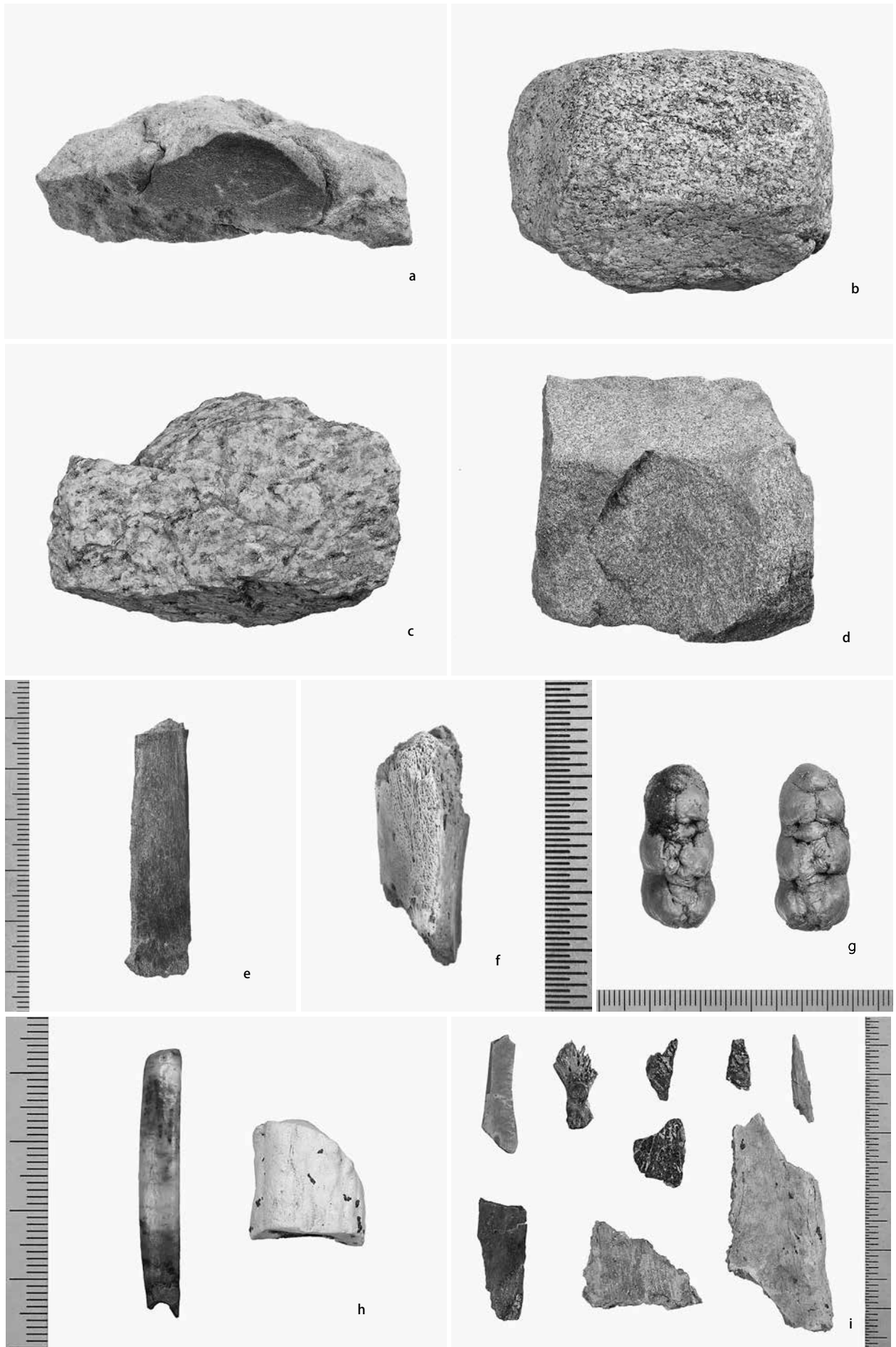
图版42 第11面 08-1-2·3区



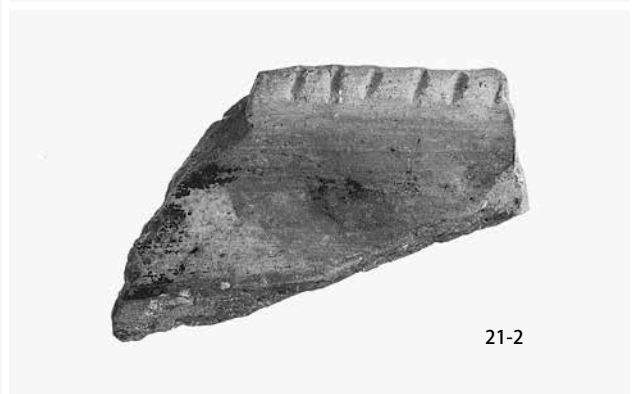
第13層 [2] (14-1·3~5·7·9~11·13·16)



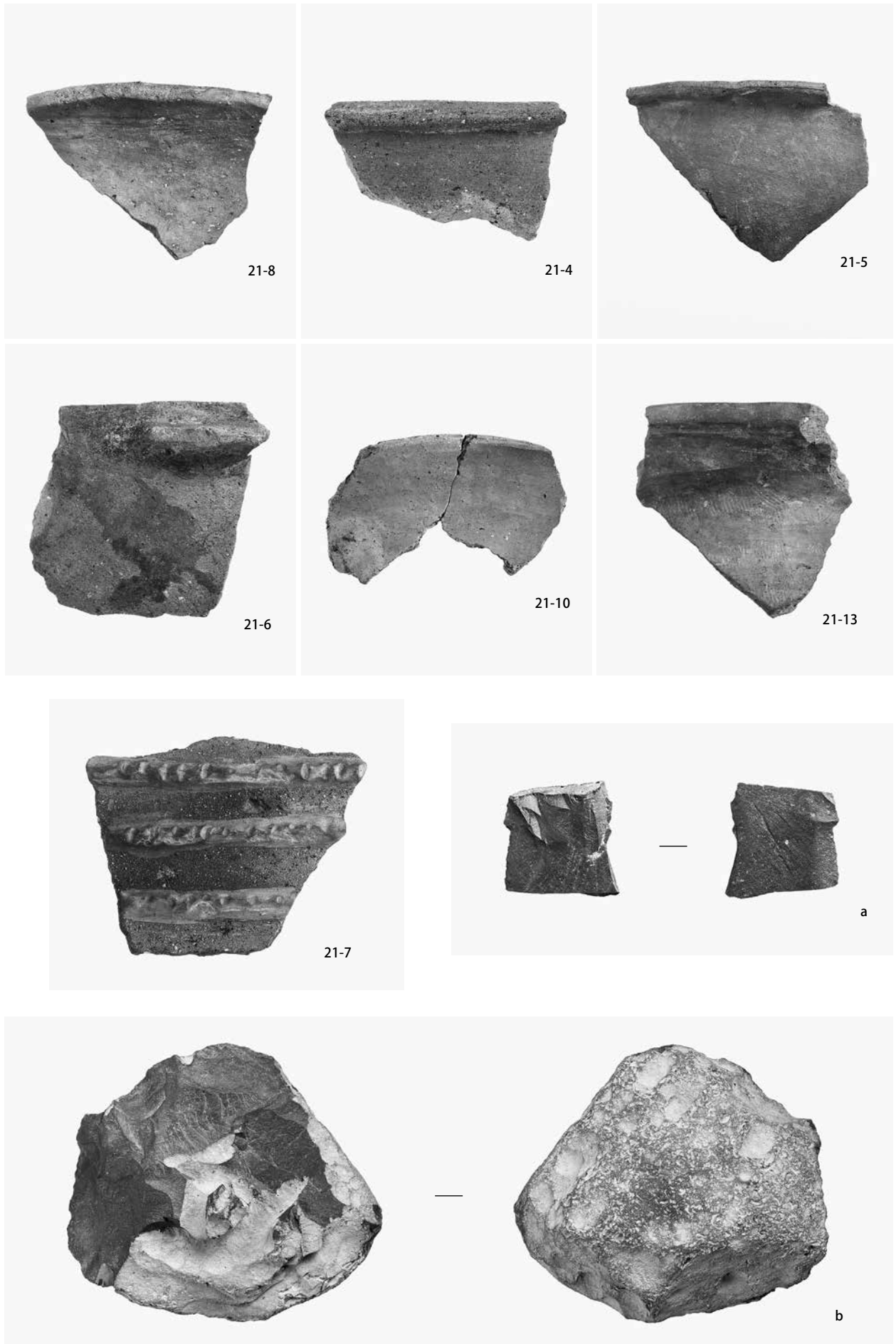
第13層 [3] (15-1~5・a・b・c)



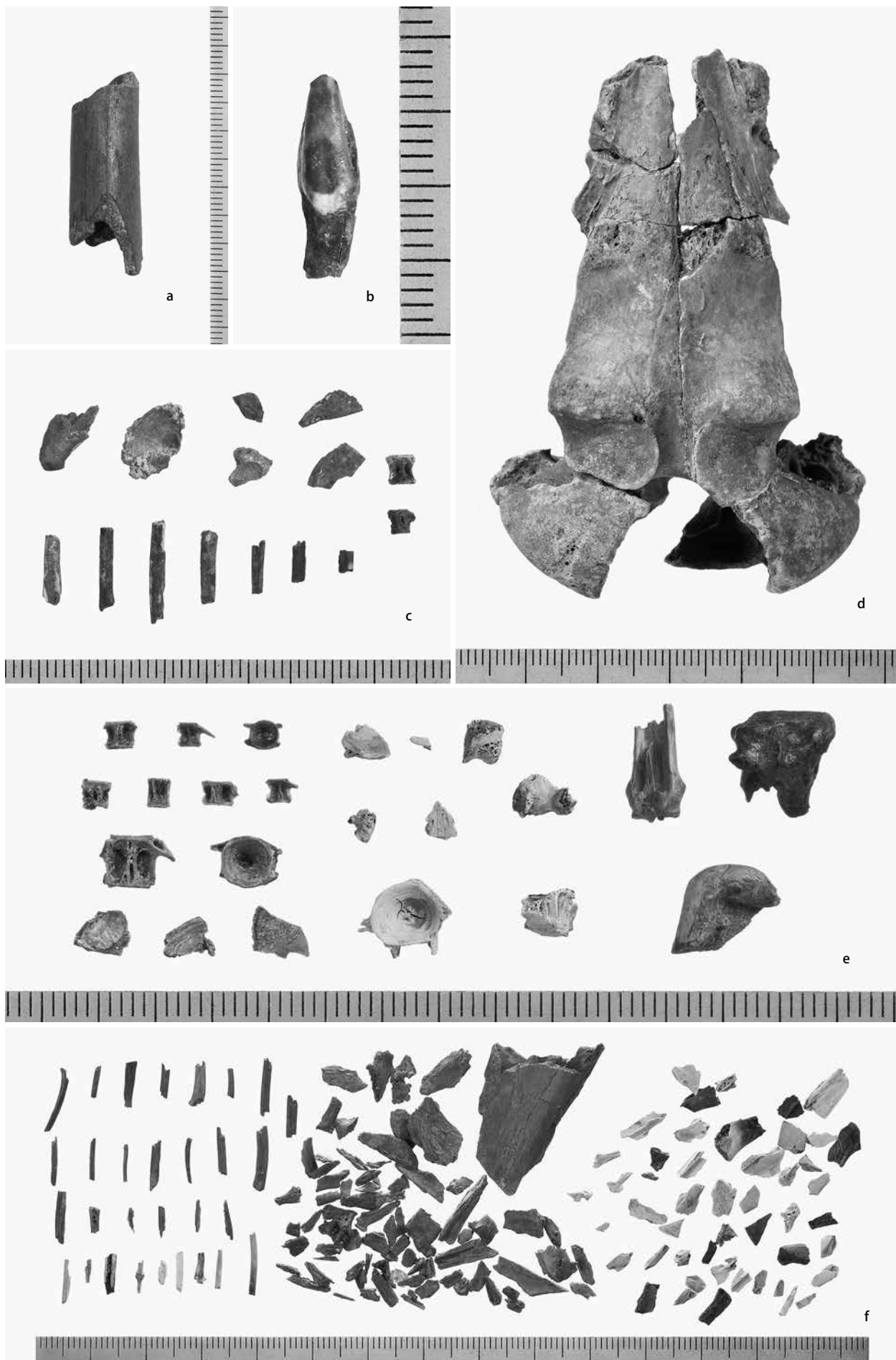
第13層〔4〕(a~i)



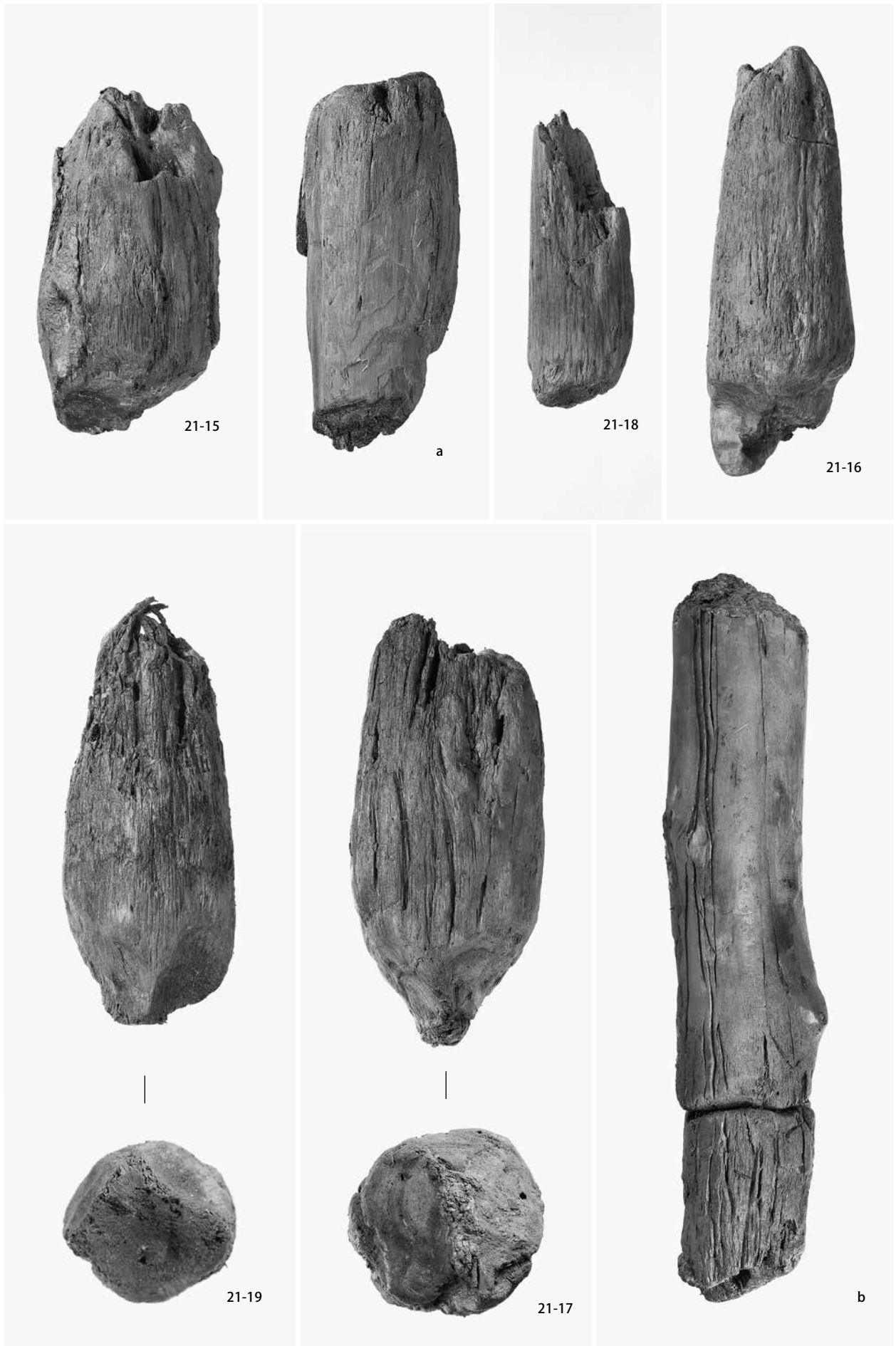
図版46 第10面 08-1-2区



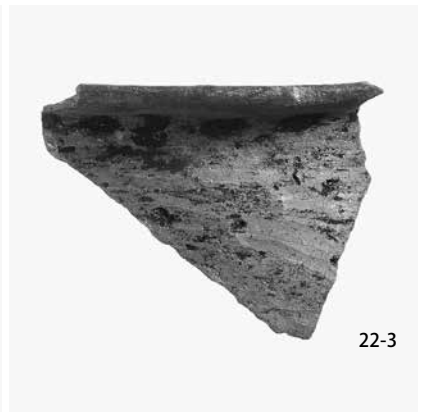
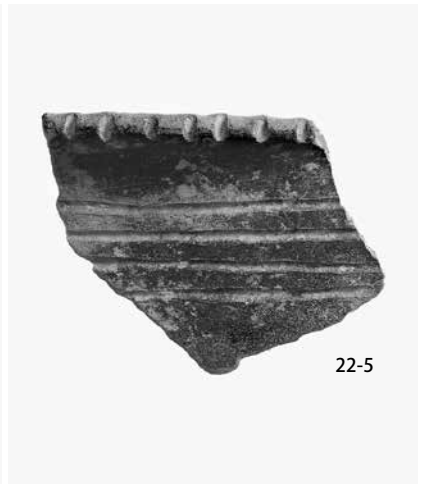
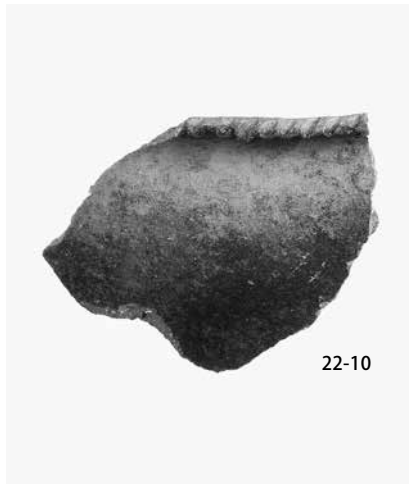
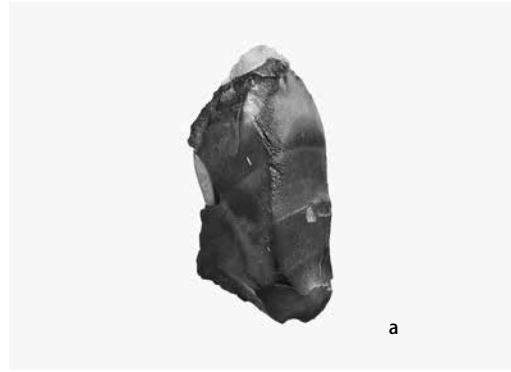
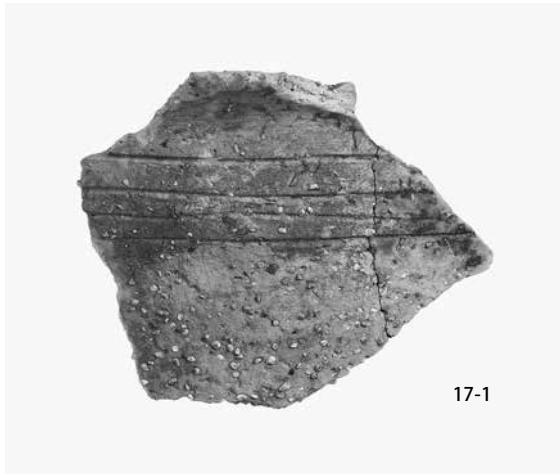
25 建物址 [2] (21-4 ~ 8・10・13・a・b)



25 建物址 [3] (a ~ f)

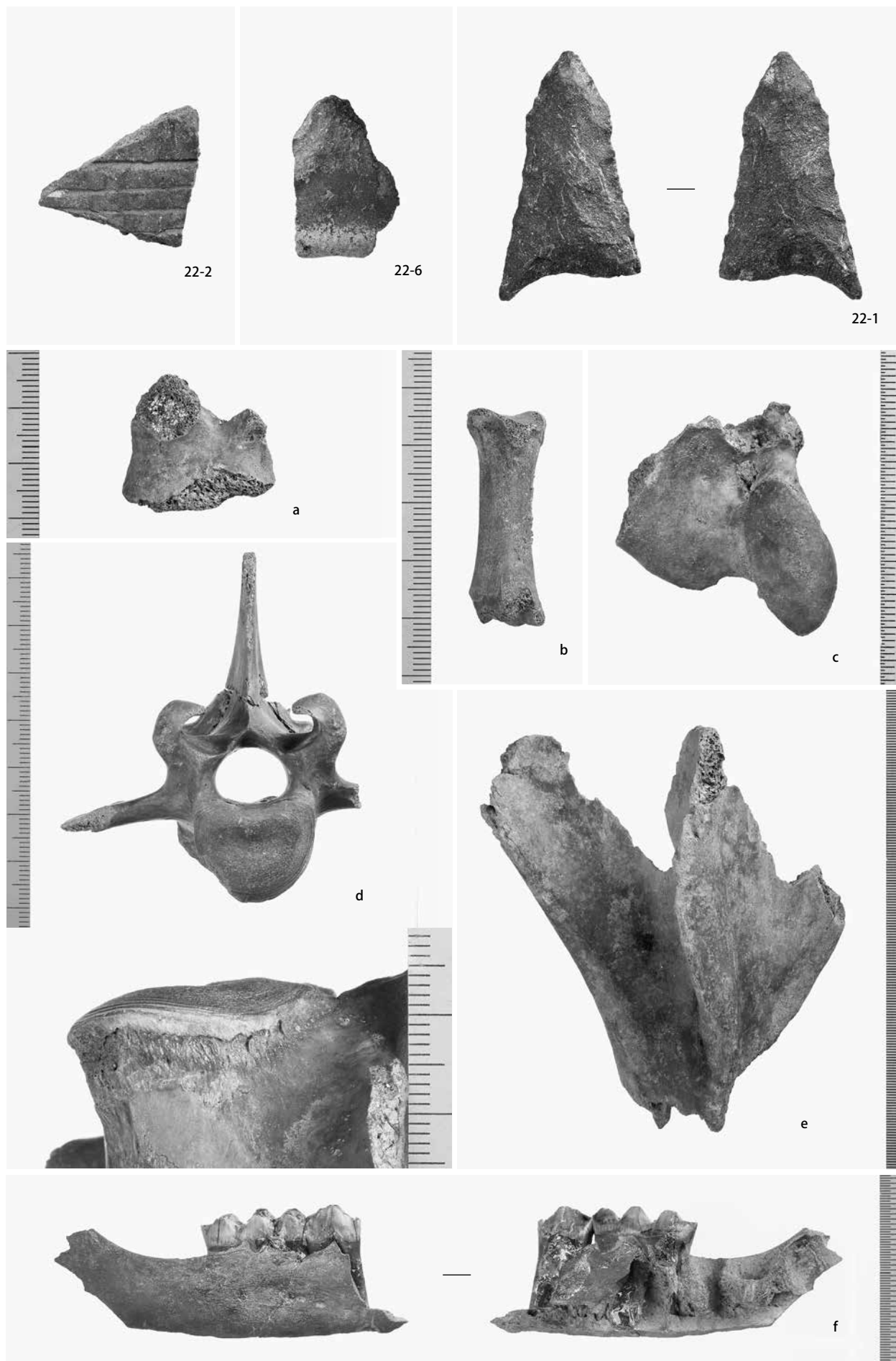


25 建物址〔4〕(21-15～19・a・b)

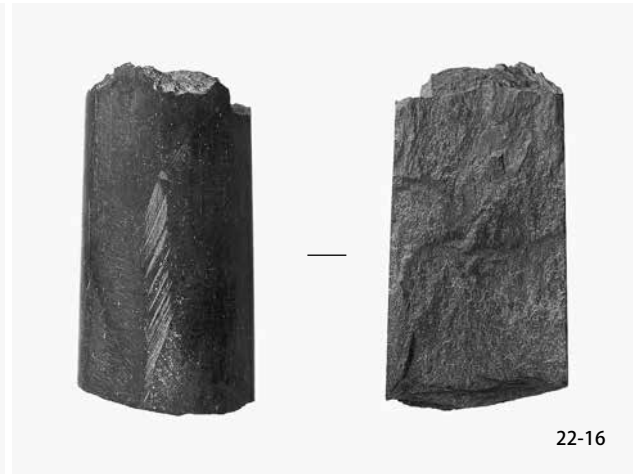
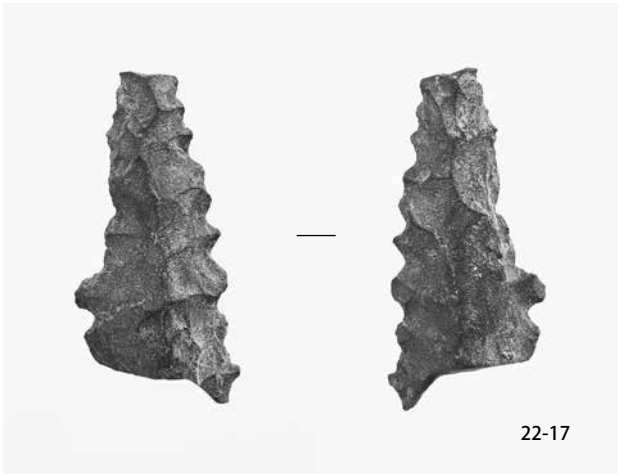


26 土坑 (17-1 · a)、10 溝 [1] (22-3 ~ 5 · 7 ~ 12)

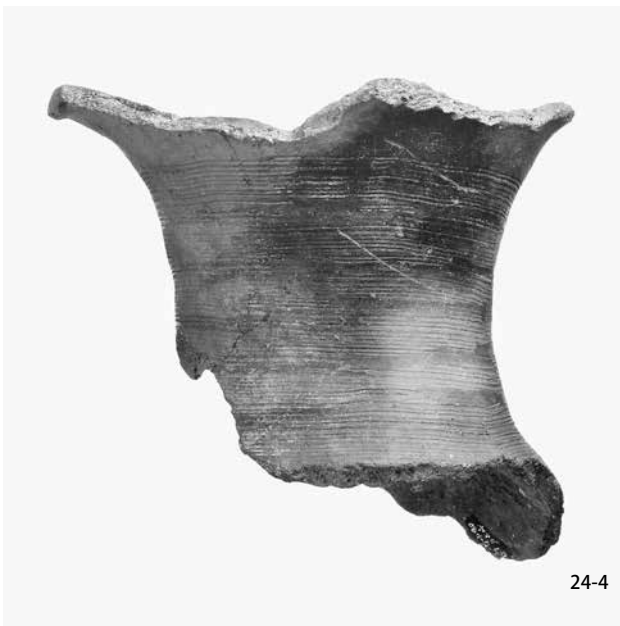
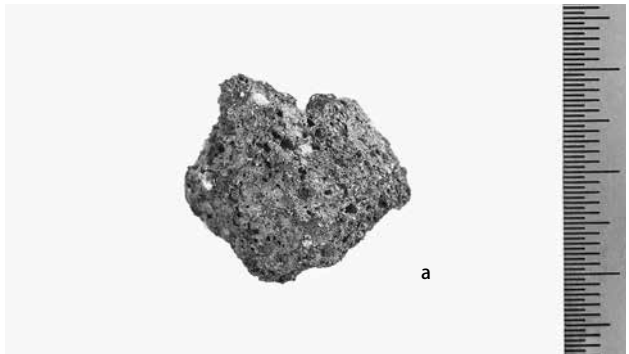
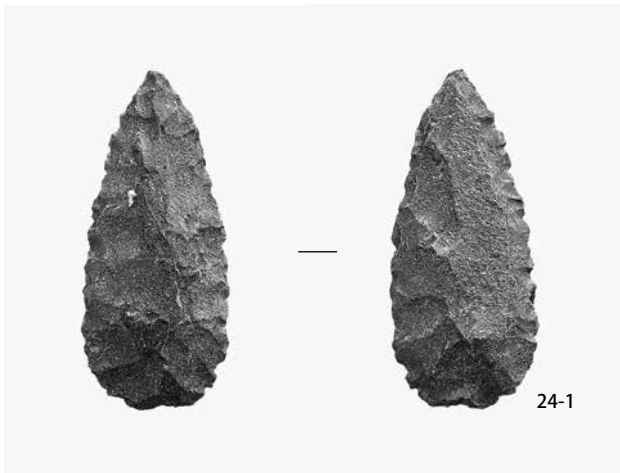




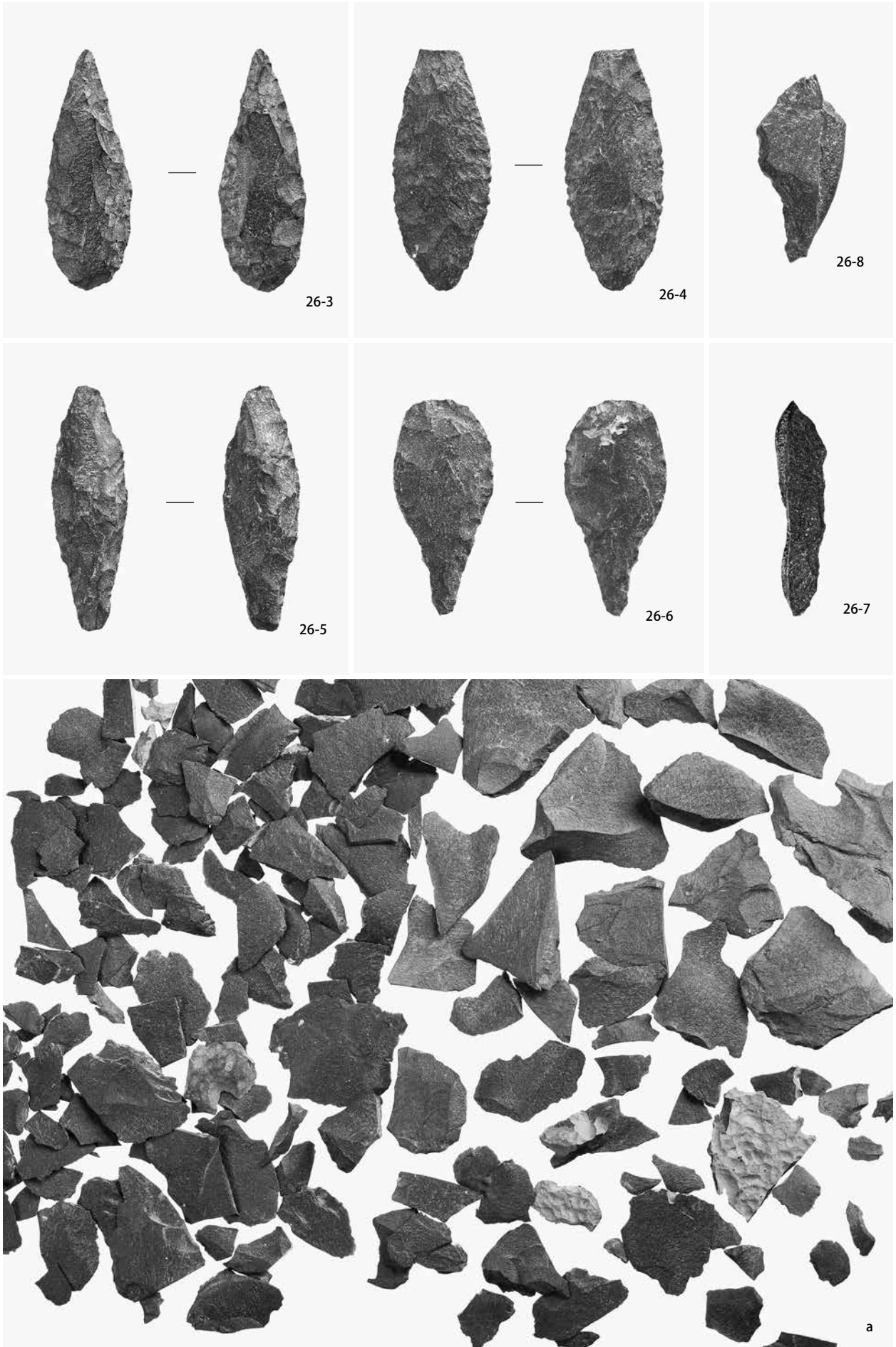
10溝 [2] (22-1・2・6・a～f)



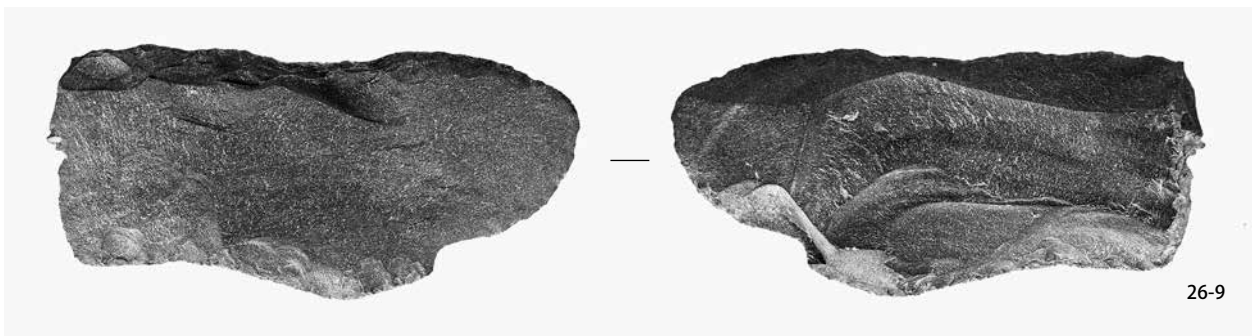
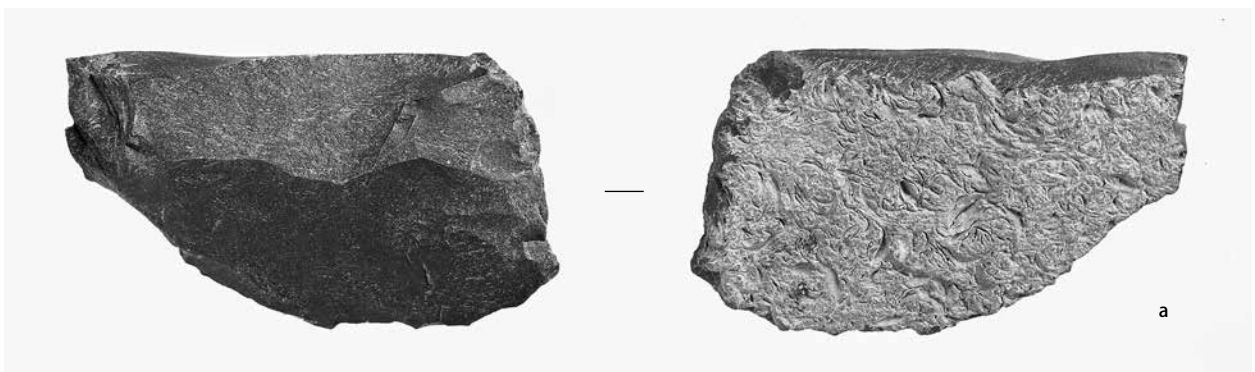
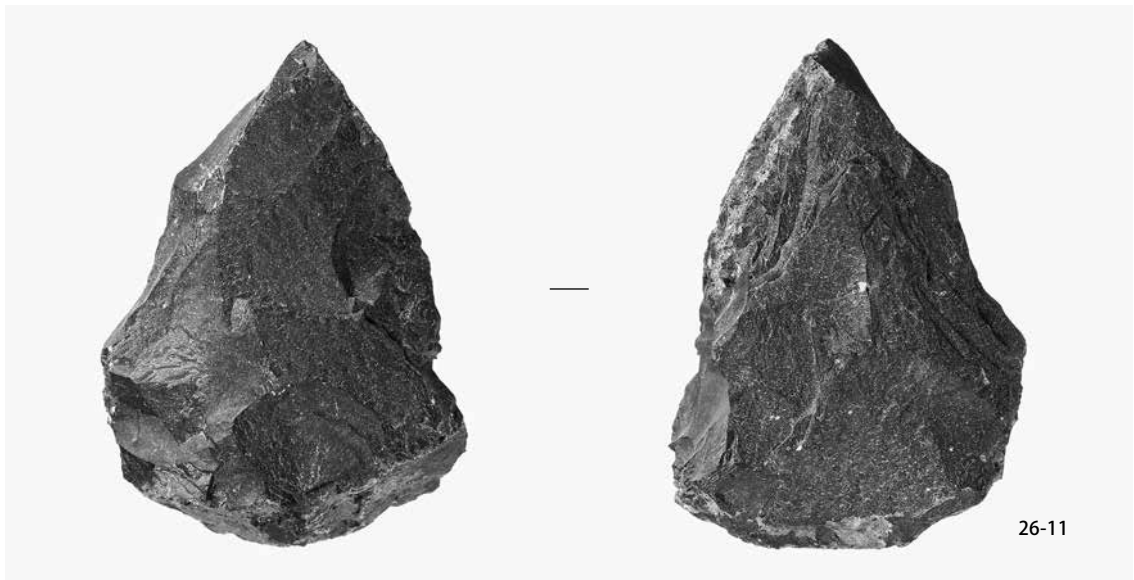
图版52 第9面 08-1-2区

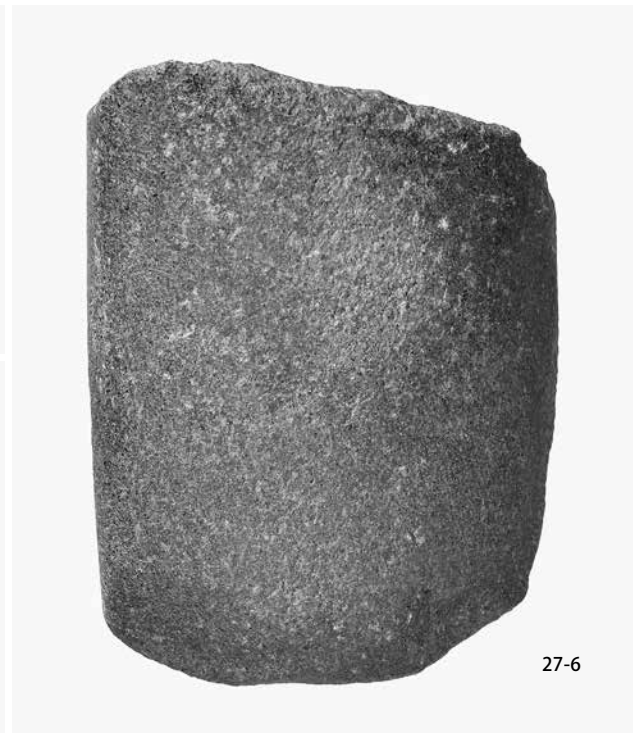
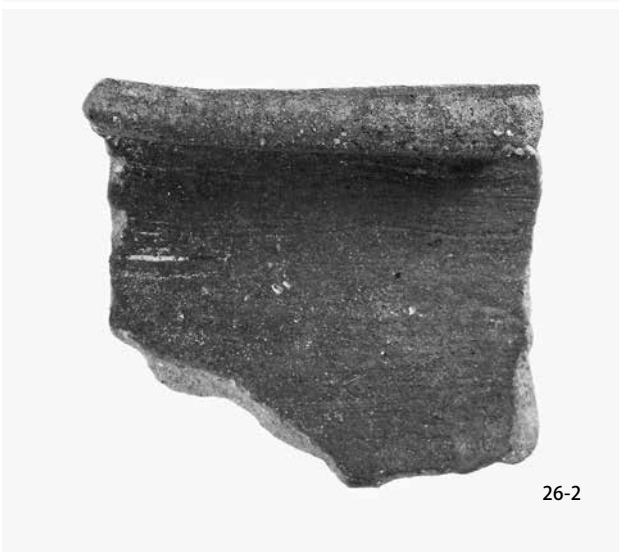
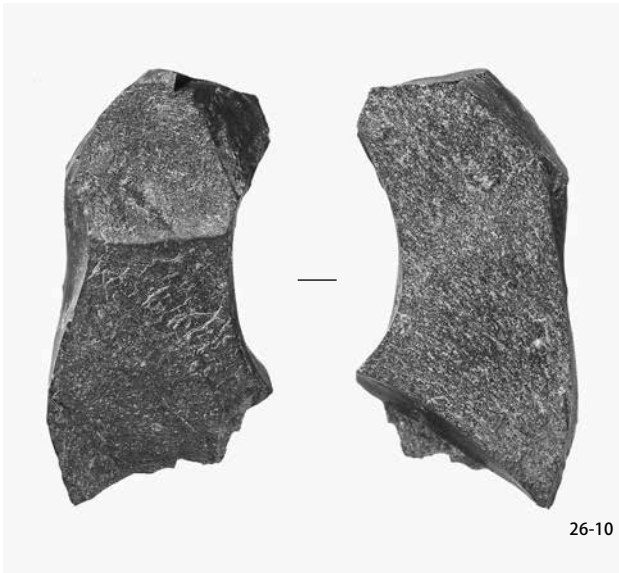


20 落込 (24-1 ~ 6 · a)



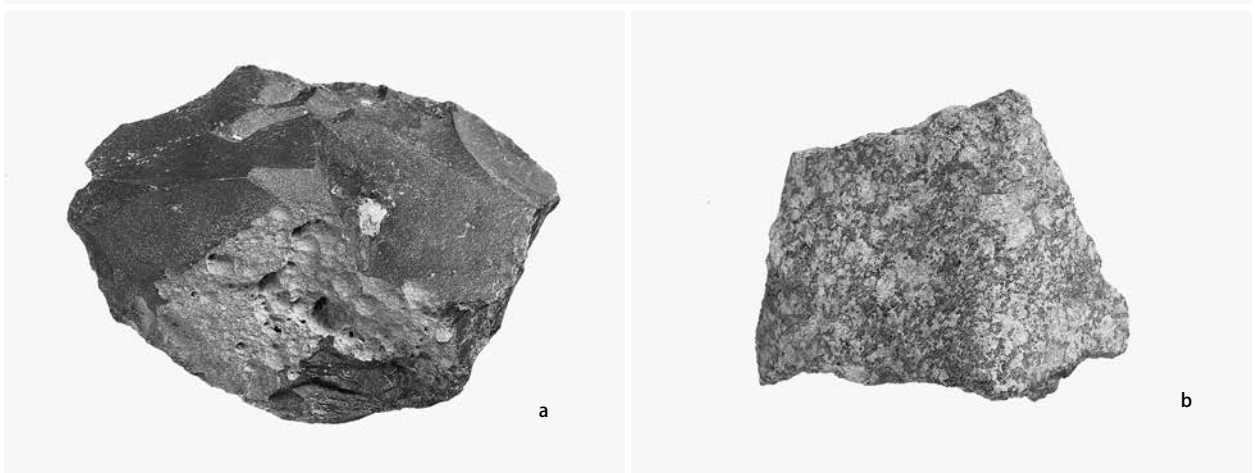
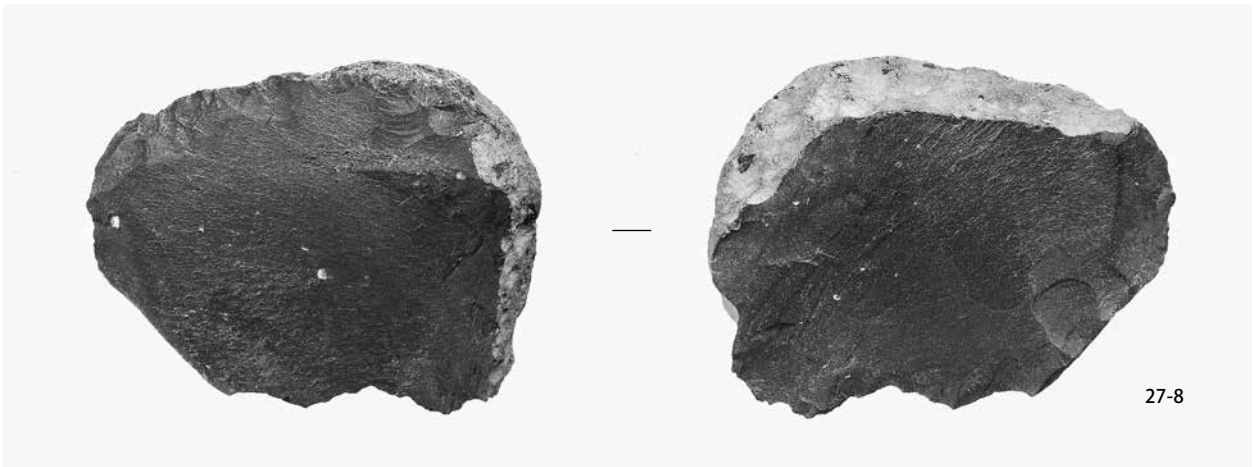
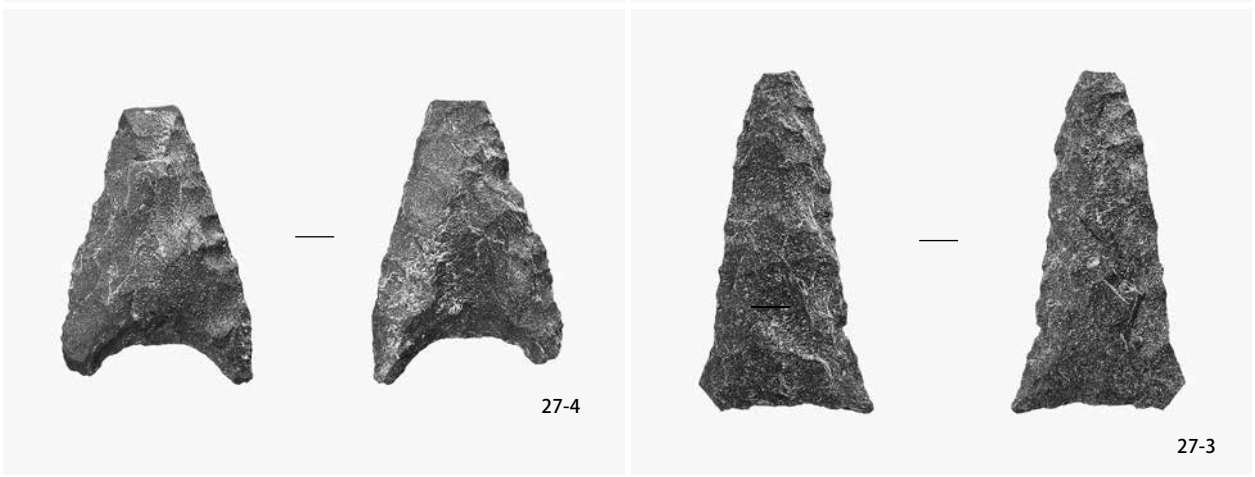
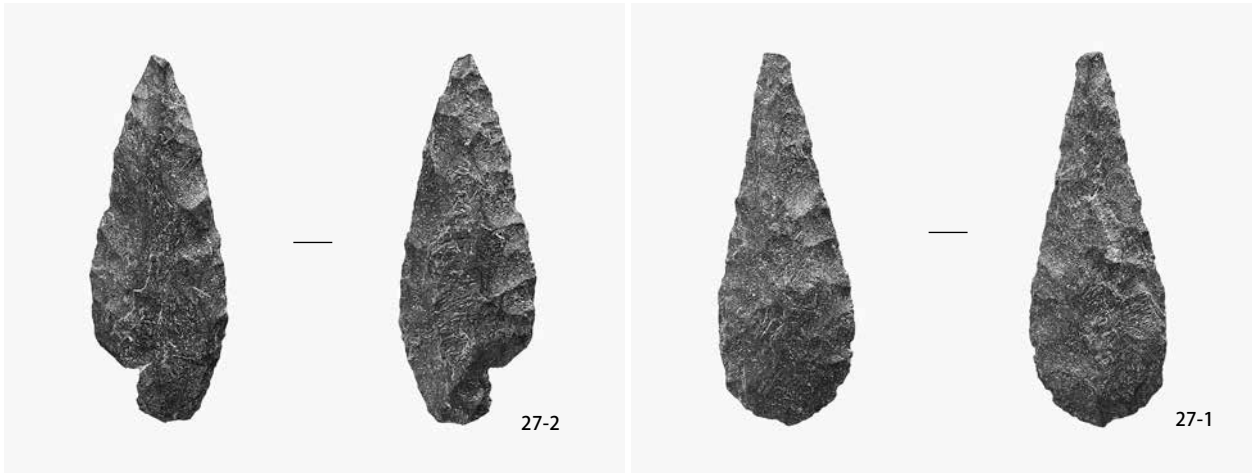
24 石器集中部〔1〕(26-3~8・a)





24 石器集中部〔3〕(26-1・2・10・a)、第11層〔1〕(27-5~7)

图版56 第9面 08-1-2·3区

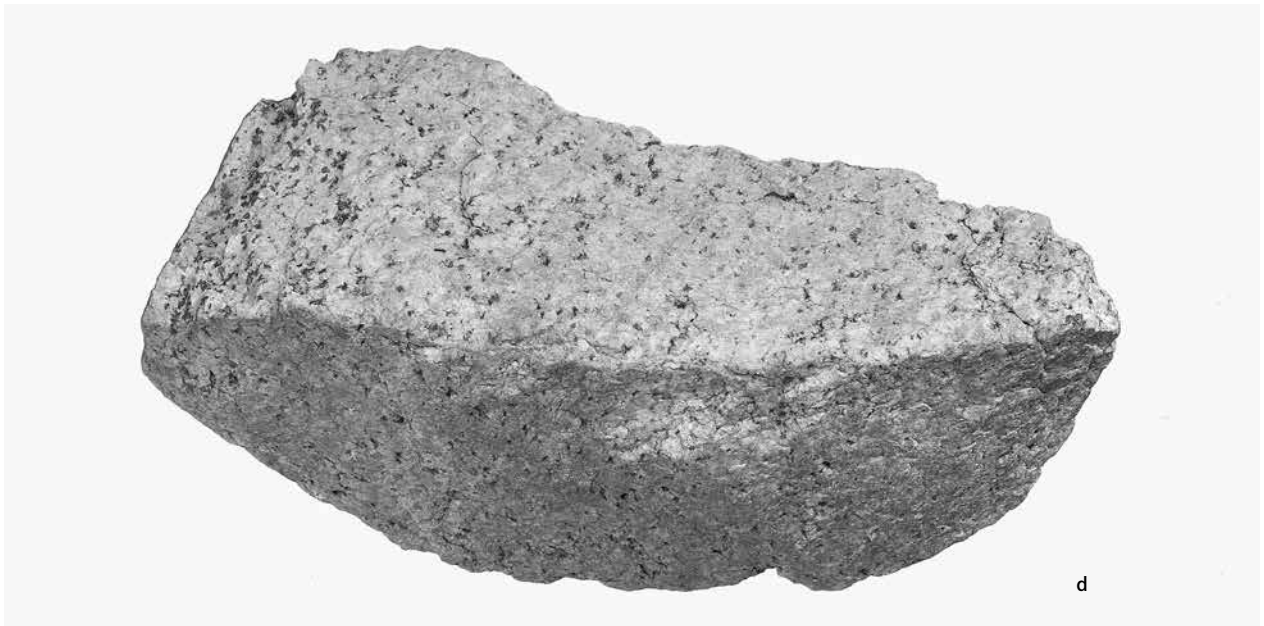


第11層〔2〕(27-1～4·8·a·b)

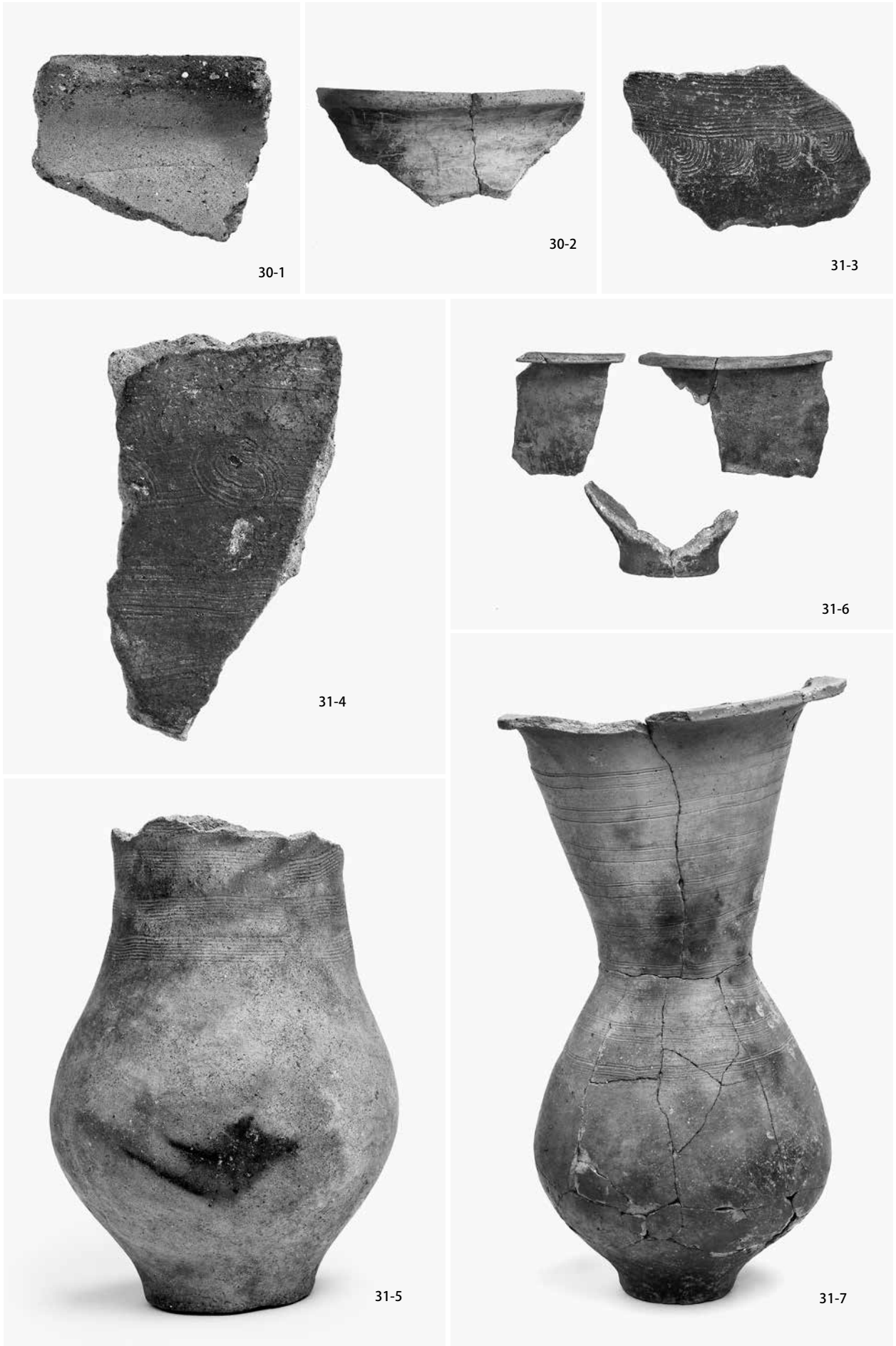




図版58 第9面 08-1-2区

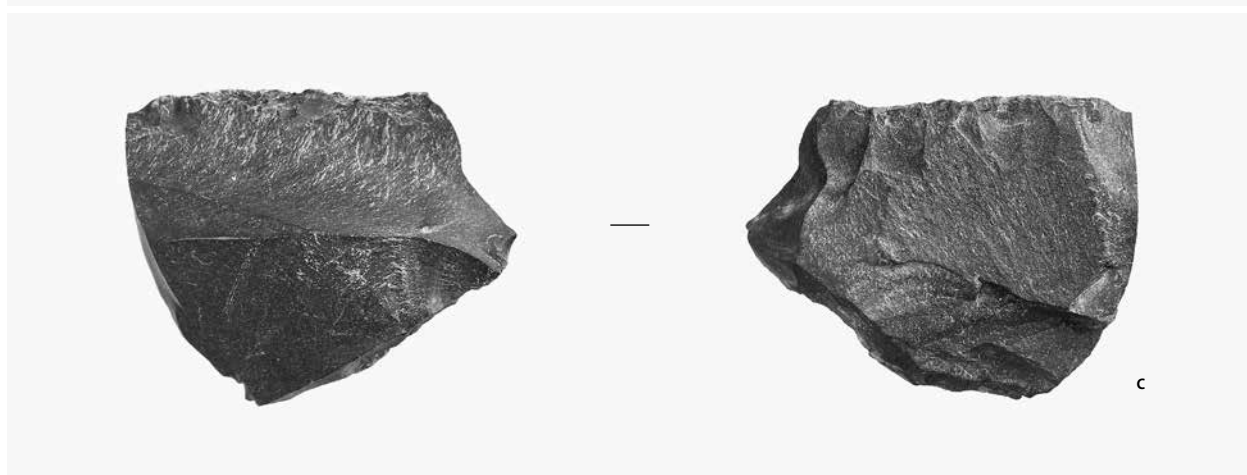
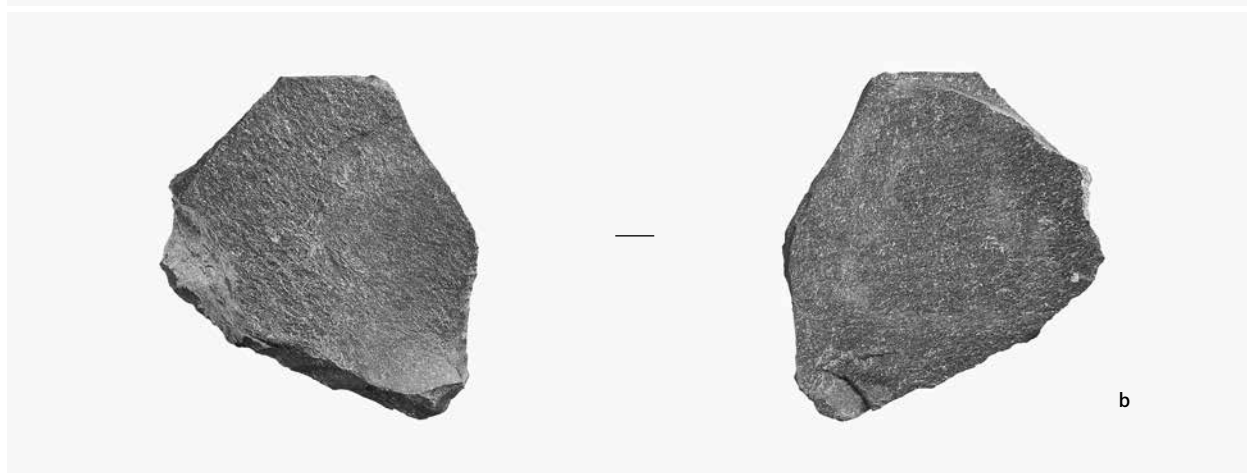
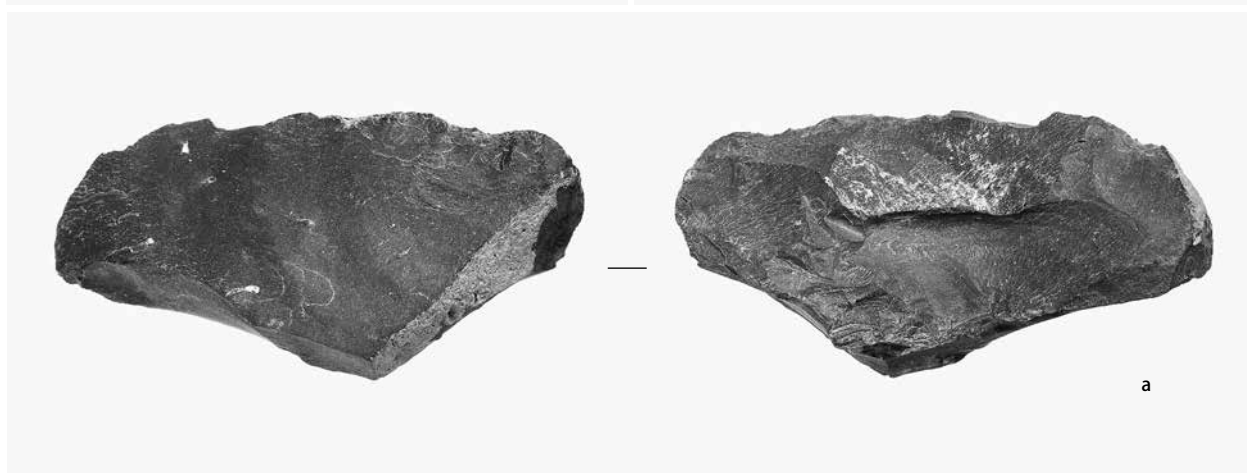
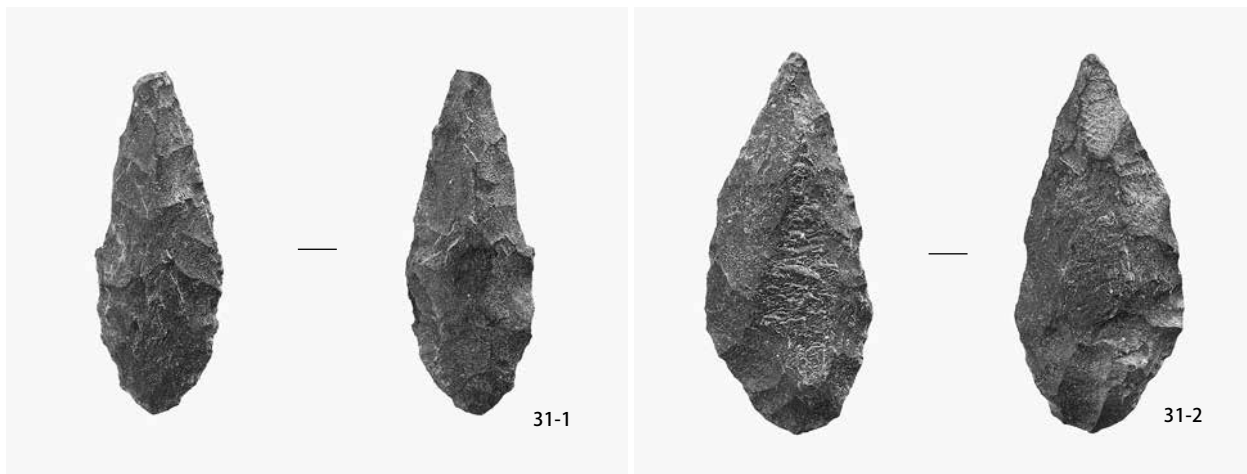


第11層〔4〕(27-17・a～d)



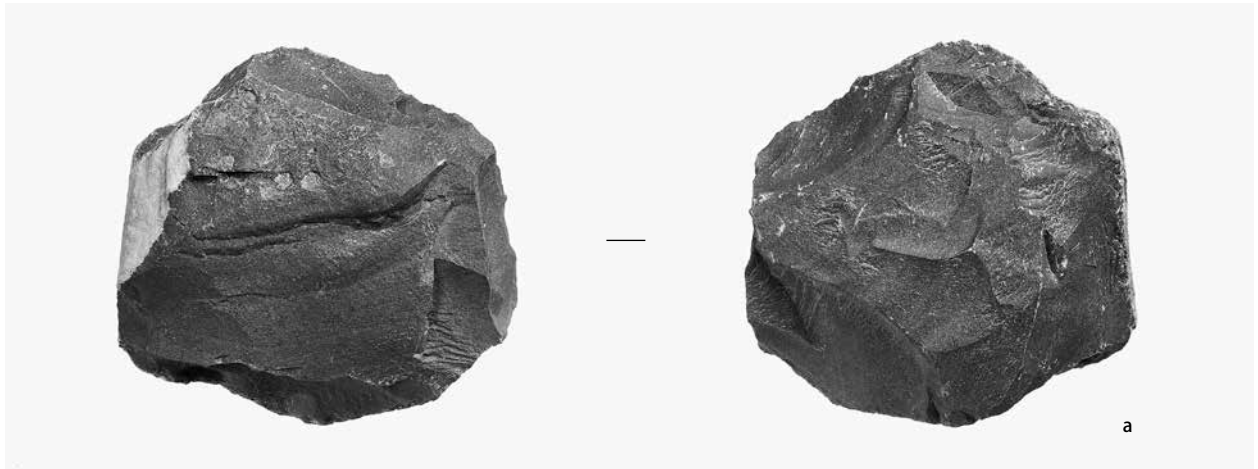
22 土坑 (30-1)、23 土坑 (30-2)、第 10 层 [1] (31-3 ~ 7)

図版60 第8面 08-1-1・2区

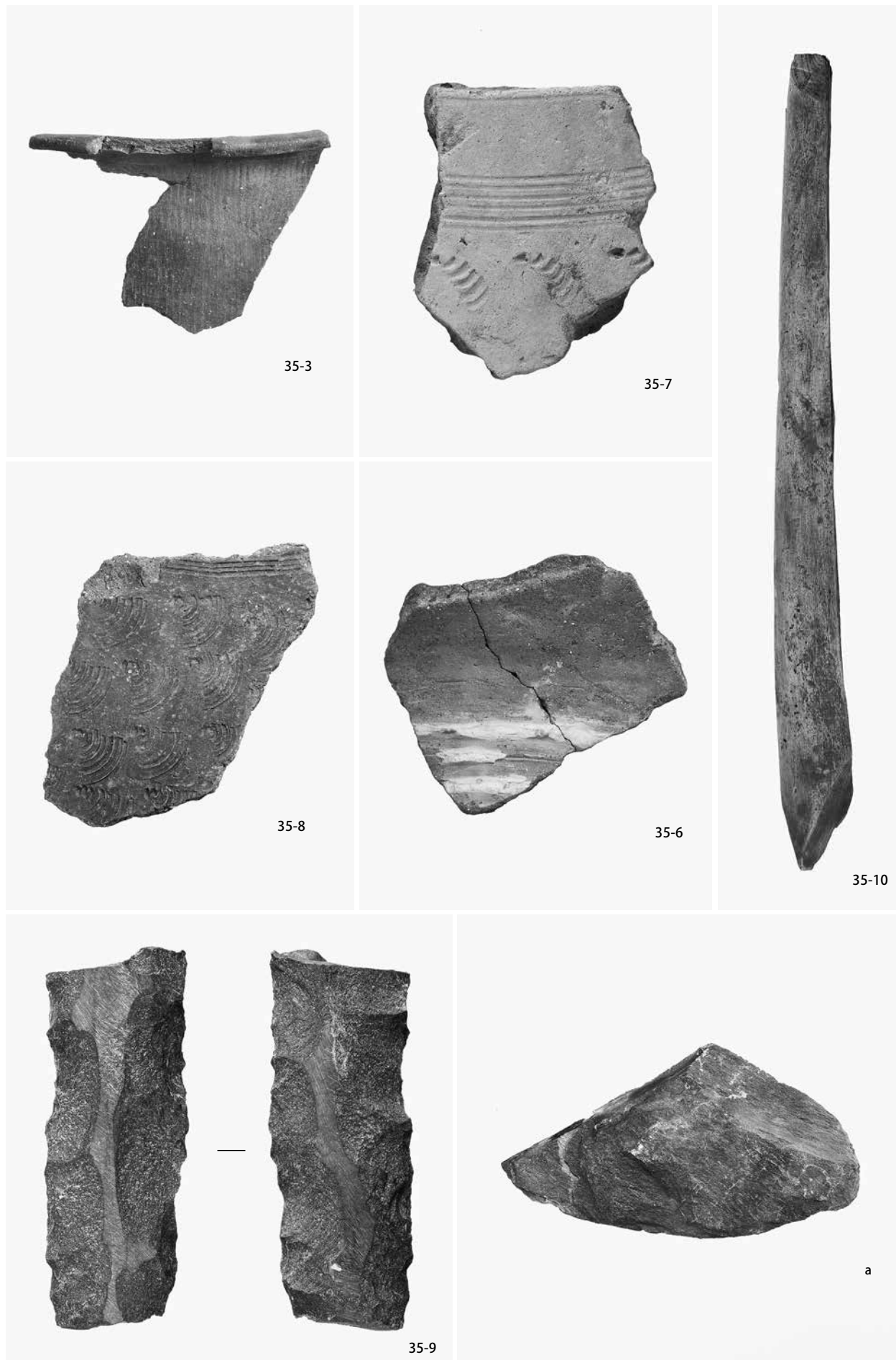


第10層 [2] (31-1・2・a～c)

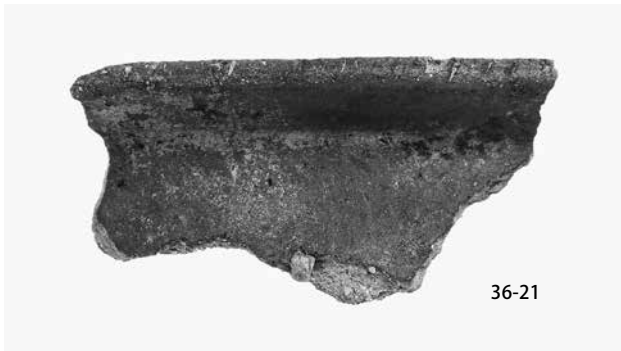
图版61 第7面·第6面 08-1-2·3区



18 溝 (33-1 · a)、17 流路 [1] (35-2 · 4 · 5)



17 流路〔2〕(35-3・6~10・a)

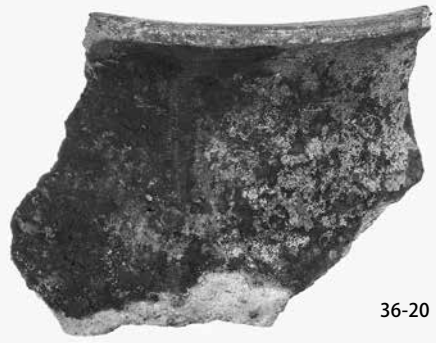


8流路〔1〕(36-1·2·4·5·7·8·19·21·23·24)

图版64 第6面 08-1-3区



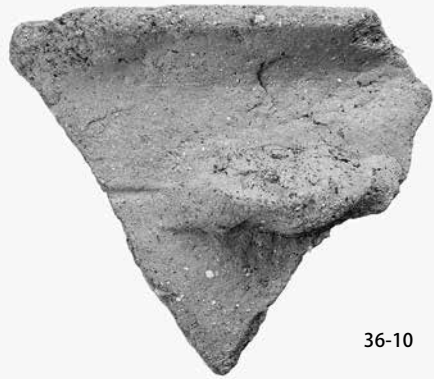
36-18



36-20



36-6



36-10



36-22



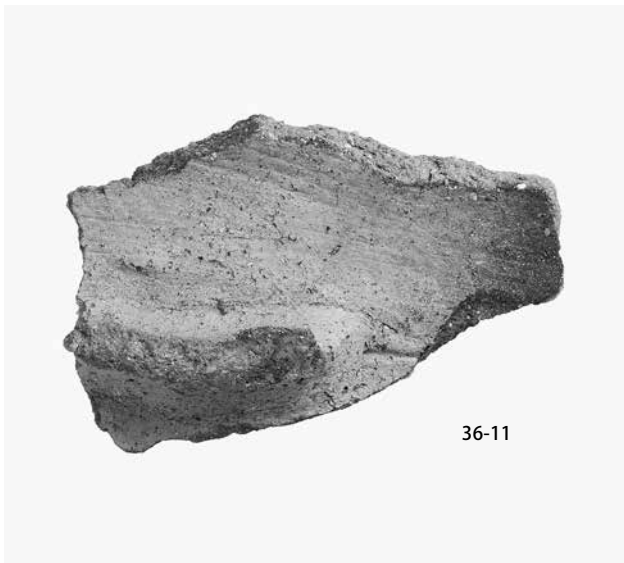
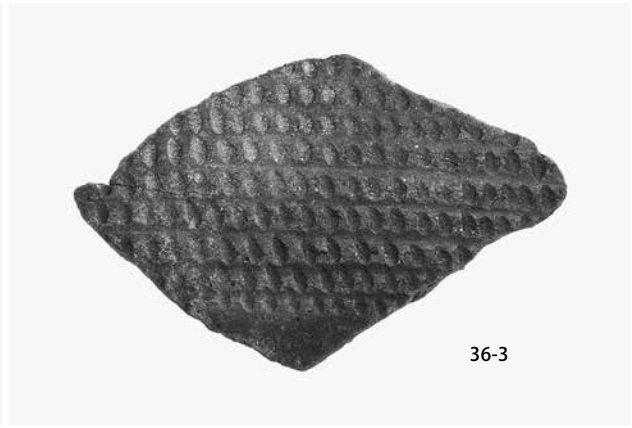
36-14



36-15

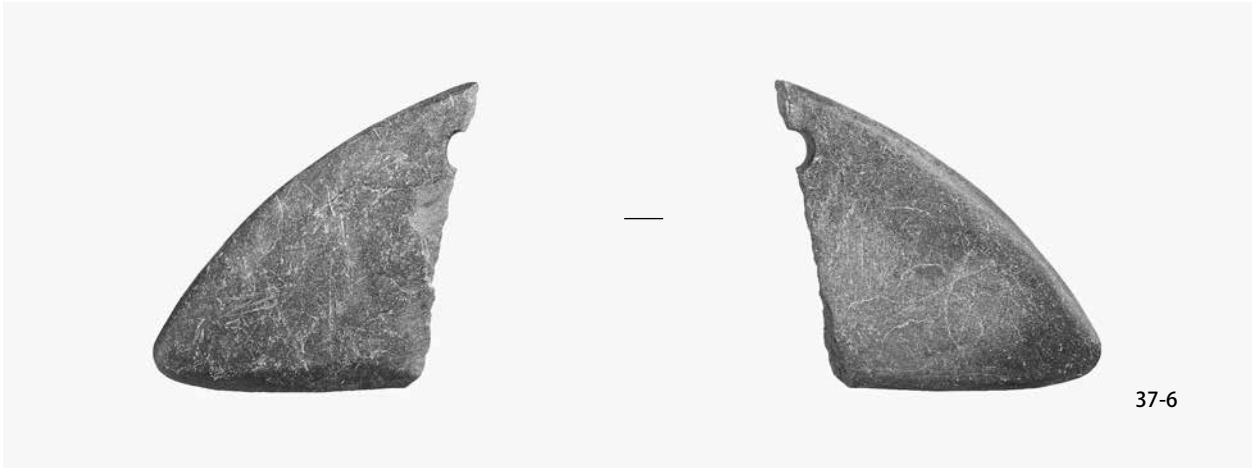
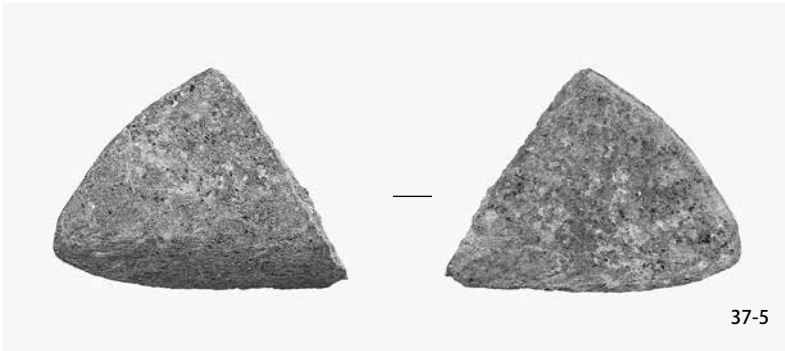
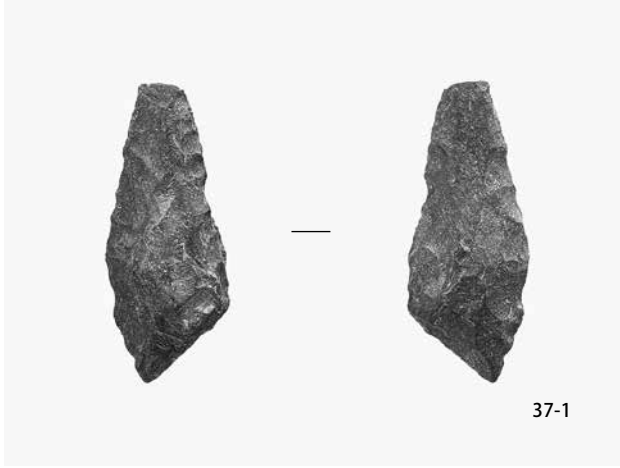
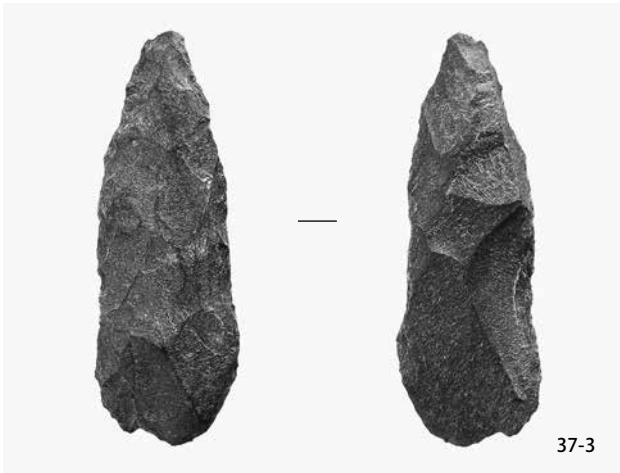


36-17

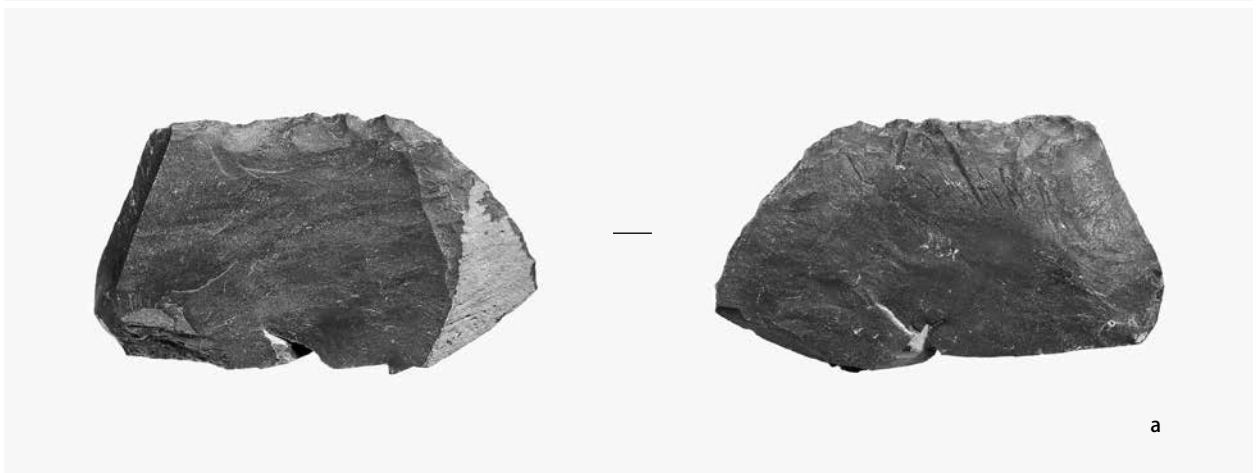
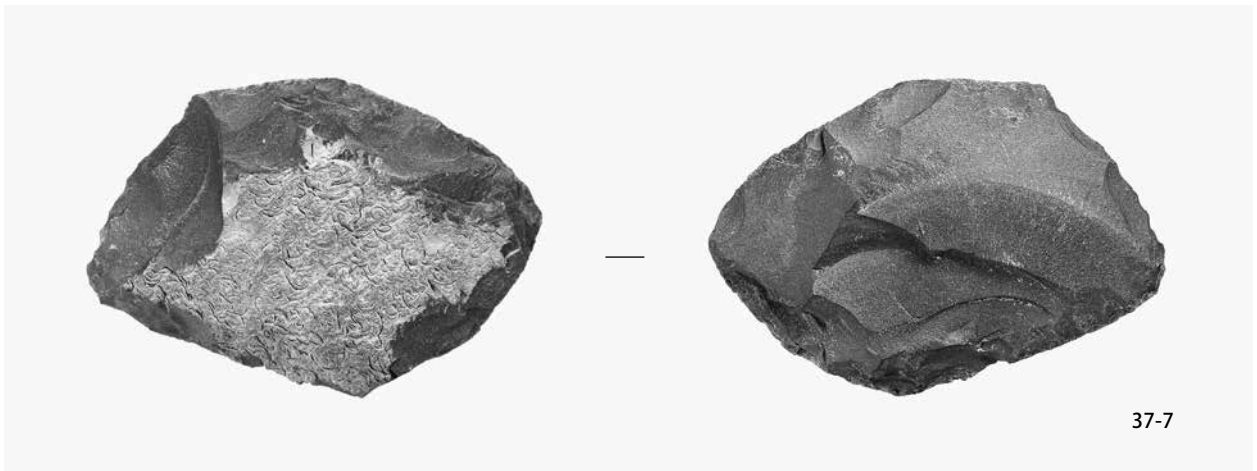
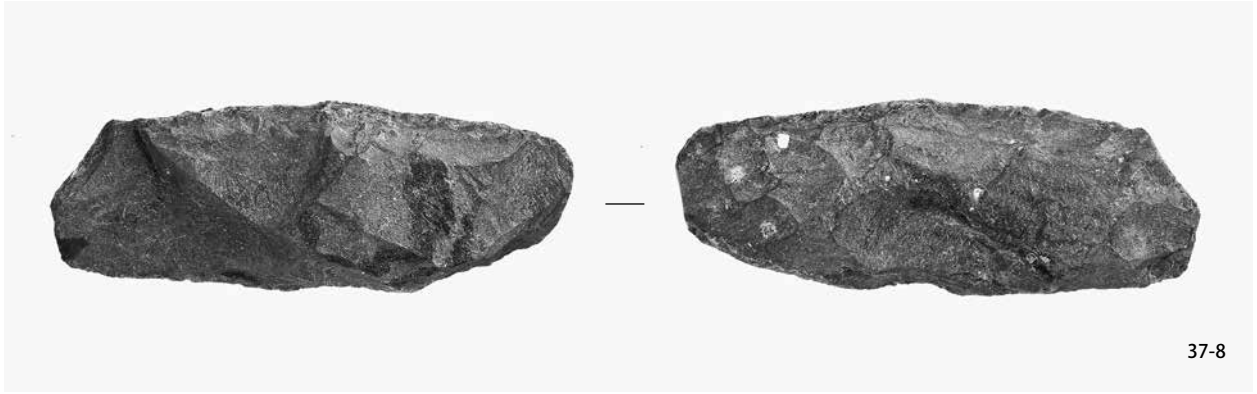




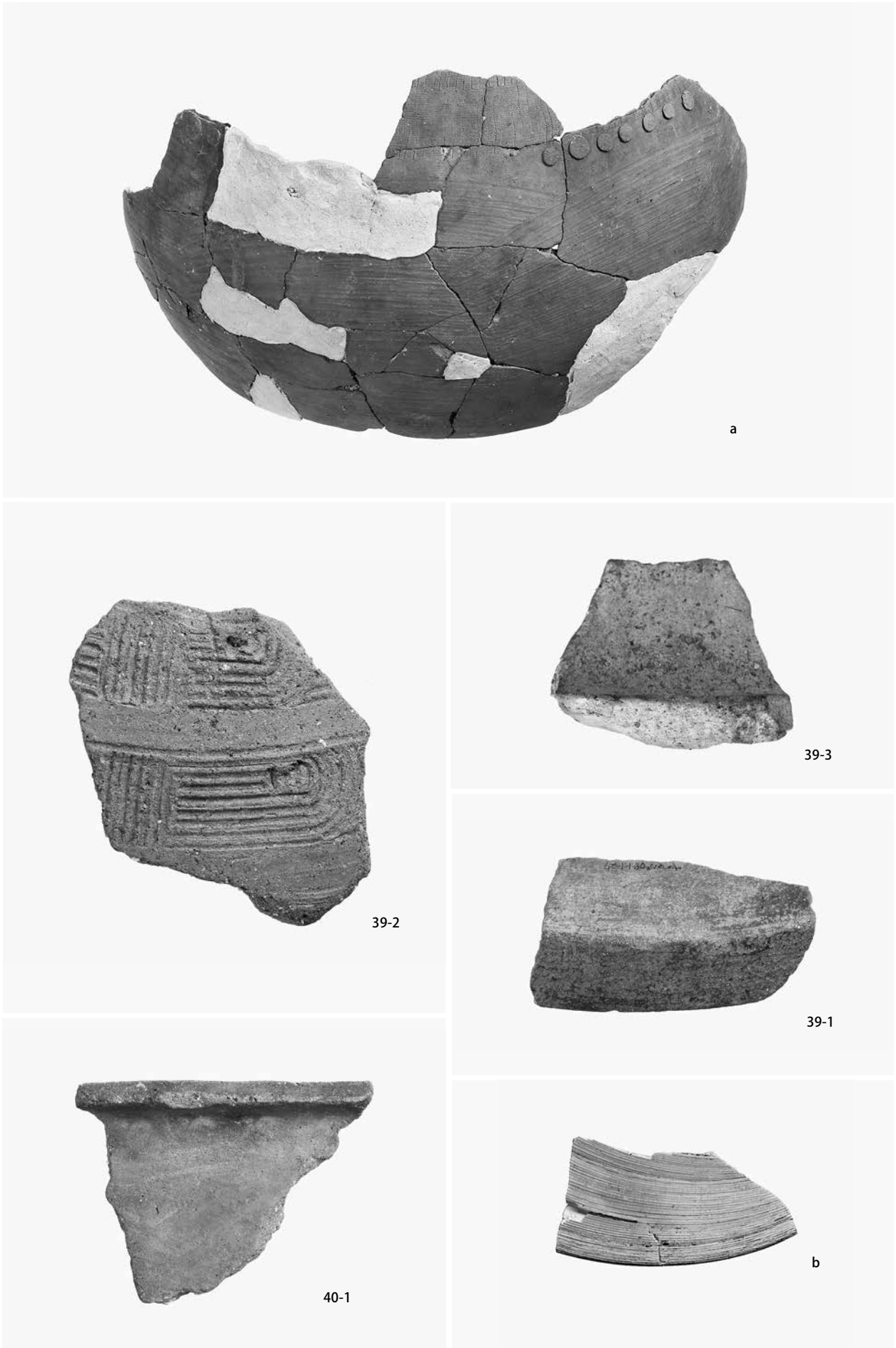
図版66 第6面 08-1-3区



8 流路 [4] (37-1 ~ 6)

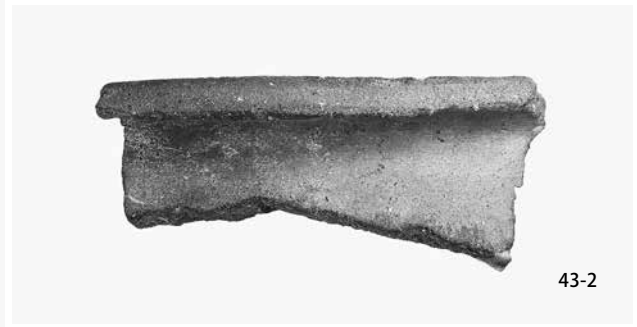
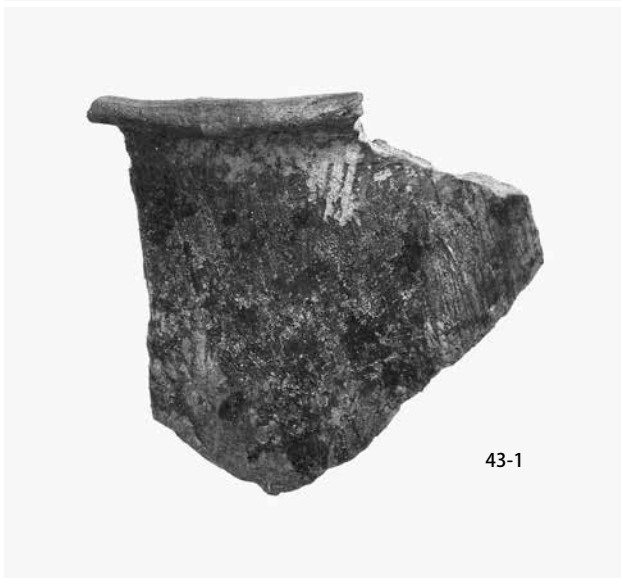
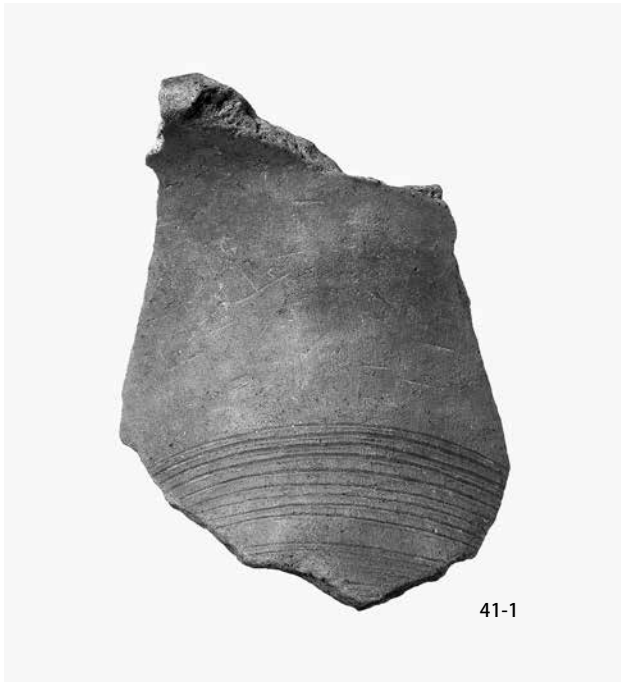


8流路 [5] (37-7·8·9)、第8層 (35-1·b)



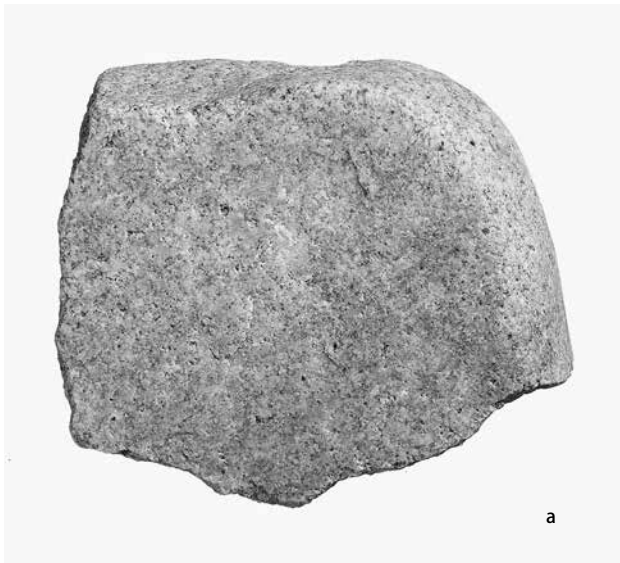
12ピット (a)、9溝 (39-1～3)、13溝 (40-1)、5土坑 (b)

图版69 第5~3面 08-1-1·3区

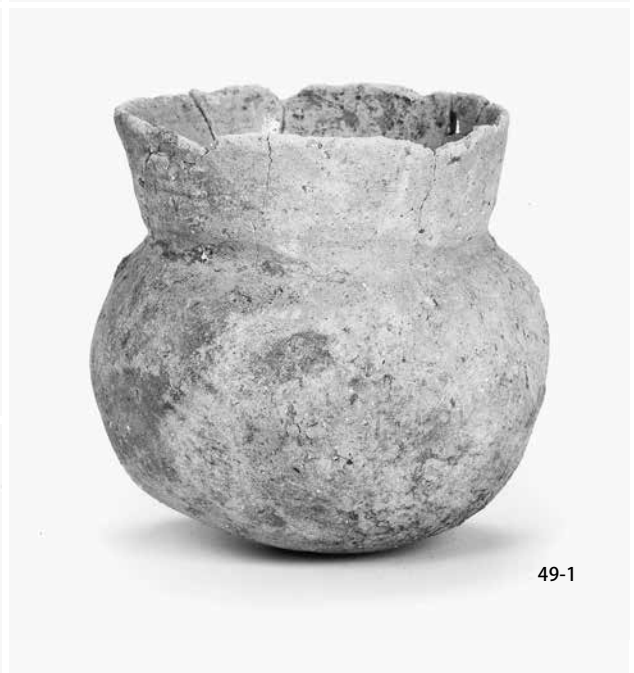


6土坑 (41-1·2)、第7層 (41-3)、第6層 (43-1·2·a)、第4層 (45-1·2)

图版70 第2面 08-1-1·2区

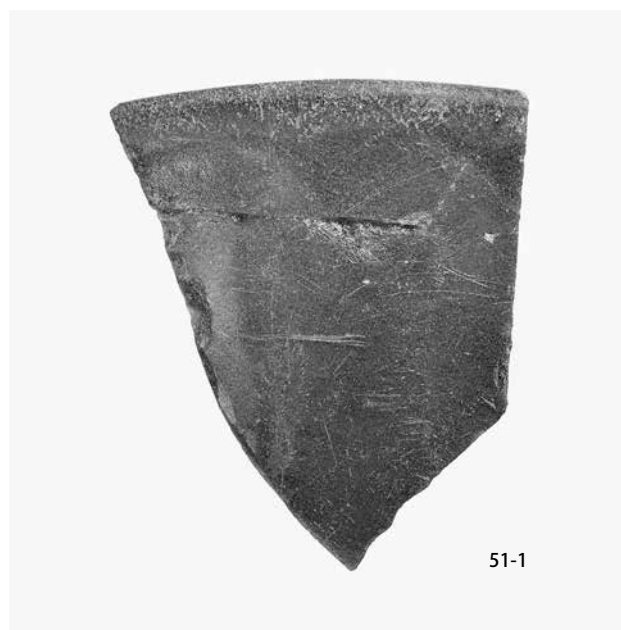
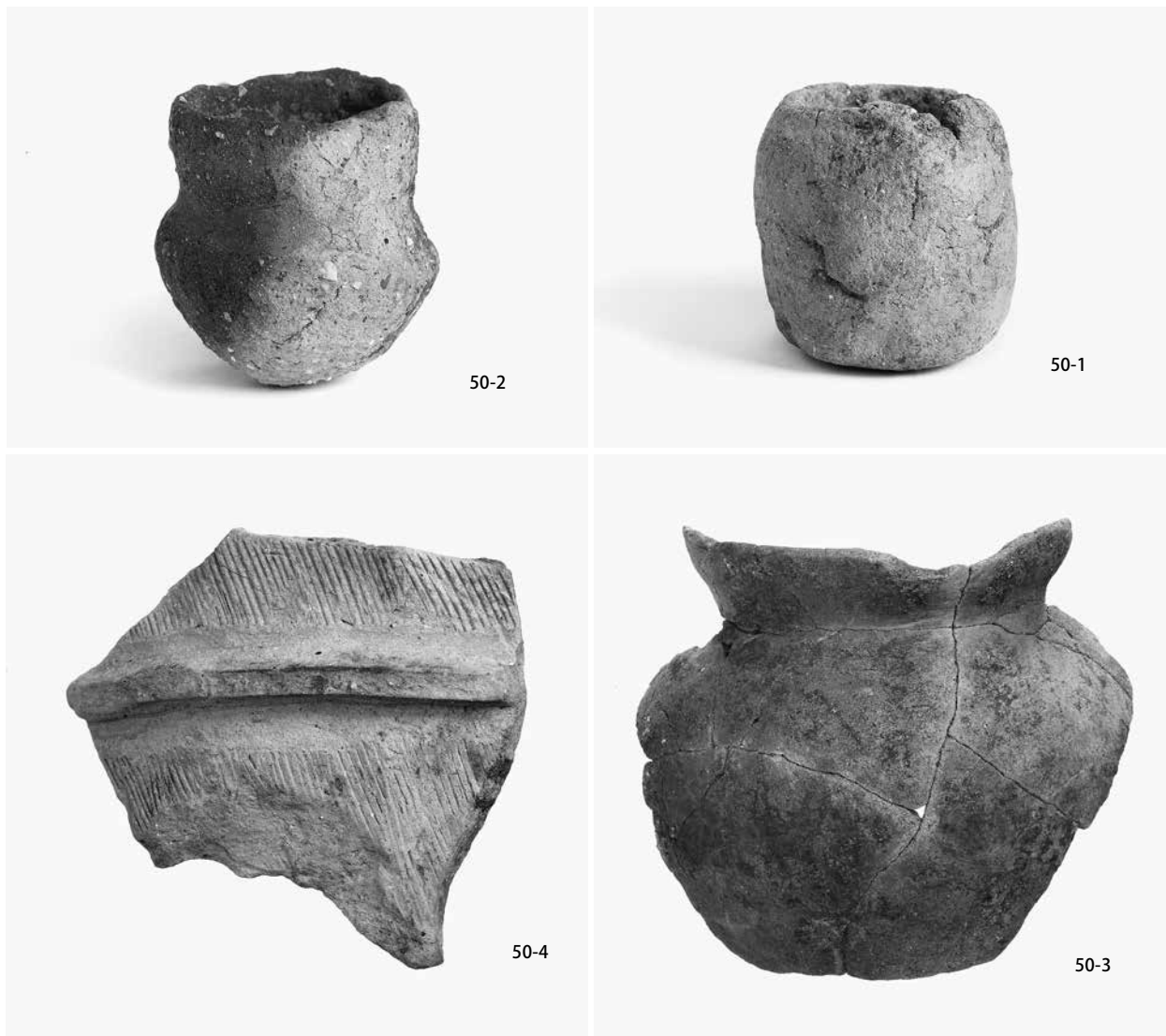


1 溝 (a)、2 溝 (47-1)、3 溝 (47-2)



7土坑 (49-1 ~ 7)

图版72 第2面·第1面 08-1-1·2区



第3層 (50-1 ~ 4)、第1層 (51-1)

# 報告書抄録

ふりがな	やまがいせき に						
書名	山賀遺跡 II						
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調節池）地内の埋蔵文化財に係る発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第194集						
編著者名	亀井 聡						
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791						
発行年月日	2009年8月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
やまがいせき 山賀遺跡	おおさかふやおしんげちよう 大阪府八尾市新家町 5丁目	27212	32	北緯 34° 38' 48" 東経 135° 36' 06"	20081201- 20090318	133 ㎡	寝屋川水系改良事業 （一級河川寝屋川 新 家調節池）地内の埋 蔵文化財に係る発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
山賀遺跡	生産	中世以降	すき溝・畝間溝	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器			
	集落 墓？	古墳時代～平安時代	土坑・ピット	土師器・須恵器・円筒埴輪・石			
	生産	弥生時代後期？	水田・水路・流路	弥生式土器		残存状態の良い水田	
	生産 集落	弥生時代前期～中期	土坑・ピット・溝・流路・ 建物址・石器集中部・木 棺墓	弥生式土器・石器・木器・骨・歯牙・土製品		柱根を残す建物址の一部 と、約500点もの石器剥 片・未成品がまとめて 出土	
要約	<p>弥生時代前期から中世にかけて約11面の遺構面を検出し、それらに伴う遺構や遺物を層位的に確認した。特に、弥生時代後期末の氾濫堆積物に覆われて残存状態が良い水田跡や、弥生時代中期前半頃の柱跡が残る建物址と推定する遺構、大量の剥片を伴う石器製作址等の検出は、弥生時代を特徴とする山賀遺跡を考える上で貴重な資料となった。</p>						



(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第194集

## 山賀遺跡Ⅱ

寝屋川水系改良事業（一級河川寝屋川 新家調節池）地内の  
埋蔵文化財に係る発掘調査報告書

発行年月日／2009年8月31日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号